
魔法少女リリカルなのは ~ Introductory chapter of story ~

まーた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Int r o d u c t o r y c h a p
t e r o f s t o r y }

【Nコード】

N 8 5 6 5 M

【作者名】

まーた

【あらすじ】

とある日ラクトは夢を見る。4年前、なのはと遊んだ時の記憶。その夢が始まりの合図のように物語は始まる。この作品は作者の初作品です。また、これは原作ブレイク、主人公最強系です。そういったモノが苦手な人は見ない方がいいです。現在A's編です。

第一話 夢（前書き）

この作品はあらすじにも書いた通り、主人公最強系です。
そういったものが駄目な人は読まない方がいいと思います。

では、魔法少女リリカルなのは } Introductory ch
apter of story } 始まります。

第一話 夢

Side:

少年と少女が海鳴にある公園で遊んでいた。

内容は鬼ごっこで、茶髪で片方だけに結びを作っている少女が鬼役、黒髪で綺麗に形を整えてる少年の方が逃げる役である。

「待ってなのー」

少女の方が無邪気にそう言いながら楽しそうに笑う。

「鬼ごっこで鬼を待つ人はいないよ」

少年は言葉ではそう言うが少年は走るのを止めた。
それをチャンスと思ったのか少女は疲れたのにも関わらず、体力を振り絞って速度を上げて少年を捕まえようとした。

しかし、少女は少年のことしか見ていなかった為、足元に注意を払わなかった。

その為、少女は足を石に引っ掛かって転んでしまった。

「なのは大丈夫？」

「……痛い」

「ほら、僕の手に乗まって」

少年は少女に向かって手を伸ばす。少女はその手を取り、顔を赤く

しながら少年の手に引つ張られながら立った。

「ありがとうなの」

「どういたしまして。……って、顔が赤いけど平気？」

少年が少女を見ると少女の顔が赤くなっていた。

「へ、平気なのっ！ / / / / /」

「熱中症かな？ 今日はいつも以上に疲れたみたいだし」

少年は少女の額を手で触れる。

そしてその手が冷たく感じられたと言う前に、少女は少年に額を触れられているという事実さらに顔を赤くした。

「ふえっ！？ / / / / /」

「あれ？ 何で顔がさらに赤くなるの？」

「ふえ！ あ、それは私が………っ！？ / / / / /」

少女は何を思ったのか、顔を真っ赤に染め少年のことを見る事ができなくなった。

そしてその日は、少女が一方的に家に帰ってしまったのだった。

「随分と懐かしい夢を見たなー。とは言っても、4年前の出来事だよね」

最近引越してきたマンションの部屋で夢から目を覚ました黒髪黒瞳で綺麗に髪の毛を整えている少年がいた。

「気持ち悪いぞ」

少年の背後にいる女性。

瞳の色は少年とは違い赤色で、こちら黒髪だが髪は背中当たりまで伸ばしている。

「何が？ メア」

女性の名前はメアリスティング。

しかし、彼女を知る多くの人はメアと呼ぶことにしている。

「貴様の口調だ。それにその容姿だ」

「口調？ 何か可笑しいかな？ それと容姿の方は肉体年齢を上げてただけなんだけど」

さも、当然のようにそう言い返す少年。

「容姿の方は納得してやろう。私もそれに近いからな。だが、その口調は何だ？ 気持ちが悪いにも程があるぞ」

「酷いねメア」

「別に酷くは無いだろう？ 私は思ったことを素直に言っているだけなのだからな」

「だからそれが余計に酷いの」

少年は困った顔でメアを見る。

「それよりもさ、この話昨日もしたよね？ 昨日だけじゃ無くて前からかな？」

「その口調が気持ち悪いのがいけないのだ」

「……慣れてよ」

メアは少年がこの様な口調以外での喋るということを知っている。その為に、少年がこのような口調であるということに違和感があるのだ。

とは言え、既にメアはこの口調には慣れている。ただ、違和感があるだけなのだ。

そのことを知らない少年は会話を続けても無駄と思ったのか、ふと部屋にある時計を見た。時計は朝をに過ぎて13時を指している。

「アレ？ 今日遅くまで寝てたんだ。……ということは、メア何も食べて無い？」

「当たり前だ。私は……」

メアが言葉を続けようとした時、大きな音がメアのお腹から鳴った。要するに空腹である。

メアが起きた時間は6時。そうなるのも普通のことである。

「今すぐ作るから、少し待ってて」

「了解した」

何故、6時に起きていたのにも関わらず、何も食べていないかと言うと、メアは致命的に料理の才能が無いからである。

インスタントの物にも関わらず味が（まだ本編では出てきていないがシャマル並に）終わる。

その為、料理はラクトに任せているのだ。

少し時間が経つとラクトが料理を作り終えた。

「相変わらず早いな」

「そう？　メアも何回もチャレンジすればできると思うよ。……………」

「…少し味の方はアレだけど」

ラクトなりに慰めようとしているのだろうが、彼女にとって料理はどうにもならないと思っているので、その言葉を簡単に流した。

少年はエプロンを取りながら、完成した料理を机に並べる。

「「いただきます」」

二人揃ってそう言うのと同時に、メアの皿に乗っていた料理が物凄いスピードで無くなっていく。

「メア。いくらお腹が減ってたって言ってもそんなに早く食べると」

「うるさい。お前が起きるのが遅いのがいけないのだ。…………それと

この料理が美味すぎるのもいけない」

「理不尽だよ」

「知る」

凄い速さで食べるメアだったが、途中で顔が青くなる。

その状態で胸を強く叩き、コップに入っていた飲み物を一気に飲み干した。

「死ぬかと思った」

「自業自得だよ。少なくとも僕のせいじゃない」

「分かつてる。……それと、最低限でも一人称を変えろ。違和感がありすぎて気持ち悪い」

「はいはい」

少年は知らない内に一人称を僕になってしまっていたのだが、メアに言われる事で初めて気づいた。

「ご馳走様」

「お粗末様でした」

食事を終え、午後何をするか決めることにする。

この二人は働いていないのだが金は不自由無く過ごせている。その為、特にすることが無い二人は基本暇なのだ。

そこで少年は先程見た夢のことを口に出す。

「なのはは今何してるんだろ？ そろそろ一回ぐらい様子でも見に行こうかな」

「なのは？ 一体誰のことだ？」

「前にこの第97管理外世界『地球』に来た時に遊んだ少女の名前だよ。メア」

夢であつた事を思い出しながらそう言うラクト。

「ほう。来たことがあるのか。意外だな」

「そうだよな。僕……俺からしてみても少し驚いてるからね。ま、全部が全部楽しかった訳じゃないけどな」

先程メアに言われた事を思い出して、途中から一人称を『俺』にした。しかし、口調は戻さずそのままだ。

「それで、そのなのとは言う少女に会いに行くと」

「まあ、その考えで間違っではないよ。細かく言えば少し違うけどね……」

「……？　どういう意味だ？」

「知らなくていいよ。……さて、俺はすぐに行くけどメアも来る？」

「ふむ、暇だから私も行こう」

メアのその言葉で、少年は準備することにした。

「ところでラクト」

「何？」

「今日は……いや、何でもなし。済まなかったな」

「？　変なメア」

メアは少年をラクトと呼び、何かを言おうとしたが途中で言葉を止める。

ラクトはそれを不思議がったが、わざと気にしていないように見せた。

そしてラクトとメアは準備を終え、少女に会う為に玄関に向かった。

第一話 夢（後書き）

どうも、初めましてでは無い人もいるかと思いますが、初めまして！
この作品の作者である、『まーた』です。

まあ、物凄い駄文ではありますが、この作品を暇つぶし程度に見続
けてください！

（11月26日、編集）

それぞれの出会いって言うと大袈裟だね（前書き）

連続投稿つかれた……

それぞれの出会いって言うと大袈裟だね

あ

重大な事を忘れてた。

「なのはって何処に住んでるっけ？」

遊んだと言ってもずっと公園で会って、遊んで、話をしたからなー。
何処に住んでるとか知らない。仮に知っていたとしても多分意味が
ないし。

そもそも、なのはとしか言って無かったから名字も分からない。

「知ってるのではないのか」

「いや、知らない」

「お前は馬鹿だな」

否定したいけど、言葉通りだから否定ができない。
どうしよう。暇つぶしができると思ったのに出来なくなった。

「暇になったな。私は少し気分転換に外に出かける」

「りょーかい。俺も出かけるか。何か買おうかな？」

メアが外に出かけるということで、一緒じゃ無いけど俺も外に出かけることにした。

今は鳴海にある図書館の前にいる。デパートに行こうかなと思っていたけど、これと言った必要な物も無かったから、行った事が無い図書館に行くことにした。

そして、図書館の中に入ったけど、広いねー。ここ。1万冊ぐらいは軽く超えてるかな？

「あの、すみません。こういう本は・・・・・・・・・・」

一応、読みたい本があるかどうかを確認する為に司書の人に聞いたけど、さすが数があるだけに読みたい本があった。

席に着いて読書を始めるけど、

「うーん。やっぱり本を読むのは好きだけど、完全記憶能力があると読み応えが半減するな！。まあ、その分知識とか得られるから良いけど」

読書だけこの能力消せないかな？できたらすごく有難いけど。

「と、取れへん」

「ん？」

車椅子に乗ってる少女が「うーん」と言いながら腕を伸ばして本を取ろうとしてるみたい
だけど、あと少しの所で届かない。

あの子に言っちゃ失礼だけど、一度でいいからあんな風に努力してみたいな！。

気にしないでいいか。手伝おう。

「取りたい本はこの本？」

「え？あ、そうです」

「ほら、どうぞ。他にも取りたい本はあるのかな？」

「ええの？そこまでしてもらって」

「人の好意は素直に受け取った方がいいよ」

車椅子の少女が読みたい本を数冊取ってから、その後も何冊か本を読んだ。

……やっぱり読み応えが無い。

「それにしても、手伝ってくれてありがとうな」

「気にしないでいいよ。じゃ、俺はこれで」

家に戻らなければいけないという事は無いけど、とりあえず、ここがどついう所か分かったから家でお昼寝でもしよう。

「あ、ちよつと待ってや」

さっきの少女が声をかけてきた。

何だろ？ 他にも取ってほしい本があったのかな？ 時間もあるからいいか。

「まだ取りたい本があったの？」

「いや、もうあらへんよ」

アレ？　じゃあ、何で声をかけられたのかな？

「まだウチの名前言ってなかったやろ？手伝ってくれはった人の名前は覚えてておきたいから」

自己紹介したいって事かな？

多分間違っではないと思うからいいか。人と関わりを持つのは良い事だしね。

「そういう事ね。俺の名前はラクトだよ」

「ウチは八神はやて。これからよろしくなー、ラクト君」

「うん。八神さん。会う事はあまりないかもしれないけどね」

最後の一言は余計だったかな。折角自己紹介したのにね。

「はやてでええよ。それと最後の一言は要らんかったよ」

「いめんいめん」

あー、やっぱり言われちゃったな。

馬鹿だね俺は。今後気をつけるとしようかな？自己紹介の時は。

「じゃ、俺は帰るから、はやてさん、また会いましょう」

「呼び捨てにしてや。さん付けは何か慣れないやから」

「分かったよ。はやて、また今度」

「また今度な。ラクト君」

元氣いいなー。手なんか振っちゃって。

さて、家に帰りますか。

そう考えて俺は海鳴図書館から出ていった。

S i d e メアリスティング

メアリスティングだ。

ラクトの奴がなのはとか言う娘に会いに行くと言っていたが、結局会えない事が分かり今は外に出ている。

それで今はとある喫茶店の前にいる。前からこの喫茶店のことは評判の良い店と聞いていたが、引越しの後、日常品を買った為に時間が無かった。

ここで考えことをしても意味がないか。とりあえず、入ろう。

「いらっしやいませ」

メアが『翠屋』に入ると、髪を伸ばした女の人がそう言い、その後席を案内された。

何を食べればいいのか？ 適当に食べればいいのか？

メニューを開きながら注文するものを考えていたが、メニューに勧めというのがあったからそれにすることにした。

呼び鈴を鳴らすと先程の女性とは違い、茶髪で髪を結んでいる少女が来た。

子供が此处で働いている？と疑問に思ったが、すぐに疑問は消えた。

おそらく、先程の女性の娘なのだろう。似ているしな。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「ああ。シュークリームとダージリンを1つずつ頼む」

お勧めのシュークリームと私が好きな飲み物のダージリンを注文することにした。

「ダージリン？」

「ああ、すまないな。ダージリンとは紅茶のことだ」

小学生だからそのような知識が無くて当たり前か。

ダージリンという言い方はあまり一般的ではないのか？この国は。

まあ、どうでもいいか。とりあえず、今出てきたシュークリームとダージリンを堪能するでしょう。

「頂きます」

そう言うてから、シュークリームを一口食べる。

「美味い」

思わず口に出てしまった。

いや、しかし、美味しいの一言で片づけるのは少し失礼かもしれない。と思わせる程美味しい。

次にダージリンを一口。これも当然美味い。

「今度、ラクトに作らせよう」

そうしよう。奴のことだ。作れと言えば作るだろう。それも此処と大差ない味で。

それから、数分後には注文した物はメアの胃袋の中に納まった。

さて、帰るとしよう。

この店には週に1度は来るべきだな。奴も誘って来るとしよう。

「なのは。そちらのお客さんの接客お願いね」

「はい」

私がレジで会計をしようとして向かっていた時、先程の女性が多分娘である少女の名前を言った。

なのは？ 今日言っていた少女の名前か？だとしたら凄い偶然だな。

会計を済ませ、少女の事を知ろうと女性に話を振る。

「あの娘さん可愛いですね」

「え？」

「あ、すみません。今日初めてこの店に足を運んだもので。立派なお店ですね」

口調が違うのは気にしないでもらいたい。

「それはありがとうございます」

「とても美味しかったですよ」

その後も、少し話をしてから翠屋を後にした。

S i d e メアリスティング e n d

それぞれの出会いって言うと大袈裟だね（後書き）

あとがきこーなー

まーた「他の作者様がやってるから、あとがきこーなーを作ってた」

ラクト「まあ、いいんじゃないの？」

メア「そうだな。ところで、作者」

まーた「何？」

メア「私の出番が少ないような気がするだが……」

まーた「いやいやいや、出番求めるの早すぎでしょっ！？ まだ、空気化してないでしょ。それにまだ、始まったばかりだし」

メア「まだ？ 『まだ、空気化してない』という事は……」

まーた「なんか、ぐちゃぐちゃになってきたんでしめます。

次回、原作始めるのって早すぎかな？をお送りします。では失礼します」

ラクト「（メア、俺の方が空気化してるよ）」

原作始めるのって早すぎかな？

家に到着した俺は慣れた手つきで食事の準備をしてたけど終わった。
珍しくメアの帰りが遅いし、会話をする相手がいないから暇。
先に食べちゃおうかな？

「今帰ったぞ」

帰って来たみたいだ。すごく狙ったようなタイミングで。
まあ、偶然だけど。

「お帰り。今日は遅かったね」

「そうだな。それと、作ってくれたのは嬉しいが、生憎、今は空腹
では無いのだ」

「珍しいね。何処かで食べてきたの？」

「ああ」

そんなに食べてきたのかな？
じゃあ、作った分は保存させよっか。

そう考えて手を動かすけど、さっきからメアが何か喋りたそうな視線でずっと見てくる。

何だろ？ 何かしたっけ？ 何もしてないよね。

「メア。さっきからずっと、俺の事みてるっばいけど何かあった？」

「何も無いさ。ただ、後で少し話がしたいだけだ。その作業が終わってからで構わない」

「分かった。じゃ、終わらせようか」

話の内容が分からない。

まあ、今日出かけた事に関係することだとは予想出来るけどね。

後片づけが終わって現在はテーブルに俺とメアが座ってる状態でテーブルには紅茶がある。

そして、紅茶を飲みながら会話を始める。

「それで話って何？メア」

「単刀直入に言うと、お前が言っていたなのはという少女に会ったぞ」

へー。意外だ。

俺よりメアの方が先にエンカウントするなんて。しかも、なのはの事は朝にしか言っていないよね。それで、出会っなんて予想外。

「何だ。思ったより驚いていないのだな。いや、驚いているようには見えないのだが」

「これでも十分驚いてるって。朝にしか言っていない人に出会うなんてさ」

「驚いていると言われてもな、その顔ではそうは思えないぞ」

昔から感情は表に出にくいからね。これでも驚いている方なんですよ。

それにしても、こんなに早く会うなんてねー。

「それで、会いに行くのか？」

「一応、行くつもりだけど。まあ、会話はあまりする気はないけど」

「それは会いに行くとは言わないぞ。姿を見ると言うのだ」

まあ、そうとも言っね。

実際、今日の朝だって姿は見ることはあっても、会話する気なんて少ししか無かったし。

それに、今朝は様子を見に行くとしか言って無かったし。

「どうした？変な顔をしているぞ」

「いや、何でもないよ。気にしないで」

「まあいい。それでだな……」

その後もメアは今日あったことを具体的に俺に言った。

高町。それがなのはの名字。

現在小学三年生の9歳で私立聖祥大小学校に通っている。

それで、メアは高町桃子さんという方と仲良くなり、なのはとは会おうと思えばいつでも会える状況になった。

高町家が営業している翠屋という喫茶店は美味しい。また食べたい。というかすぐ食べたい。

大まかにメアに言われた事をまとめるとこんな感じかな？

最後のは少し欲が入ってるし、入っているのは分かったけど、だからと言って

「あのシュークリームといいあのダージリンといいとても満足だ」

嬉しそうに自慢しないでくれると大変ありがたいのですが。

でも、メアがそう言うって事は、そんなに美味しかったのかな？

「シュークリームの舌触りも……」

まだ続いてるし。

それにしても、目を輝かせて何かを言ってくるメアはもしかしてこ

れが初めてかもしれない。

俺が口調変えた時もこんな感じなのかな？　だとしたら、普通に引くね。

「それでだ、今度作ってくれ」

どうやったら、自慢話からそういう結論になるか知りたいのですけど。

まあ、いいけど。

「分かったよ」

作り方は何とかなるとして、材料が無いから今度買ってこよう。

「ああ。ありがとう。それよりいいのか？　なのは嬢と会わなくて」

「別にあまり会話しないってだけで、会わないとは言って無いよ」

「まあ、どうせいずれ、会話することになるだろうがな」

「何で？」

会うような事はこっちから行かない限り無い筈だけど。

でも多分会う事になるんだろうな。だってさ、さっきからメアが物

凄い怪しい笑顔してるんだもん。絶対に何か考えている顔だし。

それより、なのは嬢って呼ぶことにしたんだ。意外だ。

「さっきの説明で言ったと思うが、なのは嬢は私立聖祥大小学校に通っている小学3年生だ。それで、今のお前の容姿は何だ？」

そう言えば、今なのはと同じ歳になってるんだった。

でもそれだけじゃ………ん？何で学校の事が出てきた？

「この言葉を言えば理解できると思うが、手続きはもう済ませた。テストは半年後だ」

はあー。何で勝手な事をするのかな？

これじゃあ、学校に行くしかなかったじゃん。今は元の姿に戻る事が出来ないし。

「嘘だ、嘘。私はお前の事で勝手な行動をし、迷惑にならないと誓ってるからな」

そう。十分にそうやって嘘を吐かれるのも、迷惑になるのですが

って、言いたいけど、ここは我慢する。

まあ、でも、嘘で本当に良かったよ。ホントに。

それから数日後。

「では、行ってくる」

「いつてらっしゃい」

そういう簡単なやり取りをして、玄関から外に出るメア。

何処に出かけるといって、なのはの家族、高町家が運営してる喫茶店である『翠屋』だよ。

えっと、今は

「午後三時かー。さすがに一週間毎日はある意味凄いね」

ん？ 何が凄いのかって？

だってさ、メアが一週間の間毎日、翠屋に行ってるんだよ。

あ

これじゃ、少し普通かな？　って思う人もいると思うけど、午後三時に行くんだよ。

何で午後三時かというのと、何だっけ？　確かー、メアが「おやつと
いうのは午後三時に食べるべきだ」って言ったからだよ。

え？　と思う人は普通だね。俺だって驚いたもん。

まさか、メアがそんな子供みたいな事をしているなんてって感じが
な？

まあ、ああいう口調でも、まだ子供だからね。

前回、言ってたでしょ。容姿を変えてることを伝えた時に。（分か
らない人は前話を見てね）

話がそれたね。

とにかく、毎日行かれるとお金が心配になってくる。

お金平気かなー？　でも、翠屋は、安くて美味しいから問題
無いのかな？

それで、当事者のメアとこんなやりとりをした。

「お前は分からないかも知れないが、あそこの料理は全てお前と同
等の美味しさなのだ」

あ、それは褒められてるのかな？　だとしたら、ありがとうね。

「それで、前に一週間に一度行こうと決めたが、一週間も待てないのだ。食べた次の日から、禁断症状が出てしまうのでな」

……何ですかそれは？　一種の薬ですか？　そして、メアは翠屋中毒者？　ってやつなの？

「ということで、毎日行こうと決めたんだ」

まあ、そんなやりとり（やりとりと言うよりは、メアが一方的に喋っていたんだけど）があった。

それから、メアは翠屋に毎日行ってる。

メアが翠屋に行ってから数十分後。

「さて、早いけど、夜ご飯の下準備でもしようかな？」

ラクトが、そう言ってソファから立ち上がり準備をしようとしたが、止めた。

何故なら、

“聞こえますか？　僕の声が聞こえますか？”

という念話が届いたからである。

珍しい事だが、ラクトは特に慌てず、

面倒な事になるのかな？

と、呑気に思っていた。

原作始めるのって早すぎかな？（後書き）

あとがきこーなー

まーた「さて、適当な感じになっちゃたけど、原作一話目！」

メア「確かに、最後は急だったな」

まーた「それは、文才がないからさ……自分で言って、悲しくなってきた」

メア「なら、言っな」

まーた「さて、A r i s h i a様、なっぺ様、感想ありがとうございます
いました」

メア「もう、感想が来るとは驚きだ」

まーた「それは、同じ意見だね」

メア「では、今回はこれで失礼する」

まーた「（これでも、子供何だけどね……）では次回、面倒事にな
っちゃったのかな？　をお送りします」

ラクト「……………」

面倒事になるのだろうか？（前書き）

念話が来る前、メアリスティングが住んでるマンションから出るところからです。

面倒事になるのだろうか？

Side メアリスティング

「では、行ってくる」

「いつてらっしゃい」

それだけ言って玄関から出る。

私はエレベータで下の階に行こうとするが、途中で見知った顔に出会った。

「こんにちはだな。テストロッサ嬢、アルフさん」

この金髪の少女に、オレンジ色の女性。名前は金髪の少女の方が、フェイト・テストロッサで、オレンジ色の女性はアルフと言う。そして、呼び方はテストロッサ嬢とアルフさんとなっている。

「こんにちは」

「何処かに行くのかい？」

「ああ。翠屋にな」

挨拶と簡単なやりとりをする私。

第三者から見たら、一見、普通の近所関係と思うだろうが、私はこの二人が魔法関係者だということを知っている。

「そんなに美味しいのかい？ その翠屋ってところは」

「美味しいぞ。早く食べなければ、禁断症状が出てしまう」

「そ、そうかい」

まあ、この二人は気づいていないみたいだが。

それより、何故そんな変な人を見るような顔をするんだ？ ラクトも、そんな顔をしていたしな。

翠屋が美味すぎて禁断症状が出る事がそんなに変なことなのか？

気にしないでいいか。早く行こう。

「ではな。私は行く」

そう言つてその場から離れ、エレベーターに乗る。

今日は平日か。となると、今日食べるのはシュークリーム以外の物とダーズリンか。

私は、平日の時はシュークリーム以外の物、土、日曜日の時はシュークリームを食べている。できれば、毎日シュークリームを食べたいのだが、それでは飽きてしまうからな。
このようにしているのだ。

マンションから完全に出て、鼻歌を歌いながら翠屋に向かう。

「楽しみだなー……ん、んっんー」

やはり、翠屋に行こうとするだけで気分が良くなるな。

ラクトは分らないと思うが、料理の才能が無い私にとって翠屋は本当に良い場所なのだ。

もちろん、ラクトの料理も美味いぞ。翠屋と同等くらいだが、金を払って食べる方が良い。と思ってるからな。

前に作ってもらったシュークリームは細かい所は違っていたが、あれも美味かったな。

「翠屋に行くまでの、この距離もまた良い」

私とラクトが住んでいるマンションから翠屋までは30分かかる。その為、私はマンションを2時30分に出ている。

何故かだと？

そんなものは1つしか無いじゃないか。3時のおやつというやつだよ。

……その事はもう知っているだと。ラクトか？ ラクトだな。まったく、勝手に言わないで欲しいものだな。……まあ、いい。

翠屋に到着。そして入ると

「いらっしやいませ。メアさん」

さすがにここまでの通になってくると名前も顔も覚えられるな。それに何回か会話もしたこともあるからな。

「今日、シュークリーム以外でお勧めの物はあるだろうか？」

「今日は平日だったわね。一応、あるわよ」

「じゃあ、それを1つにダージリンを頼む」

高町桃子さんとはもう仲が良いな。

そう考えながらテーブルに座り、運ばれてくる品物を待つ。

数分後

「お待たせしました。タルトと紅茶です」

「ん？ ああ、ありがとう。相変わらず、早いな」

「ありがとうございます」

置かれるタルトと紅茶を見て

さて、食べるか。

と、思った。しかし、その目はキラキラと輝かして、だ。

「ご馳走様」

ふうー、食べたな。これも、もちろん美味い。

メアの前にあるテーブルの上には、タルトが1ホール分と紅茶の空。これをゆっくり食べていき、完食した。

「さて、食べた事だ帰るとしよう」

そう考え私はレジに向かう。

「ご馳走さま。今日はもう帰るとするよ」

「あら、そうなの？」

「ああ。今日は少しそういう気分なものでな」

「そう」

喋っている最中にも、金のやりとりをする。……いや、こつこつ言い方をすると言法の様な気がするから訂正しておこう。

「では、また明日も来るぞ」

「大丈夫なの？ お金の方とか？」

「心配ない。ちゃんと考えているさ」

そう言つて、翠屋から出るメア。

……金の方は大丈夫だよな？ 彼女に言われて心配になつてきたが、いや、平気だろう。……しかし、ラクトにはあまり食べすぎるなとも言われているからな。私が働いて金を稼ぐか？ 近い内にラクトと話し合いでもしよう。

そんな平和な事（彼女にとっては大惨事）を考えながら、マンションに向かつてるメアだったが、途中で念話が来た為、足を止めた。

“ 助けて！ ”

念話か。しかし、ラクトが言うにはこの世界は魔法文化が低い筈だが？

考えるのは後にしよう。現地へ向かう。

そう考えていたら

“ メア、そつちにも念話来た？ ”

ラクトから念話が来た。

“ ああ。今は念話があった現地向かってるぞ ”

“ あ、そうなんだ。じゃあ、よろしくね ”

念話でのやりとりを終える。

まったく、

「面倒事にならなければいいが」

私は、とりあらず現地へ向かうため転移して移動することにした。

「とりあらず着いたが、さっきまで戦闘があったのか？」

さっきまで戦闘があったような痕跡を見て私はそう呟き、調べようと思ったが

「多分、こつちだと思っの」

「……っ！？」

こんな森のような場所に人が？ 魔法関係者か？ いや、それよりも、この声を最近聞いたことがあるような気が……

一応、警戒するにこしたことはないが、その前に姿を消しておこう。

そう考え、メアは気配を消す。

ここに近づいてくる者を待っているメアだったが、思わぬ人であった。

そして、この場で行われていたやりとりを聞き、興味を持った。

話を終えたのか、この場から去っていく3人と1匹。

「帰っていったか。あのフェレットは誰かの使い魔か？　まあ、どちらにしろ、面倒な事になりそうだ」

“ラクト”

“何？　メア？”

“私はもう少し今回の件を調べるから、夕食はいらん”

“あ、そうなんだ。心配する必要はないと思うけど、気をつけてね
ー”

“了解した”

念話を切り

「さて、なのは嬢を追いかけるか」

そうメアは言い、その場から離れた。

面倒事になるのだろうか？（後書き）

あとがきこーなー

まーた「うーん。最後の部分は原作知らない人じゃないと分からないね」

メア「まあ、そうなるのは仕方ないのではないか？」

まーた「そうかも知れないけどね。さて、本編の方は今回で戦闘だ。と思った人申し訳ないです。戦闘は次回になります」

メア「まあ、次の戦闘は戦闘と呼ぶのはいけないんじゃない？。と思う人もいるだろう」

まーた「うん。だって君も、普通に強いからね。ところで、君って交友関係とかどうなってるの？フェイトとか、アルフとか」

メア「まあ、そうだな、前に引っ越しをしたという事で挨拶されてあんなったぞ

さて、今回も感想をくれた Arishia 様、なっぺ様、本当にありがとうございます」

まーた「（また取られた）では、今回はこの辺で」

メア「失礼する」

ラクト」(今回は本編でも出番が異常に少ないや……グスン)」

魔法に関わる少女（前書き）

先に謝っておきます。本当にすみません。理由は後書きで。

魔法に関わる少女

Side なのは

私はあの傷ついたフェレットさんを取りあえず、動物病院に預けたの。

それで今は、塾あのフェレットさんをどうするかアリサちゃん達と話し合っていました。

アリサちゃんは犬がいて、すずかちゃんは猫がいるから、難しいって言ってます。

うちも、食べ物商売だから、原則としてペットの飼育は駄目だし……

「はい、それではこの問題を……高町さん。答えてください」

「あ、はい」

どうしよう？ まったく聞いて無かったの。

慌てる私に対して、アリサちゃんが問題の場所を教えてくれて、何とかギリギリ問題を解く事ができたの。

「ナイス。なのは」

ありがとう。アリサちゃん。

心の中でそう呟きながら私はルーズリーフに、家族に相談してみる

と書きました。

それから、少しすると今日の塾が終わり、家に帰る事になりました。そして、その帰り道。

「じゃあ、さっき書いた通りに、うちで相談してみるよ」

「お願いね」

この帰り道でも、あのフェレットさんについてお話しをしていたのでも、向かい側から、紅い瞳を持って黒髪のロングヘアの女性の登場で、その話は少し中断しました。

「おや？　こんにちはだな、なのは嬢。その二人は君の友達か？」

「あ、こんにちは。メアさん」

「ああ、こんにちは」

簡単な挨拶をすると、アリサちゃんが小声でそう言ってきますが

「なのは、この綺麗な女性の知り合い？」

「綺麗だなんて、少し、私にはもったいないような言葉だよ。なのは嬢のお友達君」

あれ？ アリサちゃんは小声で私に聞いてきたよね？ どうして聞こえるのかな？

こんなに、って言うほど離れては無いけど、普通は聞こえない筈だと思うの。

「……今の、聞こえたんですか？」

「私はよっぽどの地獄耳だからな。聞こえてしまふのだよ」

すずかちゃんが聞くけど、そう言われるの。

どう考えても、地獄耳っただけじゃ済まないと思うけど……。

「どうした？ 少し、ボーっとしているが」

「え、あ、平気です。メアさん」

この人はメアリスティングさんだけど、長いということで「メアで呼ぶといい」って言われたから、私はメアさんって呼ぶことにしているの。

それで、前に翠屋のお手伝いをしていた時に出会って以来、ほぼ毎日翠屋に來ているという常連客。それで、高町家全員と知り合いなの。

私は、メアさんと私の接点をアリサちゃん、すずかちゃん二人に説

明したの。

「あ、そうなんですか？ えっとー、メアさん？」

「ああ、ところで、まだ君達二人の名前を聞いてはいないのだが」

その言葉で思い出したように、二人とも自己紹介をする。

「私はアリサ・バニングスです。これから、よろしくお願いします」

「えっと、私は月村すずかです。よろしくお願いします」

「まあ、今さっき言っていたが、私はメアリスティングだ。長いから、メアで構わない。

これからよろしく。バニングス嬢、月村譲」

「「はい！」」

メアさんだけど、実は物凄く有名なの。

だって、翠屋に毎日って言ってもいいほど来ているし、それにこんなに綺麗だから。

この綺麗さは、一度見たら忘れないと思う。

さっき、すずかちゃんはその事を思い出して、驚いていたの。

「さて、そろそろ暗くなってくる。家まで送ろう」

「えっと、メアさんは向こう側から来たんじゃない……」

「別に構わないさ。それに、私は散歩として此処に来たのだ。だから、問題無い」

「あ、じゃあ、お願いします」

「そうそう。人の好意は素直に受け取っておいた方がいいよ」

その後、最初にアリサちゃん、次にすずかちゃんが家に帰って、私はメアさんと二人で帰っていき、最後まで送ってくれたのでした。

Side メアリスティング

特に変わったところは無かったな。
となると、やはりさっきのフェレットが念話を送って来たと考えるのが妥当だろう。

だが、特に問題も無さそうだな。

ラクトとなのは嬢は昔、遊んだ事があると言っていたが、本当にそれだけか？

遊んだだけなら、もう会いに行っても不思議ではないのだが。

「いや、考えるだけ無駄だろう。私はラクトの命に従う。ただ、それだけだ」

……………昔、助けられた恩をまだ、返せていないことだしな

まあ、この事は、とりあえず置いておこう。

しかし、どうするか？

もう少し、ここにいますか？ それとも、マンションに戻るか？

いや、もう少し調査するでしょう。

なら、念話が発信された、さっきの場所に戻るか。

そうメアリスティングは考え、歩いていった。

S i d e なのは

「これでよしと」

今は、さっきお父さん達と話合つて、一応、うちで預かれることになったフェレットさんについてを、アリサちゃんとすずかちゃんにメールを送ったところです。

メールを送ったから、もう寝ようかな？

私はそう思つて、ベッドで横になろうとしたのですが

“聞こえますか？ 僕の声が聞こえますか？”

夢に聞いた声とフェレットさんを拾う前に聞いた声と同じだ。
その後も、声が聞こえたけど、途中から声が途切れた。

気がついた時には、もう、私は走っていた。

あの、フェレットさんのところへ。

「はあ、はあ、はあ」

少し、走って動物病院の前に着いた時、またキーンっていう音がしたの。

その音が止まった時、その場の周りが、さっきの場所とは思えないような異様な感じに包まれた。

ドオン！！

「っ！？」

物凄い音がしたから、動物病院の中へ入っていくの。
そしたら、あのフェレットさんがいたの……変な化け物と一緒に。

黒い変なのが、暴れて近くにあった木が倒れちゃったの。

「何？ 何、何？ どうなってるの？」

「来て、くれたの？」

え？ 今の声ってこの子？
声が同じだから、そうかな？……って

「喋った！？」

でも、そんな事に驚いてる暇は無く、化け物がまた襲ったきたの。

それで、今は逃げながら、喋るフェレットさんに事情を聞いてるんだけど、

どうやら、この世界には『魔法』 というものがあるみたいです。

普通は信じられない話だけど、何でだろう？ 魔法がある事を知っているようにすぐに信じちゃったの。

「これを」

考えごとの途中だったけど、喋るフェレットさんが赤い宝石を口にくわえ、私に渡してきたの。

その宝石を手にとってみたら、すごく暖かいの。

「それを手に取り、僕の声を繰り返して」

「うん」

「いい？いくよ・・・我指名を受けしものなり」

「我指名を受けしものなり」

「契約の元その力を解き放て」

「契約の元その力を解き放て」

「風は空に星は天に」

「風は空に星は天に」

「そして不屈の心は」

「そして不屈の心は」

「この胸に……この手に魔法を！レイジングハート、セツトアップ！」「」

その呪文のような言葉を言った時、私は桃色の光に包み込まれた。

でも、訳が分からなくて私が慌てていた時、黒いのが襲いかかってきました。

「危ないっ！」

私は怖くて目を瞑りましたが、何も起きません。

恐る恐る目を開けてみると

「無事か？　なのは嬢」

白い剣のような物を持ったメアさんがそこにいたの。

魔法に関わる少女（後書き）

あとがきこーなー

メア「おい、戦闘が無いじゃないか」

まーた「本当にすみません。何か書いていたら丁度いい長さになっちゃったから」

メア「まったく、早く終わらせないと、あそこにさっきから独り言をぶつぶつ言ってる奴が、貴様の事をどう思っているのか、分からんぞ」

???「また、出番が……しかも、今回は念話自体も出てこなかったし……」

メア「正直、今の奴に関わりたくない」

まーた「大丈夫。次回から、ちゃんと出るようになるから。次回は戦闘が入る関係上、少しになるけど」

???「本当っ！？」

まーた「本当だよ。本編に出られるよ。では今回はこの辺で失礼します」

メア「次回も見えてくれ」

???「やったー！！」

「まーた、（まあ、本編には、だけどね）」

海鳴での初戦闘だ

Side メアリスティング

「無事か？　なのは嬢」

まったく、魔力を感じて来てみたらこの有様か。
まあ、そんなことは今は置いておこう。

それより

なのは嬢が魔法に関わったな。

まだ、バリアジャケットやデバイスを出していないみたいだが……

「メア、さん？」

「ああ、メアだ。無事か？　と言いたところだったが、その様子では問題無いようだな……さて、そのフェレット」

当事者と思われるこのフェレットから事情を聴くために話を振るが、
先程、吹っ飛ばしたスライムのような奴が、こちらに向かってきた。

「私が時間を稼ごう。君たちはその間に対処する条件でも整えておいてくれ」

当事者がいるのだ。そのぐらいはできて普通だろう。
さて、久しぶりと言うほどでは無いが、戦闘をしようか。

「え？ え？」

スライムもどきが近付いているのにも関わらず、事情が分からないと、そのような反応をするのは仕方の無いことが。

「なのは嬢はそのフェレットから話を聞いておいてくれ」

その言葉を言い終ると同時にスライムもどきが襲いかかって来た。
しかしそれを、冷静に受け止め

「『ノエス』プロテクション」

ガアアアアアン！！

プロテクションで受ける。
プロテクションはビクともせず、逆にスライムもどきがひるむ。

その隙を見逃さずに剣状態になっているメアリスティングのデバイス『ノエス』で横に一閃。

二つに別れるスライムもどき。しかし、二つ別れたスライム（以下略）は、すぐさま1つに戻り、スライムは一旦、メアリスティングから距離とる。

「ほう、斬撃による攻撃は意味がないか。となると、最初に吹っ飛ばした方法か、それとも、砲撃攻撃による攻撃か、どちらにするべきだろうか？」

そして

先程で接近戦は無理と判断したのか、スライムから触手のようなものが出て、それを鞭のようにしなせながら攻撃する。

それを見たメアリスティングは、手首を捻り、剣腹を上に向けるようにする。

「ノエス、片手銃^{ハンドガン}モード」

《了解しました。メア様》

剣腹を上に向けたまま、そう言ってデバイスであるノエスに命を出す。

そして、純白の剣は純白の片手銃^{ハンドガン}へと、変わっていく。

変わっていく間にも、触手はだんだんと近付いてきているが、メアリスティングに触れるまで、後5メートルといったところで、完全

に剣から銃に変化した。

「残念だったな。こちらの方が少し速かった」

そう言つて、一回引き金を引く。

一瞬で白い魔力光が銃の前に現れ、それを放出する。

すると

近付いてきた触手は無くなり、スライムがいたところではだいたい半分程度になった大きさになったスライムがいた。

「まあ、手加減したとはいえ、まだ生きているのか。案外、頑丈な方なのだな」

そうは言うが、スライムはもう瀕死状態で、ビクビクとしか動かない。

その事に気づいたメアリスティングはこう言う。

「前言撤回だ。案外、脆いものなのだな」

その時、後ろ側から、白色と青色を中心として、胸元におおきな赤いリボンをしたバリアジャケットを来ている少女が現れた。

「どうした？ 対処できる条件でもそろったのか？」

「え、えと、多分」

「……どうなのだ？ そのフェレット」

「はい。そろいました」

「もうあのスライムは瀕死状態だから、後は任せるとしよう」

そう言っ、メアリスティングはその場から数歩離れた。

そして、なのは『レイジングハート』を構える。

「リリカルマジカル!!」

「封印すべきは、忌まわしき器ジュエルシード!!」

「ジュエルシード、封印」

なのはがそう言っ、レイジングハートがシーリングモードになり桃色の光がスライムを包み込む。

そして最終的に、スライムがいた場所には青い宝石が1つ、落ちていた。

「これで問題解決か？ フェレット」

「一応はですけど。それより僕の名前はフェレットではありません」

とりあえず、問題は解決したらしいな。

フェレットが自己紹介するつもりらしいが、それはまた今度らしい。

「悪いが、今はこの辺で帰らせて貰うぞ。なにせ警察が来ているんだ」

先程の物音が間違いなく原因だろう。

結界を張るのを忘れていたしな。まあ、あれはなのは嬢が危険という事で省いたのだが……

「ふえ？」

「まあ、念話などが出来るだろうから、空いてる時間にも自己紹介はしよう」

そう言っつて、私は転移でその場から消えた。

Side ラクト

少し面倒な事が起きた。

簡単に言つと念話が届いてきたということで、今は現地にメアを向かわせている。

魔法文化は殆ど無い筈なんだけど、何故念話が来たのかという疑問は後にする。

嫌な予感がする。

まあ、メアがいる筈だから、問題は無いと思うけど一応心配だね。

そんな時

“面倒な事になってるぞ”

メアから念話が来て、とりあえずどうなってるか説明される前に

“どんな感じ？魔法が感知できる範囲ではAAAランク相当の魔導士が1人いると思う。”

そして、さっきまであった弱い魔力がその魔導士によって消された事も予想ができるけど、何が面倒事なの？“

一応ここから予想できる事を伝えるけど、そんなに問題点はないと思う。

“簡単に言っぞ。なのは嬢が魔法に関わった”

“……………それで、なのはは今どうしてるの？”

“今は少し離れた所に行った”

“分かった。ありがとう。とりあえず、戻ってきていいよ”

“了解した”

そう言って念話を切る。

「今戻った」

ふーむ、さすがにこれは予想外だね。

「どうした？」

「いや、何でもないよ。それより、何でなのはが魔法に関わったか分かる？」

「フェレットだったか？まあ、原因はソイツだ。何故巻き込んだかは知らないが」

フェレット？……ああ、魔力が低すぎて感じにくかった方か。

まったく、一こんな場所（地球）で魔法なんか使っな。人を巻き込むな。って言いたいね。

「分かった。じゃあ、メアはこのままなのは事を見ておいて。危険等の場合は今回みたいに手は出してもいいから。」

「お前はどつするんだ？」

「まあ、適当に時間を潰すよ」

「そうか」

まあ、そんな感じに話がまとまり、これから別々に行動するようになった。

海鳴での初戦闘だ（後書き）

あとがきこーなー

ラクト「出られたよー!!」

メア「うるさいな。断罪してやろうか？」

ラクト「すみません」

メア「さて、あとがきだ」

まーた「いやー、戦闘シーンって難しいね。一日遅れた理由も、書いては消して、書いては消しての繰り返しだったから」

メア「それでも、こんな駄文か。文才ないな」

まーた「……………」

メア「まあ、努力しようとしてるだけ、良いと思うのだがな」

まーた「頑張ります!! さて、次回ですが、メアの設定を書くところにいるのですが、もし、設定より本編進めろ。という方がいましたら、感想か、メッセージをかいてください」

メア「では、今回はこの辺で失礼する」

ラクト「（感想くれた方々、ほんとうにありがとうございます。…ここでは、やっぱり空気になるのかな？）」

私と の設定だ（前書き）

今回は設定などです。

設定に興味が無い方は、見なくてもいいかもしれません。

私と の設定だ

メア「今回は今作品で出る、私とラクトの設定だ」

まーた「伏線のところは、ネタばれにならないようにします?」

「よろしく願います……って何で俺だけが『ラクト』じゃないの!?!」

まーた「まあ、いいじゃん。もう、『出番が本編だけ』をキャッチコピーにすれば?」

「嫌だよ!!? ちゃんと後がき、感想にも出たいよ!!?」

まーた「そう思ったが為に、その後の の行方は分からなかった。完」

「終わらせないで!?! ちゃんと最初にラクトって表示されたよね? 何でわざわざなおすの?」

まーた「え? だって君って弄られキャラじゃないの?」

「何でそんな風に思ってるのかなー？」

まーた「強いて言うなら、面白いからさ」

メア「貴様らはいつまでゴチャゴチャと話しているのだ？ 今回の回は設定なのだろう？ なら、設定を早く出せ。と読者様が思っているだろうが」

まーた「はい。すみません……では、最初にメアの設定の方からどうぞ！」

名前：メアリスティング

身長：178cm しかし、変える事が可能（だが、これ以上身長を伸ばすことはできない）

年齢：？歳。ラクト曰く、まだ子供で、たまに（翠屋などでは）精

神年齢が低いような行動になる。

容姿：紅い瞳で黒髪の（ストレートの）ロングヘア。背中まで伸ばしている。

こちらに変えることができるが、幼くなるだけ。

視線が鋭い。しかし、普段は抑えてる。

鋭い時は、初対面の人ではまともに目を合わせられない。

（具体的例は、BLACK CATのイヴを大人にして、もっと紅い眼verみたいな感じ）

ちなみに、胸の大きさは、バトルマニア（本編では出てきていないが、シグナム）と同じ大きさ。

性格：とにかく冷静であり、ラクトの事を考えながら行動している（昔、とある事情で助けられたので、恩を返したいと思っている）冷静な彼女だが、とある人と同じ（または同じような）境遇の人を目の前で貶されると、冷静ではなくなることがある。

特技：特になし。苦手なことなら料理。

目標：とある人ともう一度、一緒に色々な事をする事。

デバイス：名前はノエス。純白のデバイスで、待機時はネックレスになっている。

インテリジェントデバイスでカードリッジシステムを搭載。

術式：ミッドとベルカの両方。

稀少能力：稀少能力は持っていない。

まーた「こんな感じです」

「作者。作者ってBLACK CATって知ってるの？
(内容)」

まーた「……………」

メア「貴様、よく知らないで私の容姿を決めたのか？ だとしたら、
断罪するが」

まーた「え、えっとー、黒髪に紅い瞳は決めていたよ。でも、それ
じゃ、読者の皆様方がイメージしにくいかなあ。って思ったから」

メア「そうか。まあ、いい」

「それにしても、設定でも伏線張ったね作者」

まーた「とある人のところか？　まあ、その人はメアの中で最も大切な人だから

……って、お前も会った時あるだろっ!？」

「あ、また伏線みたいの張った。回収しきれるのかな？」

まーた「多分、大丈夫さ」

メア「心配なのは私だけか？」

「俺も心配だねー」

まーた「頑張つてやる!」

「メアのデバイスってインテリジェントデバイスなのに、カ
ートリッジシステムをもう搭載してるんだ」

まーた「いやいやいやいや、これも君が搭載したんだよ」

「そうなんだ」

また「人事のように言いますね……………さて、次はラクトの設定です。でも、メアの設定より短いです」

名前：ラクト

身長：130cm ラクトも変えることが可能（上限は190cmまで）

年齢：？ 現在は肉体年齢を9歳にしている。メアと同様、ラクトも変えることが可能。

容姿：黒い瞳に黒髪で、綺麗に整っている顔立ち。髪の毛は少し目にかかる程度の長さ。

こちらも、メアと同様、ラクトも変えることが可能。
普段から、優しそうな目をしている。

（具体的例は、鋼殻のレギオスのレイフォンの黒髪、黒眼になった
ver）

性格：現在は誰にでも優しく、それに合った口調使いをする。しかし、この口調はメアにとっては気持ち悪いと思っている。

特技：特に、特技と言える事は無いが、大抵のことなら普通にできる。

目標：努力をする事。

デバイス：名前は??? メアとは反対の漆黒のデバイス。ラクト曰く、待機時にはさせていない。

インテリジェントデバイスで、カートリッジシステム搭載。

術式：ミッドとベルカの両方。

稀少能力：稀少能力持ちなのだが、名と能力は不明。

メア「疑問が多い設定だな」

まーた「まあね」

「……本当にメアの設定より短い」

まーた「は置いておいてと。まあ、こんな感じの設定ですね」

メア「結局、読者の皆様方の疑問が増えたと思うぞ」

まーた「そうかもねー。それじゃあ、ネタばれいきまーす」

メア「ネタばれ等が嫌いな方はすぐに戻った方がいい。本当にネタばれをするらしい」

まーた「メアは実は（分かっている方もいるかもしれませんが）人間ではありません」

メア「……まあ、今言った通り、私は人間ではない。私は「それ以上はダメ」……」

まーた「今言った事も含めて、全てではありませんがA's後に明かしていきます。まあ、少しずつ明かしていくけどね………では、今回はこの辺で失礼します」

メア「結局、疑問が増えたじゃないか……では私は失礼する」

「あれ？ 俺は？ まあ、謎が多い作品になりそうな予感ですが、今後もこの作品をよろしくお願いします。では失礼します」

私と の設定だ（後書き）

まーた「結局、疑問だけが増えてしまった。

さて、感想をくれた人、ありがとうございました。

それと、ラクト…… のデバイスの名前は次の次辺りに出ます。
では失礼します」

「だから、言い直さなくても良いってばっ!？」

海鳴での初戦闘だよ (ラクト) (前書き)

今回はタイトル通り、ラクトの戦闘ですが、正直、前回より酷いです。

海鳴での初戦闘だよ（ラクト）

Side ラクト

「それを渡してください」

あ、皆さんこんにちは。いや、こんばんはかな？……現実を見よう。
現在、金髪の少女が俺の前にいて、俺が拾おうとしている青い石を
指さしてそう言ってきます。

「一応聞くけど、何で？」

「それは……………」

そこで口籠っちゃダメでしょ。

それより、ここにもAAAランクの魔導士がいることを気にした方が
いいのかな？

とりあえず、何がどうなってるか分からないと思うので、

回想どうぞ。

皆さん、おはようございます。もしくは、こんにちは。いや、こんにちははかな？

ってアレ？ 同じようなことをもう一回言いそうな気がするけどな……気にしないで良いか。

そんなことより、昨日からメアと別々に行動する事になったけど、特に問題は無いと思う。

それで今は、数日振りに図書館に来ている。

「はやてはいるかなー？つと」

図書館で知り合ったはやてを思い出す。

また、車椅子に座ってるから本が取れなかったりして。って、はやては学校だからいる筈が無いか。

「また、取れへん」

「アレ？」

今、はやての声が聞こえたような気がするけど……。

一応、声のした方に行こう。

で、向かってみると、出会った時と同様に車椅子に座っていて、腕を伸ばしているけど本が取れずにいる少女がいた。

うん。間違いなくはやてだね。

何でここにいるの？ 学校じゃないの？ もしかして、サボリ……は無いか。

とりあえず、手伝ってから話を聞こうか。

「この本？ はやて」

「え？ あ、ラクト君。何でここにおるの？」

聞こうと思ったことを逆に聞かれた！？

「それは後で。で、取りたい本はこれ？」

「せや。ありがとうな」

「どういたしまして。とりあえず、空いてる席に座ろうか」

都合良く2人分の席が空いていたから座ることにした。

「それで、何ではやてはここにいるの？ 学校は？」

「うち、今足がこんな状態やから、今は学校休学中や」

「あ、そうなんだ」

休学って事は骨折とかじゃないって事か。

「ラクト君こそなんでここにいるんや？」

「俺は最近引越してきたからさ、学校に入学してない」

「そうなんや」

その後、はやてと少し話をしてから図書館を後にした。

で、まあ、その帰り道に魔力を感じて行ってみると、青い石があった。
興味があったから、拾おうとした。

そして に戻る。と、そんな感じです。

「それを渡してください」

別に渡しても問題無いかな？

無いなら渡してもいいけど、どこかで見た事あるんだよねー、この石を。

何だっけ？ まあ、いいか。

「そんなに言うならあげ……アレ？」

考えてみたら、そこまで欲しいと言う訳でも、特に拾っても意味が無いって事に気付いた。

だから、この子にあげる為にとりあえず、この石を拾おうとしたけど、いきなりこの石が光りだした。

「ジュエルシードが発動するっ!？」

そう言えば、そんな名前だったっけ？ 忘れてた。それと確か、封印しないといけないんだっけ？

じゃあ、封印しないと言って言いたかったけど……。

何て言うのかな？ ジュエルシードが光り始めた後、青かったのが

黒くなって、膨張してきて凄いスピードで形が出来上がっていく。
うん、そんな感じ。

「あー、貴方は下がっていた方が良いと思うよ。名前分らないから、A A Aランクのお嬢さんって言うけど」

ジュエルシードが発動することを忘れてた。

正直、発動というよりも暴走って言う方が合ってると思うけど。

考えるのは後にしよう。オーガのようになりかけているこいつをジュエルシードに戻してからでも十分に時間はあるから。

「あなたも魔導士ですか？」

「だから、下がっていた方がいいよ。一応、このオーガある程度の強さがあるから」

このA A Aランクのお嬢さんじゃきついと思う程の魔力の感じだし。

「質問に答えてください」

「そうと言えばそうだけどって言うとかよ」

と言うより冷静だね。このA A Aランクのお嬢さん。

普通、こついつの見たら少なくとも動揺とか、驚いたりすると思うのにな。

「とりあえず、このオーガを倒さないといけないからー、構えておいた方がよいよ。」

でも、A A Aランクのお嬢さんにはきついな？」

その言葉でムツとなるが、構えるA A Aランクの少女。

そして

「ガアアアアアアアアアア！！」

そう叫びながら凄スピードでオーガはA A Aランクの少女（以下、少女）の前に移動し、太い腕をそのまま振り下す。

「え？」

少女はあまりにも速いスピードだった為、振り下ろしてくる腕に反応するのが遅れた。

すぐさま、少女は振り下ろしてくる腕から逃れようとするが、それすらも間に合わない程にその腕はすぐ頭上にあった。

ドオオオオオオン！！

地面には腕によって作られた大きなクレームができた。しかしそこには少女の姿は無かった。

「AAAランクのお嬢さんじゃ少しきつい相手って言ったよね。危ないから下がってて」

「え？」

「え？じゃないよ。危ないから下がっててって言ったんだよ」

クレームができた所からすぐ近くにラクトがお姫様抱っこした状態でそう言った。

お姫様抱っこされているという状況に気がついた少女は顔が赤くなる。

「は、はい／／／／／」

「すぐに終わるからそこにいてね」

少女が離れた時に、オーガが見失ったラクト達のことを見つける。そして、先程と同じように、今度はラクトのことを襲う。

少女が気がついた時には既に腕が宙に舞っていた。

腕が落ち、赤い血が流れる。

「ウオオオオオオオオ!!」

腕を斬られた事に気が付いたオーガは叫び声を上げる。

「まったく、うるさいな。もう少し静かにしてよ」

そう言うラクト。腕を斬った時に流れた返り血は付いて無く今の姿は、手には黒い剣、黒を中心とした服装を身に纏っている。

「ウオオオオオオオオ!!」

「だから、静かにしてって言ってるんだよ。まったく」

突進してくるオーガに対し、冷静にそう言う。

オーガは進んできながら、斬られていない方の腕で上から押しつぶそうとするが、いつの間に押しつぶせる範囲から離れていた。

「まあ、通じるとは思っただけ。できれば、そんなにここら辺を壊さないで」

腕がある場所から近い場所でそう言っている途中に、ラクトがその場から消える。

「戻すの面倒だから、さ」

その声はオーガの左の足元からした。

それに気がついたオーガは腕を振ろうとするが途中からオーガの体が倒れていく。

オーガの体勢が倒れている時にはラクトは足元にはいなくオーガ正面にいて、オーガの足は、いつの間に斬った所に沿ってだんだんとずれていく。

「とりあえず、片腕と片足を斬ったから、そろそろ終わらせようかな？」

力の差を見せつけられ、その言葉に恐怖するオーガ。
しかし途中から、オーガは

背後にいた少女に襲いかかる。

「っ！？」

突然の事に動揺し、反応が遅れる。
ダメージを負っているせいか先程よりかは速くないが、それでも間

に合わない程に接近を許してしまった。

少女は恐怖から目をつぶるが、いつまでも衝撃、痛みが襲ってこない。

恐る恐る目を開いていくと

「ごめんね。遊ばずにとっと片づければ良かった」

こちらを向きながら、背に担ぐようにして、太い腕を剣腹で止めるラクトがいた。

そして、ラクトは少し声を低くしながら

「こういう事をするのは褒められないよ」

と言う。

その言葉の直後にオーガの正面から消える。

オーガは周りを見渡すが、どこにもラクトはいなかった。

「戦闘中に敵を見失うって、正直、話にならないよ」

その言葉でオーガは上を見ると、そこにはいかにも、これから斬るという体勢になっている状態のラクトがいた。

それに気がついたオーガはラクトに向かって腕を出す、斬る方が

速かった。

縦に
一閃。

その一閃だけで、オーガは完全に消滅した。

海鳴での初戦闘だよ（ラクト）（後書き）

あとがきこーなー

ラクト「俺の初戦闘かー」

まーた「前はメアだったからね」

メア「私の時より適当と言うより、圧倒的だな」

ラクト「そう？ これでも、全然全力でも無いんだけど……」

まーた「だからぶつちゃけ、メアの時より簡単に書けた。でも、駄文です」

メア「それは言わなくても、読者の皆様方は分かっている筈だ」

まーた「それも、そうですね……」

ラクト「さて、感想をくれた『Arishia』様、『なっぺ』様、『七つ夜&夜つ七』、本当にありがとうございます。では今回はこの辺で失礼します」

まーた「では、この作品を読んでいただき、ありがとうございます
た」

能力？とデバイス？と自己紹介

Side ラクト

……何だ、随分と弱かった。

まあ、感じられた魔力から、大体の強さは分かってたけど弱すぎる。もっと、齒応えのある奴と戦いたかった……って、これじゃバトルマニアか、戦闘狂みたいな言葉になるから、この言葉は訂正しておくよ。

もっとも、バトルマニアは俺じゃ無くて

《もう終わっちまったのか？　っち、つまんねえ奴だ》

こいつなんだけどね。

えっと、こいつは俺のデバイスで名前は『ラルドデイス』。
俺の^{パートナー}一時的な相棒で、インテリジェントデバイス。

《オイ、他に戦える奴はいないのか？》

「いないよ。とりあえず、ありがとうね」

《礼の言葉を述べるんだったら、とつとと、敵をよこしやがれ》

「敵を何人倒しても、君はそう言うでしょ？」

《知るか。ってその金髪は……ダメだな。相手にならずぎて意味がねえ》

ラルドデイスとメアが持つてるノエスの両方は俺が作ったから、他のデバイスより性能が良い。その為、どの程度の強さとかの様々な情報まで分かる。

「まだ子供なんだよ。そんな厳しいというより、失礼なこととは言っちゃダメだよ」

《本心で言っているのですか？ 我が主》

あ、ミスった。

バトルマニア（というより、強者との戦いを求めている。同じ意味みただけで本人曰く違うらしい）のラルドデイスだけど、こうやって、敬語で喋ってる時は凄く不機嫌。

つまり、大変怒っています。

《子供だから、厳しく言っではならない？ 我が主がそんな甘い言葉を言うなんて、考えられません》

「悪かったって。でも、今の俺なんだから少しは仕方ないでしょ」

《少しは大目に見ましよう。しかし、今の状態のまま、甘い考えが

原因で死んでしまったら意味がないでしょう。私は貴方が完全に能力を取り戻す為に創られたのですから」

「……それもそうだね。とりあえず、今回はありがとう。戻っていいよ」

《うち、何で俺が説教なんか》

最後にそう言われ、バリアジャケットごとラルドデイスは虚空に吸い込まれた。

分かってるよ。いくら今の状態は油断したら死ぬ可能性があるって事は。

「さて、ごめんね。そのAAAランクのお嬢さん」

とりあえず、このAAAランクのお嬢さんから話でも聞こうかな？

Side メアリスティング

む？ 今、ラクトの魔力が感じたと思ったのだが、気のせいかな？
あまりにも、一瞬すぎて判断ができません。

《メアリスティング様》

そこに、私のデバイスであるノエスが私の事を呼んだ。

「何だ？」

《はい。今、ラクト様の魔力が感知しましたので、その報告を》

やはり、ラクトの魔力の事は勘違いでは無かったようだ。

「ああ、御苦労」

その一言でこの会話は終わり、ラクトの事について考える。

ラクトが魔力を使うと言う事は、やはり戦闘だろうか？ この町で
戦闘となると、前のスライムと関係あるのか？ 今日はその辺りを
自己紹介も含め、あのフェレットから聞くか。

現在は十時だから、なのは嬢は学校にいたるうが、念話で話をすれば問題はないだろう。

そう考えメアは、まずはフェレットの方から念話で会話をする事にした。

S i d e ラクト

オーガを消滅させて、元に戻ったジュエルシードを回収してから数分後。

「あー、AAAランクのお嬢さん。今は何処に向かっているの？」

今、現在進行形で何故か引つ張られながらどこかに向かっています。地面で引きずられるという事は無いけど、何かシヨックだね。

「私が住んでるマンションで、私の名前はAAAランクのお嬢さん

じゃ無くて、フェイト・テストロッサだよ」

「えっと、俺はラクトだよ。これからよろしく？ テスタロッサさん」

「フェイトでいいよ」

うーん、はやての時は普通に問題無かったから、平気かな？

でも、一応魔導士だし、とりあえずここはさん付けしよう。

「フェイトさ……ん？」

「呼び捨てにして」

フェイトさんと言おうとしたけど、さん付けの『さ』の時点で「呼び捨てにしてください」と言い始めて、『ん』まで良い終わった時にはすでに言い終わってた。

そんなことができるなら反射神経なのかな？ とにかく、そんなに速く反応できるならさっきのオーガの時も何とかできたと思うけど……。

気にしないでいいか。多分こっぴうのは気にしちゃいけないと思うし。

「分かったよ。これからよろしく、フェイト」

「こちらこそよろしくね。えっと、ここが住んでるマンション」

さっきから思ってたけどね、自己紹介してる途中にも知ってる道を通ってたような気がしてたしさ。いや、気がしてたじゃないって知ってる道だったや。それで、この町に来てから一番通ってる所だし。

うん、何が言いたいと言いますと

どうして俺達と同じマンションなのでしょうか？

はい。今、フェイトが住んでいるというマンションもとい、俺が住んでるマンションの中に入りました。

エレベーターを使って、上っていきます。着いたのでフェイトが住んでる部屋に行きます。

何だっけ、こういうのをお約束って言うんだっけ？

何で、お隣の部屋なのでしょうか？

普通、気が付くのではないのでしょうか。

でも、近所関係とかは全部メアに任せてたから仕方の無い事なのかな？

まあ、良いか。

「どうしたの？ 何かボーっとしてるけど」

「ごめんね。ちょっと考えごとしてた」

そこまで深く考えてるつもりは無かったけど、ボーっとしちゃってみたいだね。

「お邪魔しまーす」

玄関から入って奥に進んでいくけど、必要最低限以外って言うか、あまりにも物が少ないかな。

「適当にくつろいでいいよ」

「分かった」

フェイトがそう言ってきたので俺はソファがあったから、そこに座ることにした。

本当に物が何もないな……。俺達の部屋ですら少しは物あるんだけど。

……まあ、半分というより、ほぼ全部の物はメアのものだけだね。そう言えば、メアは今何やってんだろう？

気にしても仕方がないかな？

その時、玄関から誰かが帰って来た。

「フェイトー。今、帰ったよー」

誰？ 今、こっちに鼻歌歌いながら来てる人。

うーん、魔力の波長が同じだから、フェイトの使い魔かな？

じゃあ、ソファでくつろいでるのは失礼だね。立っておこつ。

「うん。お帰り」

「ただいま……アンタ誰だい？」

警戒されてるっぽい。

まあ、フェイトも最初そうだったから仕方ないか。

「初めまして、ラクトという者です。以後よろしくお願いします。
使い魔さん」

「っ！？」

アレ？普通に自己紹介したつもりなんだけど。
何で、こんなに敵対心出てるの？

「アンタ、管理局の奴かい？ だったら、ガブツといくよ」

成程。一応、マンション来る途中でフェイトには管理局の人じゃないって伝えたから、フェイトから伝えさせた方がいいかな？ 使い魔だと思っし。

それに、あんな正義を語る偽善組織になんか入らないと思うけど。……まあ、そう思ってるのは俺だけじゃないけどさ。

「敵対心はないから。フェイト、事情よろしく」

まあ、さっきの考え通りにした方がいいかな？ って思ったから、説明はフェイトに任せることにした。

別に面倒臭いとか思ってるないよ………ホントダヨ？

少しすると、事情を話し終えたようだ。

「あんまり強そうにはみえないんだけどねえー」

フェイトから事情を聞いた印象がそれですか。

「俺は使い魔さんの言う通り、そんなに強くないよ」

「使い魔さんじゃなくて、アルフって言う名前だよ」

「そう。よろしくね。アルフさん」

まだ、敵対心みたいのがあるけど問題はなさそうだ。
仲良くできたらいいかな？

能力？とデバイス？と自己紹介（後書き）

あとがきこーなー

メア「何故、更新されている？ 活動報告などによると当分先と思うのだが」

まーた「えっと、事故にあう前に書いておいたものを、出来る限り違和感が無いようにして、なんとか文章を書いた。だから、今回の回ではラクトメインじゃない筈なのに、ラクトメインになった」

メア「何故、もっと前からこうしなかった？」

まーた「違和感とかを無くすのに、スゲー時間がかかった。でも、次回からは亀更新になる。それで、活動報告にどうすればいいかなことを書いた」

メア「成程な。では、今回（といっても結構前だが）感想をくれた【七つ夜&夜つ七】様、【A r i s h i a】様、【天童翼】様、【なっぺ】様、本当にありがとう」

まーた「短編の方は、早めに書き終らせたいとは思っていますが、できない可能性もありますのでご了承を」

メア「では、失礼する」

ラクト」早く復活して欲しい。これ以上、出番が少なくなるのは……」

考え事ばかりだな……私は（前書き）

以外と早く書けちゃったので更新します。

考え事ばかりだな……私は

Side メアリスティング

現在、私は翠屋でなのは嬢とフェレット……ではなく、ユーノ少年と話し合っている。

此処に来る前、ユーノ少年と念話でやりとりをした後、翠屋なら大丈夫だろうと思いなのは嬢に伝え現在に至る。

説明が雑だが、理解してくれるとありがたい。

まあ、私もユーノ少年からある程度の事は聞いた。聞いた後、私はとりあえずユーノ少年のことを手伝うことにした。

理由は2つ。

一つ目は先程（分からない奴は前話を見る）、ラクトの魔力を感じた事だ。奴が動いているということは、理由はともかく奴がこの件を早く解決したいと思っている筈だからだ。まあ、勘違いでも勘違いでなくともどちらでもいい。奴が動くなら私も動く。唯、それだけだ。

そして、2つ目。これは私の興味本位だが、なのは嬢とラクトとの関係だ。前に奴は遊んだ事があると言った。しかし、その後少しだが違和感を感じたのだ。……私が奴のことを勝手に知ろうとするのは気が引けるが、この際は特別だ。

「メアさん」

と、考え事に集中しすぎていたようだ。

「何だ？　なのは嬢」

「えっと、メアさんも魔法関係者なんですよね？」

「まあ、そうだが」

何が聞きたいのだろう？　まあ、なのは嬢とユーノ少年が念話でやり取りをしているのは分かるが、……私の事を詳しく知りたいのか？

念話での会話を終えたのか、なのは嬢の代わりに、ユーノ少年が代表して念話で聞いてきた。

“何故、メアリスティングさんは、それほどまでの力を持っているのに、魔法文化が無いって言うてもいいこの地球にいるのですか？”

「メアで構わないよ、ユーノ少年」

それだけ言うと、ユーノ少年は頷く。

それにしても、困ったな。理由はラクトに付いてきたというのが正しいが、奴の事を喋ってしまったていいのか？ ということだ。

そこで、2人に少し待ってほしいと言い、ラクトと念話でやりとりをすることにした。

“ラクト”

“ん？ 何？ メア”

“いくつか聞きたい事がある。ひとつは今日の前になのは嬢がいるのだが、貴様のことを言っても構わないか？ ということと、今回の件はどこまで関わる？ ということだ”

そう聞くと、奴は少し考え事をしているのかどうか知らんが、少しの間黙った。

少しして、考えが決まったのか念話でのやりとりを再開させた。

“一つ目の質問は……まあ、構わないかな？ 多分、平気だと思うし。あ、でも話したら、メアも少し困るんじゃない？ 二つ目は、気分による。以上”

それだけ言つと、ラクトは念話を切つてこちらから念話ができなくなった。

……忘れていたな。奴の言う通りだ。

「待たせて申し訳ないな。さて、何だったか？ ユーノ少年」

“はい、何故、力をもっているのにこの地球にいるんですか？ ということです”

「簡単に言つと、今は行動を別に行っているが、とある者に付いてきたということだ」

私達の情報が漏れるのは、ラクトだけではなく、私も少し困る状況になることを忘れていた。

“とある者とは誰のことでしょうか？”

続いてユーノ少年がそう聞いてくるが、これは教える訳にはいかないな。

「すまない。それは教えるわけにはいかないのだ。教えてしまったら、私は怒られてしまう。それだけは遠慮したいのだ」

“……そうですか”

まあ、そう言つと、私が思っていた以上に簡単に引き下がった。

私からしたら、それは嬉しいことだった為、特に気にせずにいた。

「では、そろそろジュエルシールドでも探しにいこうかな？　なのは嬢、ユーノ少年」

「え？　あ、はい」

……？　何か驚いていたような気がするが、気のせいだろう。

S i d e フェイト

とある神社で私とアルフは驚いてる。

ジュエルシールドが発動したから私とアルフ、そして行動を共にすることになったラクトと一緒に向かってたんだけど、ラクトが「先に行ってる」とだけ言ってラクトが消えた。

それで私達は反応があつた場所に向かって、その場所に着いた。

でも、その場所には

「フェイト、とりあえずジュエルシールド手に入れたよ」

既にジュエルシールドを手に入れたラクトがいた。戦闘があつたのか、少し戦闘の後のようなものができていた。

その事実には私とアルフは驚いている。

何故なら、ラクトが消えてから私達は急いで向かったのに、ジュエルシールドを手に入れているからだ。時間にして、10秒ぐらい。

「も、もう手に入れたのかい？」

アルフが聞くけど、それは聞く必要の無い事。だって、魔力の感じからして間違いなく本物だから。アルフも分かってる筈だけど。

「まあ、出来る限り早く手に入れたかったんでしょ？ だから、少し真面目にやった。……ほら、フェイト」

そう言つて、彼はジュエルシールドを私に向かって投げた。それを両手で受け取る。

そして、私達は彼に対してこう思うようになった。

「じゃ、マンションに戻ろうかな？」

彼はどれほど強いのだろうか

と

S i d e メアリスティング

現在は、なのは嬢とユーノ少年と別々に行動している。もちろんジュエルシードを探すためだ。

ユーノ少年はジュエルシードは21個あると言っていたな。となると、いまだに封印されていないジュエルシードの数は……まだまだあるな。しかし、ラクトも動いていることだ、私の予想より、早く全てのジュエルシードが封印されるのだろう。

「ジュエルシードは見つからんな」

私はラクト達のように強くない。あの人と同じ力があるとは聞いているが、私はまだまだ使いこなせていないな。

もっと、使いこなすことができれば、私は……………

と、今はジュエルシードを探さなければな。考えごとをしている場合では無い。

「まったく、何を考え……ジュエルシードが発動したか」

メアが独り言を呟いている途中にジュエルシードが発動した。

「まずは、なのは嬢とユーノ少年を合流だな」

そう言ってメアは転移でなのは達がいる場所に向かった。

S i d e なのは

私は今ジュエルシードが発動しちゃったから、とあるマンションの屋上にユーノ君といます。

やっぱり、さっきの男の子が持ってたのはジュエルシードだったんだ。私をもっとちゃんとしてたら、こんな事にはならなかったのに……気が付いていた筈なのに……

今は考えていてもしょうがないから、できるかぎり他の人に迷惑かけないように速く封印しよう。

その時、なのはがいるマンションに背中まで髪を伸ばしているロングヘアの女性が現れた。

「無事か？なのは嬢、ユーノ少年」

「メアさん！」

この人は『翠屋』によく来ている背の高く紅色の眼をした綺麗な女性で、

名前はメアリスティングっていう名前だけど「メアで良いぞ」と言うから、私はメアさんと呼ぶことにしている。

「その様子では問題無いようだな。まあ、今回の様なケースでは大

事に至ることは無いか」

今回のケースっていうのは、前みたいに人を襲ってくる事はないって言ってるのかな？

でも、それでも、他の人に迷惑がかかってる。今も木が大きくなってる？……る？

なのは疑問に思った時には、どんどん、大きくなりつつあった木の成長が止まっていた。

「一応、結界を張っておいた。これで、他人には迷惑はかからないだろう。

だから、心おきなくジュエルシードを封印したまえ。なのは嬢、ユーノ少年」

「どうやって、あの木の成長も止めたのですか？ 僕は、結界関係の魔法は少しは得意だけど、こんな結界は見た事ない」

ユーノ君がメアさんに魔法関係の事だと思っことを聞いてるけど

「それは、企業秘密というものだ」

と言って、秘密にされるの。

前も助けられた時も、私が使ってる杖じゃなくて剣みたいなモノだったし……

「今はそんな事はどうでもいい。速くジュエルシードを」

その言葉で思い出したの。

今は、出来る限り早くジュエルシードを封印しないと。

「レイジングハート！」

《All right . My master》

なのはがそう言う事で、レイジングハートの形が変わる。

そして数分後、ジュエルシードは高町なのはとレイジングハートの手によって封印された。

考え事ばかりだな……私は（後書き）

まーた「ふう、何とか書いてるかな？」

メア「まあ、何とかなっているのではないか？」

まーた「そうだといけれど……本編の方は、ラクトが手に入れたジュエルシードはあの犬のジュエルシードです。それで、なのはが封印したものは木のやつです」

メア「同時に封印する必要はなかったのではないか？」

まーた「まあ、そうかもしれないね」

メア「どうしようもない奴だな」

まーた「すみません。……今回、感想をくれた【七つ夜&夜つ七】様、【なっぺ】様、【雨季】様、ありがとうございます！」

メア「ありがとうと言っておう」

まーた「では今回はこの辺で失礼します」

ラクト「（一応、出れた）」

新しき日常っていつと、ちょっとカッコイイかな？（前書き）

今回はラクトサイドオンリーです。

新しき日常っていうと、ちょっとカッコイイかな？

S i d e ラクト

今日も俺は台所で料理を作っています。でも、一週間前と比べ、ひとつだけ違うところがあります。その違いというのは、料理を作る台所の位置が違ふということです。

現在、俺とメアが住んでいた部屋のひとつお隣の部屋の台所にいます。

つまり

フェイトとアルフが住んでいる部屋の台所で料理を作っているという事です。

……何故、こうなったんだろう？ とりあえず、回想どうぞ。

「いやー、ジュエルシードって言ってもやっぱりこの程度の物なんだよね」

現在、ジュエルシードが発動したから、フェイト達と一緒に向かってたけど早めに封印したかったから、1人で先に向かって犬？を倒したところです。もちろん、ジュエルシードは手に入れました。

ジュエルシードを手に入れてからの感想を言い終えてから、フェイトとアルフさんがこの場所に到着した。

「フェイト、とりあえずジュエルシードを手に入れたよ」

そう言っつて、手に入れたジュエルシードをフェイトとアルフさんに見せる。

すると、驚いたような顔をしてきたので、何を驚いているんだろう？と考えていた。

しかし、考えている途中で

「も、もう手に入ったのかい？」

とアルフさんがそう言ってきた。

あ、そう言えば、あの犬？を見つけた瞬間に斬りかかって戦闘になつて、まあ、殺した訳じゃないけど、文字通りで瞬殺したからすぐにジュエルシードは手に入ったんだよね。そのスピードに驚いているのかな？まあ、少し真面目にやったからからね。

「まあ、出来る限り早く手に入れたかったんでしょ？ だから少し真面目にやった。……ほら、フェイト」

そう言つて、フェイトに向かって手に入れたジュエルシードを投げる。それを、慌てながらも両手で取ったことを可愛らしいと思つたのは秘密だ。

落とさずに取れた事を確認して、俺とフェイトとアルフさんはマンションに戻る事になった。

「ラクトってどのくらい強いの？」

マンションに向かつている最中に、フェイトがそう言ってきたから答えようとしたんだけど、正直に言つと、何て言えば良いか困る。だって、本来のランクはE×ランクなんだけど、今は力が弱つていてその上、調べていなかったから分からない。

まあ、それでもSSランクオーバーぐらいかな？ ……でも、多分それ以上だと思う。

「まあ、SSランクオーバーだけど、戦法によってはSSSランクの魔導士にも勝てると思うほどの強さ」

「え！？」

いやー、良いリアクションだねって言いたいけど、驚きすぎじゃない？ SSSランクを倒せる魔導士はあんまりいないっていうのは分かるけどさ。

「す、すすす凄強いんだね。私と同じ年ぐらいなのに」

「まあ、色んなことがあったからね。嫌でも、強くなるものなんだよ。と、着いた」

簡単なやり取りをしている間にマンションに着きました。

と言うより、フェイト少し噛みすぎ。もう少し、落ち着いて喋ろう。それで、俺は自分の部屋、フェイトとアルフさんは隣の部屋で別れる筈だったんだけど、フェイトが部屋の前で

「ぎゅっううー」

と、メアと同様に大きな音がフェイトから鳴りました。

「／／／／／／」

その音で顔を真っ赤にしてしまうフェイト。

えっと、お腹が減ってるんだよね？ 今の時間は午後2時ぐらいだけど、空腹になるには少し早すぎじゃないのかな？ ……もしかして、ちゃんとした食事を取った事はないのかな？

そう考え、アルフさんに質問をする。

「アルフさん」

「な、何だい？」

「フェイトって、ロクに食べ物を食べずにジュエルシード探しをしているんですか？」

「この子、私が作っても全然、食べてくれないんだよ」

「ア、アルフ！？ / / / / /」

うん、その慌てようじゃ、全然食べていないんだね。まったく、育ちざかりなのに食べないって不健康だよ。まあ、アルフさんも自分の主人だから強く言えないって言うのは分かるけどさ、ちゃんと食べさせないと駄目だよ。

仕方がない。

「じゃあ、俺が作るから、フェイトは絶対に食べる事」

「アンタ、料理作れるのかい？」

「まあ、嗜み程度なら」

そんな感じで、俺はフェイト達の部屋に入って料理を作ることになった。なった訳だけど、冷蔵庫に入ってる材料があまりにも無さ過ぎて、なにも作る事ができなかった。ということで、自分の部屋から材料を取って来て、ようやく料理が作れるようになった。

少しして料理が完成した。

「こんなもんだね。……でも、少し作り過ぎちゃった」

……自分でやっておいてなんだけど、本当に作り過ぎちゃった。フェイトとアルフさんが二人合わせて、メアと同じくらい食べることができるなら、まあ、平気だと思うけど……

「アルフさん。一応、出来たんで、運ぶの手伝ってもらえますか？」

「いいよ……って少し作り過ぎじゃないのかい？」

「すみません」

テーブルに料理を運び終え、三人で食べる。

「」「頂きます」「」

そう言うってから、アルフさんが最初に一口。俺からしたら、美味し
いって言われるかどうか、分からないから内心ビクビクしてたんだ
けど

「どうやったら、こんなに美味しくできるんだい？」

という一言で、その不安は何処かに消えた。

やっぱり、作った料理を美味しいって言われるのは嬉しい事だね。
じゃ、俺も一口。

……まあ、いつも通りの味になってるね。よし。ところで、フエイ
トは食べてるかな？

そう思い、フエイトの方を見てみると

「」馳走様」

うんうん、ちゃんと食べて……………え？
今、フエイトは何て言った？ ご馳走様？ ……ご馳走様っ！？

思わず、二度見してみると、フエイトの取り皿に盛ってあった料理

が無くなっていた。

「フエ、フェイト、もう食べちゃったの？」

「うん。とても、美味しかったよ。あ、おかわりってある？ ラクト」

この出来事にアルフさんは、さっきのランクを言った時よりもかなり驚いていた。

正直、俺も驚いてる。だってさ、メア以上に早く食べれる事ができるって……何て言えば良いんだろう？ ……分からないけど、とりあえず、凄く驚いてる。

「あるよ。ちょっと、待ってて」

そう言っつて、フェイトの取り皿を取り、料理を入れる。そして、その間にアルフさんと念話でやり取りを行う。

“アルフさん”

“な、何だい？”

“アルフさんが作った時もこんなに早食いだっただんですか？”

“ち、違うよ。私の作った料理の時は全然食べてくれなかったしね”

“ あ、そうですね ”

それだけ、言って念話を切る。

そして、数分後。

俺が作った料理は三人で食べ終えた。でも、一番フェイトが食べた。大体、料理の六割を。

そんな出来事があり、その日から、フェイトの部屋で料理を作ることになった。

そして、今日も作った料理の殆どが、フェイトの胃袋に収まることになった。

「今日も、ラクトの作った料理、美味しかったよ」

「そう言ってくれると嬉しいね」

今日で、フェイトの部屋で初めて料理を作ってから、三日が経った。
まあ、この三日でフェイトとアルフとは随分、仲が良くなったものだ。

三日前はアルフさんと言っていたが、アルフがさん付けは止めてくれと言ってから、呼び捨て、タメ口になったというのが、仲良くなったという証拠のような物だ。

もちろん、この三日間もジュエルシードを探している。それで、今フェイトが持っているジュエルシードの数が7個になった。正直、集めるスピードが早いと自分で思っている。でも、あと14個あるから、もう少し働くつもり。

とは言っても、12個全部集められるとは思ってもいないよ。だって、メアもなのは一緒に行動してるみたいだからね。どんぐらい集めてるかは知らないけどさ。

「さて、じゃあ、今日もジュエルシード集めをしようか」

「うん」

「そっだね」

そう言っつて、マンションから出て、ジュエルシード集めに専念する。

正直、何で俺がフェイトとアルフと一緒に行動してるかと聞かれち

やったら、なんとなくって答えるけど、本当に理由が無いんだよね。でも、現に俺は手伝ってる訳だし。……何でだろ？

誰かの為に頑張る人を応援したいのかな？

「ラクト？　ボーっとしてるけど、大丈夫？」

変なことを考えすぎちゃったね。ま、理由はなくても、手伝いたいって思うから手伝う。それだけで十分かな？

最終的にラクトはそうまとめた。

「ちょっと、考えごとしてたよ。じゃ、俺はまた別行動するから、そっちはそっちで頑張ってね」

「ラクトも頑張って」

「ありがとう（ニコッ）」

「／／／／（その笑顔は反則）」

……？　顔が赤い様な気がするけど、ま、良いか。

そう考え、ラクトはフェイト達と離れた。

新しき日常っていうと、ちょっとカッコイイかな？（後書き）

あとがきこーなー

まーた「今回は珍しく、ラクトサイドオンリーでした」

ラクト「今回って何が書きたかったの？」

まーた「フェイト陣営の方はどうの様な感じになってるかを書いてみた」

ラクト「……基本、料理のことしか書いて無いじゃん」

まーた「それは、文才の無ささ」

ラクト「そこ言いきるところじゃないから」

まーた「細かい事は気にするな。では今回感想をくれた【天童翼】様、【なっぺ】様、【XG-70b 凄之皇】様、【雨季】様、本当にありがとうございます」

ラクト「では、今回はこの辺で失礼します」

メア「（ふむ、今回は私の出番は無しか。まあ、いいさ）」

食べ物の恨みは怖いぞ（前書き）

前々回の木のジュエルシード封印後からです

食べ物の恨みは怖いぞ

S i d e なのは

「色んな人に迷惑かけちゃったね」

私があの時、気づいていたのに……私がちゃんとしていれば、今回のことは起こらなかった筈なの。

「な、何言ってるんだ。なのはちゃんとやってくれてるよ」

ユ一ノ君がそう言ってくれてるけど、私のせいで町の人に迷惑をかけたのは間違いようがないの。

「私、気づいてたんだ。あの子が持つてるの。でも、気のせいだっ
て思っちゃった」

そう言い、なのはは座って、さらに考えることをする。その時、メアがなのはのいるところに歩いていき、なのはの前に立つ。

「なのは嬢。ひとつ言っておこう」

その一言で、私はメアさんの顔を見る。でも、そこにはいつも以上に真面目な顔つきをしたメアさんがいたの。

「自分1人で、何でもできるとは思わないことだ」

「え？」

「君は、『私が完璧だったら、こんな事にはならなかった』とでも思っているのだろう？正直に言おう……そんな考えなど無意味だ」

え？ でも、私がちゃんとしてたらこんな事にはならなかった筈なの。そんな考えが無意味？

さらにメアは言葉を続ける。

「それはただの理想で、現実じゃない。この世界にそんな事ができる者なんてこの世にはいない。誰もが完璧ではないからな。……君は、君が出来る精一杯のことをしたのだろう？それで、十分じゃないか。……結果以上の結果を望むな」

「……………」

「今回の出来事を次に生かせばいいさ。そう思うだろう？ ユーノ少年」

「そ、そうだよ。なのは！ 次に生かせばいいんだよ！」

「ま、好きに考えたまえ」

そう言つて、メアはなのはとユーノのもとから去つた。

S i d e メアリスティング

……昔、私が言われたことをそのまま言うとは予想外だな。

まあ、先程の言葉でなのは嬢がどう転ぶかは分からないが、できれば良い方向へ転んで欲しいものだ。

「まあ、完璧な者なんていないなんて言つてしまつたが、限りなく完璧に近い奴はいるにはいる。しかし、それは黙っていた方が良かっただろうな」

完璧に近い奴とはラクトの事だ。私は、奴以上に完璧に近い者を知らない。とは言っても、現在は能力を失っているようだが……

と、少し話が逸れてしまったな。

今は、なのは嬢1人で考えさせた方がいい筈だ。

それから三日後。

この三日間で集められたジュエルシードは4個。

多いかどうかと聞かれたら、返答に困る。

結果から一日1つ以上は、一応、集められていることにはなっているが、ジュエルシードはユーノ少年の話によると21個あるとのこと。私達もっていないジュエルシードの数は17個。そして、その内のいくつかはラクトが持っているのだろう。

「まったく、別行動というのは不便だ」

前に、ラクトと念話をしてから私は奴とはやり取りを行っていない。奴が念話に応じないのだ。まったく、互いの持つている情報を交換すれば、もっとこの件は早く解決する可能性があるというのにな。

しかし、まだ念話に応じないだけというのなら構わないのだが、何故、住んでいるマンションにラクトがいないのだ。しかも、奴自身の魔力が感じられないのだ。当然、何処にいるのかは分からない。

「あいつ、私が料理を出来ないことを忘れているんじゃないかあるまいな？」

それで、今は翠屋でシュークリームを食べている。

今日は平日だが、二日間、翠屋に来ていなかったということだな。

……まあ、少し禁断症状が出てしまったが。

「やはり美味しいな。ここのシュークリームは」

やはり美味しい。しかし、ひとつ問題が発生した。

今日の分の金はあるのだが、明日から翠屋に行ける金が無くなると言う事だ。マンションに戻っても、金を置いておいてる場所など知

らんし、ラクトに聞こうにも聞けない。

……緊急事態並に困った。

「恨むぞ。ラクト」

まったく、あいつは何処にいる？ それから、奴が作った料理も食べていない。

奴の料理と翠屋の料理をいつも食べてしまっていたから、それ以外の食べ物で満足することができないのだ。

……そうだな、見つけ次第、全力で奴と死合……字を間違えた。試合を行おう。うん、そうしよう。奴は今能力が使えないから、少しは弱い筈だ。そして、痛めつけよう。

食べ物の恨みは怖いぞ、ラクト。フツ、フッフフハハハハハハハッハ！！

……いかにいかに、少し、頭を冷やさなければ。別の事を考えよう。

そつだな、なのは嬢の事でも考えるところ。

三日前、私が彼女にああ言ってから、ちゃんと彼女なりに考えたらいい。

何でも「これから、出来る事に対して“全力全開”でやるの!」
と言ったらしい。らしいというのは私が聞いた訳でも無く、ユーノ
少年が聞いて、それを私に言ってきたのだ。

何かが引つ掛かるような言い方だが、まあ、おそろくなのは嬢自身
にとって良い方向へ進むだろうから、気にしない事にした。

「メアさん!」

と、噂をすれば、だな。

「今日は、店番ではないのかね?　なのは嬢」

「ちょっと、休憩です」

「そうか」

わざわざこの事を聞くことに意味は無いが、何となく聞いている。

「午後から、ジュエルシード探しを行う予定はあるのか?」

「はい。でも、明日はすずかちゃんの家で遊ぶ予定があるんですけど」

すずか？ …… ああ、前になのは嬢と一緒に帰っていた少女の1人か。そして、アレを家と言ってもいいのだろうか？ 城って言う方が合っているような気がするのだが。

まあ、いいか。

「楽しんできたらいいさ」

「そうします」

「ところで、ユーノ少年はどうした？ 今日とは肩に乗っていないじゃないか」

「ユーノ君は家で、お姉ちゃんに遊ばれています」

「そうか。ところで、なのは嬢」

そうだな。この際に聞いておこうか。

「何ですか？」

「今、桃子さんの手は空いているだろうか？ 少し、桃子さんと話したいのだが」

「お母さんと、ですか？ ちょっと、聞いてきます」

そう言つて、なのは嬢は店の奥に入つていった。

何を聞くのか？ というと、先程言つた通り、金がもう無いのだ。そこで、アルバイトをして、金を稼ぐ為に桃子さんに良いか駄目かを聞きたいのだ。

そして、奥から桃子さんがやつて来た。

「丁度、少し手が空いたわ。それで、話つて何かしら？ メアさん」

付けていたエプロンを取り私が座つていた席の相席に座つた。

さて、聞こうとしよう。

「単刀直入で言わせて貰います。できれば、私を少しの間、翠屋で働かせて貰えないでしょうか」

「いいわよ」

即答だった。それはもう何の迷いも無く。

「えっと、私が言うのもどうかと思いますが、そんなに簡単に決めて良いのでしょうか？ 土郎さんにも聞かずに」

「ええ。問題無いわ。じゃあ、早速明日からお願いできるかしら？」

「ええ、平気です。というより、明日からお願いしようと思いましたから」

ふむ、こんなにも簡単に行きすぎると、どうも怪しいが、そんなことも言ってもらえない。本当に金が底を尽きかけているのだ。

まあ、その後も少し私は桃子さんと話をして、翠屋を後にした。

しかし、メアは知らなかった。

この翠屋には、女性用の衣装がこれでもかと言うほどにある事。

その中には、いつもメアが私服で着ているような地味な物では無く、派手な物もあると言う事。

翠屋の営業時間終了後、衣装を見る桃子さんがいた事。そして、その顔が少し微笑んでいたこと。

そんな事で、後日、メアの顔が少し赤くなるのはまた別のお話。

食べ物への恨みは怖いぞ（後書き）

あとがきこーなー

メア「今回は私達の話か」

まーた「前はフエイトのほうだったからね。こうした」

メア「そうか。それにしても、ラクトの奴、見つけ次第……フッフ」

まーた「（怖っ！？）まあ、こんなくならない？ 理由で、敵対することになりましたw」

メア「さて、【七つ夜&夜つ七】様、【なっぺ】様、【天童翼】様、【雨季】様、今回感想をくれ、ありがとう」

まーた「なお、【七つ夜&夜つ七】様から貰った翡翠屋、10店舗程の食べ物はメアのもとではなく、ラクトの方に3店舗分送りました。そして、残りは私の胃袋に」

メア「な、何をするっ！？」

まーた「だって君に送ったら、アルバイトしないじゃんwww」

メア「…………断罪してやろう」

まーた「え？ ちよつと、待ってくださいよ。悪かったですって、お願いですから剣を下してください」

メア「うるさい。死ね」

また「ギャアアアアア」

メア「ふう。では今回はこの辺で失礼する」

出会いと簡単すぎる再会（前書き）

今回はいつもより短い&駄文です

出会いと簡単すぎる再会

S i d e ラクト

今、フェイトが持っているジュエルシードの数は7個。昨日はジュエルシードを見つけることは出来なかった。

そして今日も、これからジュエルシードを探しに行く。

「じゃあ、いつも通りに別行動で。見つけ次第、たがいに連絡を」

「分かった」

「了解だよ。じゃ、私とフェイトは行くよ」

マンションの屋上から、そんなやり取りをしてフェイトとアルフはジュエルシードを探しに、この場所から去る。

「メアは今回の件に俺が思ってた以上に関わってるね。なのはの事を気に入ったのかな？　まあ、どっちでもいいや。さて、ジュエルシードを探しに行こうか」

1人残されたラクトはそう言って、マンションの屋上から消える。

手っ取り早くジュエルシードを探す方法はあるにはある。俺の魔力をジュエルシードに当てて、強制発動をさせるというやり方がある。でも、この方法は絶対にやらない方が良い。だって、残り何個か分らないのにそんな事をしたら、危険だからだね。

「地道に探すしかないのかな？」

メアには少し悪いけどね。

んー、でも平気かな？ 一応、お金は置いておいたし、あれだけの量となると、お金に困るような事は無い筈だし。それに、一応、完全に別行動しているのは意味があるしね。

とりあえず、この事は置いておいて、と。ジュエルシード探しの方を集中しよう。

しかし、ラクトが問題無いと思ったメアの件は、ラクトが思った以上に厄介な事になっているのを、ラクトは知らなかった。

S i d e なのは

私は今日、すずかちゃんの家ですずかちゃんとアリサちゃんと、楽しくお喋りをしていたのですが、途中でジュエルシードを感知したの。

“ なのは！”

“ うん。すぐ近くだ。でも、どうしよう？”

ここには、すずかちゃんとアリサちゃんがいる。何とか、ジュエルシードのところに行きたいけど、どうすればいいんだろう？

その時、ユーノがなのはのもとから降り、ジュエルシードがある方向へ向かった。

“ なのは！ なのはは、僕を探しに行くみたいな口実で来て！”

“ 分かったの”

念話でのやり取りを終え、なのはは椅子から立ち上がった。

「どうかしたの？　なのは」

「うん、ユーノ君が何か見つけたみたいで、森の方へ行っちゃったの。それで、これから探しに行くの」

「私達も一緒に探すよ」

「大丈夫。すぐに戻ってくるから待ってて」

そう言うと、ずずかとアリサはここで待っていると言う事になり、なのははジュエルシードがある方向へと向かう。途中でユーノと合流し、そのまま向かうが、途中でジュエルシードが発動した。

「発動した！」

ジュエルシードが発動する前に回収することができなかったの。出来る限り、迷惑にならないようにしないと。

「ここだと人目が……結界を作らなきゃ」

「結界？」

「最初にあつた時と同じ空間、魔法効果の生じている空間と通常空間の時間進行をずらすの……僕も少しは得意な魔法」

ユーノ君が魔法に関する事を言ってると思うけど、全然理解できないの。

なのはがそう思い、ユーノが結界を張る。そして、ジュエルシードを発動させた猫が大きくなってなのはとユーノの前に現れた。大きくなった猫が歩くたびに地面が揺れる。

「あ、あれは？」

思いつきり声が裏返っちゃってるけど、それは仕方の無い事なの。

「た、多分……あの猫の大きくなりたいてって思いが正しく叶えられたんじゃないかと」

「そ、そっか」

と、とりあえず、ジュエルシードを封印しようか。さすがに、こんなに大きくなるとすずかちゃんも迷惑だと思っからね。

そして、なのははデバイスのレイジングハートを取り出し、セットアップをしようとしたところで、金色の魔法弾が猫に直撃した。

「え？」

なのはがボーっつとしていた間に金色の魔力をした少女がさらに猫に向かって魔法弾を撃つ。

「バルデッシュ、フォトンランサー連撃」

そして、発射される数十発の魔法弾。その全てが猫に当たり、猫が倒れる。それを見たなのはすぐさまレイジングハートをセットアップさせた。そして、魔法弾を撃った少女は木の枝に立つ。

「同系の魔導士、ロストロギアの探索者か？」

ロストロギア？ 何だろそれ？ って今はそれどころじゃない。

そう考えていたら、いきなり少女が鎌の形になったバルデッシュで襲いかかる。

経験の差で、なのはは徐々に押され始める。

“きつと私と同年くらい。綺麗な瞳と綺麗な顔……だけど、この子”

そう思っていた時、なのはの後ろにいた猫が立ち上がり、なのはは後ろを見る。しかし、少女はその隙を見逃さずに魔法弾をなのはに向かつて撃つ。

「……ごめんね」

《Fire》

その魔法弾がなのはに当たり、なのはは宙に浮く。

「なのは！」

ユーノがそう言うが、なのはの意識はそこで途切れた。

そのまま、落ちて行くなのはを救おうとユーノはなのはのもとに向かおうとするが、それが間に合わない程に距離が離れていた。

なのはは地面に向かって、落ちて行く。しかし、地面との距離が残り5メートルのところで、誰かに抱き抱えられた。

「なのはは……気絶してるだけか」

1人の少年がなのはの事をお姫様抱っこで抱えたのだ。そして、その少年は数年振りの再会を少し懐かしむような表情をしていた。

S i d e ラクト

フエイトから念話で連絡があつたから、向かつて来た訳だけど驚いたね。何がっていうとき、来たと同時に昔の知り合いが宙に浮いてるんだもん。当然、地面とぶつかるような出来事は好ましくないの
で、救つただけ。

「ラクト？」

「連絡あつたから来たよ。ジュエルシードは……猫か」

そつ言いながら、なのはをゆっくりおろした。

えっと、確か4年振りだね。まあ、今君は意識を失つてるけど、さ。出来れば、もう少しこうしていたい訳だけど、早めに撤収した方が良さそうだ。

「フエイトはジュエルシードを回収。回収後、先に撤収してね」

「ラクトは何をするの？」

「ちょっとした事。すぐに戻るから先に行つてて」

「分かった」

そう言つて、フェイトはジュエルシードを封印して、この場所から去つていった。まあ、目的地はマンションだけだ。

「さて、小細工をやりですか……………こんな感じかな？」

俺はちょっとした小細工を行つた後、なのはを下したところに向かう。でも、フェレットが敵対心があるような目で見えてきた。

「大丈夫、なのはには何もしないよ。フェレットさん」

「何故、ジュエルシードを集めているんですか？ あれは危険な物なんです」

「何故つて聞かれても困るかな？ 俺はただ手伝つてるだけだし。じゃ、また会おうね、フェレットさん。そろそろ、小細工をした意味も無くなっちゃうし」

「それはどういう意味ですか？」

「すぐに分かるよ。じゃ、さよなら」

そう言つて、俺もその場から去つた。

ちなみに、小細工というのは、なのはの周囲だけ時間の進行を早く

させ、早く気絶から目を覚ますようにしたことがある。

出会いと簡単すぎる再会（後書き）

あとがきこーなー

ラクト「今回はいつもより、少し短いね」

まーた「無理やりきりのいいところで切ったから、そのせい」

ラクト「そうなんだ。そう言えば、メアは？」

まーた「翠屋でアルバイト。それより、随分と簡単な再会なんだね、なのはと」

ラクト「そう？ 結構懐かしんだと思うんだけど」

まーた「そうは思えません。……さて、感想を下さった【七つ夜&夜つ七】様、【なっぺ】様、【天童翼】様、感想ありがとうございます！」

ラクト「えっと、【なっぺ】様からは、グレンラガンのヨーコ（子供版）のコスプレ衣装を送られました。ありがとうございます」

まーた「出来る限り、早く無印を終わらせてから番外編で使わせて貰います」

ラクト「何で、無印中じゃないの？」

まーた「あの衣装って、水着みたいな物じゃん。だから、夏の翠屋

で使う予定。無印って春ぐらいの出来事でしょ？ だからさ」

ラクト「そうなんだ。では今回はこの辺で失礼します」

また「今回は、温泉のところを予定してますが、もしかしたら、変わるかもしれませんので、ご了承を。では失礼します。それと、明日は更新できないと思います」

意味の無い再会 前篇（前書き）

更新が遅れてしまって申し訳ないです。

意味の無い再会 前篇

S i d e メアリスティング

私は、海鳴温泉という場所に向かっている。

翠屋でアルバイトをしていた時に、桃子さんに誘われたのだ。

断る理由も無かったから、それを承諾し、現在は高町家の車に乗って目的地へ向かっている。

“こんなこととしていいのかな？ 前みたいに迷惑がかかったら……”

独り言のようにそう呟くのは嬢。

“なのは、旅行中ぐらいはゆっくりしてないとダメなんだからね”

“ユーノ少年の言う通りだぞ、なのは嬢。こういう時に楽しんでおかなければ、楽しめるのも楽しめなくなるぞ”

私がそう言つと、なのは嬢はその言葉を受け入れたのか月村譲とバニングス嬢と会話を始めた。それを確認すると、私はユーノ少年に

ある1つの事を聞きだす。

“ところで、ユーノ少年”

“何ですか？　メアさん”

“確か、なのは嬢の話によると、前に月村譲の家に遊びに行った時にジュエルシードが発動して向かったら、金髪の女の子がいたそうだが、間違いは無いな？”

なのは嬢の話によると、そのような出来事があったらしい。まあ、途中で気絶をしたらしいから、全ては知らないらしいが。

“はい。その通りです”

“どんな少女だった？”

私は恐らくだが、この少女のことを知っている。長い金髪の少女。

“えっと、長い金髪で、メアさんと同じような紅い眼をしていて？”

ユーノ少年が彼女の容姿を説明しているが、そこまで聞けばもう十分だ。高確率でテストロツサ嬢の事だろう。これで、なのは嬢の言っていた人物は分かったが、またひとつ疑問が増えてしまったな。

そこに、ユーノが続けていた説明が聞こえたので、一時的に思考をメアは中断した。

“ と、そんな感じの容姿でした ”

ユーノ少年がテストロッサ嬢の容姿についての説明を続けていたらしいが、途中から聞いていなかった。とはいえ、誰かが分かったから、聞かなくなったのだが。

“ そうか ”

それだけ言っで、メアは再び思考を再開させる。

ふむ、増えてしまった疑問のことだが、なのは嬢を気絶させたテストロッサ嬢は、確かAAAランク程の力だった筈。それなのに、月村家から魔力を感じられなかった。誰かが強力な結界を張ったということは分かるのだが、AAAランクの力でそこまで強力な結界を張ることはできるだろうか？

しかし、そこでユーノは、そう言えばと付け足す。
それによって、再び思考をメアは中断する。

“ そう言えば、その金髪の女の子以外に、もう一人魔導士がい
ました ”

“ そうなのか？ ”

となると、そのもう一人の魔導士が結界を張ったのか？ 一番、アルフさんが考えられるが、その魔導士はアルフさんのことではないだろう。彼女はテストロッサ嬢の使い魔だ。主以上の力を持つ使い魔なんて聞いたことが無いからな。

ユーノ少年は言葉を続ける。

“ はい。そちらの魔導士の特徴は顔とかは良く見えませんでしたけど…… なんとか、黒かったです ”

…… ラクトはどうやらテストロッサ嬢と行動を共にしているようだ。道理で、ジュエルシードが中々見つからない訳だ。

“ ふむ、そうか。なら、今後はその二人のことも考えてジュエルシード集めをしていこう ”

“ そうですね ”

それを最後に私とユーノ少年の会話を終えた。

この高町家の旅行が終わったなら…… テスタロッサ嬢の部屋はどこにあるか分らん。

廊下ですれ違つて、会話をするぐらいの關係の為、どこにあるかは分からないのだ。まあ、同じ階だろうから、1つ1つ調べて行けばいいだけの話だ。そして、ラクトを叩きのめす！

私を三日間も、インスタントの食品を食べさせたのだ。桃子さんという方がいなかったら……考えるだけで恐ろしいな。とにかく、イラつくのだ。実力はラクトの方が圧倒的に上だが、それでも私は、ラクトを叩きのめすことをここに誓おう。

そんなことをメアは思っていた。

S i d e ラクト

……？ 何だろう？ すごく迷惑なことを誓われたような気がするけど……ま、いっか。

さて、現在俺は、フェイトとアルフと一緒に海鳴温泉に向かっています。理由は最近、ジュエルシード集めで、疲れているだろうという考えのもと、このプランを提案すると二人ともOKということだったので向かっています。

その後、旅館に着き部屋に到着。三人一部屋というのに4人は十分入れる程の広い部屋に荷物を置く。

「ふうー、やっと着いたね」

「うん、やっぱり魔法を使わない移動は時間がかかるね」

荷物を置いたフェイトとアルフはそういう会話をしている。

まあ、二人ともジュエルシードを集める為にこの世界に来た訳だからね。魔法文化が著しく低いこの世界は何かと不便だと思う。

「さて、じゃあ各自別行動で体を休ませよう」

「そうだね」

「じゃ、私はさっそく温泉に入ってくるよ」

フェイトは散歩をしに行くのか部屋から出て、アルフは温泉に入るみたいだ。

「温泉は後でいいや。少しお昼寝でもしようつと」

温泉に入るのを後回しにして、俺は横になり、そのまま意識を落と

した。

S i d e ?

ここはとある倉庫の中。その倉庫の中に少年と少女がいた。

「なのは、大丈夫？」

少年はそう言いながら、少女の方へ歩いていく。しかし、その少年に関わらないように、少女も一歩下がる。

少年は、何故？ と少しばかり考えた。そして、その答えは簡単に予想がついた。

「い、ごめんなさい」

一歩下がったことに気がついた少女はそう言う。どうやら、無意識で下がったようだ。

とは言え、その言葉は怯えているようで、震えている。

少年はその言葉で、自分の考えが間違いないと確信する。

自分の事が恐ろしいのだ。この子は

と。だから、無意識とは言え、一歩下がったのだ。そう、少年は考え、そしてそれを確信させた。

「大丈夫。すぐに怖い事なんて、無くなるからさ。もう少しだけ我慢してね」

出来る限り、優しい口調で、少年は言いながら、少女の方へ近づいていく。そして、少年が少女の頭に触れる。

「今までありがとう。楽しかったよ……さよなら」

「え？」

別れを惜しむような口調でそう言う。そして、少女はそう聞き返す。

「できれば、また会いたいね。じゃ」

最後に少年はそう言い、少女は意識を失ってその場に倒れた。

「まったく、夢ならもう少し良い夢を見たかったんだけど……」

夢から目を覚ました俺は最初にそう愚痴を言う。

「……まあ、いいか。なのはにとつては意味が無いし。そう言えば、メアにもこの事言ったかな？」

独り言を言った後で、ラクトが時計を見てみると、横になった時間

から1時間経っていた。

「よし、風呂にでも、入るとしますかっ」と

そう言っで、ラクトは部屋から出て、温泉に入りに行った。

そして、時間は進む。

S i d e メアリスティング

既に、なのは嬢や高町家の皆さん、そして、月村家のみなさんも眠ってしまった。

私は寝る気分では無かったので、ひとりで旅館の外を散歩している。

「ふむ、たまにはこういうのも、悪くは無いな」

1人で散歩をして、夜風に当たるといのは中々心地が良いものだ。こんなことができるのはラクトと、今は何処にいるか分からないが、あの人のおかげだ。

あの人は私の事をラクトに任せて旅に出てしまったからな。もう随分と会っていない。

……まったく、会いたいな

「と、少し考えすぎたか？ まあ、構わないな。部屋に戻るとしよう」

メアがそう呟いたその瞬間、ジュエルシードが発動した。

「随分と近いな。向かうとs……ジュエルシードが封印された？」

ジュエルシードが感知できたと同時に、すぐさまジュエルシードの反応が消えた。この出来事に少し考えごとをする。そして、たどり着いた答えが出た瞬間、メアは急ぎながら現地へと向かった。

S i d e ラクト

「ジュエルシード封印」

現在、俺とフェイト達はジュエルシードが近くにあるのが分かったから、フェイトの魔力でジュエルシードを強制発動をさせ、すぐさま俺がジュエルシードを封印させた。

「封印完了つと、さて、戻るよつて言いたかったんだけど……」

その言葉で、フェイトはバルディシュを構え、アルフは警戒した。その二人の視線の先には、なのはとフレットがこっちに向かっていた。

アレ？ メアと一緒に行動はしてないの？ まあ、いいや。とりあえず、ジュエルシードを封印できたから。

「子供は良い子でつて言わなかったっけか？」

少し考えごとをしていたら、話が少し進んでいた。つて、アルフはなのはに会った事があるんだ。

「それを……ジュエルシールドをどうするつもりだ！？ それは危険なものなんだ」

「さああね？ 答える必要がないよ。それに、良い子にしてないとガブっといくよって、言っただよね？」

しかも、どうやら忠告みたいなおことをしたらしい。

それから、アルフの視線が鋭くなり、なのは達の事を敵対したような目で見える。

そこに、ラクトがある違和感を覚え、真上を見してみる。するとそこには

「やはり、気がつかれたか」

剣を構え、一直線に向かって来てるメアの姿があった。ラクトの耳には、そう言ったのが聞こえたが、フェイトとアルフには聞こえない。

「アルフ、二歩手前に移動して。……さて、一応伝えておくよ。この場をやり過ごした後、マンションに向かうよ」

「どうして？」

「理由はまた後で」

それだけ言うと、ラクトは上に上がりメアの方へ向かって行った。
その出来事で、メアとはわからなかったが、フェイトとアルフは近
付かれていたという事実を知った。

そして、ラクトはメアごと転移させて、この場から消えた。

意味の無い再会 前篇（後書き）

あとがきこーなー

まーた「忙しい」

メア「後がきの初めから愚痴るな。しかし、随分と遅い更新だな」

まーた「うん、だから忙しい」

メア「……さて、本編の方だが、途中で出てきた少年となのは嬢の話は何だ？」

まーた「正直言って、少し急ぎ過ぎたかな？　って思ってる。まあ、でも、あれは次回の為の伏線みたいな感じに受け取ってくれるとありがたいです」

メア「そうか。……今回、感想をくれた【なっぺ】様、【暇人】様、【七つ夜&夜つ七】様、本当にありがとうございます」

まーた「なお、【七つ夜&夜つ七】様からは、サイズが少し小さいキャミソールを貰いました。ありがとうございます。メアのコスプレの時に使わせて貰います」

メア「ふ、ふざけるなっー！」

また「w 次回は、メアVSラクトがメインになります。では、この辺で失礼します」

意味の無い再会 中篇（前書き）

最後の方は、少し急ぎめになってしまいました。すみません

意味の無い再会 中篇

S i d e ラクト

メアごと転移した俺は、何故かメアからたくさんのお痴言を言われ模擬戦をしろって言うてきました。まあ、どのくらい強くなってるかというのも知りたかったので、良いのですが、何だか殺意すら感じられるのは気のせいでしょうか？

そんな事はさて置き、模擬戦ねえ。……ルールを決めないといけないか。

「ルールは、カードリッジは使用禁止で、非殺傷設定にしておく事ぐらいかな？」

カードリッジは、使っちゃうとアレだし、殺傷設定にしたら加減できないで殺しちゃうかもしれないから、ルールはそんな感じだね。

「了解だ。さて、行かせて貰おう」

さて、少しだけ真面目にやろうかな？

Side メアリスティング

「了解だ。さて、行かせて貰おう」

ラクトと殺^やりあうの……字を間違えた。

ラクトと模擬戦何て、随分を久しぶりだな。まあ、私^{………}が今まで生きてきた時間に比べればだが。

私はラクトに模擬戦で一度も勝ったことがない。……そう言ってしまつと、何回もやりあっていると思われそうだな。正確には、これで5回目だ。

考えることは後だ。今はこの模擬戦に集中しよう。

「『ノエス』セツトアップ」

そう言つて、私の体はバリアジャケットに覆われる。

前のスライムの時は私服でやったが、今回はバリアジャケットを纏う。

前はどの程度の強さが分かった上で、バリアジャケットは必要無しと判断したからな。
だが、今回は全力で行かせてもらおう。

Side：

「さて、始めてもいいだろうか？」

バリアジャケットを纏ったメアはそう言う。

全ての部分が白い騎士の様なバリアジャケット。一見、動き難にくそう
と思うそうだが、実際はそんな事はなく、メアにとって最も動き
やすい物になっている。そして、その手には白い剣を持っている。

「いつでもどうぞ」

「……………」

いまだにバリアジャケットを纏っていないどころか、デバイスと思

われる物すらラクトの手には無い。その事にメアは少しだけ怒気が湧く。

“……冷静になれ。いつものことじゃないか。このモヤモヤとした感じは。

この程度のこと、無駄な考えをだすな。集中しろ”

メアはラクトと模擬戦をする際には毎回、このようなことを心の中で呟いて集中力を高める。

メアは自分の剣を握りしめる。対して、ラクトは立っているだけ。

“行くか”

そんな状況の中で、メアはそれだけ思い、ラクトとの距離を縮める。そのスピードは瞬間移動のように早く、メアはラクトの背後を取り斬りかかる。

狙う場所は胴体。両手で握った剣で横に一閃。

しかし、ラクトは背後を見ずに、いつの間にか持っていた黒い剣で受ける。

「良い斬撃だね」

ラクトが言葉を途中で止め、一旦、その場から離れる。すると、ラクトがさっきまでいた場所の全てが“氷漬け”になっていた。

メアは離れたラクトに追撃をするように再び距離を詰める。

「結構、面倒な攻撃だね。今の」

「この程度はまだまだだ。それに本心は、そう思ってなどいないだろう?」

「まああ、ね」

こうして、喋っている間にも互いの剣は交っている。しかし、メアが攻撃、ラクトが防御に専念しているだけで、進展は無い。

そして、再び間合いを取る。

「やっぱり、凍結の魔力変換は結構、面倒だね。避けるのとかが、さ」

メアは、凍結の魔力変換を持っている。その為、攻撃の際は自分の魔力を消費して、相手を氷漬けにするというのが、メアの基本スタイルである。

「面倒だと言っている割には、簡単に避けてるじゃないか。余裕な

のだろう?」

「さあ? ……さて、そろそろこちらからも行くのか。『ラルドデイス』セットアップ」

ラクトがそう言う事で、黒い剣から魔力が噴出される。

ラクトの持つデバイスの『ラルドデイス』は、他のデバイスとは少し違う。他のデバイスは待機状態の時、身につけられるように小さくするが『ラルドデイス』は剣のままである。

そして、待機状態の剣でも戦う事が可能。その為、ラクトは“待機状態にはなっていない”と考えている。

《何だ? 戦いか? 敵は何処だ?》

「今は模擬戦の途中で、敵はメア。少しだけ真面目にやるから呼んだ。以上、説明終了」

起動してからすぐに質問をしてきたラルドデイスに簡単な説明をしたラクト。対して、メアはノエスと会話をする。

“ノエス、アレを使えるように、スタンバイしている”

《了解です。使えるようになるまでは30秒程、お時間がありますので》

“分かっている”

会話を終え、メアは剣を構える。

その時、ラクトの姿がバリアジャケットで覆われた。

その姿は黒と白の二色の二色をベースにしたコートの様な物を着ている。

《彼女の妹君が敵か。少しは楽しめそうだぜ》

「はいはい、戦闘中にはできるだけ喋らないようにしましょうね」

《そんなのは知らねえ。俺は俺、テメーはテメー。どんなことをしても俺の勝手だろ？》

「どうして、こんな性格なんだろ？」

戦闘中だと言うのに緊張感の無い会話をしているラクト達。

その会話を遮るようにメアは魔力を剣に込め、ラクトから少し離れたところで剣を振る。

振ったところから物凄いスピードで氷ができていく。その氷はラクトへ一直線に向かう。

それをラクトは横に移動して避けようとするが、氷は横に広がっていきラクトを呑みこむ。

「 やっぱり、面倒だ」

氷がラクトのことを呑みこむ前に、ラクトはそう呟く。呟いた後、辺り一帯が白くなった。

「ノエス」

《分かっています、メア様》

この攻撃でこの辺りの視界が悪くなるが、時間の経過を共に除々に視界が良くなっていく。

メアはその光景を見て、ノエスを呼び、構える。

メアがみた光景とは、氷に呑まれた筈のラクトの姿がどこにもいないことだ。とは言え、メアはそれを予想していた為に、慌てず構えるようになったのだ。

《やりがいがあるぜ！》

「何で不意を打つつもりだったのに、邪魔するかな？」

その時、そのような会話がメアの上で行われた。当然、メアにもそれは聞こえ上を見る。

見られたラクトは、ラクトのデバイスであるラルドデイスを見て、溜め息を吐いた。

「まあ、でも、これだけ近づけられれば、十分かな？」

しかし、ラクトは考えを改め、剣の構え方を変える。ラクトとメアの距離は15メートル程離れているが、ラクトにとってはそのぐらい距離はあってもないような距離だ。

しかし、メアはその距離を開く事はせず、その場に留まった。

「あれ？」

疑問に思うラクト。しかし、気にせずそのまま斬ろうとするが、メアの口元は笑みを浮かべていた。

「そんなに近付いて良いのか？ ノエス」

《はい》

「え？ あ、忘れてた」

何の事か分からず少し考えるラクトだったが、すぐに何の事か分かり、思わずそう言ってしまうラクト。

「もう遅いかな。……やれ」

ラクトが斬りかかっている途中で、メアはノエスに命令する。ノエスはその命を実行した。

《Wide-ranging type attack》（広範囲型攻撃）

その瞬間、メアの場所を除く全ての場所が氷になった。

Side メアリスティング

「私の勝ちか」

何せ、私のいる場所以外の半径50メートルの全てが氷になってい

るのだからな。さすがのあいつも油断した状態で、避ける事はできないだろう。

「油断していたから負けるのだ。……さて、探すか」

私は球体状になった氷を無くし、ラクトを探す。

いくら、非殺傷設定でもこの技は危険だからな。直撃したラクトは怪我をしていることだろう。

「うーん、勝手に勝ち誇るのは良いけど、油断しちゃダメだよ」

「　　っ　　な　　!　　?　　」

メアは背後から聞こえた声から、瞬時にどんな状況になったか理解し、そう言った。

そして、メアが振りむこうとしたその瞬間、メアの意識は落ちた。

S i d e ラクト

いやー、驚いた。まさかここまで強くなっているなんて。裏技を使わなかったら、負けてたかもね。

《何が、強くなっている、だ。完全にテメーの油断だろ》

「デバイスなのに主人の考えが読めるの？　まあ、いいや。確かに、油断はしてたけどさ、出会った時に比べたら、随分と強くなったものだよ」

《それはテメーが育てたからだ》

「そーですね。じゃあ、お疲れ様。また呼ぶね」

《次はもつと強い奴をよこせ》

そう言つて、ラルドデイスは虚空に包まれて消えた。当然、バリアジャケットも解除される。

それにしても、本当に強くなったね。彼女の技も少しずつだけどできるようになってるし。まあ、“教育係”としては、とても満足です。

「彼女も今のメアを見たら喜ぶだろうなあ。うん」

そう言えば、こっちはこっちで模擬戦をしちゃったけど、フェイト達はどうしたんだろう？

一応、向かって見るとしますか。メアは、おいていく訳にもいかないので担いで俺は転移して、その場所から消えた。

それで、向かってきたのですが、どうやらこちらの方も勝負は終わったみたいです。

「できるならもう私達の前に現れないで、もし次であつたら……次は止められないかもしれない」

「あなたの名前は！？」

「フェイト……フェイト・テストロッサ」

台詞だけを聞くと、フェイトが勝ったようです。それで、なのはが

フェイトにむかって自己紹介をしようとするけど、その前にフェイトとアルフが転移で消えた。

一応、メアを届けておこうか。

「どうも、宅急便です。その辺に倒れていた人をお届けに来ました」

その言葉で、なのはとフェレットがこちらの方を見る。

……………いやー、さすがにこの言い方は無いね。反省点だ。

「あなたはあの時の!？」

「メアさんに何をしたのっ!？」

俺が担いでいたメアの事を見ると、ほぼ同時のタイミングで二人はそう言ってきた。

それにしてもフェレットは俺ってことがよく気がついたね。顔は見られないようにしたと思うけど……。

「何をしたのって、気絶させたただだよ。安心して、お嬢さん」

前にフェレットに会った時は少し口が滑っちゃったけど、まあ、気づかれていないようだし、まあいいかな？

「メアさんを……倒した？」

へー、なのはの中ではメアは強いと思ってるんだ。まあ、間違っ
ては無いけど。……って、こんなことを考えている場合じゃないや。
早くマンションに戻らないと。

「この人はここに置くね。じゃ、俺はこれで失礼するよ」

ここを去ろうとしたんだけど、なのはがそれよりも前に話しかけて
くる。

「やっぱり、貴方はさっきの子の仲間？」

「一応ね、彼女のジュエルシード集めを手伝ってるよ」

「どうしてアレを集めるんだ！？ あれは危険な物なんだ」

アレ？ その台詞、さっきも言って無かったっけ？ まあ、いいか。

「何となく、だよ。フェレット君。それで、質問は終わりかな？
終わりなら、俺はここから去るけど」

まあ、なのはの性格からすると、この後

「待ってなの！ 貴方の名前を教えて！」

“自己紹介”をするだろうね。

さて、その言葉に従って、二度目の自己紹介をしますか。…
…一度自己紹介した人にもう一回自己紹介するって、何だか面白い
ね。まあ、仕方の無い事だよな。

だって、君は

「いいよ。俺のことはラクトって呼んでね。それで、君の名前は？」

「私は高町なのは！ 初めまして！」

「うん、初めまして。これからよろしくね、高町さん」

君は、俺……いや、僕に関する記憶を既に失っているのだから。

意味の無い再会 中篇（後書き）

あとがきこーなー

まーた「今回でいくつかは伏線回収かな？」

メアがいないので、今回はラクトが来てます。

ラクト「そうだと思うけど……」

まーた「そっか。まあ、なのはが君のことを忘れているという事だけ書きたかったからさ。最後の方になっちゃったけど……」

ラクト「まあ、VSメアがメインだったからね。次回はもう少し詳しくやるみたいだけど」

まーた「そのつもりです。とは言え、過去に何があったかというのは、まだ公開しません」

ラクト「そうなんだ。……さて、感想をくれたArisshia様、暇人様、なっぺ様、ありがとうございます！」

まーた「そして、Arisshia様からは際どい感じのスク水を、暇人様からはちよつとサイズきつめのセーラー服を、なっぺ様のところの吼太君からは某薔薇乙女の第一ドールの服をもらいました。ありがとうございます」

ラクト「これを全部メアが着ることになるのか。この姿を見たら彼女も喜ぶかな？」

また「（そう言えば、そっちの伏線も……）まあ、そうじゃない？」

ラクト「だと良いけど」

また「うん。……では、今回はこの辺で失礼します」

ラクト「失礼します。……あ、それと次回の更新は送れるそうですみません」

意味の無い再会 後篇

Side : ラクト

あの時、僕はなのはの頭に触れて、僕に関する記憶の全てを消した。あまり良かった方法じゃ無いって事は、今でも思ってる。でも、あれがなのはにとって一番良かった選択の筈だから……。

「それで、敵に自己紹介して何をするの？ 高町さん」

できればなのはとは、また楽しく喋りたいけど、僕はどうやらそれを心の底で、拒んでいるみたいだ。

「高町さん、敵に自己紹介をしても意味がないよ。君達と俺達はジュエルシードを集めているんだ。できるだけ多い方が良い。となると、ジュエルシードを奪い合うのは必然だよ」

「それでも、私はお話がしたいの！」

「……君は魔法に関わってから、あまり時間がたっていないでしょ？ 話だけじゃ、この世界で生きていくことはできないよ。まあ、今回の件で命のやりとりをするつもりは無いけどさ」

ホント、嫌な冗談だよ。

魔法のせいで、僕はなのはの記憶を消したのに、その魔法に今度は直接的に関わっているなんて。……嫌な冗談だよ。

「……………」

なのはは黙っちゃったか。少し難しい話だったかな？ まあ、いずれ知ることだし、いいかな？

「さて、話を戻すよ。俺はこの人を君達に届けに来た。……大丈夫、気を失っているだけだよ」

そう言っ、メアを担いだままなのはの方へ歩いていく。

……メアはあとのぐらいで目を覚ますんだろ？ まあ、結構早いと思うから、平気だとは思っけど。

「すぐに目を覚ますと思うから、それまで君達はこの人を見ていたらどう？ まあ、お好きなように」

「……貴方は本当にあの子の味方なのですか？」

そこにユーノがラクトに向かってそう言っ。そして、その言葉で、

ラクトは足を止める。

……うーん、さっき一緒に行動してたのに、普通そんな事言っかな？ どうみても、仲間としか思えない筈だけど……。一応、聞いてみよう。

「そうだよ、フェレット君。俺はフェイトのジュエルシード集めを探しを手伝っている彼女の仲間だ。何か疑問に思ったことでもあったのかな？」

「いえ、ただ、前に彼女が^{フェイト}なのはを気絶させた時はここまでのことはしませんでしたから。そしてそれは貴方の言う“敵”に対しては普通です。でも、今回、貴方はメアさんを僕達のところまで届けに来た。前の時だってそうだった。……という事は、貴方は僕達のことを“敵”と思っていないのでは？ と思ったので」

フェレット君は頭良いね。まあ、確かに、敵としては見て無いね。見る必要性も無いし、君達三人の内、フェレット君を除いた2人は俺の知り合いで、出来る限り傷つけたくないから、さ。

一応、メアと俺は仲間同士ってことは言っておこうかな？ ……
…止めた。それじゃ、メアがなのはにたくさん質問される。そして、その事に今回みたいにやつあたりされるかもしれないから。できれば、それは遠慮したいね。

「まあ、そういう捉え方もできるね、確かに。……じゃあ、フェレット君の考えが正しかったでしょう。そう仮定しよう。でもさ、敵

とは思ってなくても、こっちはさっき言った通り、ジュエルシードを1つでも多く手に入りたいのさ。それは、そっちも一緒でしょ？つまり、敵とは思っていなくても、どうせ、君達と俺達は争い合うようになる。敵とは思っていなくてもね」

「争わなくても、話合いをすればいいと思うの！」

「……高町さん、君はどうしてジュエルシードを集めているの？」

「え？ それは、ジュエルシードは危険なもので、集めないと、他の人に迷惑がかかっちゃうから、それをさせないために私は集めているの」

突然聞かれた為、少し戸惑うが、なのはは自分の考えを素直に言う。

「君の考えは分かった。でもさ、フェイトもちゃんとした理由があるんだ。俺はその理由というのは少ししか知らない。でも、これだけは言える。その理由じゃ、結局、フェイトと敵対することになるってね」

彼女は、他人の為に……その人は誰だか分からないけど、話によると、その人の目的の為に1つでも多くのジュエルシードを集めているらしい。そして、出来る限り急がなくてはいけないとのこと、その為、彼女は手段を選ばずジュエルシードを集めている。

なのはの理由じゃ、手段を選ばないフェイトと敵対するのは目に見える。

「……………」

その言葉で、黙ってしまうのは。

「さて、他に言いたいことは無いようだし、この人を此処………
…いくらなんでも早すぎじゃない？」

ラクトが担いでいたメアをラクトは下ろそうとするが、途中でラクトはそう言った。

今さらながらに、俺の肉体年齢9歳なのに、メアを担ぐ光景って、結構アレじゃない？ すみません、目の前の事実から逃げる為に、現実逃避をする為にそう言いました。

だってさ、もうメアの紅い眼が開いてんだもん。うん、凄く驚いた。しかも、少し睨んでるようにも見えるし……。

「随分と、気絶から覚めるのが早いですね、氷の魔導士さん」

一応、俺から仲間、もしくは知り合いってばらさないようにそう言う。これで、ばれちゃっても、やつあたりみたいな事はしてこないだろう。

……念話で伝えればいいじゃん。

そう考え、メアに念話で話をする。

“メア、なのはには前に聞かれた通り、俺達の仲は言って無いんでしょ？”

“……まあ、そうだが”

“この際、ばらしちゃっても良いよ。ただ、判断だけはメアに任せるけど”

“了解した”

まあ、これで、なんとかなるでしょう。……さて、俺はそろそろ本当にマンションに戻るとしようかな？

そう考えている途中にメアはラクトのもとから離れる。

「大丈夫ですか！？　メアさん」

「ああ、問題は無い。それと、なのは嬢、奴が目の前にいるというのに、そのような会話は避けた方が良いぞ」

「分かりました」

結局、ばらさないんだ。まあ、どっちでもいいけど。

「高町さん、俺はこれで失礼するよ。聞きたい事は大体言っただと思
うからね」

そう言っつて、なのは達が何かを言う前に俺は転移でその場から消え
た。

S i d e : メアリスティング

「高町さん、俺はこれで失礼するよ。聞きたい事は大体言っただと思
うからね」

……？ 高町さん？ 奴はなのは嬢のことはそうは言わなかった筈
だ。何故、そういう風に距離を置いたような言い方をする？ 私に
なのは嬢のことを言った時のラクトはなのはと言っていた筈だが。

そこまで考えた時、メア達の前から消えるラクト。

……消えた、か。それにしても、奴はどうしてあの様な言い方を。

「メアさん、メアさん！」

と、呼ばれていたようだ。

「何かな？　なのは嬢」

まあ、本人に聞くのが一番早いだろう。とはいえ、言葉を選んで聞かなければな。さっき、ラクトが私に言ったという事は、自分で考えろということだ。ばらそうと思ったが、先程の言い方が気になるから、ばらさずにいよう。

私は最終的にそう纏め、なのは嬢との会話をする。

「えと、さっきも言いましたけど、大丈夫ですか？」

「問題ないよ。少し、油断してしまっただね。負けてしまったよ」

そうは言うが、奴が本気になった場合は油断しても、していなくても負けるだろう。

「そうですか。メアさんが無事でよかったです」

安堵したようにそう言うのは嬢。どうやら、私は気に入られた存在のようだ。

「心配させてすまないね。ところで、なのは嬢」

「はい」

「先程の彼とは、知り合いなのか？ 彼は君の名前を知っていたようだ」

言葉を選ぶと言ったが、単刀直入のように素直に私はそう聞く。そして、返ってきた答えは予想外なものであった。

「えと、知り合いというか、さつき、自己紹介をした仲です」

どういうことだ？ なのは嬢は彼のことを知らないのか？ そんなことは無い筈だ。いくら、昔だったとは言え、ラクトの奴があそこまで懐かしむような口調でなのは嬢のことを言ったのだ。それなりに良い仲であったのであろう。それなのに、知らないだと？

……ラクトの奴、まだ私になのは嬢に関することで、言っていないことがあるな。今度、聞くか。まあ、訳ありのようだから、拒まれてしまったら、聞く事はできんが。

「そうか。さて、もうこんな時間だ。そろそろ宿に戻るとしよう」

「そうですね」

私の言葉にユーノ少年はそう返す。しかし、なのは嬢からは何も返答をしない。

「なのは嬢？ どうしたのだ」

「え？ あ、すみません。聞いてなかったです……」

「こんな時間だから、宿に戻ろう、と、私は言ったのだ。ちゃんと話は聞いていないとダメだぞ」

「……すみません」

「なら、戻るとしよう」

そう言って、私達はその場から宿に向かっていった。

Side:なのは

私はメアさんとユーノ君と一緒に宿まで歩いて向かっています。メアさんとユーノ君がお話をしているみたいですが、私はさっき自己紹介をしたラクトという子の事を考えていました。

……どうしてだろう？

ラクト君と会った時、どうして、私は懐かしいと思ったのかな？
彼とは、初対面の筈なのに、どうしてだろう？

ラクト君は自己紹介をした時に、初めましてって言ってたから、初対面だと思うけど……。

何なのかな？ この違和感は。それに、ラクト君の眼を見た時、どうして、私は謝りたいって、思ったのかな？

……うー、訳が分からないの！ でも、私がそう思ってるだけかもしれないから、この事は置いておこうと。ラクト君はそう思っていない筈だからね。

最終的にははそう考えを纏め、この事に関する思考を中断した。

しかし、なのはは知らない。そのように考えられる事、感じられる

事自体が、少年にとっては予想外な出来事である事に。
イレギュラー

S i d e : メアリスティング

私は宿に戻り、自分の部屋で考えごとをしていたが、散歩をしていた場所に戻る。

空には暗くて分かりづらいが、雲ひとつなく月明かりが照らす。そして、風によって地面に生えている草が揺れる。そんな場所にメアは1人で座わった。

「やはり、月明かりがいいな。まったく、どの世界でもこの月明かりが見えると良いのに……」

私はそのような事を独り言で言う。

私はこの月というのが好きだ。まあ、正確には月ではなくて、この月明かりだが。……どちらでも構わないか。

「この場所に対しての感想はもういいか。考えごとをする為に此処に来たのだ。考えごとをしなければな」

うむ、思わず、此処に来た理由を忘れるところだったな。

「……………結局、今回も負けてしまった、か。強くなったつもりだったのにな」

考えごとの内容は先程の模擬戦のことだ。

「あの時、広範囲の攻撃は当たった筈なのだが……………そうであろう？
ノエス」

《はい、確かにそのような感触はありましたが……………》

「やはりそうか。当たってはいるのか、効果が無いだけで」

《そのようです》

私は自分のデバイスのノエスも含めて、この会話をする。

それにしても、当たってはいるのに効果が無いとはな……………正直、何故？ と思っている。あれが私の全力という訳では無かったが、それでも効果がないとは……………。

「まあ、しかし、昔に比べ強くなっている自覚は一応あるな」

《確かにそうですね。動きもだんだんとあの方に似てきていますし》

「そうなのか？」

《ええ》

そうか、近付いてきているのだな……………“姉様”に。

それは、本当に私にとって喜ぶべきことだ。その言葉に思わず笑みがこぼれてしまう。

「そうか、そうなのか…………フフッ」

《嬉しそうですね、メア様》

「それはもちろんだ。ノエス、お前が言うのであろう、前の“姉様”のデバイスであるお前が」

《はい、確かに、メア様はあの人の動きに似てきています》

「それを聞けて私は満足だ」

うむ、今ならインスタントの食品を食べさせたラクトを許してやる。

それほどまでに私の気持ちは高まってきた。

「“姉様”が旅にでている間に少しでも強くならなければな」

《その為にも、今後も頑張りましょう、メアリスティング様》

「ああ、頑張つて強くなろう」

メアは自分とノエスにそう誓い、その場から歩いて行くのであった。

意味の無い再会 後篇（後書き）

あとがきこーなー

まーた「さて、ようやくあの人とはどのような人物が出せた」

ラクト「そうだね（てか、前回、出たじゃん）。とは言っても、彼女が登場するのなんて、結構先の出来事でしょ？」

まーた「予定ではA'sからA's後の間に登場する予定」

メア「姉様が来る前に少しでも強くならないとな」

まーた「まあ、この無印中でメアとメアの姉の関係は公開します」

ラクト「登場の方が後なんだ。まあ、いいんじゃないの」

まーた「頑張らせて貰います。……さて、感想をくれた、なっぺ様、七つ夜&夜つ七様、Arishia様、暇人様、ありがとうございます！」

ラクト「そして、なっぺ様のところの吼太君からは、身体の半分以上が露出するというメイド服らしからぬメイド服を送られてきました。ありがとうございます」

メア「これで何着目だ？ 数が多くなってきたから、最初のように叫んだりはしないが……というより、私が着て需要はあるのか？」

まーた「あるある。普通にある。あー、早く書きたい」

ラクト「とは言っても、こっちの作品は次回からシリアスになってくるじゃん」

まーた「そうそう、その関係で出せない。でも、早く終わらせたいとは思っている」

ラクト「ふーん。次回はあの親が登場の予定らしいです」

まーた「その予定です。では、この辺で失礼します」

メア「失礼する」

フェイトの傷とその理由

S i d e : ラ ク ト

「……あれ以上話していたら、少しマズかったね」

俺はあの場所から消えた後、フェイトにマンションに戻るようにつたから、それに続いて俺も向かっている。でも、直接転移ではマンションには向かわず、ある程度マンションに離れているところに転移で移動した。そして、歩いて移動をしている。

まあ、こんなことをした理由は少し考え事をしたかったから。歩きながら、マンションに向かって考え事をしています。

……あれ以上話していたら、本当に昔のことを思い出してしまつ。今日、昼寝をした時にあんな夢さえみなければ良かったのに。……愚痴を言っても仕方がないね。

「さて、今後はどうしよう？　メアは俺となのはの関係が気になっ
ているだろうし。でも、だからと言って、メアには教えられないかな？」

いや、メアだけじゃなくて、彼女にも言えないかな？　この出来事

は。

そこまでの価値がある情報じゃないと思うけど、何でだろう？ どうして、僕はそう思っているのだろう？

「怖いのかな？ ……………？ 怖い？ 俺が？」

何を言ってるんだろう？ 俺がそんな弱いことを言っなんて。俺はもっともつと、強くないといけないというのに。そんなことを言っなんて…………滑稽だ。

「強くないといけないんだ。もっと、強く」

それが、今まで俺が経験した出来事に対して、ただ一つできることだから…………。

って、何か暗いな。これじゃ駄目だ。いつもの俺に、ラクトに戻らないとね。

「…………いつもの俺、か。…………いつもの俺ってどんな感じだった？」

最近の俺の性格は…………よくわからないや。まあ、いつか。ラルドデイスにも言われたように、俺は俺なんだから。だから、俺は思った通りに生きていく、ただそれだけ。

「うん、それじゃ、マンションに戻ってフェイト達と合流しよう」

考えも完全にはまとまっていけど、そうしよう。

そうラクトは考え、今いた場所から転移でマンションに向かった。

S i d e : メアリスティング

あの温泉での出来事があってから、なのは嬢に元気がない。

原因は分らない。どうやら学校で何かあったらしい。私は学校関係者ではないので、その詳しい原因が分らないが。

……できれば、その理由を聞いて、解決させてあげたいのだが、私はどのように声をかけてあげればいいかが分らない。姉様や、ラクトなら上手い聞き方というのを知っているだろうが、私は姉様、ラクトのようなできる奴ではない。

「こんな時、姉様はどうするだろうか？」

答えを聞いて、解決させてあげたい。でも、姉様はここにはいないし、ラクトは前の時に分かったが、なのは嬢のことではあまり干渉してこないだろう。……本当に、どうすればいいのだろうか？

……駄目だな。これでは、全てをあの二人に任せているではないか。このぐらいのこと、私一人でできなくてどうする？

「少し、ユーノ少年に話を聞くか」

私はユーノ少年と会話をすることにした。ユーノ少年なら、原因を知っているかもしれないからな。

そして、メアはユーノに念話を送った。

S i d e : ラクト

「よし、出来た」

現在は、昼食を作っていて作り終えたところです。

「アルフ、出来たから運ぶの手伝って」

「分かったよ」

アルフに手伝ってもらい、作った料理をテーブルに並べる。その料理の多さは、テーブルに何とか収まるぐらいの多さ。決して、テーブルが小さいって言うわけではないです。

料理を並び終えた。その時間、2分。……2分がどうした？ っと思う人もいると思うけど、この部屋の台所とテーブル距離は5メートルと近いです。それでも、2分かかってしまいます。……まあ、それは俺とアルフの二人の場合なんだけど。フェイトは料理運びをしています。

じゃあ、そのフェイトは何をやっているのかというと

「これも美味しそうだね ……これも」

料理を一人で食べています。はい、俺とアルフが並んでいる間、フェイトは並べた料理を食べていきます。しかも、料理が一瞬で無く

なるし……。とは言え、これもそろそろ慣れてきた光景です。

それで、料理を食べ終え、いつも通りに話していた時、俺はとあることに気付いた。

「フェイト」

「何？ ラクト」

「その背中から肩に出来てる傷、どうしたの？」

それは、フェイトの背中辺りに鞭で叩かれたような傷があるということだ。

何で今まで気がつかなかったのかな？ 長い間、行動を共にしてきたのに。たまたま、気がつかなかったのかな？ でも、それにしては……やけに、新しくできたような傷だけだ。

「あ、これは……」

そう口ごもりながら何かを考えるフェイト。
その間にアルフが真面目な顔で、ラクトのことを見る。

“？……どうした？　アルフ”

“ちょっといいかい？”

“別にいいけど……”

そのように念話でやりとりをする二人。そして、ラクトはあるひとつのことをアルフに頼まれる。

“とりあえず、そこに後で行けばいいんだね？”

“頼むよ”

“分かった”

何だろう？　アルフにある場所に来てって言われたけど……。でも、何だか嫌な予感がする。出来れば、気のせいであって欲しいけど……。俺のこの予感みたいのは、嫌って言うほど当たるからな。少し、真面目になろう。

その後、フェイトとアルフはどこかに出かけていくと、外に出た。その時、アルフに「さっき言った場所に」と耳打ちをされる。そして、フェイトとアルフの二人は玄関から外に出た。

「さて、後でって言われたけど、いつ行けばいいんだろう？　でも

まあ、あの言い方からすると、出来る限り早い方が良さそうだったから、5分ぐらいしたら行くか。でも、その前に……」

そう言つてラクトは目を閉じ、メアに念話を送る。

“メア”

“何だ？　今私はとあることをしているのだが”

“悪いけど、一緒に来てもらえない？”

“聞いていたのか？　私はとあることをしていると云つた筈なのだが……”

“まあ、下らないことなら、わざわざメアを呼ばないよ。ただ、嫌な予感がするんだ”

“……仕方がないな。貴様のその予感というのはよく当たるからな。私も行つてやろう。それで、どこに行けばいいのだ？”

“まずは、住んでいたマンションの屋上に来て”

“了解した”

うん、メアには悪いけど一緒に来てもらふことにする。でもなあ、何でだろう？　こっちの方が、マズいような気がするけど……まあ、平気でしょ。二人いることだし。

「じゃ、屋上に行くか」

俺はメアに言った集合場所に歩いて行つた。

S i d e : メアリスティング

まったく、ラクトは何をしたいのだろうか？　こちらは、なのは嬢のことで少し考えていたのだが……。ユーノ少年に聞いたところ、どうやら、魔法の事を気にしすぎていてバニングス嬢との関係が悪くなっているらしい。

私はあの二人を喋らせるような状況を、どうやって作るか考えていたというのに。

まあ、奴の嫌な予感って言う事もあって、一時、中断しなければならなくなったが。そうだな、この用事が終わったら、ラクトにも考えさせよう。

「屋上と言っていたから、ここで合っている筈だな」

そうしている間にも、私はマンションの屋上に着いた。そして、遅れてラクトもここに到着する。

「テストロッサ嬢の部屋に住んでいる割には、随分、遅かったじゃないか」

「あれ？ フェイトの部屋に住んでるって何で分かった？」

「予想だ。気にするな」

「分かった」

まあ、そう言わなくてもラクトはこんなことで気にするような奴ではないことは分かっているが。

「それで、どういう用件だ？」

「今から、フェイトのところに一緒に来てほしいんだ」

テストロッサ嬢のところにか？ 部屋にいないという事は、何処かに消えたのか、それとも、先にどこかに向かっているのか？ まあ、この二つの内、どちらかだろう。

「仕方が無いな。しかし、この件が終わった後、少し私の我儘に付き合え」

「その程度のことなら良いよ」

これで、なのは嬢の問題が簡単に解決できる筈だ。

しかし、この件が終わったらだが。ラクトの嫌な予感というのもあり、少し気を引き締めて行くか。

「じゃあ、その場所に向かうよ」

どうやら、先程の疑問は後者が正解だったようだ。

次元転移、	次元座標。	8 7 6 C	4 4 1 9	3 3 1 2	E 6 9 9
3 5 8 3	A	1 4 1 3	7 7 9	F	3 1 2 5

ラクトはそう言って、私とラクトはこの場所から消えた。

S i d e : ラ ク ト

まあ、メアを連れて、アルフが言っていた場所に着いた訳だけど……。

「ここ何処だかわかる？　メア」

「分からない。というより、私が知る訳無いだろう。私は貴様に来てと言われて来たのだからな。まあ、しかし、……あまり良い場所には思えないな」

周りを見渡して、そう言うメア。そして、その声は不機嫌というよりはどうでもいいと、言っているような声だ。

それは、俺も思ってるね。なんか、ゲームの話で出てくる魔王の城みたいな感じだし。

よくこんな場所にフェイト達は来てるものだ、と感心したいよ。まあ、アルフの言うこの場所に来たら、フェイトのあの傷の理由だって分かると思うから、進むしかないけどさ。

それなら、とつととアルフでも見つけるとしようか。

「じゃあ、メア。二手に別れてー」

ラクトがそこまで言った時、フェイトの悲鳴らしき声と、何かを鞭で叩いてるような音が聞こえた。

……今のは、鞭？ それと、フェイトの悲鳴。そしてフェイトには背中を鞭で叩かれたような傷があった。……………先を急いだ方が良さそうだ。

ラクトはある1つの考えを結論付けた。

「メア、向かうよ」

「……………」

そのまま、ラクトは音のした方へ、メアはそれに黙って付いていく。向かう途中にも、音は止まらず、ラクトとメアは互いに黙りながら向かった。そして、フェイトがいると思われる部屋の前には大きな扉があった。そして、その扉のところにアルフがいた。

「アルフ」

「ラクトかい……………って、どうしてメアさんもいるのさ？」

「理由は後で。それより、まあ、予想はできるけど中で何が起こってるの？」

まあ、予想じゃなくて、この考えは間違いないと思うほどに、自信をもってるけど。まあ、一応念の為に聞いておく事にする。

「多分、その考えの通りだよ。あの鬼婆が……」

鬼婆？ フェイトのことを鞭で叩いてる奴のこと？ 何で、その人はフェイトのことを傷つけてるんだ？

そう聞く前に、アルフがその考えを読んだのか、質問をする前にアルフが答える。

「ジュエルシードを集めた数が少ないからさ。フェイトは頑張っているのに、どうしてあの鬼婆は！ それでも、フェイトのー」

そこまで言った時、フェイトの悲鳴がより大きなものになった。

「っ！？ …… フェイト」

最早、アルフは主人であるフェイトの悲鳴を聞きたくないらしい。でもそれは、俺も同じだ。

「アルフ、今から俺とメアがその人からフェイトを離す。それで、アルフはフェイトを連れて、此処から離れて」

「アンタは平気なのかい？」

「俺みたいな奴の心配より、フェイトの心配をしなよ。……さて、行くよ、メア」

「分かっている」

そうして、俺とメアは扉に近づいていき、そのまま扉を開けた。そして、扉を開けた先に見えたものは、フェイトが今にも黒い女性に鞭で叩かれそうになっている光景だった。

フェイトの傷とその理由（後書き）

あとがきこーなー

まーた「次回からプレシアが登場」

ラクト「とは言っても、一応最後の部分だけでたじゃん」

まーた「これは、出てるに値しない」

ラクト「そう。まあ、いいや」

メア「さて、感想をくれた七つ夜&夜つ七様、天童翼様、暇人様、なっぺ様、Arishia様、本当にありがとう。その作者が喜んでるぞ」

まーた「はい！ こんな駄作に付き合ってくれて、本当にありがとうございます！」

メア「まあ、こんな感じだな。ところで、作者、次回はどうなるのだ？」

まーた「え？ 次回？ まあ、プレシア辺りの話」

ラクト「やっぱり、そこら辺の話かー」

まーた「でも、次回、メアがブチギれます！」

ラクト「メアが？　それは、予想外」

まーた「そして、さらに次回メアが言う台詞の1つが」

“ラクト、こいつを殺してもいいだろうか？　これ以上言われるとさすがに、我慢ができそうにないのだ”

まーた「です！」

ラクト「これは怒ってるといよりも、何というか……」

まーた「とは言え、まだ予定ですので、変わってしまったら申し訳ないです」

メア「（次回はそんな台詞を言うのか……）では、今回はこの辺で失礼するぞ」

まーた「失礼します」

アリシア・テストロッサの存在

S i d e :

現在進行形で鞭が、フェイトに向かって振り下ろされていく。しかし、その鞭はフェイトに当たる事はなく、ラクトが鞭を掴む事で鞭が止まった。

「アルフ」

ラクトがそれだけを言うと、フェイトがラクトの目の前から消えアルフがいる場所へと移動した。

「アルフはフェイトを連れて、ここから離れて」

「分かったよ！」

そして、アルフはフェイトを担いで、この場から消えた。消えたことを確認すると、ラクトは掴んでいた鞭を離す。

ラクトの手からは微量の血が流れる。

「……………貴方達は何者？」

フェイトのことを叩いていた黒い女性は、怒りと殺気のこもった声です。

「そう言った類のことを聞く時は、自分からっていうのが普通だと思っけど」

「……まあ、いいわ。私はプレシア・テストロッサ。かつて、大魔導師と呼ばれていた者よ。さあ、私は自己紹介をしたのけれど」

つまり、そっちも自己紹介をしることだろう。その意味を、ラクトとメアの二人はそれを理解し、互いに自己紹介をする。

「初めまして、プレシア・テストロッサさん。俺のことはラクトって呼んでください」

「私はメアリスティング。そのラクトの連れだ」

二人は簡単に自己紹介をしたままプレシアの眼を見る。

「それで、貴方達は何故この場所にいるの？」

「質問の意図が分からないのですが……」

「そう。なら、こう言えば分かるかしら？ ……何故、あの人形に
対するお仕置きを邪魔したのかしら？」

その言葉には、隠そうともしない苛立ちがあった。その言葉を受け、
言葉を聞いた二人の内、1人は先程よりも強い殺気を出し、もう一
人は考えごとを始める。

「止めたのは私では無くラクトだが、理由は簡単だ。ただ、気に入
らなかっただけだ」

当たり前だ。と、そうは言っていないが、その声にはそう言ってい
るように聞こえるように感じる。

一方、その言葉が気に入らないのか、プレシアは持っていた鞭を杖
に変える。

「どうやら、貴方達と会話をしても意味が無いわ……………消え
なさい」

その杖から、紫色の雷がラクトとメアを襲う。しかし、ラクトとメ
アの周りに氷がドーム状にでき、紫色の雷を防ぐ。そして、雷が無
くなったと同時にドーム状の氷が砕けた。

「この程度が大魔導士と呼ばれていた者の力か？　嘘ではないのか？」

「……あまり、図に乗らないことね」

今度は先程よりも遥かに多くの紫色の雷だプレシアの周りに現れる。それを先程と同じように受けるが、氷にひびが入っていく。しかし、メアは冷静に大きな盾のようなものを出し、それで受け止めた。

その間にメアは1つのことを疑問に思う。

先程から、ラクトが一言も喋っていない。さらに、一步も動いていないということだ。

（まあ、構わないのだが、一体、何を考えているんだ？　どうやら、フェイト嬢のことを人形と言われた辺りから考えているようだ……）

そう考えていた時、ラクトから念話を送られる。

“メア、悪いけど、時間稼いで”

“……何故？”

“この場所ではできない調べ事をするから、1人にさせて欲しい”

“まあ、いいだろう。しかし、どのぐらいの時間を稼げばいいのだ？”

“そこまで長く無いと思うよ”

“そうか”

プレシアの攻撃を正面から受け止めている二人は、戦闘中とは思えないような会話をする。当然、今も紫色の雷が氷とぶつかり、大きな音がでる。

そして、最後にラクトはこう付けくわえてこの場から消えた。

絶対にどんなことがあっても、その人を殺さないでね。

と。そう最後に言った。

Side:ラクト

俺があの場合から消えた後も、氷と雷がぶつかりあっている音が響く。

「頼むから殺さないでね。メア」

絶対にメアはプレシアさんの過去、フェイトの正体を知っちゃった
ら、マズいからね。一応、殺すなって言ったけど、メアは案外怒り
やすいからね。早くしないと。

「まあ、探しますか。“証拠”となるものを」

その言葉は、一体何を指しているのかはラクト以外は知らない。そ
して、その言葉は氷と雷の音によって掻き消された。

S i d e :

「いい加減に消えなさい！」

「残念ながら、この程度では消えない。たかが、10程度の雷ではな」

プレシアは最初に攻撃をしてからずっと雷を出しているのだが、メアはその全てを氷で受け止め、掻き消す。そして、メアの顔には余裕と言いたそうな表情をしている。

一方、プレシアはいつの間にか消えていたラクトのことを考える。

（確か、……ラクトとか言ったわね、あの少年。彼女に気を取られていたというのものもあるけれど、いつの間に消えたのかしら？ まあ、いいわ。どうせ、この場所以外の部屋の全てには傀儡兵がいるのだから）

プレシアがこう考えている間にも攻撃の手は休ませず、むしろ激化する。しかし、これも全てメアの氷に防がれる。

そこで、プレシアは一旦、攻撃を止めた。

メアは警戒しつつ、プレシアのことを見る。

「どうしたのだ？ まさかもう、息が上がったなどとは言わないよな」

「まさか、そんな訳がないわ。それより、どうして貴方からは攻撃してこないのかしら？ ……侮辱のつもり？」

プレシアの言う通り、メアは一度もプレシアに攻撃をしていない。攻撃をせず、防御のみである。それを侮辱と受け取り、プレシアはそう言う。

「侮辱などしていない。ただ、相手の魔力が少なくなってきた方が、後々、楽になる。そう思っただけだ」

「そうね。確かに、その通りだわ。でも」

プレシアがメアから視線を外す。

疑問に思うメアだが、あえて何もしなかった。そして、この部屋に鉄どうしがぶつかる機械音が響く。

「でも、百の傀儡兵の前では、防御だけではやられてしまうわよ」

「……………」

そして、一気に現れる百の傀儡兵。

「彼女をやりなさい」

プレシアがそう言う事で、一気に百の傀儡兵がメアを襲う。対して、メアは自分のデバイスのノエスを見る。

それだけで、ノエスはメアの考えが分かったのか、杖状に形を変える。

「……カートリッジ、ロード」

《了解しました》

ノエスから、一発のカートリッジが排出され、ノエスが青白く光る。百の傀儡兵が向かって来ているのだが、あくまでもメアは冷静に言う。

「《対象者、補足完了》」

メアの声と、ノエスの声が重なり、メアの足元も円状に白く光る。そのまま、メアは集中する為に目をつぶる。しかし、その時間は1秒にも満たない。

「……砕ける」

「なっ!？」

この出来事に驚くプレシア。

まあ、それも無理も無いことである。

何故なら、その一言だけで、この部屋にいた百の傀儡兵は一瞬で、氷漬けになり、砕け始めたのだから。

そして、メアが言葉を言ってからたったの3秒で、百の傀儡兵は完全に砕けた。

S i d e : メアリスティング

前のラクトとの模擬戦ではカートリッジを禁止されたが、この場所で使っても問題はないだろう。だが、こっちのカートリッジなら、使っても良かったと思うのだが……。まあ、気にしていても仕方が無いな。

「それで、貴方の出した傀儡兵は、全て消えてしまったのだが」

「気にしてもいないわ。それより今の、ベルカ式の魔法ね」

「ほう、ミッドの方では、マイナーの魔法では無かったのか？」

「知識として知っているだけよ」

このぐらいのことは、一般常識の部類に入るのか？ ……それも、当然か。

それより、ラクトの奴は何故、この人を殺すと言ったのだ？ まあ、奴なりに何かを考えているのだからいいか。

「少し、休戦をしよう」

「……ふざけているの？」

「いや、真面目だが。さて、何故貴方は先程、フェイト嬢のことを人形を言ったのだ？」

「答える必要は無いわ」

どうやらこの質問には答えたくないらしいのだが、気になっている私は現時点で考えられることを言う。

「フェイト嬢の名前は、フェイト・テストロッサ。貴方も自己紹介の時に、テストロッサを名乗った。……つまり、フェイト嬢は貴方

の娘で？」

メアがそこまで言った時、プレシアが先回りして怒鳴る。

「あんなものは私の娘じゃないわ！ 私の娘は、アリシア・テストロッサ、ただ一人よ！ あんなものをアリシアと一緒にしないで頂戴！」

「……では、どのような関係なのだ？ フェイト嬢とは」

「関係？ 関係なんて無いわ。アリシアを蘇らせるために利用してるだけのただの人形よ」

アリシア・テストロッサ？ 聞いたことがない名前だ。それにしても、蘇らせる？

まあ、気にしていても仕方が無いな。それに、フェイト嬢のことを人形人形と……少し、イラついてきたのだが。

「お前の為に、頑張っているフェイト嬢のことを人形だと？ あまり、図に乗るなよ、プレシア・テストロッサ」

いけないな。少し、言葉使いも暴力的になってしまっている。姉様にも、怒るな、怒るのは事が終わってからと言われた筈なのにな……自分を見失ってしまっている。落ち着け。

メアは自分に暗示をかけるように言い聞かせるが、次のプレシアの言葉で、その暗示も意味が無くなった。

「誰に何と言われようが、関係無いわ。あの子は
プロジェクト・A・T・Eで生まれた人形なのだから」 プロジェ

「っな!？」

プロジェクト・F・A・T・Eだと!? まさか、あの子がこのプロジェクトの産物だったなんて。最初に名前を聞いた時から、プロジェクト・F・A・T・Eのことを思ったが、まさか、この名前から取ったなんて。

「プロジェクト・F・A・T・Eで生まれたあの子を最初はアリシアと重ねていたのだけど、あの子はアリシアじゃない。何かが違う。……それで、蘇らせることにしたのけれど、ジュエルシードもたったの9個しか集められなかった。……まったく、使えない人形よ」

「……………」

メアは黙って、プレシアの言う事を聞く。そして、メアの中で何かがキレた音がした。

“ラクト、こいつを殺してもいいだろうか? これ以上言われるとさすがに、我慢ができそうにないのだ”

“メア、俺は言ったよ、殺すなって”

“しかし！ こいつはプロジェクトF・A・T・Eの！”

“フェイトはその産物でしょ？ 今、アリシア・テストロッサを見つけた”

“貴様、私に黙っていたのか！？ いつから気付いていた！？”

何故、ラクトが知っている！？ いつから確信していたのだろうか。

“プレシアさんの名前を聞いた時に疑問を持って、アリシア・テストロッサを見つけた時だから、今さっき”

あの時か、道理で動かなかったわけだ。だが、これが、これが！

“これが！ と言う意味が分かっているのか！？”

“分かってるよ。今から、そっちに向かうから、絶対に殺さないでね”

そう言って、ラクトは念話を切り、転移でメアとプレシアの二人の前に現れた。

「プレシアさん、1つだけ言っておきます。……あまり、図に乗らないでください」

ラクトはこの場所に着いて、最初にそう言った。

アリシア・テストロッサの存在（後書き）

あとがきこーなー

まーた「うーん、メアのブチ切れがあまり上手く書けなかった……」

ラクト「そうだね、思ったより迫力とか無いし、まあ、作者に期待するのが間違いかな？」

まーた「酷いね。心が壊れそうだ」

ラクト「それにしても、また伏線が……」

まーた「大丈夫、ちゃんと考えてる」

ラクト「でも、この調子じゃ彼女も早く登場するんじゃない？」

まーた「そうかもしれないけどね。……さて、感想をくれたA r i s h i a 様、暇人様、天童翼様、なっぺ様、本当にありがとうございます！
います！」

ラクト「なお、なっぺ様からは、フリフリのたくさん付いた服を貰いました。ありがとうございます」

まーた「結構、（メアの衣装が）溜まって来たな」

ラクト「作者のせいで、どんどん後回しになっていく……」

まーた「気にしない、気にしない。さて、次回もシリアス？ が入

ります」

ラクト「そして、俺とメアのが……」

まーた「こら、ネタバレすんな。まあ、期待しないで、次回を待って下さい。では、失礼します」

フェイト・テストロッサ（前書き）

いつも駄文を書いています、今回はいつも以上の駄文になってしまいました……

フェイト・テストロッサ

S i d e :

「プレシアさん、1つ言っておきます。……あまり、図に乗らない
てください」

この場所に着いてから一番にラクトはそう言う。そしてラクトは、
そのままプレシアと会話をしたかったのだが……。

この場所に着いてから、メアが凄まじい殺気をラクトとプレシアさ
んに当てているのだ。
ラクトは平気のようだが、プレシアには少し苦しそうな表情を出し
ている。

「メアもそんなに殺気を出さないで」

「ふん……」

実に不機嫌そうにそれだけを言って、メアは殺気を納めそのまま黙
った。

（うーん、やっぱり伝えておいた方が良かったかな？ でも、アリシア・テストロッサを見つけるまでは確信もできなかったし、間違っていたら意味がなかったし。

……とりあえず、後でメアには謝っておくか）

殺気を納めたメアに安堵しつつも、ラクトはそんなことを考えた。

「すみませんね、メアがここまでの殺気を出すとは思わなかったもので」

できるだけプレシアと会話がしやすい状況にする為にラクトはメアの事を謝る。

「……………」

無言のままメアはラクトのことを紅く鋭い視線でラクトのことを見る。最近見ていなかったその視線は過去を思い出す。とは言え、今はそんなことをしてる場合では無いのでラクトはその思考をすぐさま中断させる。

一方、メアはその視線でラクトを見続けていたが、途中からその視線では無くなった。

「……すまない。少し頭に血が上り過ぎたようだ、私はここで失礼する」

ただ、メアはそれだけを言うところから消えた。

最後に消える寸前にラクトが見たメアは、先程まで殺気を出していた者とは思えないような姿だった。その姿はまるで、私は馬鹿だ。と言っているのかのようなものだった。

S i d e : ラクト

メアが消えちゃったか……。

会話がしやすいと言えはしやすいけど、少し悪いことしちゃったかな？

まあ、今はプレシアさんとの会話が先だ。

「貴方は彼女の殺気を受けても顔色一つ変えないのね」

俺が質問しようとしたら、プレシアさんが先にそう言うてきた。

「ええ、まあ俺は過去に色んなことがありましたから。彼女……メアは俺よりかは弱いですが、貴方よりも強いです」

「それは今ので十分に理解したわ」

……？ さっきまでとは雰囲気が違う。俺が消える前はもっと、反発していたように感じていたけど。いや、反発はしているのかな？
……まあいいや、会話を続けよう。

「……さて、プレシアさん。貴方に最初に言うておきます、フェイトをどう思っていますか？」

「聞いていなかったの？ あの子はただの人形よ、とても使えない人形……」

フェイトが人形ねえ。……………馬鹿なのかな？

アリシアとは違うから利用して、使えないって言うて、拳句の果てには暴力ですか。

うん、馬鹿だね。

「あ、1つ聞きます。貴方はアルハザードに行く為にジュエルシードを集めているんですか？」

「……そうよ。何故わかったの？」

「いえ、アリシア・テストロッサの近くにそういう類の研究をしている痕跡がありましたので。……それと、ひとつ言っておきます。仮に、ジュエルシードを21個集められたとしても、アルハザードには行けませんよ」

「何故？」

さっきのメア程では無いけど、怖い視線で俺を見てくる。

「何故って、ジュエルシードに願ったとしても、何らかの害をもたらす形でジュエルシードは願いをかなえるから。それに、そんな体じゃ、ジュエルシードを発動する前に死ぬから」

「え？」

「そんな体でジュエルシードを発動したら死ぬよ、間違いなく」

俺が見えるプレシアさんは、何と云うか弱ってるみたいない感じだったから。

まあ、その事を言うと思いがたることがあるのか、プレシアさんは黙ってしまった。

自分とアリシア・テストロッサのことしか考えていないみたいだけだ……。

メアが怒る訳もわかるね。彼女にとって殺意しか出てこなかったと思うよ。

「プレシアさん、正直に言います。……………見苦しいです、というよりも見てるこっちが苛立ちます」

「どう思おうが貴方の勝手だわ」

「まあ、そうですね」

とは言っても、言葉だけで苛立つてもない。
冷静になるのが一番だからね。何かを思うのは、事が終わってからだ。

「話を戻しますが、貴方はメアにフェイトをアリシアと重ねていたと言いましたよね？　それで、違和感を感じ取り、利用するようになった。……………これも正直に言いますが、笑ってしまいますよ」

世界には、まったく同じ人間なんて存在できないのに、さ。必ず、どんなに外見が似ていたとしても、性格、思考などが違うのは当たり前のことだし。それを、フェイトと重ねていて違和感をもった？　そんなことは、当たり前。

研究者がそんな馬鹿でいいのか？　って言いたい気分だよ。まあ、言わないけど。あくまでも気分だからね。

「貴女はアリシア・テストロッサに生きかえらせるために、自分の娘であるフェイトを利用するということですよね？」

「あんなものは娘では無いわ！」

あー、ついに人形じゃなくて、あんなもの扱いですか。酷いですね、まったく。

「アリシアはもっと！」

「もっと、何ですか？」

ラクトはプレシアの言葉を遮る。そして、ラクトは言葉を続ける。

「もっと何ですか？ 可愛かった？ 優しかった？ フェイトと比べて全ての能力が上だった？ ……それとも、フェイトよりも利用価値があった？」

「どういう意味？」

「いえいえ、人を利用する人間ってやっぱり、優秀な方が使い勝手が良いと思っているのでは？ そう思っただけですよ。プレシア・テストロッサさん」

うわ、自分で言っておいてアレだけどさ、酷いことを言ってるね。でも、言わずにはいられないさ。

「アリシアのことはそんな事を思って無いわ！」

「では、フェイトの事は娘とってないかと、そういうことですか？」

「さっきから何度もそう言っているでしょう！ 私の娘はアリシア・テストロッサ、ただ一人よ！」

まあ、さっきから同じような言ってるからね。同じ答えが返ってくるか……。

それにしても、仕方がないなあ。少し言い方を変えようか。

「まったく、まだ気づいてないんですか？ 貴女はフェイトの親です。気付いていないというのなら、俺から言います」

できれば、自分で気づいて欲しかったけど。

この際は俺から言う事にしよう。

「……プロジェクトF・A・T・Eで貴女はフェイトを生んだ。つまり、形はどんな形であれ貴女はフェイトの生みの親です。プロジェクトF・A・T・Eという形だけど、フェイトは貴女の娘なんです」

すよ！」

ラクトは大きな声で言葉を続ける。

「さっきから言ってた娘というのは、フェイトも入ってる筈なんだ！ プロジェクトF・A・T・Eで最初はアリシア・テストロッサという人物をつくろうとした。でも、違かった。それは当たり前です、そんな事なんてできる筈がない。なのに、違かったから貴女はフェイトを利用し、傷つけた。……自分勝手すぎるんです！」

さっきからずっと思ってたけど、プレシアさんは自分勝手過ぎて、大切なことを見逃している。

「アリシア・テストロッサのことを思い過ぎて、フェイトが娘という事実を忘れていたんですよ！ ……貴女は二人の親として失格だ！」

まあ、言いたいことはこんなものかな？

怒鳴ったことで、より一層効果があると思うし、見落としていた事に気付かせられると思う。

……それよりも、我ながら変なものを言ってるものだ。本来はこのような事は言わなかったのにね。気にしていても仕方がないね。

「でも、まだやり直すことができます」

そう、二人の娘とまだやり直せるんだ。二人という部分は伝えて無いけど、これで良い筈だね。

「……………失礼します」

「……………」

先程から何も言っていないプレシアにそう言うってから、ラクトはここから去った。

S i d e : プレシア

「……………貴女はフェイトの生みの親、か」

あのラクトという少年に言われた言葉に私は何も言わなかった。
…

…違うわね。何も言えなかったわ。

彼の言う言葉は全部、考えれば誰でも分かるような内容だったけど、私はそのことを気付かなかったわ。……どうして、今まで気づかなかったのかしら？

それにしても、最後に言っただけやり直せる、ね。

「残念だけど、それは無理だわ」

彼は何故か、私が弱っているという事を知っていたみたいだけど、どうやら、私があと少しで死ぬということまでは気付かなかったようね。

持った後、一か月と言ったところかしら？

アルハザードで、この体も直そうとしたのだけど、彼の言う通りアルハザードには行けないわ。だから、やり直すことはできない。

「それなら、彼にフェイトを……ゴホッ」

プレシアが口に手を当てる。そして、その手には血が付いた。まだ、少ない量だが、前に比べて量が多くなっているという事実にはプレシアは気付く。

「……本当にもう時間が無いようね」

その言葉は、1人残された部屋に寂しく掻き消された。

S i d e : ラ ク ト

あの場所を後にして、俺はメアと合流する。

近くにメアの魔力を感じ取り、その場所に転移をする。

すると、メアは来る事が分かっていたのか、座って待っていた。

「話は終わったのか？」

「一応ね」

「そうか」

その後、簡単にさっきまであったことをメアに説明した。

「ということで、プレシアさんの件は何とかなと思う」

「フェイト嬢の望むようになると良いな」

ふーん、メアはテストロッサ嬢とはもう呼んでいないんだ。

メアって、基本的に人の名前を言う事は無いからね。以外と珍しいことなのです。これで、現在、4人目かな？ ……彼女と、俺となのは、それとフェイトの4人。

そこにメアが申し訳なさそうに言う。

「先程は済まなかったな」

「いやいや、謝るのは俺の方だって。プロジェクトF・A・T・Eのことを疑った時点で、言わなかった俺がいけないんだし。仕方ないよ。君と彼女はプロジェクトF・A・T・Eについては敏感だし。……あー、彼女はと思うか分からないね」

「そうだな。姉様の考えていることは分からない。しかし、お前になら教えてくれるのではないのか？」

「聞いて無いから分からないよ」

「そうなのか」

「うん。じゃ、言いたい事も終わったし、俺は戻るね」

「了解した」

そう言つて俺はマンションへと、メアはどこかにへと向かいこの場から消えた。

フェイト・テストロッサ（後書き）

あとがきこーなー

まーた「ラクトの説教？ シーンがあつたわけですが、全然できてない」

ラクト「少し、物足りないかな？」

まーた「その通りですね。でも、何回も書きなおしたんだけどな……」

ラクト「作者に変わって、俺が謝ります。申し訳ありませんでした」

メア「まったく、ダメダメだな」

まーた「返す言葉がございません」

ラクト「作者は置いておいて、感想をくれたなっぺ様、A r i s h i a様ありがとうございます！」

メア「そして、A r i s h i a様のところの優からはクッキーとプリンを……な、何も送られてきてないぞ？ 私は何も食べていないぞ（必死に誤魔化す）」

まーた「まあ、置いておいてw 次回の予定は、k yと言えば分かる方が多いと思います」

ラクト「……………」

メア「ん？ 何故、怖い顔をしているのだ？ ラクト」

ラクト「いや、何でもない。気にしないで」

まーた「では、この辺で失礼します。読んでくれ、ありがとうござ
いました」

管理局介入

Side：メアリスティング

……そう言えば、ラクトになのは嬢に関する問題を言うのを忘れていたな。

さっき別れたばかりだが、我儘を聞いてもらうことにしよう。

そう考え、メアは目を閉じてラクトに念話を送る。

“さっき別れたばかりだが、我儘を聞いてもらえるか？”

“……そう言えば、プレシアさんのところに行く前にそんなことを言ってたね。まあ、出来るところまでは聞いてあげるよ”

“そうか。そのだな、なのは嬢に関することなのだが”

そう言って私は、最近、なのは嬢が友達との関係が悪くなったということを説明した。

それで、具体的な解決方法を教えてもらおうとしたのだが……。

“あー、メア。悪いけど、その問題には介入しない”

“何故だ？ できる限りのことなら協力してくれるのではなかった

のか？ ……それとも、なのは嬢のことだから介入はしたくないのか？”

“ いやいや、なのはだからって言う訳じゃないよ”

……なのは嬢のことではないと言う事は、別に協力してくれても良いと思うのだが。

私はそう考え、ラクトに質問をする。

“ なら何故？”

“ うーん、そうだね。……だってさ、こういう問題って、当事者が解決しないといけないと思うんだ”

“ ……？”

意味が分からん。

問題があるなら、早めに解決した方が良いと思うのだが。

ラクトは思っている事が分かったのか、メアに説明をする。

“ だってさ、何でもかんでも他人の意図で解決させちゃったら、物事で学べることは無くなっちゃうでしょ？”

物事に対して学べる事、か。

……ふむ、分かったような気がするのだが、完全に理解はできていないな。

“問題が起きてしまったら、今度は同じ事が起こらないように努力をすればいいと思うが”

次の為に努力をしようとするのは、学べる事には入らないのだろうか？

失敗は成功のもと、とも言っしな。

“それじゃ、ダメだよ。努力をしても意味がない”

“そんなものは分からないではないか”

“じゃあさ、メアの料理は努力して解決する？”

……無理だな。

どんなに努力をしても、料理は一向に上達をしない。間違いなく、1人で作ってしまったら大変な事になる。

“メアの料理だって、メアが簡単な作業しかやらずに美味しい料理ができたとしたら、メアの料理センスは分からないでしょ。つまりはそういうこと”

少し説明が雑だが、一応理解することはできたな。

つまり、なのは嬢とバニングス嬢の当事者二人が解決した方が彼女達にとっては良い。

当事者が初めて体験することに部外者は関わるな、と。そういうことか。

“まあ、そんな感じかな？　じゃあ、もう用件は終わったみたいだし、切るよ”

最後にラクトはそう言って、念話を切った。

「……ふむ、また1つラクトに教えられたな」

ラクトは私が生まれた時から、色々な事を教えてくれる。もちろん、姉様もだ。

二人は私に優しくしてくれてる。それが、たまらなく心地が良い。

私が最初に教えられたことは何だっただろうか？

「確か……“1人で勝手に諦めるな”だったな」

そうだ、その言葉だ。

私が初めて姉様に教えられた事だ。忘れもしないあの月光が照らされていたあの場所で……。初めて私は感情というものを手に入れたのだ。

「こうして生きていられるのも、あの二人のおかげだ」

今思うと、大した礼は言えてないな。うむ、今度姉様に会った時は伝えよう、心からの礼を……。

S i d e : ラ ク ト

「彼女は早く戻って来ないかな？」

メアと別れて、マンションに向かいながら俺はそう言う。

「メアもどんどん“人”らしくなってきたし、彼女も喜ぶんじゃないかな？」

うん、きっと彼女のことだ。手を合わせて喜ぶだろう。

彼女って、以外とメア思いだからね。……何か、俺のことも思われているみたいだけど。

何でだろ？ 彼女が喜ぶようなことしかしてなかったのに、何で様付けされるんだろうなあ？

彼女と出会った時は、一方的に俺のことを殺そうとしてきたんだけどね。

いやー、あれは危なかった。凍結の魔力変換の使い方が上手いからね、今のメアよりも。

「彼女は今、どんぐらい強いんだろうなあ？」

まあ、この疑問は会った時のお楽しみという事で、マンションの方に向かいますか。

で、着いて（フェイトの）部屋に入った訳だけどさ……。

どうしてさっきから、

「どうして、母さんの場所にいたの？」

「メアさんはどうして、あんな場所に？」

質問責めにあっているのでしょうか？

いや、確かにメアとの関係は隠してたから、言っても無いけどさ。それに、アルフに來いって言われたから行った訳であって……。

あー、面倒だ。とりあえず黙らせようかな？

「はいはい、質問には答えるから一旦黙って」

そう言っと、俺をじっと見てきた。

「じゃあ、まずフェイトの質問からどうぞ」

「うん、何で時の庭園にいたの？」

あの場所ってそういう名前なんだ。てつきり、どっかの魔王城だと

思ったよ。

それに時の庭園って、神聖な場所みたいに思えるんだけど……。

まあ、質問に答えようか。

「それはアルフに来说いって言われたからであって、フェイトがどんな場所に行っているかなんて知らなかったよ」

「……アルフ？」

「念話で言われたから、フェイトは知らないと思うよ。それに、何で来いって言われたか分かったしね」

とは言っても、その問題に関しては必要な事を既に行ったけどね。
あとは、プレシアさん本人がするべき事だ。

「で、次の質問はアルフか」

「ああ、何でメアさんがあそこにいたのさ？」

「え？　メアさんが？」

「そうなんだよ、フェイト。ラクトはメアさんも連れてあの場所に来たんだよ」

さて、非常に困りました。

メアと俺が通じ合っているという事実はバレても構わなかったのですが、フェイトにメアがなのはの方の味方になっているという事実はできるだけバレない方がいいです。

何故ならそうなってしまったら、最悪の場合、フェイトが裏切られたと思ってしまうかもしれないからです。どんなにフェイトの味方であろうと、フェイトはラクトとメアは通じ合っている。そして、メアとなのはも通じ合っている。だから、ラクトとなのはも……と考えてしまう可能性がある訳です。

まあ、なのはとの関係が良くなってきたら、こんなことは考えなくても良いのですが……。

いけないいけない、そんな可能性なんてほぼあり得る訳がないじゃないか。余計な考えを出すなよ。

まずは質問に答えよう。

「えっと、聞かれていなかったから言っただけで、メアと俺は知り合いで、ついこないだまでは、彼女と一緒に隣の部屋に住んでいた」

「メアさんと一緒に住んでいたのかい？」

「うん」

「よく平気だね。アタシは最初に会った時なんて、思わず殺気がで

そんな程のオーラみたいのがあったからさ……」

多分、それは魔法関係者と分かって様子見をしたと思う。

というより、メアの威圧でそんなこと言ってたら、彼女の威圧は何なんだろう？

……アルフの場合だったら、殴りにいつてるかもしれない。

「まあ、そういうこと。じゃあ、次の質問に」

そこまで言った時、ジュエルシードが発動した。そして、フェイトは迷わずベランダから外へ、アルフもそれに付いていった。俺を部屋に残して。

「よっぽど、フェイトはジュエルシードを集めて、プレシアさんに喜んで欲しいみたいだね」

さて、俺もフェイトのことを追いかけるとしますか。

まだ日が沈んでいないということで、今回は転移を使わずに移動をした。

S i d e :

ジュエルシードを感知してその場所にメアは向かっていたのだが、
フェイトが先に木の化け物と戦闘をしていた。

「手伝おう」

そして、その場所に着いたメアはそう言った。

ラクトは私と仲間であるみたいなのを言っただろうと、そう考えたのだ。

「いいんですか？」

「構わないさ。私が奴の動きを止めるから、フェイト嬢はジュエルシードを」

「分かりました」

結界は既にメアが張ったので、魔法を使うのに躊躇いが無くなる。

メアはバリアジャケットを展開して、ノエスを杖状にさせた。
その途中で、この場所になのはとユーノが到着する。一方、まだラ
クトは到着してこない。

気にしていても仕方がない。だから、ジュエルシードを封印するこ
とを第一と考え、そして少しの間、目を閉じ木の枝の全てを氷らせ
た。

「今の内に頼むぞ。なのは嬢にフェイト嬢」

「「はいっ!」」

すると、なのはからは桃色の魔力光が。フェイトからは金色の魔力
光が出て、それをそのまま木の化け物に向かって放出した。

「撃ち抜いて!」

《デイベインバスター!》

「貫け轟雷!」

《サンダースマッシャー》

桃色と金色の魔力が木の化け物に当たり、張っていたバリアを貫通
し、ジュエルシードをむき出しにさせた。それを、そのまま二人で

封印する。

「ジュエルシード、シリアル7」

「封印」

封印が終わり、なのはとフェイトはお互いのことを見る。

（ふむ、一応ジュエルシードは封印できたが、今度はこっちの問題か。

これは、まあ、二人に任せるとして、ラクトは一体何処にいる？
さっきから視線は感じるのだが、いる場所がわからないな）

と、そんなことを考えていたらなのはとフェイトの距離が縮まり、杖がぶつかろうとするが、それは途中で第三者に止められた。

「ストップだ！ 此処での戦闘は危険すぎる。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせて貰おうか」

メアはその第三者は黒いバリアジャケットをしていたので、ラクトかと思ったが違った。

管理局の執務官、クロノ・ハラオウンの言葉が言い終わった時、空中にいたメアの下から、一瞬だが殺気を感じられた。その殺気は、

メアにしか感じられなかったらしく、メアを除く者は気付かなかった。

（ラクトはそんなところにいたのか。それにしても……………今の殺気は？

正直に言っ、冷や汗がとまらない程に濃い殺気だったぞ。）

メアの背中には冷や汗が流れる。

メアは今までラクトと行動を共にしていた時とは比べ物にならない殺気を出した為、少しの間だがメアはラクトのことを初めて怖いと思った。

そして、メアはラクトのことを見ていたが、途中で見失った。

管理局介入（後書き）

あとがきこーなー

まーた「はい！ k y 登場です！」

メア「管理局のことか……。それにしても、ラクトはどうしたのだ？」

まーた「まあ、この事に関しては殆どの方が分かると思います」

メア「そうなのか」

まーた「はい。分からなかったとしても、次回で少し出ますので。

……じゃあ、メアよろしく」

メア「了解だ。……感想をくれた A r i s h i a 様、なっぺ様、本当にありがとう。こんな駄作に感想をくれて」

まーた「感謝です！ なお、なっぺ様のところの吼太君とリームちゃんからは、ペロペロキャンディー（渦巻き状の棒つき飴）とリーム特製のチーズケーキを受け取りました。ありがとうございます！ ……って、何も食べれてないんだっただ」

メア「馬鹿だな」

まーた「……。では、今回はこの辺で失礼します。ありがとうございました」

あと少しで、殺していたな（前書き）

少し、ラクトの口調が……

あと少いで、殺していたな

S i d e : ラ ク ト

フエイトがジュエルシードを感知して俺も魔法は使わずに向かった訳だけど、途中からメアの魔力を感じられたということで、さつきよりも速く向かった。

今まで手間をかけて移動した理由は、特には無い。

なんとなく最近、転移でしか移動してないと思ったからさ。そのせいで、運動ができて無い訳だし……。たまには体を動かさないとね。

移動方法は、走りながらジャンプして向かっている。

……多分、意味が分からないと思う。

まあ、つまり、民家の屋根を走って跳んで、走って跳んでの繰り返し。

その方法で向かってる訳だけど、楽しいねコレ。うん、またやりたいようなスリルがあるよ。

「って、楽しんでる場合じゃないや。少し急ごっか」

民家の家を移動してたけど、結局、転移で向かうことにしました。
決して、飽きたと言う訳ではありません。……多分。

それで現在は公園にいます。

どうやら、なのはとフェイトが協力して木の化け物を倒すらしい。
それで、俺がこの公園にいるってことはメアは気づいてるみたいだ
けど、場所は気付かれていないようです。

ちなみに、俺は空中にいるメアを見上げられるような場所にいる。
簡単に言うと、メアの下ということだ。

『撃ち抜いて!』

《デイベインバスター!》

『貫け轟雷!』

《サンダースマッシュ》

と、砲撃？ まあ、魔力のゴリ押しで何とかすることにしたみたい。それで、ジュエルシード封印できたんだけど、なのはとフェイトの二人が向き合う。

「協力してくれた事には感謝するけど、ジュエルシードは譲れないから」

フェイトはバルディッシュを構える。

「私は、フェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど……」

それに続いてなのはも構え、なのはは言葉を続ける。

「私が勝つたら、ただの甘ったれた子供じゃないって分かってもらえたら、おはなし聞いてくれる？」

アレ？ なのははいつの間にそんな風に思ってたんだろう？
あの二人に何かあったのかな？

そう考えていたら、フェイトとなのはが動く。

先にフェイトがバルディッシュを振り、なのはがそれに反応し杖を振る。

しかし、その二つの杖はラクトと同じ黒いバリアジャケットをした少年に止められた。

ん？ 何者だろう？ あの少年。

強さは……大したことは無いかな？ どうやら、経験の差である二人に勝てるみたいだけだし。

そんな余裕を考えつつも、ラクトは少年の言葉を待った。

しかし、

「ストップだ！ 此处での戦闘は危険すぎる。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。

詳しい事情を聞かせて貰おうか」

その言葉を聞いた瞬間ラクトの中から、ドス黒い何かが沸き起こった。

そしてそれが殺意ということに気づいた時には、ラクトがいる場所をメアに気がつかれた。

S i d e :

「……押さえる。殺すな」

ラクトはクロノが言った言葉の後に、自分に言い聞かせるようにそう言う。

殺意は既に納めているのだが、少しでも気を抜いたらマズいことになる。ラクトは思い、一旦、その場から離れた。

「管理局だからといって殺すな、落ち着け。……あいつの目の前では絶対に殺すな」

それから深呼吸を数回行い、何とか落ち着いたのだが、ラクトはあの場所には戻るべきではないと考える。しかし、考えとは裏腹に、ラクトはもとの場所に戻った。

とは言え、一旦離れてから、たったの10秒ほどで戻ったのである。

「後少しでも、殺意を抑えるのが遅かったら大変な事になったな」

メアは戻って来たラクトを驚いたような目でみるが、ラクトはそれを気にせずにそう言った。そしてその声は遠くにいたメアの耳にも聞こえた。

（口調が戻っている？ ……管理局が来てから殺気が出たようだが、何かあるのか？）

その声を聞いてメアはそう思ったが、その途中で場が動いた。

「フェイト！ 撤退するよ！」

アルフがクロノに魔法弾を当てたのだ。しかしそれをクロノは、はね返す。

そして再度、アルフが先程よりも魔力を込めた魔法弾を撃つ。

それによって、周りが土煙りによって見えなくなった。

その隙についてジュエルシードを手に入れようとしたフェイトだったが、クロノがそれを邪魔する。

「っ！？」

青色の魔法弾に撃ち落とされるフェイト。アルフが助けに行こうとするが、間に合わない。

「フェイトーッ！」

叫ぶアルフだが落下は止まらず、落ちて行く。

そして、

そのまま地面に当たる……筈だったが、ラクトが姿を現して、フェイトを抱えたのであった。

しかし、フェイトは1つ疑問に思う。

（ラクトってこんな人だったっけ？ ……私の知るラクトはもっと優しい感じなのに、今は凄く……怖い）

フェイトがそう感じるのも無理はない。

何故なら先程まで隠せていた殺意だが、少しだけ漏れてしまっているのだ。

つまり、零距离で、微弱だがラクトの殺気を受けているのだ。恐怖を感じないというのも、無理らしからぬ話だ。

まだ、AAAランク程度の力では。

「フェイトは此处から逃げろ」

ラクトがそう言うことで、フェイトはアルフの場所へと向かう。しかしそれは、それはラクトに言われたからではない。ラクトのことが怖かったから、アルフのいる場所に向かったのだ。

その事をフェイトは心で謝りつつも、フェイトとアルフはこの場所から移動しようとするが、またしてもクロノが邪魔をしようとする。

「待てっ！」

クロノの杖に魔力が溜まりそれを先程と同様に撃つが、ラクトによって掻き消される。

「なっ!?!」

「……早くしろ」

クロノが驚いている間にラクトは冷静にそう言う。フェイト達は、その言葉でこの場所から消えた。

一方、ラクトは魔法弾をかき消した腕を下ろす。

「貴様っ！ 何故、彼女を逃がしたっ！？」

「……………」

クロノの言葉をラクトは無視する。しかし、視線は鋭く据わっている目だ。

「とにかく！ 一旦、貴様を公務執行妨害で逮捕する！」

「……時空管理局とは何だ？」

「魔法を使ってるのに、管理局を知らない筈はないだろうっ！？」

「さすが執務官殿。この程度の嘘は簡単に見破りますか。……さすがです、と、言いたくなってきましたよ」

ラクトはクロノを馬鹿にしたような声でそう言う。

「貴様っ！？ 僕を馬鹿にしているのかっ！？」

「馬鹿に何てしてませんよ。管理局の執務官様、褒めているのですが……気に障りましたか？」

「話すだけ無駄だっ！ とにかく、拘束させてもらおう！」

「……………」

すると、今までクロノを馬鹿にしていたラクトが急に黙り込んだ。何かを考えているような姿だったが、それは一瞬の出来事。

「行くぞっ！」

クロノが先に魔法弾を撃つ。しかし、ラクトは腕だけを振り、魔法弾を掻き消す。

そのラクトは虚空から、デバイスであるラルドデイスを取りだす。

「この戦闘を見てる者に告ぐ、10秒以内で出て来い。さもなければ」

誰かに言ってるかは分からないが、ラクトは誰かに向けて言う。ラクトは言葉の途中で消える。クロノは周りを見渡すが、どこにもラクトはいなかった。

「さもなければ、この執務官を殺すぞ」

その声はクロノの背後からした。振りかえるクロノだったが振り返る前にラクトに蹴られる。その衝撃で、クロノは地面に叩きつけられた。

「がつ！」

「あと8秒だ」

地面に叩きつけられたクロノはその反動によって動けなかった。その隙を見逃さずにラクトは追い打ちをかけるように、距離を縮める。

「ラルドデイス」

そして、ラルドデイスからは黒い魔力光があふれ出す。ラクトはその状態になったラルドデイスを構え、クロノに向かって振る。

すると、今までラクトが溜めた分の魔力全てがクロノに向かい襲いかかる。その大きさは縦が10メートル、横が5メートルぐらいの大きさだ。

これをクロノは避けようとするが、まだ地面に叩きつけられた反動によって動けなかった。

しかも、ラクトは念を入れ、クロノをバインドで縛る。

「あと3秒だ」

ラクトがそう言った時には既に、その魔力を込めた斬撃はクロノに当たっていた。
黒い魔力光によってクロノの姿が見えなくなるが、それが無くなり、クロノを見ると

「……………」

死んだと言う訳ではないが、死にかけているクロノがいた。
クロノは体を動かそうとするが、体のあちこちの骨が折れている為、動けなかった。

ラクトはそのままクロノのもとまで移動し、剣を持つ。

「時間だ。……さよなら、と言っておこう」

それだけを言うと、ラクトは持っていた剣を何の躊躇いもなく振り下ろした。

クロノの首を狙って。

『待ってください!』

ラクトはその声によって振り下ろす腕を止めた。
しかし、後少しでも遅れていたら首が斬られていたと言ってもいい程に、剣は首の近くで止まっていた。

「随分と遅かったな」

『すみません、接触事故があったものですから』

この場所に、1人の女性が映ったモニターが現れる。なのはとユーノ、それにメアはその女性のことを見るが、ラクトは興味無さそうに背をそむけて会話をする。

「くだらん嘘は吐くな。次に嘘を言ったらこの執務官を殺す」

『……………』

女性はラクトの顔が見えないので表情は分からない。

しかし、もし本当に嘘を吐いたら、ラクトは何の躊躇いもなくクロノを殺すだろうと思い、女性はできるだけ気をつけた方が良いということは分かった。

「まあ、いい。それで、貴様らは管理局の何だ？」

『私はリンディ・ハラオウンです。そのクロノ・ハラオウンの上

司であり、母親です』

「まあ、聞いたところで何の意味も無いがな。……俺のことはラクトとも呼べ。リンディ・ハラオウン」

軽い自己紹介をしても、ラクトは背を向けたままである。

「俺はここで失礼する」

『待つてください、貴方には聞きたいことがあります』

「俺は聞かれないことなんて無い」

ラクトは実に不機嫌そうに言う。しかし、リンディは会話ができるようする為に交渉を続けた。

一方、なのはとユーノは状況の変化に着いていけず、戸惑うのであった。

メアはラクトの言葉を静かに聞いている。

「そもそも、行ったとしてもメリットが無い」

『しかし、私達の立場からしたら来て貰わなければ困ります』

「立場、か。……そうだな、条件を呑めば行ってやろう」

その言葉に若干の不安があるが、リンディはそれを聞かなければいけない”立場”だった。

『分かりました。それで、その条件というのは？』

「それは後で言おう」

その言葉で、アースラに行ける道が開く。

ラクトは最後に入る事になったが、その顔が笑っていたという事実を知る者はラクトを除いた者は知らなかった。

あと少いで、殺していたな（後書き）

あとがきこーなー

まーた「ラクトがおかしくなった。しかも、普通に冷酷な性格だし」

メア「そうだな」

ラクト「仕方ないじゃん。管理局なんだから」

まーた「うわ、さっきまであんな口調だった奴が、そんな口調だと不気味だ」

メア「だろ？ 最初のプロローグでは私はこういうことを言っていたのだ」

まーた「成程ね」

ラクト「では、感想をくれた天童翼様、暇人様、なっぺ様、A r i s h i a 様、本当にありがとうございます！」

メア「それと、なっぺ様のところの吉谷からは巨大パフェを貰ったが、私ひとりでペロツと食べたぞ」

まーた「……あり得ない」

ラクト「作者、次回の内容は？」

また「次回はリンディさんとの交渉となのはのこととか、そんなところ」

ラクト「なのは、ね」

メア「暗く考えるなよ。まあ、いいか。では、この辺で失礼する」

貴様らを感じる事なんて無い(前書き)

後半部分、ラクトの性格が……

貴様らを思う事なんて無い

S i d e :

クロノは体のあちこちの骨が折れてしまっていた為、メアがクロノを回復魔法で歩けるようにした。

しかし、本来はメアがこのようなことをする必要は無い。

何故なら、この程度の怪我をラクトは簡単に治せるのだ。しかし、ラクトはそれを行わない。そして、ラクトはクロノには興味が無いのか、まったく気にせずに歩いていく。

「……………」

この空間の状況では誰も喋らずに無音状態が続く。

しかし、それを最初に破ったのはなのはだった。

「ラクト君は何でさっき、あんな酷い事をしたの？」

この場にいる全員は少なからず、ラクトのことを恐いと思っている

のだが、なのはは何故か普通に、純粹に質問することができた。

「だって、フェイトを傷つけたでしょ？　そのやり返しと思えばいいよ」

「それでも、その前にお話はした方が良いの」

「俺は君みたいに強くて優しい人間じゃないからさ。できないよ」

この会話を聞いて、なのは以外は不気味と思った。

さっきまであのような行動をした者が、このような口調にいきなり変わったからである。

しかも、先程から出している敵対心や微弱の殺気を放出させたまま、というのも不気味に思う原因の一つだ。

「できるの」

「できない」

「できるの」

「できない」

「できるの」

「……はいはい。できたら嬉しいですねー（棒読み）」

この場にいるなのは以外の者は、なのはが純粹だから、ラクトが出している殺気を感じられていないからこうしてラクトと会話ができているんだと思っている。ラクトでさえそう思っていたが、事實は違う。

なのははラクトの殺気をメア達と同様に感じられている。当然、そのことに恐怖もしている。

それでも、なのははラクトと会話を続ける。

（ラクト君が出している冷たいオーラみたいのは怖い。……でも、何でだろう？

お話しないといけないって思ってるの。……大切なものを失いそう
で）

なのははそう考えていた。前にラクトと出会った時、懐かしさというものがあつた。

今回もラクトと話している間は懐かしいと思ってるが、それよりも何故か謝罪したい気持ちの方がそれを上回っていた。

そんな気持ちのまま、少し歩き、目的地であるアースラに着いた。

「バリアジャケットとデバイスは解除しなよ。窮屈だろう？」

着いた時、クロノがそう言う。

その言葉にラクトを除く者はバリアジャケットを解除した。

「君も解除してくれ」

先程、クロノはラクトに殺されかけたということもあって、クロノは内心少し低姿勢になってしまっているが、ラクトはその事に興味を持たなかった。

とは言え、ラクトはバリアジャケットを解除した。

しかし、ラクトはバリアジャケットが無くて問題ないだろうと思
い解除したのだ。

「妙な真似をしたら貴様だけでなく、この場所にいる管理局全員を
殺すぞ」

そう言いながら、ラクトはバリアジャケットをしまう。

クロノはその事に安堵しつつ、ユーノの方を見た。

「君も、元の姿に戻ったらどうだい？」

「そう言えばそうですね。……すっかり忘れていました」

ユ一ノ体が白く光り、そこから1人の少年が出てきた。

「なのはにこの姿を見せるのは久しぶりかな？」

そうは言うが、なのはは「え？ え？ ……」と思いつきり動揺して……

「ふええええええええ！？」

耳が痛くなるぐらいに大きな声で叫んだのであった。

S i d e : メ ア リ ス テ ィ ン グ

……… 今のは効いたぞ、なのは嬢。

耳がピーンとする。それにあまりにも大きな声のせいで、頭も少し

痛い。

「ユーノ君って！？ ユーノ君は！ アレ？ ……訳がわからないの！」

動揺を続けるのは嬢。

私はふと、ラクトのことを見るが、何も考えていないような表情だ。しかし、何故だろうか、少しだけ笑っているように見えるのは……。

「何か、君達の間で見解の相違でも？」

「そうみたいです。……なのはに最初に出会った時って、この姿じゃなかったっけ？」

「違うよ！ 最初からフェレットだったの！」

最初に出会った時とは、あの道の悪い場所のことを指しているのだろうか？

だとしたら、最初からフェレットだったな。

私はユーノが人であるということを知っていたが、なのは嬢知らなかったのか。

そこで、ユーノ少年は出会った時を思い出しているのか、考えごとをする。

「……ああ！　そ、そうだった、そうだった！　この姿だった！」

「だよね！？　そうだよね！？　……びっくりしたー」

ユーノ少年は出会った時を思い出したのか、そう言って、二人して納得した。

「今まで知らなかったのか？　なのは嬢」

「はい。ずっと喋るフェレットだと思ってました」

「そうか。しかし、知らなかったということは着替えなどを見られていたのではないだろうか？」

知らなかったらしいから、私は気になることを言う。

それに温泉の時だって、なのは嬢は裸を見られたのではないだろうか？　なのは嬢だけでなく、あの時いた私以外の全員は。

私？　私は知っていたから、ユーノ少年とは入る時間をずらしたぞ。

「ふえ？　あ、……」

なのは嬢が私の言葉を聞いて、少しの間考える。考えた後、なのは嬢はそう言ったので、私は耳をふさいだ。

「ふえ ええええええええええええええええええええええ！？」

先程の叫び声より数倍大きかった。

S i d e :

閑話休題。

先程の件が終わり、ラクト達はクロノに1つの部屋まで案内された。その部屋の中では、お茶に砂糖を入れそれを飲んでいる女性がいた。

「着いたみたいね」

「はい、艦長」

「お疲れ様。貴方達は楽しただろう?」

その言葉に従い、メアとなのは、それにユーノが正座で座った。ラクトは立ったままである。

「貴方も座ったら?」

「立ったままの方が落ち着くものでな。貴様ら管理局を相手にする時だけだな」

「お好きなように。……さて、さっき自己紹介したけれど、もう一度するわ。

時空管理局のリンディ・ハラオウンです。このアースラの艦長をしています」

落ち着いた様子で自己紹介をするリンディ。

それに続き、なのは、ユーノ、メアが自己紹介をして話を進める。

ユーノがジュエルシードの話をして、こうなった経緯を話す。途中でロストロギアの説明も入り、事の重大さを知ったなのは。

「それで、僕がジュエルシードを回収しようと……」

ユーノの説明が終わり、静かになる。

そして、その場の沈黙を破ったのは管理局の人間。

「立派だわ」

「だが、同時に無謀でもある」

そのクロノの言葉によって、ユーノは黙り込む。

「これよりロストロギア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

「「えっ!?!」」

「君たちは今回のことは忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも!」

「次元干渉に関わる事件だ。民間人をこれ以上巻き込む訳にはいかない」

「まあ、急に言われても気持ちの整理ができないでしょう。今夜一晩ゆっくりと考えて、それから改めて話を？」

リンディが喋っていたその時、ラクトの殺気が部屋全体に広がり、

リンディは言葉を途中で止めた。

そのまま、ラクトはリンディのことを睨む。

「そうやって貴様ら管理局は人を利用する。今すぐここで殺してやりたいが、残念ながらそれはできない。……だが、図に乗るなよ」

「どういう意味だ!？」

ラクトの言葉に怒鳴るクロノ。しかし、ラクトはクロノを完全に馬鹿にしたような顔で見る。

「管理局の執務官というのは弱いだけでなく、頭の回転の方も遅いのか？」

「なんだとっ!？」

「俺達の魔力を黙って測っているのはどういう意図だ? ……本当に死にたいのか？」

ラクトはクロノを無視してそう言う。

気付かれたリンディは驚いた表情をして黙る。それを見たラクトは殺気を納め、部屋を出ようとする。

しかし

「待てっ!？」

ここでもクロノが邪魔をする。

ラクトは向かってくるクロノの足を蹴り、転ばせる。そして、虚空から取り出したラルドデイスの刃をクロノの首元に突き出す。

しかしそれは、あまりにも早すぎる出来事だった為、ラクトを除く者は何が起こったか分からなかった。

「クロ」黙れ。それ以上喋ったら殺す「……」

その言葉でこの部屋が再び静まり返る。

「さて、俺が此処に来た理由を言おう。先程は条件と言っていたが、此処に来た目的は違う。俺は貴様ら管理局に忠告をする為に来た」

「忠告？」

「この件でテストロッサと付く名の者を逮捕した場合、管理局を潰すということだ」

「そんなのできる訳がないだろうっ!」

驚くリンディに怒鳴るクロノだが、ラクトはそのことに何も思わない。
しかも何故か、リンディとクロノ、それにラクト以外の者は時間が止まっているように、少しも動かない。

「できるかできないかは聞いていない。……そうだな。逮捕しても局は潰さないようにしよう。だが、もし逮捕したら、リンディ・ハラウン」

言葉の途中でラクトは殺気を強め、二人から大量の冷や汗が出る。

そして、ラクトは残酷な笑みを浮かべながら、こう言う。

「リンディ・ハラウン。貴様の目の前でこいつを、クロノ・ハラウンを殺す」

「なっ!?!」

ラクトはそう、リンディ・ハラウンに言った。

その言葉を聞いて、リンディは絶句した後クロノのことを見る。

「どう出る？ リンディ・ハラウン。貴様の“立場”からすると、逮捕しなければいけないが、……クロノ・ハラウンの親としての“立場”としてはどう出る？」

「……貴方に心は無いの？」

「少なくとも、正義を語っている貴様ら偽善組織に思いやることなど、1つも無い。

貴様ら偽善組織は世界で、俺が世界で二番目に憎んでいるモノだからな」

その台詞を言うとラクトは殺気を納め、ラルドデイスも消した。

その時、ラクトの顔はひどく不愉快な顔をしたが、すぐに何も感じさせない表情に戻った。

それと同時にリンデイはデバイスを納めてくれたことに安堵する

「俺は言いたい事は言い終わったからな。ここで消えさせてもらう」

そう言って、ラクトは転移でどこかに消えてしまった。

そして、消えると同時になのは達が動き出した。

S i d e : ラ ク ト

アースラから消え、俺はさっきまでいた場所である公園にいます。

「管理局は結局逮捕するだろうなあ。ま、期待もしてないけど……」

なのは達のことを利用しようとした連中だし。

俺は管理局を世界で二番目に憎んでいる。理由は色々あるんだけど、一番はそうだね、正義を語っているのが許せないかな？ 聞いていて反吐が出るよ。

あ、多分信じてくれないだろうけど、俺は局の人間を殺す気は無いよ。

「殺すのは数人でいいんだ。それ以外の局の者には、興味もない」

そう、数人でいい。あのプロジェクトに関わった者と、俺個人が恨んでいる者だけだ。

プロジェクトの関係者の方は彼女に任せるとして、俺の方は地道に居場所を突き止め絶望させてから殺す。

……って、口調がこつちになってる。戻さないと。

「残りのジュエルシードも少なくなってきたし、この件は最後まで動こう。そして」

ラクトは決意した声で言う。

「アリシア・テストロツサを蘇生させる」

その声は誰に言っている訳でもなく、ただ独り言のようにそう言ったのであった。

貴様らを感じる事なんて無い（後書き）

あとがきこーなー

まーた「今回はリンディさん辺りの話だったのですが、ラクトが鬼畜です」

ラクト「酷いなあ。俺はそんなつもりないけど……」

メア「いや、誰でも思う事だと思うが」

ラクト「そう？」

まーた「そう。てか、自覚してなかったのね……」

ラクト「さて、感想をくれたなっぺ様、天童翼様、Arisshia様、暇人様、ありがとうございます！ なお、なっぺ様からはところの吼太君からは浴槽プリンを貰いました。ありがとうございます。まあ、これも、メアに……」

メア「胃が宇宙の私には軽い量だったぞ」

ラクト「……らしいです」

まーた「（ある意味、メアの方が人間止めてる）さて、次回の話は、海での出来事のところを予定してます」

ラクト「ということは、そろそろ無印は終盤かな？」

また「そういうことです。ちなみに、無印中ではもう裏ラクトが出る予定はありません」

メア「裏というのは、怖い方のことか？」

また「はい。あのラクトは色々……。それと、次の更新は遅れるかもしれません」

メア「だそうだ」

ラクト「すみません。こんな作者で……。では、今回はこの辺で失礼します」

プレシアの行動、そして思い（前書き）

少し、行間を変えてみました。

プレシアの行動、そして思い

S i d e : メアリスティング

ん？ 今、何があつた？

どうやら、執務官とその母親がゆがませた表情をしているが……。それに、ラクトもいつの間にかこの場所から消えている。

「今、何があつた？」

私はそう質問するが、執務官と母親が驚いたような顔をする。

「今を見て無かつたのかっ！？」

「……？」

意味が分かん。

見てなかつたなんて、気が付いていた時には……… 成程、ラクトか。

何かやったな。それも、少し過激的なことを。

「クロノ。……多分、見て無かつたのではなく、見えなかつたと思うわ」

その時、小さな声だが……リンディ・ハラウンと言ったか、まあ、

彼女がそう言った。

その後、彼女達は話をしていたが、分かったことは一つ。
どうやら、ラクトは想像以上に管理局を敵視しているということだった。

S i d e : ラクト

管理局もとい、偽善組織……いや、普通は逆かな？ とにかく、偽善組織と接触してから既に一週間が経つ。

この一週間でジュエルシードは一つも集められなかった。

別に、そのことに苛立っているってことはない。というより、早すぎる少し問題ができるちゃうし……。

「ラクト、行くよ」

って、そんなこと考えてる場合じゃないや。……いや、完全に関係ないっていう訳じゃ無いか？ まあ、いいや。

「はいはい、じゃ、行こうか」

「うん」

俺とフェイトとアルフはこれから目的地に向かう。

プレシアさんのいる時の庭園へと。

それで、まあ、着いた訳ですが

「やつぱり、フェイトをあの鬼婆のところに行くなんて、安心できないよ！」

さつきからアルフがそう言って、フェイトをプレシアさんと会う事を反対する。

でも、フェイトは「大丈夫だよ、アルフ」とだけ言ってプレシアさんがいる部屋に向かっていく。

アルフは扉の前に残り、俺はフェイトについていく。

「フェイトは殴られるのが平気なの？」

俺はふとそう思ったから、そう言った。

だって、自分が慕っている人に自分が傷つけられたら、肉体的よりも精神的の方が辛いと思うし……。自分は貴方を大切にしているのにつてさ。

「うん。だって私は母さんの娘だから」

「……………」

俺は黙ってるけど、凄いね。

そこまで信用して、大切に思っ、自信ありげに言うその姿は、さ。

「ラクト？」

いけないいけない。少し考えに夢中になってたみたいだね。

「ごめんごめん、考えごとした。じゃ、行こっか」

そう言いながら、フェイトの頭を撫でる。

「／／／／／」

そう言えば、頭を撫でるのはこれで三人目かな？
うーん、多分それであってる筈……。

「／／／／／」

「顔赤いけど平気？」

「だ、大丈夫　／／／／／」

？　まあ、大丈夫って言うてるみたいだし、平気かな？　でも、どうしたんだろう？

って、彼女達の頭を撫でた時もこうなっていたような……。まあ、気にしていても意味がないか。

そう考え、俺とフェイトはプレシアさんのいるところに向かう。
部屋に入って奥に進むと、プレシアさんがいた。

「一週間ぶりです、プレシアさん」

フェイトよりも早く、俺はプレシアさんに挨拶をする。

「……貴方も来たの？」

「来ないで欲しかったんですか？　だとしたらショックです」

「いいえ、そんなことはないわ。好きにして頂戴」

フェイトとアルフは俺がプレシアさんと普通に会話をしていることに驚いているのか、目を大きく開いていた。そう言えば、結局、プレシアさんとの会話は言って無かったや。

「それで、今日はどんな用事で来たのかしら？」

分かってるくせに……。俺はそう思った。

「ジュエルシードの報告です、母さん」

「そう。それで、一体いくつ集まったのかしら？」

プレシアさんがそう聞くと、フェイトは顔を伏せた。

この一週間は一つも集められなかったからね……。

「すみません、母さん。……この一週間で一つもジュエルシードを集められませんでした」

顔を伏せながらフェイトはそう言った。

すると、プレシアさんがフェイトに近づいていく。フェイトは殴られると思ったのか、痛みを堪える為に目を閉じた。アルフもフェイトが殴られると思ったのだろう。扉を勢いよく開け、そのままこの場所に向かってきた。

そして、殴ろうと思えば殴れる程に近づいたプレシアさんはフェイトの頭を？

「え？」

「私の為にありがとう」

そのまま撫でた。

「え？」

「は？」

「……ふーん」

フェイトの頭を撫でられたことが予想外だったのか、フェイトとアルフは少し口をあけながらそう言った。……正直に言って、俺もこのことには予想外だったけど。

一週間前にフェイトのことを普通に殴っていたあのプレシアさんが、今はこうして娘の頭を撫でている。それはまるで、親子のようだ。

「残りのジュエルシードも頑張って集めなさい、いいわね？」

「はいっ！ 母さん！」

テストロッサ親子が会話をしている間にアルフと俺は念話で会話をしていた。

「ラクト、アレはどういうことだい？」

「ん？ さあ？ あのまま殴ろうとしてたら、止めてたけど……正直、予想外だよ」

一週間前にプレシアさんと会話していたことは黙っていた方が良さそうだ。

“あの鬼婆がフェイトを……”

“あー、アルフ。できればその鬼婆っていうの止めた方がいいよ”

“まあ、そうみたいだね。……フェイトがあんな嬉しそうに”

口ではそう言っているが、いまだに目の前の事実を完全に理解できていないらしい。

テストロッサ親子は話を終わると同時に俺とアルフの会話も終わった。

「行きなさい」

「はい、母さん」

フェイトはとても嬉しそうだ。

そんなことを思っていたら、プレシアさんが俺のことを指さす。

「貴方は此処に残りなさい」

「ラクトを？ どうして？ 母さん」

「少し、彼に用事があるのよ。さあ、行きなさい」

「はい、母さん」

フェイトとアルフはプレシアさんにそう言われ、この場所を後にした。

で、俺はプレシアさんに言われて残った訳だけど……。

「何の用ですか？ プレシアさん」

「貴方に少しお願いがあるのよ」

「お願い？」

何だろう？ 別段、プレシアさんをお願いされるような事は無いと思うし……。

あ、今すぐメアを連れて来いっていうのかな？ 前に、プレシアさんには失礼なことをしちゃったし。

俺は気軽にそう考えていた。

でも、プレシアさんのお願いというのは、俺が思っていた以上にフエイトにとって辛いものだった。

S i d e : なのは

私はメアさんと管理局っていう人達と一緒にジュエルシードを集めてから、一週間以上経ってるの。私は管理局の人達とジュエルシードを集めている代わりに、学校には行つて無いの。それに、お母さんやお父さん、お兄ちゃんにお姉ちゃんにも会つて無いの……。

そのことを寂しいとは思っていてもこれは私が出した答えだから、最後まで頑張る。

それに、私が五歳の時にも1人の時があつたから大丈夫なの！

……アレ？ 違和感を感じるの。1人だった？ アレ？

そんな事を考えていた時、アースラの中で警報がなった。

「っ!？」

私は考えごとを止め、すぐにメアさんと一緒にブリッジに向かったの。

そこには

「何とも呆れた無茶をする子だわ」

「無謀ですね、間違いなく自滅します。あれは、個人が出せる魔力の限界を超えている」

モニターに映っていたのは、フェイトちゃんとその使い魔のアルフさんが大きな竜巻を止めようとしている姿だったの。

「っ!？ ……私、急いで現場に？」

「その必要は無いよ」

その姿を見て、私は現地に向かおうとしたけどクロノ君が止めた。

「放っておけば、あの子達は自滅する。……仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところで叩けばいい」

「でも!」

でも、そんなことを私はできないよ。

その時、隣にいたメアさんが動く。

「悪いが、命令を無視させて貰う」

メアさんが一瞬でゲートのある場所まで移動する。

「行くぞ、なのは嬢」

「はい！」

私はそれに付いて行くけど、クロノ君が怒鳴る。

「何をやってるんだ！ 君たちは！」

「後で、謝罪はする。しかし、今回は独断で動かせて貰う。それに私達はあくまでも協力者だ。管理局の決まりに従う義理はない筈だ。……行くぞ」

「後でちゃんと謝りますが、今はフェイトちゃんのところに行きます！」

私はメアさんと一緒に現場に向かった。

S i d e : フェイト

この場所にラクトはいない。

ラクトは残って母さんと話した後、ラクトは「ごめん、フェイト。数日間、別行動になる。ジュエルシードは集めてもいいけど、無茶はしないだね」と言って、私達の前から消えた。

どうして？ って疑問に思ったけど、ラクトとは別行動になった。

それで、私とアルフは海上にジュエルシードがあると判断して強制

発動をしたけど、まさか六個あるとは思わなかった。

私とアルフは何とかジュエルシードを封印しようとするけど、六個のジュエルシードの前に苦戦していた。

「フェイトちゃん！」

その時、あの白い魔導士がこの場所に来た。

「フェイトちゃん！　今は、協力してジュエルシードを封印しよう！」

「……………」

この状況ではそうした方が良いと判断して、私はこの子と協力することになった。

Side：

アルフとユーノ、それにメアがバインドで竜巻の暴走を抑え、その内にフェイトとなのはが砲撃を海に向かって発射させる。

「サンダーレイジッ！！」

「デインバスターッ！！」

発射された砲撃はそのまま海に向かい、六個のジュエルシールドを封印することができた。

ジュエルシールドはなのはとフェイトの前に止まり、なのははフェイトに

「友達になりたいんだ」

と言う。そのことにフェイトは驚き、戸惑う。

その時、紫色の雷が海に向かって放たれた。
海に当たる雷。

「か、母さん？」

フェイトはそれを見てそう呟く。

そして、今度はフェイトのことを雷を襲う。しかし、その雷はフェイトに当たすることは無かった。

「大丈夫？ 怪我は無い？」

「ラクト？」

「そうだよ、ラクトだ。それで、怪我とかは無い？ フェイト」

ラクトが雷をラクトの魔力で相殺させたのだ。

そしてフェイトは何故、プレシアから攻撃されたか疑問に持つ。

一方、ラクトはこの雷が来た理由を知っているかのような表情をしていたが、フェイトはそれに気が付かなかった。

プレシアの行動、そして思い（後書き）

あとがきこーなー

まーた「前書きにも書きましたが、少し行間を変えてみました。とは言え、お試してみたいなモノなので、前の方が良いと言う方がいらしたら、感想などにどうぞ」

ラクト「そういう訳でよろしく願いします」

まーた「今回の本編はアレだね。何とも言えないね」

ラクト「今回は少しわかりづらい内容だからね。そんな状態で書くからだよ」

（作者は現在風邪です）

まーた「ゴホッ、ゴホッ……まあ、そうだね。でも、横になって、寝れないから小説を書く、頭が痛くなる、横になる……の繰り返しだよ」

メア「その言い方だと、頭痛がひどくなってるように感じるのだが……」

まーた「否定はできないね。でも、風邪も現在は37度代だし、問題無いさ」

ラクト「（それでも微熱じゃん）」

メア「（馬鹿だな）」

まーた「では、感想をくれたなっぺ様、A r i s h i a様、ありがとうございます！」

ラクト「アレ？ あんところにプールサイズの納涼みかんゼリーが？」

まーた「誰かが送って来たんじゃない？」

ラクト「まあ、そうかもね。って、メアはもういないし……」

まーた「w w w さて、もう無印が終わりそうだ」

ラクト「後何話ぐらいの予定なの？」

まーた「5、6話で終わる予定」

ラクト「そうなんだ。……では、少し長くなってきましたので、この辺で失礼します」

まーた「……ああー、ホットレモネードが美味い」

娘を思つゝ気持ち（前書き）

短い……

娘を思っ気持ち

S i d e : プレシア

「ラクトがちゃんと防いでくれたわね、良かったわ」

私がフェイトに向かって放った魔法をラクトが防いだ事を確認すると、私はフェイトの無事を安堵してそう言った。

「でも、フェイトにはもう少しだけ辛い思いをさせてしまっわね」

本当はこんなことはしたくはないわ。

だって、フェイトは私の大切な娘なのだから。でも、辛い思いをさせてしまう。

「…………無力ね」

気づくのが遅すぎたわ。昔から、本当に私は気づくのが遅すぎる。

…………いえ、気付いたという訳ではないわね。気付かされたというのが正しいわね、ラクトに。

「彼なら、フェイトを支えてくれるだろう」

だから、私はラクトにあのような事を頼んだのだ。フェイトの幸せを願って。

S i d e : ラ ク ト

プレシアさんの魔法を防ぎ、俺はすぐさまジュエルシードを回収する。
フェイトが何かを聞いたそうな顔をしているけど、それは後回しにする。

理由？ ……だつてさ

「封印したジュエルシードを渡して貰おうか」

偽善組織がこの場に来ちゃうからだよ。
ホント、もう少し空気を読んで行動してください管理局様……って
言いたい気分だよ。

てか、クロノ・ハラウン、君は前に俺に殺されかけたと言つのに、
また来たよ。

何？ 自殺志願者？ だつたら、協力するよ……とも言わず、この
場から消える事を最優先させる。

「後からしゃしゃり出てきた人に渡すジュエルシードなんてありません」

「君だってジュエルシールドを封印してないだろうっ!？」

「え？ あ、そうだった、そうだった」

プレシアさんの攻撃を防いだから、ついその気になっちゃった、テヘッ

……………気持ち悪。自分でやっておいてアレだけど。

「今度は手加減しない」

「……ふーん、そう。まあ、頑張ってね、クロノ・ハラオウン君」

多分だけど、この台詞を逆に俺が言われたら、とてつもなくウザく感じる事だろう。

俺だったら、その言った人を殴りに行くね。

「ふ、ふ、ふざけるなあー!」

この正義語ってる馬鹿みたいに。

ある意味、俺とは行動パターンが似てるのかな？ まあ、そういう所は評価しよう。

でもさ、殴りに来られたら

「よつと……それ、それ、はい、どーん、ははっ」

「ふっ」

最低、5倍にして返さないかね。

えっと、なんだっけ？ 目には鈍器、歯には銃器だっけ？ でも、これだと5倍どころじゃないかな？ ……まあ、そんな感じでやり返す。

さて、そろそろ止めようか……………最後に割と強めに殴ったら。

「がはっ！」

最後に割と強めに殴って、クロノ・ハラウンは海へと一直線でそのままダイブ……………するかなって思ったけど、割と彼打たれ強いんだ。何とか保ったよ。

……………やめよう。この空元気を。

さて、ジュエルシールドも手に入れた事だし、戻るとしますか。

「撤退するよ、フェイト。質問は後で」

「うん、分かった」

メアとなのはが俺達のことを見てくるけど、特に気にせずこの場所から俺達は消える。

それで、着いた場所はマンシヨンの部屋。

さっきまで、竜巻があつた場所にいたということで俺はとにかく、フェイトはしぶ濡れた。

「お風呂に入ってきたら？ そのままだと風邪になっちゃうよ」

「うん、そうするよ」

フェイトはそのまま風呂場に行った。

「アルフはどうする？」

「ラクトの料理を食べたいんだけど、その前に聞きたい事があるよ、いいかい？」

「まあ、そう言われると思ってたけど、具体的には何が聞きたいの？」

「全てさ」

全てって、結構大雑把だね。

それにこのことは、あまり教えたくないんだけど……。

「もう少し具体的にお願いします」

「ああ。まず、アイツは何故アンタを残して会話をしたか、ということ」

アイツって言うのは、プレシアさんのことと考えていいのかな？。

「次に、さっきの魔法はアイツのものだっただろう？ アンタは理由を知っているんじゃないのかい？ 聞きたいことはこんな感じだね……教えてもらえるかい？」

「……まあ、いいよ。ただし、フェイトには絶対に言わないということをお誓えたらね。命令されても、絶対に言わないって誓うなら良いよ」

「……誓うよ。命令されても絶対に」

まあ、良いかな？ それにもし、アルフが言いそうになったら、俺が邪魔すれば良いだけの話だしね。

「じゃあ、話すよ」

「分かったよ」

そうして、俺はアルフにプレシアさんと会話した時の内容を話していく。

「時の庭園に残ってプレシアさんと会話をした時に、ある1つのことをお願いされたんだ」

「貴方に少しお願いがあるのよ」

「お願いですか？ 別に構いませんけど、何ですか？」

プレシアさんをお願いされるようなことはないと思うけど……。

「その前に確か貴方、私の体が弱ってることを知っていた筈よね？」

「ええ、まあ……」

「……単刀直入で言わせて貰うわ。私はあと長くて一カ月の命よ」

まあ、そのぐらいの長さかな？

前に会った時よりも衰弱してるし、息が少し荒くなってる。

「……それで、お願いとは何ですか？」

口ではこう言つも、頭の中では『お願い』の内容が分かっている。

「フェイトのことを頼むわ」

「……………」

……どうしてだろうか？ 何故？ 俺なんか、フェイトを任せてしまふのだろうか？

もつと、生きようとは思わないのか？ 娘二人ともう一回普通の生活を送ろうとは思わないのだろうか？

「何で、俺なんですか？」

「フェイトが貴方のことを信用してるからよ」

「……自分が頑張ろうとは思わないのですか？」

フェイトが俺のことを信用してるから、俺に大切な娘を任せるって……

フェイトのことを考えてないじゃないか。さっき、あんなに親子みたいだったのに、親の方から離れるなんて。

「だから、もう1つ貴方をお願いがあるのよ」

もう1つ？ 一体何だろうか？

「先に言っておくわね。これは間違いなく、フェイトを傷つけることになるわ」

「……傷つける？ 誰がフェイトのことを？」

「私よ」

意味が分からない。

どうして、プレシアさんがフェイトのことを傷つけるんだ？

疑問に思っていた俺に説明をするプレシアさん。

その内容を簡単にまとめるところなる。

「つまり、現在、管理局に犯罪者として扱われているフェイトの罪を、プレシアさんがフェイトを利用したということでそれを軽減する。それで、フェイトがプレシアさんに利用されていたと錯覚させ、プレシアさんの死をできる限り傷つけないようにする。そして、そのフェイトを俺が支える、ということですか？」

「……その通りよ」

「貴方はこれでいいんですか？」

正直に言つて、こんなことをしたくない。

あの稀少能力レアスキルさえ、完璧に使えたら、こんな思いはしなくてもいいのに……。

「構わないわ。それに、短い間だけど、フェイトを娘として見れたわ。貴方のおかげよ、ラクト」

「そんなお礼を言われるようなことはしてません」

むしろ、俺がやったのは誰でもできることだ。礼を言われることなんて無い。

「それでもよ、ありがとう」

「……………」

「私は、ここから『悪』を演じてフェイトを傷つけるわ。……そして貴方がフェイトを守りなさい」

「……………」

その一言を最後に俺は無言でその場所から離れた。

「……まあ、そんな会話があつたんだよ」

「どうして、そんなことをしないといけないのさ！」

アルフに説明をしたら、アルフは怒った。

プレシアさんのことで、怒り以外の感情で怒鳴るのは恐らく、これが初めてだろう。

「落ち着いて。……大丈夫、この計画は俺が粉々にするから。フェイトもプレシアさんも、みんな幸せにさせるよ。その為に俺は数日間フェイト達と別行動してたんだから」

今言った通り、プレシアさんの話を聞いた時から、この計画を粉々にすることは決めていた。

「そんなことができるのかい？」

「うん、出来るよ。でも、出来る限り時間が経ってからの方が良い」

「どうしてさ？」

「まあ、俺にも色々理由があるんだよ」

主に、プレシアさんの病を治すのと、アリシア・テストロッサの蘇生にできる限り、俺が良い状態で行わないと駄目なんだ。

今はまだ、この稀少能力レアスキルを完全に使いこなせないから。

「さて、まずは、ジュエルシードを何とかしないとね」

俺はそう言ってから、これからどうするか考えた。

娘を思つゝ気持ち（後書き）

あとがきこーなー

まーた「すみません、今回の本編が短いです」

ラクト「理由は？」

まーた「次は決闘のところを予定してるけどその過程が書けないから、強引にする為に」

ラクト「もつと文才上げてよ」

まーた「すみません。……さて、本編の方ですが、前回、プレシアがフェイトを攻撃した訳を今回の理由が分かったと思います」

ラクト「原作のプレシアとはかけ離れたね」

まーた「そうだな。さて、感想をくれた、なっぺ様、天童翼様、Arisshia様、本当にありがとうございます！」

ラクト「そろそろ、無印クライマックスだから頑張らないと！」

まーた「まあ、適当にがんばれ。それと、ちょっとしたおまけです」

（ラクトの住んでるマンションの部屋でArisshia様のところ

の優君が寝ている。そして、部屋にはメアと優君しかいないというシチュエーションです)

メア「睡眠薬で優を眠らせたからな、当分は起きないだろう」

優「……ZZZ」

メア「……可愛いな。……プニプニのこの頬も」

優「……ん……めあ………」

メア「寝言で私のことを言ってくれるのか、嬉しいぞ。……不味いな。体が熱くなってきた」

優「……ZZZ」

メア「バレなければいいのだ。そうだ、……バレなければ」

(現在、メアが優君のズボンを下ろしていき、現在は下着のみとなりました)

メア「頂きまー」

ラクト「っと、忘れ物、忘れm………何やってんの？ メア」

メア「ラ、ラクトっ!？」

ラクト「いやまあ、うん、ごめん。邪魔したね」

(ラクトがこの部屋から消える)

メア「ラクトオオオオオX! 待てえええええええ!」

（メアがラクトを追いかける。そして、残された優君は起き、何故か下着姿になっているのを疑問に思うのだった）

「まあ、こんな感じですかね？ では、失礼します」

なのはとフェイトの決戦

Side：ラクト

現在、俺は海鳴にある公園にいる。

そしてこの公園にいるのは今回の件の当事者達だ。

つまり、俺となのはとフェイトとメアとフェレットとアルフだ。

何故、俺達が此处にいるかというと、

昨日、アルフにプレシアさんのことを言ってから、俺は少しマンシヨンから離れた。

理由はそうだね、少し1人で考えことをしたかったのかな？

それでマンシヨンに戻ったら、何故かフェイトとなのはが決闘することになったらしい。

お互いの持つてるジュエルシードを全てかけて。

簡単に説明するとそうことらしい。

フェイトはプレシアさんに命令されて、フェイトから決闘を申しこんだみたいだけど……。

「ここならいいね？ 出てきて……フェイトちゃん！」

そしてこの場所に姿を現すフェイト。

「始めよう！ 最初で最後の本気の勝負を！」

二人の戦いが始まった。

S i d e :

フェイトとなのはが互いに衝突する。

若干、フェイトの方が吹き飛ばされるが、身体を回転させ体勢を整える。

《 P h o t o n L a n c e r 》

バルデッシュの形が鎌から通常状態に変わり、フェイトの周りに金色の魔法弾が浮かび上がった。

一方、それを見たなのは目を閉じ集中する。

《 D i v i n e S h o o t e r 》

レイジングハートになのはの魔力が集まり、数発の魔法弾を出す。

フェイトとなのははデバイスを構えたまま動かなかったが、先に動いたのはフェイトだった。

「ファイア！」

それに続き、なのはも動く。

「シューット！」

互いに魔法弾を撃つ。

なのはそれをフェイトに近付きながら避ける。

フェイトは一旦その場から離れ、魔法弾同士がある程度近くなった時にそれを相殺させた。

しかし、フェイトがなのはのいた場所を見ると、なのはがいない。

「っ！？」

「シューット！」

フェイトが再びなのはを見つけた時には、なのははもう魔法弾を放っていた。

《Scythe From》

しかし、フェイトはできる限り冷静に、再び鎌状態にしたバルディッシュでなのはの魔法弾を斬っていく。最後の一発を避け、そのままなのはに近づく。

「っ！？」

この出来事に今度はなのはが動揺する。

《Round Shield》

なのはがバリアを張り、フェイトと衝突する。
押され始めるが、なのははフェイトが避けた魔法弾で再びフェイト狙う。それを、フェイトは打ち消すが、その隙になのははフェイトの上にまで移動していた。

《Flash Move》

なのはは加速して、フェイトに近付いていく。

「てええええええい!!」

そして、それを正面からフェイトは受け止め、辺り一帯が光りに包まれた。

Side：ラクト

“……今のところは互角っていうところかな？”

俺は、なのはとフェイトの戦いを見てそう思っていた。

正直、なのはの成長には驚いている。

一前に魔法に関わっている（・・・・・・・・・・）とは言え、
なのはの成長は非常に早いから。

ホント、なのはが魔法に関わっているところを見ると、どうしても
昔のことを思い出しちゃうな。でも、なのははそのことを覚えてい
ないし、思い出す事も無いだろう。

あの忌々しい記憶。なのはにとっては意味が分からなかった記憶だ
とは思うけど、俺にとっては忌々しい記憶として覚えている。

俺が初めて
……。

そう考えていた時、場が動いた。

フェイトがバインドでなのはの動きを封じたのだ。

S i d e :

フェイトがなのはをバインドで動きを止めたのを見て、ユーノはな
のはをサポートしに行こうとするが、それはメアに止められる。

「駄目だぞ、これはあの二人の一騎打ちなんだ。それを邪魔するの
は良くない」

「でも！ それじゃ、なのはが！」

「安心はできないだろうが、見届ける。この戦いを」

「……はい」

引き下がるユーノ。それを見たメアも引き下がる。

そして、フェイトが詠唱を唱えていく。

「アルカス・クルタス・エイギアス……疾風なりし天神よ、今導きのもと撃ちかけ」

フェイトの周りだけでは無く、なのはの周りにも魔法陣が浮かび上がる。

そして、その1つ1つに魔法弾が現れる。

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル……フォトンランサー、ファラシクスシフト。

撃ち砕け！ ファイア！」

その瞬間、浮かび上がった魔法弾の全てがなのはのことを襲う。なのはは数発自分の魔力で魔法弾を消すが、数が多すぎた。

ほぼ全発がなのはに直撃した。

「なのは！」

それを見て、ユーノはなのはのことを心配し大きな声で名前を呼ぶ。しかし

「撃ち終わると、バインドっていうのも解けちゃうみたいだね」

そこには、フェイトの攻撃を受けたにも関わらず、殆ど無傷の状態のなのはがいた。

フェイトはこの事に驚く。

「今度はこっちの 番だよ!」

《Divine Buster》

なのはがデイベインバスターをフェイトに向かって放つ。

フェイトは先程の攻撃で殆どの魔力を使ってしまった為、簡単なバリアしか張る事が出来なかった。

そして、何とか防ぎきったフェイトだったが、今度はフェイトがバインドで動きを封じられる。

「っ!?!」

「受けてみて、デイベインバスターのバリエーション!」

《Starlight Breaker》

「これが私の全力全開!」

レイジングハートの周りに大気中となのは自身の魔力が集まってい
き、

それをフェイトに向かって発射させる。

「スターライトオオ、ブレイカアアアアア!」

そして、この攻撃でなのは勝ちが決まった。
フェイトは攻撃を受けそのまま海に落ちて行く。
しかし、

「よく頑張ったね、フェイト」

ラクトが彼女を受け止めた。

S i d e : ラクト

“うわー、凄くエグイ攻撃。バインドで縛って、魔力の塊を相手にぶつけるって……。どう思う？　ラルド”

“知るか！　そんなことで俺を呼ぶな！　というより、その呼び方は何だ？”

“え？　いやー、ラルドデイスって何か長いじゃん。それで、短縮した”

“お前は本当に名前を短縮するのが好きだな”

ん？　その言い方だと何度も名前を短縮してるように聞こえるんだけど……。

てか、デバイスなのに念話って出来るんだ……。

“アイツ等のことも短縮してるだろうが”

“アイツ等？ …… ああー、彼女とメアのことね！ そう言えばそうだったよ”

最近、ずっとメアって呼んでたから忘れてた。

“そもそもお前の方がエグイ魔法を使ってるじゃねーか”
“そうだったけ？”

そんな技はあまり無いと思うけど……。

それと、何か飽きられてるように感じるのは気のせいかな？
デバイスの癖に感情を持ちすぎじゃない？ いくら俺が作ったと言っても。 …… まあ、気にしない方が良いかな？。

“……自分で考える。それと、俺と話をするなら戦闘か、テーマ自身のことだけだからな。それを忘れるな。 …… じゃあな”

それを最後にラルドデイスとの会話？ を終えた。

何だかんだ言っても、ラルドって俺思いの良いデバイスなんだよね。 …… さて、決着もついたことだし、この件を一気に終わらせるとしますか。

俺はのん気にそう考えていた。

でも、

「っ！？」

俺はフェイトを思いっきり突き飛ばした。
何故なら、紫色の雷がフェイトに向かって放たれているからだ。

「え？」

「間に合えっ！」

いつもならこの魔法自体を掻き消すんだけど、残念ながら今の俺にはそれができない。

だから俺は、フェイトのことを力一杯押し、プレシアさんが放ったであろう雷を俺が直接受ける。

「っ！」

「ラクトッ！？」

その雷をラクトがモロに受け、少しだけ痛みを感じる。

良かった、フェイトは無事か……。それにしても、プレシアさんはどうしてフェイトに魔法を？

疑問に思うラクトだったが……。

……………プレシアさん、本当に貴方は『悪』になるつもりですか？
自分の娘を傷つけようとして、自ら嫌われようとしているんですか？
それとも、最初から俺がフェイトを守るって思ってたのかな？

……………でも、何でこんな時に？ ……まさか、もう自分から死ぬつもりじゃないよね？

そう考え、ジュエルシードがあった場所をみるが、そこにはジュエルシードが1つも無かった。

「……………」

あー、プレシアさん、アンタ動くの早過ぎだよ、まったく。
どんだけ死にたいんですか？

「ラクトツ！？ 大丈夫！？」

その時、フェイトが俺に声をかけ、心配をしてくれた。

「平気平気。それよりもフェイトの方がこれから辛くなるだろうから、頑張つてね」

「え？ それってどういう意味？」

「すぐに分かるよ。さて、ジュエルシードはプレシアさんが奪って
いっちゃったからねー」

「母さんが？」

「うん、だって今はプレシアさんの魔力光だったし……………フェイト」

そう言つて、フェイトをこちらに振り向かせる。
そして俺はフェイトを

「ごめんね」

気絶させた。…………さて、これではプレシアさんの考えを木端微塵
に破壊でもしよう。

俺はそんなことを考え、これからどうするか決めるのであった。

なのはとフェイトの決戦（後書き）

あとがきこーなー

まーた「いまいちパツとしない出来になってしまった……」

ラクト「それはいつもって言うことに気付いてないことが駄目だね」

まーた「最近の君って、私に少し冷たくない？」

ラクト「気のせい気のせい。さて、本編の方だけど今回は決闘だったね、次回の予定は？」

まーた「アースラの出来事。つまり、フェイトが真実を知るところ」

ラクト「へえー。でもさ、更新遅れるんでしょう？」

まーた「う！ まあその通りです」

ラクト「理由は活動報告に書いてありますので、見てください」

まーた「さて、感想をくれた、A r i s h i a様、なっぺ様、ありがとうございます」

ラクト「なお、A r i s h i a様からはメア宛てに俺をお仕置きする為の券を、そして、なっぺ様のところの吼太君からは簡易版ド・マリニーの時計を送っていただきました、ありがとうございます」

まーた「二つともメア宛てだね」

ラクト「券の方は処理したけど、もう1つの方はまだなんだよな」

メア「（ポチつとな）」

ラクトの時間が止まる。

メア「さて、どう復讐していくか。ラクト本体が動かないのなら、私が氷漬けにさせればいいだけの話だ」

ノエス「……誠に申し上げにくいのですが、メア様、それは恐らくできないかと」

メア「何故だ？」

ノエス「いえ、もうラクト様が動いていますので」

メア「は？」

メアが見てみると、物凄くいい（黒）笑顔のラクトがこっちを向いていた。

メア「な、何故だ!？」

ラクトが指をさす。そこにはラクトの格好をした作者がいた。

ラクト「ホントはね、送られてきたものの効果とか知ってるからさ」

メア「な、なら!」

貴女を殴りに行きます（前書き）

PVが5万行きました。

読んでくれありがとうございます。

これからも、応援宜しくお願いします！

貴女を殴りに行きます

S i d e : ラ ク ト

なのはとフェイトの決戦が終わって俺達はアースラに向かい、現在はアースラの内部にいる。……俺が黙ってアースラに乗った理由はちゃんとある。

その理由とは、先程の攻撃で時の庭園の座標位置が管理局に知られてしまったと思う。そして管理局はプレシアさんを拘束しようとする筈、その様子をアースラにいた方が状況が分かりやすい、というのが理由である。

とは言え、ちゃんとリンディ・ハラオウン、クロノ・ハラオウンへの警戒、敵対心は出している。

「リンディさん、俺は言いましたよね？ テスタロッサと付く名の人を逮捕した場合のことを……」

「ええ、だからこれは逮捕では無いわ。一時的な拘束よ」

「……屁理屈がとてもお上手ですね」

「褒め言葉として受け取っておくわ」

……まあ、ここで事を起こす必要は無いから、ここは引き下がってしようか。

それに、こんなところで無駄な魔力は使いたくないし……。

「第一部隊、転送完了。……侵入開始！」

その時、このアースラにいる人間が指示をして、転送された人達が時の庭園に侵入する。

ざっと、20人ぐらいかな？

「お疲れ様。それから、フェイトさん？ 初めまして」

モニターの方ばかり見てたら、リンディ・ハラウンがフェイトにそう言っていた。

しかし、それだけを言うと、モニターの方を振り向きそのまま画面を見る。

「フェイトちゃん、良かったら私の部屋に……」

「……………」

どうやら、なのはを使ってこの場面を見せないようにしようとしてるらしいが、

フェイトは動かず、モニターを見続ける。

プレシア・テストロッサ！ 時空管理法違反及び、管理局艦船への攻撃で貴女を拘束します！

武装を解除してこちらに

……見ていてイラっとする。

何が、時空管理法違反だ。勝手に決めた法で拘束、逮捕できると思ってるのがウザいね。

というより、その程度の言い方で武装を解除するわけがないじゃん。馬鹿でしょ？

そのまま偽善組織の人間を見続けるプレシアさんだったけど

こ、これは!?

プロジェクトF・A・T・Eの証拠がある部屋に1人の局の人間が入った。

つまり、アリシア・テストロッサのいる部屋へと。

「あれって!？」

「え？」

もちろんそれは、モニターを見ている俺達にも見え、なのはとフェイトが驚く。

目の前の事実が受け入れられないのだろう。

……さて、フェイト。ここからは少し辛いだろうけど、頑張っ

私のアリシアに近寄らないで!

プレシアさんの攻撃に局の人間全てが倒れ、そのまま動かなくな

た。……正直に言っ

て、少し気分が高まった。そして、局の人間は回収された。

「アリ、シア？」
フェイトは自分の姿をしている人がいるということに動揺していたが、その人物の名前を知る。

この子を亡くしてから暗鬱も……。この子の身代りの人形を娘

扱いするもの……

「え？」

フェイトは言われた事を少し理解したのかそう言う。

聞いていて？ 貴女のことよ、フェイト。……せっかくアリシアの記憶をあげたのにそっくりなのは見た目だけ、役立たずでちっとも使えない……私のお人形

プレシアさんがそこまで言った時、確か……エイミイって言う人だったかな、その人がプロジェクトF・A・T・Eについて話す。

アリシアを事故で亡くしたと、フェイトが人工生命であるということ、フェイトという名前の由来のことを。

ちっとも上手いかなかった。所詮、作りモノの命は失ったモノには代えられないということね。……アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。時々、我儘も言ったけど、私の言う事をよく聞いてくれたわ

うわー、凄く上手い演技。

とは、もちろん言える筈も無く、黙って俺達はプレシアさんの言葉を聞く。

「やめて、やめてよ！」

なのははプレシアさんに言葉を止めて欲しいと思い、そう言うがプレシアさんは言葉を続けていく。

アリシアはもっと優しくかった。……フェイト、やっぱり貴女はア

リシアの二セモノよ。せつかく上げたアリシアの記憶も、貴女じゃ駄目だった。……アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使うだけの……お人形

……？ 何だろう？ 少し違和感があったように感じたけど。

どこへなりと、消えなさい！

まただ。違和感を感じる。

何か、プレシアさんが辛そうな表情をしてるけど………成程ね。

良い事を教えてあげるわ、フェイト。……私は貴女を作りだしてから……ずっと………ずっと、貴女のこと………

そこで、プレシアさんの言葉が完全に止まる。そのことを不審に思ったのか、アースラにいた人達は疑問に思う。

プレシアさん。貴女にはやっぱり

……駄目ね。やっぱり私はこれ以上フェイトを傷つけられないわ

完全な『悪』にはなれないようですね……。

「えっ!？」

今までごめんなさいね、フェイト。貴女はアリシアと同じ……私の娘よ。私のことは忘れて、幸せに暮らしてね……私の愛しいフェイト、さよなら

でもさ、そう言って死んじゃったら意味が無いよ、プレシアさん。

……ラクト、フェイトのことを頼むわね

そう言つて、プレシアさんが映っていたモニターは消えた。

「艦長！ ジュエルシードの全てが発動して魔力がどんどん跳ね上がっていきます！」

「何ですって！？」

……………イラッ！

「……嫌に決まってるじゃないですか」

何で俺がプレシアさんの代わりにフェイトを見守らないといけないんですか？

何ですか？ 嫌がらせですか？

ぶっちゃけ、俺はプレシアさんに物凄くムカついてる。それはもう、物凄くムカついてる。

大事なことなので2回言いました。

「プレシアさん、今から貴女を割と本気で殴りに行くので待っていてください。ちなみに、拒否権はありませんから」

「ラ、ラクト？」

フェイトが何かを言ってるみたいだけど、そんなのは気にしない。どうやって殴ろう？ フック？ アッパー？ ……それともストリート？ どれにしよう？

「フェイト、今からプレシアさんを殴りに行こうか」

「えっと、どうして？」

「不思議な事を聞くねえ。もちろん、ム力ついてるからに決まっているからだよ」

「そんな理由で？」

「そんな理由？ 十分すぎる程の理由じゃないか」

というのは冗談で、実際はフェイトの心を落ち着かせる為にそう言ってるんだけど、

何でだろう？ メアからの視線が痛い。

「まったく、貴様は馬鹿か？」

「酷いなあ。ちゃんと、考えて行動してるって。じゃ、殴りな……プレシアさんを止めに行こうか」

「了解だ」

君の妹のメアが反抗期に入ってしまった。どうすればいいのでしょうか？

え？ どうしてそう思ってるのかって、メアが俺の首元に剣を向けてるからだよ。

……「冗談のつもりだったのに。……半分。

「では、局のみなさん。俺達？ は時の庭園に向かっていますので、合流するなり好きにしてください。……行くよ、フェイト」

「うん！」

はっはー、フェイトは平気みたいだね。良かった。

「勝手な行動h」

「黙って吹っ飛べ」

何か途中で、転移門のところに近づいてきた黒い奴がいたけど、思いつき殴った。

……局の人達の方で慌ててるみたいだけど、正直、局には興味も無かったので無視して俺達は転移した。

それで、時の庭園に着いたんだけど

「何ともまあ、結構数があるね」

「……そうだな」

入口のところには大量の数の傀儡兵がいた。
正直、時間をかけていられないんだけど……。俺がやるか。

「メアとフェイト、それに高町さん、ここは俺に任せて貰っていいかな？」

「私は別に貴様の言うことを聞くまでだが……」

「任せるよ、ラクト」

「フェイトと同じく、アンタに任せるよ」

「ふえ？」

「？」

賛成3人に意味がわかって無い人が2人ね……。
賛成意見が多いと言う事で実行しますか。

「ラルドデイス、セットアップ」

《状況は分かってるぜ。早くやっちまえ》

「そう？　なら、やりますか」

俺はラルドデイスに俺の魔力をいつもの数倍込める。すると、ラルドデイスの大きさでは魔力が入りきらないのか、形の大きさから大きくはみ出る。

「月牙天衝」

それで、その状態のラルドデイスを横に一閃。

「……………魔力、込めすぎたかな？」

《雑魚ばっかだが、たまにはこういうのも悪くねえな》

すると、そこには傀儡兵など完全に木端微塵になり、さらには門までもが吹き飛んでいた。

「やはり、貴様は馬鹿だな」

「う、否定できない。……さて、先を急ごう」

憐れみ目線が1人に目の前の出来事が信じられない目線が3人ね。少し、力を入れ過ぎたけど目的が達成できたからいいか。

そして、俺達は門を通り過ぎ奥に入る。でも、そこにも傀儡兵がいて道は二つに分かれていた。

「じゃあ、高町さんにユーノ君だっけ？　それにメアはそっちの方に向かってくれる？」

俺達はプレシアさんに会いに行くから」

「了解だ」

「分かったの！」

「……その前に、………月牙天衝」

再び、傀儡兵が木端微塵になる。

これでよしと。……若干、視線が痛いですけどね。
そうして、俺達は別々の道を進むことになった。

S i d e : メアリスティング

なのは嬢とユーノ少年と一緒にラクトに指示された道の奥へと進む。

正直、今回の件はラクト1人で何とかなると思っただが。
と、思ってしまったている。しかし、先程の技を見せつけられたら誰
でもそうなることだろう。

「頑張ろう!」

「そうだね、なのは!」

……訂正だ。どうやら、この二人はそんな事を思っていないらしい。
私達は傀儡兵を倒していたが、突然壁が崩れ、今まで傀儡兵より遙
かに大きい傀儡兵が現れた。

「ふむ、バリアが硬そうだな」

「メアさん！」

「分かっている。私が足止めをするからなのは嬢はその隙に」

「分かりました！」

良い返事だ。

さて、このぐらいのバリアとなると……少し本気を出そう。

「カートリッジ、ロード」

私は二つのカートリッジをロードさせ、魔力の出力を上げる。

まだまだ、姉様の力には程遠いが、それでも

「貴様を相手にするには十分だ。……ダイヤモンド・ダスト」

《Diamond dust》

そう言うと、白くて小さな雪の様な物が傀儡兵に付く。すると、その氷が触れた場所が氷になり、その小さな氷が傀儡兵の上から大量に現れる。そして、そのまま小さな氷が傀儡兵全体に触れ、傀儡兵が氷漬けになった。

「今だ、なのは嬢」

「はい！ レイジングハート！」

《Stand by Ready》

なのは嬢は攻撃の体勢を取り

「デイバイイン、バスタアアアー！」

そのまま傀儡兵に向かって魔力を放った。すると、氷漬けにされたということもあり、簡単に傀儡兵は砕け散った。

……ふむ、中々攻撃力の高い攻撃だな。

まだ、魔法に関わった間もないというのにな。

「さて、なのは嬢、ユーノ少年。私達はこのまま駆動炉の封印へ向かうぞ」

「はい！」

「分かりました！」

この傀儡兵を完全に機能停止したことを確認し、私達はそのまま奥へと向かった。

貴女を殴りに行きます（後書き）

あとがきこーなー

まーた「今回はかなり飛ばしたかな？」

ラクト「てか、最後に何で少しだけメアの方を書いたの？」

まーた「ぶっちゃけ、メア達の出番って時の庭園では無かった筈なんだけど、それじゃ何か可哀そうということで、少しだけだけ出した」

ラクト「成程ね。それより、アースラでの俺って何か可笑しくない？」

まーた「うん、正直、誰だこいつwww って思いながら書いてたから」

ラクト「……そう。では、感想をくれた、なっぺ様、Arishia様、寒ブリズム様、感想ありがとうございます！」

まーた「さて、今回はブリーチの技を何となく使ってみました。違ふところは、斬撃そのものを飛ばすというところを、魔力になって、魔力を込めた分だけ大きくなるという設定で使いました」

ラクト「まあ、魔力を込める時の加減が以上に難しいけど」

まーた「それと、本編でフェイトが立ち直るという感動的なシーンを省いてしまった……」

ラクト「何やってるの？」

まーた「すみません……でも、一応考えてるんだけどね」

ラクト「そうなんだ。それは以外だね」

まーた「まあ、ね。……ところで、メアが見当たらないけど」

周りを見渡す。すると、体育座りで小さくなっているメアがいた。

ラクト「はっはっはー、俺に邪な考えを持つからいけないんだよ」

メア「貴様にはもうそんな考えを持たない。だから、許してくれ……」

ラクト「嫌だ」

そう言つて、ラクトがこの場から消える。

メア「……鬱だ。死のう」

？「つて、メア！ 駄目だよ！」

（Arishia様のところの優君が今度はドラクエ？の女賢者の服を着ながら来ました）

メア「？ 何故だろうか？ エロい格好をした優が見えるぞ。そうかそうか、私はもう死ぬのだな」

優「俺が話を聞くから！ そんな考えを持たないで！」

メア「いや、もう私は死んでいるのか。そうか、なら幻覚であつても、意識のあるうちに優を食べるとしよう」

優「え？」

メア「頂きます」

（メアが優を食べようとするが）

まーた「まさかもう、なっぺ様から受け取ったこれを使うとはな」

「ゴオオオルディオンツ、ハアアアアリセンツツ！！！！！」

（メアと優二人とも気絶）

まーた「とりあえず、優君を食べる事はラクトと私がいる限りないだろう？」

ラクト「何故疑問形？」

まーた「細かい事は気にするな！ では、失礼します！」

世界で一番憎いもの（前書き）

ん、サブタイが何か適當かな？

世界で一番憎いもの

Side：ラクト

プレシアさんを殴りに……じゃなかった。

プレシアさんに会いに行く為に、プレシアさんを止める為に俺達は奥に進んでるけど、傀儡兵が邪魔をする。

「サンダーレイジッ!!」

《Thunder Rage》

フェイトと俺が傀儡兵を倒していくけど数が多くて、奥に進むのに時間がかかる。

これじゃ、プレシアさんに会いに行く前にジュエルシードの暴走でプレシアさんが

……。俺が次元震を抑えるか？ でも、それじゃ万が一って言う時に動けないし。

でも、どうする？

俺がそう思っていた時、何故か次元震の揺れが抑まった。

「……揺れが止まった？」

「……一応、礼儀として感謝しておくよ」

君達、管理局にはね。

恐らく、次元震を抑えたのはリンディさんだろう。……ありがとう
ございます、助かりました。……それにしても、管理局の者に礼を

言うことがあるなんてね、驚きだよ。まあ、局の立場からすると、しなければならなかったとは言え、これは助かる。

さて、これで心配する必要も無くなったし、とつとつプレシアさんに会いに行きますか。

「プレシアさんを止めに行こうか、フェイト」

「うん！ 母さんを助ける！」

そして俺達は再びプレシアさんのいる所へと走る。

正直、フェイトを置いて先に行くということもできる。でもそれじゃ、フェイトの思いはプレシアさんに届かない。

だからこそ、俺は最後までフェイトと一緒にプレシアさんに会いに行くんだ。

……俺の目の前で、誰かが悲しむ姿なんて見たくないから。それを笑顔にするために俺は力を使うんだ。……それが、俺が今できるところだから。

「プレシアさんのいる所まで後少しだ！ 気を引き締めていこう！」

もう、プレシアさんの魔力を感じられる距離まで近づいてる。

多分、プレシアさんがいるだろう場所に邪魔する最後の傀儡兵を倒して、俺達は最下層へ降りていく。

そして、目的の人物がそこにはいた。

その表情は、どうして？ と言っているみたいだ。

「プレシアさん。行動するの早すぎますよ。少し、困っちゃったじ

やないですか」

もちろん、プレシアさんのことだ。

「何故、此処に来たの？」

「プレシアさん、貴女を連れ戻しに来たんですよ」

じゃないと、こんなところに来ないですよ。

内心、そう付け足してプレシアさんのことを見る。

「フェイトのことを頼むわって言わなかったかしら？」

「すみません。俺って、頭悪いんでそんなこと覚えていないんですよ」

「……貴方ね」

呆れてるような視線があるけど、そんなもんは気にしない。

「母さん！……帰ろう」

「……フェイト、貴方もなの？」

「はい」

そう言つて、フェイトはプレシアさんに向かって手を指し伸ばす。

「ほら、フェイトもこう言ってる訳ですし、戻りましょうプレシアさん」

「でも私はフェイトに酷いことをしたのよ？」

プレシアさんは一回言葉を止め、息を整える。

「……そんな私が、私がフェイトと一緒にいられる訳がないでしょ

う！」

そして、プレシアさんの叫び声がこの場所に響く。

……そんなことを思ってるのは、プレシアさんだけです。

フェイトは、貴女が思っている以上にプレシアさん、貴女のことを大切に思ってるんです。そんなフェイトがプレシアさんのことを嫌ってる訳がないでしょう。

「自分勝手に決めないでください。……過去のことを後悔するのは人の勝手です。でも、後悔した後に何もしない、逃げるだけじゃ意味がないんです。フェイトのことを傷つけたからって」

俺がこのことを言うのは彼女以来だね。

「傷つけたからって 逃げんな！ 受け止める！ アンタが何もしないんじゃないんだ！ 後悔するなら今度はそれを乗り越えられるように努力しろ！」

「……貴方に、貴方に何が分かるって言うのよ！」
「分かるさ！ 大切なモンを傷つけた時の罪悪感をよ！ でもな、だからって死に急ぐな！ フェイトを悲しませるな！ 母親が娘を悲しませるなよ！」

アンタが死ぬんじゃない、何も意味がねえだろ！
フェイトは誰の為に頑張っていたと思ってる。アンタだよ！ プレシア・テストロッサ！

「そのアンタがフェイトを受け止められないで」

「ラクト、後は私が言うよ」

「……」

その時、フェイトが俺の言葉を遮った。

「……………そう？　なら、よろしくね」

「うん」

まあ、プレシアさんを説得するのは俺の役目じゃ無くて、フェイトの役目だしね。

こっちの方がどちらかと言うと、良い方向へ向かうと思うし。任せるとしようか。

「あなたに言いたいことがあります」

時の庭園の崩落が激しくなる。

でも、この場にいる俺、フェイト、プレシアさん、アルフは慌てずに、フェイトの言葉を聞く。

「私はアリシア・テストロッサじゃありません。……………あなたの言う通り、私はあなたの作ったただの人形なのかもしれません。でも、私は、フェイト・テストロッサは……………あなたに生み出してもらって、育ててもらったあなたの娘です！」

フェイトはプレシアさんを母親と見るような視線になる。

「……………あなたが望むなら、世界中の誰からも、どんな出来事からも……………あなたを守る。あなたが私の母さんだから！……………私が世界で一番大切な人だから」

「……………フェイト」

プレシアさんが思わず言葉を出す。

「だから私は、どんなに傷つけられたって、母さんを…… 母さんを嫌わないよ、絶対に！」

そして、プレシアさんからは一粒の涙が流れる。

……フェイトの気持ちはプレシアさんに届いたかな？
これで、自分が死ぬなんてことは言っただけで欲しくないけど……。

「……フェイト、貴方は私を許してくれるの？」
「もちろんだよ！ 母さん！」

良かった。どうやら、その心配は杞憂に終わりそうだな。
これで、後はアースラに戻るだけ。

そう思っていたその時、プレシアさんの足場が崩れ、プレシアさんとアリシア・テストロッサの入ったポッドが虚数空間へと落ちていった。

「え？ 母さん？ ……いやあああああ！」

フェイトの悲鳴が響く。

「ラルドデイス」
《了解です。我が主》

俺はプレシアさんが落ちていくのを追いかけるように、俺も落ちる。
そして、飛行魔法が虚数空間によって無効化されるまで後少しと言

う所で、俺はプレシアさんとポッドを掴みそれをフェイトとアルフのいる場所へ投げる。

「キャッチしてね、フェイト」

「ラクトツ!？」

何とか、プレシアさんとポッドは虚数空間に落ちずに済んだけど、飛行魔法が無効化されて、そのまま重力によって落ちていく。

「ラクトツ!？」

俺のことを心配するフェイト。

「大丈夫、大丈夫。すぐに戻ると思うから、アースラに向かってよ」

「でも!」

「あー、五月蠅い! とつとと行く!」

俺のことは見てくるフェイト達をアースラに向かうように言っけど聞いてくれない。

どうしよう? もう、時の庭園が崩壊しているというのに。

「メア! 今すぐ、俺を除く全員を時の庭園から脱出しろ、これは命令だ」

「貴様はどうするんだ!？」

「メアも俺のことを心配しない! …… 大丈夫、すぐに戻るよ。大体、5分くらいで」

「…… 了解した」

メアがそう言うてから、こちらを見ていたフェイト達の姿が消えた。多分だけど、メアが強制転移でも使ったんだろうなあ。…… って、

どうしよう？

「今の俺って、間違いなく虚数空間内にいるんだよね？」

《まったく、テメーの不注意が原因だ！ 馬鹿野郎が》

「ごめんなさい。……あーあ、PRESIAさん達を救うために使う筈だったけど、まあ、一回ぐらい多くていいよね？ ラルドデイス」

《テメーが決める。でも、いいのか？ それを使っちゃったらテメーは……》

「平気平気。まだ“余裕が”あるから」

《ならいいけどよ》

「それより、心配してくれるっていうのは意外かな？」

《余計なお世話だ！》

さて、とつと俺も脱出しますか。

そう考え、手で自分のことを触り

「……発動」

自分のことが世界で最も憎い理由となる稀少^{レアスキル}能力を発動した。

Side：

ここはアースラ内部。

内部にはメアが強制転移させた人達が現れる。

「悪いな、ラクトの命令だったから、意思を無視させて貰った」

メアはフェイトとアルフ、プレシアさんに謝罪を言うような口調でそう言った。

「どうして！ ラクトを助けなかったの！」

「だから、ラクトが命令をしたと言っただろう。それに安心しろ、奴はすぐにこの場所に戻ってくる」

「そんなの」

フェイトの言葉の途中でメア達の前に魔法陣が現れる。

「え？」

「ほらな。奴のことに關しては心配すること自体が不必要だ」

「酷いなあ。メアは」

そして、その魔法陣からは虚数空間から脱出したラクトが現れた。

S i d e : ラクト

「酷いなあ。メアは」

まさか、メアにまったく心配されていないなんて思わなかったよ。
泣いちゃうよ。

……さて、冗談は置いておいてメアを除く全員に驚かれてるね。まあ、虚数空間から脱出できたっていうのが余程ありえないことだと思うし、それも仕方の無いことだね。

「ラクトっ！」

「ん？ 何かな？ フェイト」

「本当にラクトなの？」

……………。

「うん、そうか。フェイトも俺が死んだとかそういう風に思ったんだね、分かったよ。フェイトは俺の言葉を信じてくれなかったんだね。大丈夫って言ったのにそうなんだね、フェイトは俺を信じてくれなかったんだね。どうしよう？ もう俺って必要の無い奴なのかな？ だったら、今ここで生きてる価値も無い奴になっちゃったね。鬱だ、死のう。と言う訳で少し外に出てくるけど、探しに来ないでね。……さよなら」

「え？ え？ ラクト？」

「俺みたいな生きてる価値の無い下種に話しかけない方がよいよ。フェイト・テストロッサ様。えっと、わたくしのような下種がこの場にいるだけで罪になりますので、わたくしはここで退場させていただきます。……来世は価値のある人間になることを祈り」

「いつまで、貴様のくだらん話に付き合わなければいけないのだ？ そんなに死にたいのなら私が殺してやるが？」

良かったー。俺もいつまで自虐をしていればいいのか分からなかつ

たよ。本当に消えようかなくて思いかけたし……。

アレ？ 何かみんなが俺を見る視線が驚きから、憐れみになってるような気がするけど……気のせいだ。気のせいだよね？ 気のせいであってくれ！

閑話休題。

現在はプレシアさんの体調が極めて悪いということで、医療室にいる。

そして、医療室にはポッドから出したアリシア・テストロッサもいる。

「では、俺以外の者は今すぐこの部屋から出てください」

「それはできない！ 彼女は犯罪者だ。逃亡するかもしれないからな、君と一緒に」

あ、言い忘れてたけど、黒い馬鹿もこの部屋にいた。

何も、時の庭園にいてメアに強制転移させられたらしい。リンディさんとは大違いの働きぶりだ（皮肉）。

「はいはい、メアよろしく」

「仕方がないな」

そう言つて、メアはクロノをこの部屋から強引的に連れ出す。

……これで、ようやく行動できるよ。

「プレシアさん、今から貴女の治療を行います」

「そんなことが可能なの？ 私の病は不治の病だけど……」

「ええ、出来ますよ。ただ、その前に……」

「何かしら？」

俺はプレシアさんのことを軽めで頭を殴った。

「それで、まあ、フエイトを心配させた分はチャラです。出来れば、もっと強めで殴りたいですけど、それだと死んじゃうかもしれないので」

「貴方って、Sなのね」

「そうですか？ ノーマルだと思うんですけど……」

うーん、どうも自覚がない。

あ、でも彼女からもSって言われた自覚があるような、ないような……。

うん！ 気にしないことにする。

「とにかく、治療をするんでプレシアさん」

「何かしら？」

「気絶してください」

そして、俺はプレシアさんを気絶させた。

むむ、やらなければいけないこととは言え、何か良心が痛む。

「さて、二人を良い方向へ導きますか。……そうだね、代償はどんなくらいだろ？ ……まあ、今はこっちの方に集中しようか」

そして、俺は再び稀少能力^{レアスキル}を発動させた。

世界で一番憎いもの（後書き）

あとがきこーなー

まーた「あーあ、クロノの出番が無くなった。可哀そうに」

ラクト「黒い馬鹿のこと？ あんな奴は、気にしない気にしない」

まーた「まあ、A'sで出番あるし、いつか」

ラクト「そう。にしても、俺の稀少^{レアスキル}能力が出たね」

まーた「まあ、そうだな。チートすぎる能力が」

ラクト「否定はしないけど、俺はこの能力、大っ嫌いなんだよね。この力のせいで俺は、自分自身のことを世界で一番憎んでるし」

まーた「……そうか」

ラクト「って、あとがきにシリアス？ を入れたら駄目だよね。」

まーた「だな。……さて、感想をくれたArisshia様、なっぺ様、本当にありがとうございます！」

ラクト「作者、次回の話は？」

まーた「んー、無印最終話。その後、何話かやってA'sに入る訳だけど、困ってる」

ラクト「具体的に何を？」

まーた「メアの姉を早めに出すか、出さないかを」

メア「姉様が出てくるのか？」

まーた「だから出すかどうか迷ってるんだって。まあ、これは後日決めるかな？」

ラクト「そうしたら？」

まーた「そうする。……では、今回はこの辺で失礼します。では」

ハッピーエンドだと嬉しいな（前書き）

一部、変なシーンがありますが、ご了承ください……

ハッピーエンドだと嬉しいな

Side :

「……………完了」

ラクトがそう呟き、1人の金髪の少女を抱え医療室にあるベッドに寝かせようとする。

しかし、既にそのベッドにはプレシアが寝ていて、どうするか考えていた。

プレシアが先にベッドで寝ていた理由は当然、ラクトが寝かせたのである。

「少し窮屈だけど、我慢してくださいね」

ラクトは、考えた結果、金髪の少女をプレシアの寝ているベッドと一緒に寝かせることにした。

そして、沈黙した医療室には二人の息が聞こえる。

「よし、これでプレシアさんにとって、ハッピーエンドだね」

ラクトは満足したようにそう言い、うんうんと頷く。

その時、

部屋の外から騒ぎ声が聞こえた。

とは言え、大きな音は医療室に入ってくることは無く、ただ小さく聞こえただけである。

しかし、寝ている人がいる為、あまり好ましく思わない。

「寝てる人がいるから静かにしてほしいんだけど……。あの黒馬鹿め」

黒馬鹿とはクロノ・ハラウンのことである。

リンディにはリンディさんと呼んでいるが、クロノのことをラクトはそう呼ぶことにした。

ラクトの中で管理局は憎むべき存在だが、そう呼ぶことにしたらしい。

ラクトは外で騒いでいるのが気に入らない為、医療室の外で騒いでいるところに向かう。自動ドアの近付き、自動ドアが開く。

そして、笑みを浮かべながらこう言う。

「今、寝ている人がいるから静かにしようね」
「……………」

ラクトが言った言葉はいたって普通の言葉である。しかし、その言葉で騒いでいた者が全員黙った。中には冷や汗を流している者もある。

「うんうん、黙ってくれて俺は嬉しいよ」
「……………」

何故なら、ラクトは笑みを浮かべているのだが、目が笑っていない

のだ。

そんな、怒気100パーセントの笑みを見て、黙るのは普通と言ってもいいくらいである。

「……まったく。黒馬鹿はもう少し静かにしてよ」

「誰が黒馬鹿だ!」

「だから、静かにしろって言ってんだけど(黒笑)」

「……済まなかった」

「それでいい。………一応、するべきことは終わったし、中に入ってもいいよ」

再び黙った黒馬鹿……もとい、クロノ・ハラウンと共に医療室に入る。

「ここで、フェイトに重量な発表があります」

ラクトが先頭で自動ドアに近づき、ドアが開く前という時にラクトは背中の方を振り向きそう言った。

「え? 何かな? ラクト」

当然、フェイトは何のことだか分からず、ラクトに聞いた。

ラクトは聞かれたことを嬉しく思い、思わず大きな声になる。

「よく聞いてくれました! では発表します!」

そしてラクトはフェイトに

「何と、フェイトに姉ができました!」

そう言った。

「……え？」

「え？ じゃないよ。……まったく、フェイトに姉ができたって聞いて混乱してるの？」

普通、喜ぶべきところじゃないの？」

ラクトは自分がフェイト達に言った言葉は簡単に理解し、喜ばれると思っていたが、フェイトはラクトの言葉を理解できなかったから、そう言い返したのだ。

当然、フェイトだけでなく、メアもなのはもクロノもユーノも黒馬鹿……クロノもラクトの言った言葉の意味が理解できていない。

「じゃあ、今俺がした事を簡単に説明するから、ちゃんと聞いててね」

「うん」

「俺がしたことは、まず、プレシアさんの病を治して、いったて健康な体にしたこと。次に、アリシア・テストロッサを蘇生させたこと」

「はっ!？」

「その二つ。で、アリシアはフェイトよりも早く生まれてるから、アリシアがフェイトの姉ということになった。以上、説明終了」

ラクトは簡単に説明するが、フェイト達は先程よりも混乱した。とは言え、ラクトの説明の仕方が悪いので、それも仕方の無いことである。

「ほら、そこに」

ラクトが指さす所には、ベッドでプレシアがアリシアを抱えるようにして寝ている姿があった。何とも、微笑ましい光景である。

「フェイトと一緒に寝たらどう？ 家族水入らずって感じでさ」

そう言つて、ラクトは医療室から1人で出ていった。

海鳴にいた連中は、ジュエルシードが発動した次元震が原因で、その次元震が収まるまでアースラの中で過ごすことになった。

「まあ、今すぐ帰りたいという訳でも無いし、別に良いんだけどさど此処にいても」

独り言のようにラクトは言う。

しかし、その言葉からは暗いオーラのようなものが見える。

「でもさ、俺一人でこの部屋にいるっていうのも退屈なんだよねえ」

ここは、アースラにある1つの牢屋のような部屋。

その部屋の中に手を手錠で封じられたということは無いが、ラクトが退屈そうに一点を見つめる。

何故、彼が嫌ってる筈の管理局でこんなことをしているかと言うと、ちゃんとした理由がある。

「まあ、此処にいないと俺殺されちゃうから、我慢しないといけないんだけどさ……ああー、話相手が欲しい」

ラクトがこんな事を言っているが、原因の殆どがラクトであるということには気付いていなかった。

（私は今、非常に虫の居所が悪い。非常に不機嫌だ）

それが、現在のメアの考えていることだ。

「あー、メアさん？」

「何だ？　なのは嬢」

「理由は分かりませんが、そこまで怒らなくてもいいと思いますけど……」

なのはと会話をして、なのはがそのようなことを言うが、メアは「ラクト（馬鹿）を許すつもりは無い。あの部屋にさえないなければメアはラクトを氷り漬けにするつもりなのだ。」

「ふむ、残念ながらそれはできんな」

「………何ですか？」

「ラクト馬鹿は滅ぶべきだからだ。馬鹿は私が滅ぼす」

それは、ラクトがアリシアをフェイトの姉と言い、ラクトが出ていった後の出来事だった。

ラクトに続きメアも医療室から出て、ラクトを追う。
そして、少ししたところにラクトはいた。

「また貴様は訳の分からん力を使ったな」

「稀少能力のこと？ まあ、これを使ったから、プレシアさんにと

ってハッピーエンドだから気にしなくても良いと思うけど……」

「そうか。……ところで、姉様はその能力の詳細を知っているのか？」

「うーん、彼女は知らない筈だけど……」

過去の出来事を思い出すように、考えながらラクトはそう言う。
その姿を見て、メアは少しだが驚いた。

「姉様が貴様のことで知らないことがあるのか。……驚きだな」

「まあ、ね」

（姉様はラクトの全てを知っていると思っていたのだが……。それにしても、死者を蘇生できる稀少能力か。一体、どんな能力なのd
……………）

メアはラクトと会話をしながら、そのような事を考えるが途中で思

考が止まった。

「ラクト」

「何？ メア」

「アリシア・テストロッサは服を着ていなかった筈だが……」

実はメアが、アリシアをポッドから出したのだが、その時には裸だったということでシーツを被せていただけだった。そして、ラクトが1人になってから次にアリシアを見た時には服を着ていたのだ。

そのことを疑問に思い、メアは冷たい視線でラクトのことを見る。

「まあ、メアの想像とは少し……って、そんな視線で見ないでよ」

「貴様は本当に変態だな。昔のことも含めて」

メアは冷たく、ラクトを突き放すようにそう言うが、次の一言でメアのラクトに対する考えは変態から一気に変わった。

「それは何？ 昔、俺に裸を見られたことを、まだ根に思ってるの？」

(……………「ロス！」)

「死ネエエエ！」

「うおっと！？ あぶ、アブ、危ないでしょ！？」

「避けないで、とつと死エエエエエエエエエエ！」

変態から、殺すべき対象に変わったメアはラクトのことを殺そうと追いかけるのであった。

閑話休題そして、それから数日後。

今回の事件であるP・T事件の当事者達への処罰が決まった。
単刀直入に言うと、全員がほぼ無実となった。

その判決を知ったテストロッサ家フエイトとフレシアとアルフは疑問に思った。どうして次元震を起こしただけでなく管理局の人に攻撃したのに、何故、私達は処罰を与えられないのか？ と。

しかし、そのことを疑問に思ったのはテストロッサ家だけでは無かった。

メアもユーノも、管理局の人間でさえ、彼女達の処遇を疑問に思ったのだ。

当然、今回の件で判決を決めたのはアースラの艦長であるリンディだ。その判決を下した彼女に対する疑心も、最初の方にはあった。しかし、リンディは何故かアリシアを失った原因となった事故は、大雑把に言ってしまうと管理局の責任であるということを知っていた。そのことをアースラにいた人に伝えると、無罪が妥当だろうということになった。

さらに、アースラの執務官であるクロノを殺しかけたラクトの件も、ラクトが管理局に行った行動の全ての証拠となる物が何故か消されており、ラクトに対しては何もできないということになった。

結果的に、テストロッサ家はほぼ無罪が決定しているが、ミッドチルダに向かうことになり、ラクトに対しては見送りという形になった。

クロノはこの結果に不満があつたが、結局、それを認めた。

そして、今日はフェイトがアースラでミッドチルダに向かい始める当日。

少しの時間だが別れの挨拶ができるということで、今回の件の当事者達が海鳴にある1つの公園にいた。

「良かったですね。何故か、罪が軽くなつたみたいですね、プレシアさん」

「……よく言うわね」

「それはどういう意味で？ と本来は聞くのですが、まあ、貴女は気付いてるようなので特に何も言いません」

ラクトはプレシアと会話をする。

ラクトは確実に、プレシアは若干、処罰の件を知っているような口調で会話を行う。

「まあ、この事はとりあえず置いておいて、と。では、半年ぐらいでしたっけ？」

「その通りよ」

「まあ、半年後までお別れです」

「ええ」

それを最後にラクトとプレシアの会話が終了する。

そして、次はなのはとフェイトが会話を始める。

「今日来てもらったのは返事をするため」

「ふえ？」

「君が言ってくれた言葉、“友達になりたい”って」

海でなのはが言った言葉をフェイトが覚えててくれたということが嬉しくて、なのはは何度も頷いた。

「私にできるなら、私でいいならって……。だけど、私はどうしてもいいか分からない。だから、教えて欲しいんだ。どうしたら、友達になれるのか」

「……簡単だよ。友達になるの凄く簡単」

そこで、なのはは一息を吐く。

「なまえをよんで。……初めはそれだけでいいの。君とかあなたとか、そういうのじゃなくて……。ちゃんと、相手の目を見てはつきり相手の名前を呼ぶの。私は高町なのは。なのはだよ！」

「なの……は？」

「そう、そうだよ」

「なのは！」

「うん！」

これが、フェイトが初めてなのはと呼んだ時。そして、フェイトとなのはが“友達”になった時であった。最後になのはとフェイトのリボンを交換してテストロッサ家達はラクト、なのはとメアの前から

「私の出番は!？」

……消えたのであった。

ハッピーエンドだと嬉しいな（後書き）

あとがきこーなー

まーた「これで、無印完結です」

ラクト「うん、長かった。更新が止まるは、スランプだは……まあ、作者のせいで遅れたね」

メア「まあ、最低の屑だからな。それも仕方の無いことか」

まーた「……（泣）」

ラクト「てか、最後の誰？」

まーた「アリシア」

ラクト「（可哀そうに……）そう。ところで、次回からどうなるの？」

まーた「幕間が普通だけど、少しだけ本編の内容が入る……予定」

ラクト「予定なんだ」

まーた「仕方ないじゃん。小説を書きたいのに時間が無いんだもん。……正直、今回の投稿ができたことに驚いてるからさ」

ラクト「時間作ってよ」

まーた「無理。……まあ、次の投稿はどんなに早くても、再来週からになる」

ラクト「遅っ！？ え？ 何それ！？ 遅ッ！？」

まーた「それほどまでにヤバいつてことさ。……ぶっちゃけ、この期間で読者に見放されると思ってて、内心ビクビクしてる」

ラクト「（まあ、作者の考え通りになると思うけど……）まあ、うん、頑張れ」

まーた「頑張れ程、酷い言葉を私は知らない」

ラクト「ハァー。……さて、今回感想をくれた暇人様、なっぺ様、Arisshia様、本当にありがとうございます！」

まーた「最早、小説を書かせるのは、読者様からの感想だけだ」

ラクト「そう。……まあ、そんな感じで酷い作者ですが、次に会えることを祈りつつ、出番を待ちます！……では、失礼します」

まーた「本当に申し訳ありません。では、次回で会いましょう」

別行動（前書き）

すみません。

言い訳は で、読んでください。

別行動

S i d e : ラクト

フエイト達と別れ、元の生活に戻ったある日のこと。

俺とメアは買い物をして、必要な物は買ったので部屋に戻る事になった。でも、マンションに戻り、部屋に入ると部屋にあった筈のものが無くなっていた。

「ラクト、これはどういうことだ？」

「あー、俺の仕業っていう訳じゃないけど、俺のせいだよ」

「どういう意味だ？」

「だってさ、部屋の鍵を閉めるの忘れてたんだもん」

まあ、何が言いたいかと言うと、

俺達が住んでいた部屋は既に部屋の中を空き巣に物色された後、という事です。

「……つまり、貴様のせいで私の物が盗まれたと言う事が」

「その通りでございます、メアリスティング様」

俺は土下座をしながらメアに謝る。というよりしないと俺、アースラの時みたいに殺されかけちゃうし……。

「うむ……………」

メアは土下座している俺を見ながらそう言って、俺への判決を考える。

アースラの時とは違い、今度は謝っているので温情な判決が下ると俺は思っていた。

「ラクト」

「何でしょうか？ メアリスティング様」
「目を閉じながらじっとしている」

……？ それだけでいいのかな？

メアのことから無茶苦茶な事を言うと思ってたけど、実際は違うらしい。メアって案外優しい人なんだ。

と、そんな平和な事を考えながら俺は目を閉じた。

「閉じましたよ、メアリスティング様」

「そうか」

すると、どうやらメアは俺の後ろに立ったらしく、俺は何をするのか疑問に思った。

「……ノエス」

その時、俺の耳には小さくだが確かにそう聞こえた。

アレ？ ノエスってメアのデバイスだね？ 何でその名前をメアが呼ぶのかな？

メアは基本的に戦闘以外ではノエスを使わないから……。

「つて！ ヤバいじゃん！」
「死ね」

危なっ！？ 少しでも、俺が着てる服が剣で斬られちゃったよ！？
目を閉じてたと言つのもあるけど相当危なかったよ！？

「避けるなよ」

「だから！ 危ないって！」

最近、よくメアに殺されかけてるような気がするけど、それは全て
メアのせいだった。

……俺？ 俺は被害者だよ？

でも、今回に限っては俺の方が確実に悪い。というより、全ての原
因は俺です。

「カートリッジ、ロード」

そんな余計な考え事をしていたら、メアがカートリッジを使ってた。

……つて、こんな場所でそんなもん使っちゃダメでしょ！？

しかも、あまり周りを見ないで避けてたから、部屋の角に移動して
しまっていた！

……。

「うん！ 俺死んだね！」
「フフッ」

とは言え、言葉だけでそう言っていて内心ではまったくそう思って

いない。

「……………」

「酷いなあ。躊躇いもなく俺を殺そうとするなんて」

随分と久しぶりに使ってみたけど、思ってたより幻覚の出来は落ちて無いみたいだね。

「……やはり幻覚か」

「そうだよ。……ってか、一応幻覚って思ってたんだ」

「ああ。私だっていつまでも貴様と姉様の足手まといにはなりたくないのだ」

「足手まとい、ね……。メアも十分に強いと思うけどな」

「嘘を吐くな。私の力は貴様と姉様の力の足元にも及ばないではないか」

「でも今の俺の力って、随分と弱ってるんだよ？」

「しかし……………」

うん。まあ、色々な事情で弱ってるけど、後少しで完全に元に戻る。そうしたら、俺は……………。

って、このことは今は置いておいて、メアは劣等感があるのかな？

「メアはもつと強くなりたいの？」

「ああ。先程も言ったが、足手まといにはなりたくないのだ」

「それはどうして？」

「いつまでも守られているようでは、姉様の後を付いていけないからだ」

彼女の後を、ね……。まあ、良い事なんじゃない？ そう思ってること自体は。

それに、彼女もその言葉を聞いたら喜ぶと思うし……。

「……頑張つてね」

「言われなくてもそのつもりだ」

「じゃ、俺は少し散p」

「待て。思わず話が逸れてしまったが、この部屋の惨状は貴様が原因だろう。どうするのだ？」

うーん、話を絶妙に逸らしてたのに気付かれちゃったね。

面倒事は嫌いだから全部メアに任せようとしたんだけどこれじゃで
きないじゃん。

「貴様、私に面倒事を押しつけようとしていたのか？」

「心を読んだ？」

「いや、普通に声に出していたが。それにしても貴様が私に面倒事を
押しつけようとしていたとはな」

物凄く鋭い視線でメアは俺を見てくる。痛いですメアさん。

「それに関してはごめんなさい」

こう言う時は、素直に謝っておくべきだ。それが、ここ最近の出来
事での教訓だね。

と、そんな呑気なことを考えていたら、俺の携帯電話に一件のメー
ルが届いた。

俺は届いてきたメールを確認する。

「……………」

「? どうしたのだ？」

「……悪いけど、このお話はこの辺で終わりにするね。メアには少し多めのお金を渡しておくからそれで生活して」

俺は通信にでる前にメアにお金を渡す。

「どういう意味だ？」

「俺の私情の関係で少し長い間、『地球』から離れるからだよ」

「……何故だ？」

「だから今言ったでしょ。俺の私情だって、さ。……先に言うけど、メアは俺に着いてきたらダメだから。ちなみに命令ね……じゃ、後はよろしく。早くても4カ月ぐらいはかかるから」

今日は6月3日。だから、早くても10月に戻るぐらいかな？

「んじゃ、一方的で悪いけど、消えるね」

「ま、待て」

最後にメアが言ってたけど、無視して転移でこの部屋から消えた。そして、転移で到着した場所で携帯電話を開いた。

Side:メアリスティング

ラクトの奴、何を考えているんだ？
あくまでも、私情の方を優先、か。まったく、私の世話は第一に考

えていないのだな。

「……………って、これでは子供ではないか。自分の世話は自分で行っのが良いのだ」

うむ、姉様にもそう言われていたしな。

……………それに私はもう、何も考えずに行動をするような子供にはなりたくないのだ。

私は考える事ができるのだ。そのことを生かさないでどうするのだ。

「となると、……………どうすればいいのだろうか？」

む、これではまったく生かせていないではないか。

「空腹になったから翠y……………そう言えば、今日は休日だったな」

翠屋で空腹をしのぐとしたが、今日は休日だったことを思い出した。……………詰んでしまった。

仕方がない。しばらくはインスタントの食べ物でしのぐか……………。

ということで、私はマンションから出てスーパーに向かっている。その途中に車椅子に乗っている少女を見つけた。しかし、どうやら荷物を落としてしまって、それを取ろうとすることができないようだ。

「代わりに取ろう」

こういう時は手伝うのが普通だ。私はそう思い、少女が取ろうとしていた荷物を拾い上げた。

「あ、ありがとうございます」

「気にするな。困ったらお互い様だったか？ まあ、そうとも言うしな」

「えと、名前なんて言うんですか？」

「私の名はメアリスティングだ。メアリスティングは長いからメアで構わないぞ」

「私は八神はやてって言います。よろしく願います、メアさん」と、今思った事だが、私と彼女……八神譲とは偶然会っただけだから別に自己紹介はする必要は無かったのでは？

そんなことを思い、そのことをつい口に出してしまった。

私は、自分のことを馬鹿か？ と思っていた。自己紹介をした時にそのようなことを言う必要は無いからである。しかし、八神譲の反応は私の予想とは違かった。

「んー、最近の人って自己紹介の後のそれを言うのが流行ってるのかな？」

何かを考えるように八神譲は独り言を言ったのだ。

……それにしても、私以外な奴が私と一緒にのことを口に出すなんて、どんな奴なのだろうか？

「済まないな。それにしても、最近ということは私以外にも今の言葉を使った者がいるのか？ 八神譲」

「はい。ラクト君って言う人なんですけど……」

……何をやっているのだろうか？ アイツは。まあ、いい。

「最近は会ってないんやけどなあー。……あ、すみません。タメ語で……」

「気にするな。それよりもそっちの方が楽ならそうしてくれ。そっちの方が良い。……ところで、君は一人で買い物に行っていたのか？」

「そうや。うちはこんな足やから、大変なんだけどなあー」

「親とは一緒に行かないのか？」

「……あ、もう親はいないんです」

……しまったな。少し空気が悪くなってしまった。

まあ、こういう話とはっと話を变えた方が良い筈だ。私は親というものがいない私にはよく分からないが、姉様が言っていたからな。

……いや、私に親はいたのだったな。

「そうか、済まない」

「気にしてませんよ」

「……八神譲。私が君の家まで、荷物を運ぼう」

親の話は終わりで、今出来ることをする。

私が思った通りに行動をする。ただ、それだけだ。

S i d e :

「了解。じゃあ、今からそっちに向かうね」

ここはマンションの屋上。その屋上にはラクトがいて、丁度、会話を終えたところだった。

ラクトは携帯電話を閉じ、そのまま海鳴の町を眺めた。

「行くか。ラルドデイス」

《我が主の仰せのままに》

少年は魔法陣を出して、転移ができるようにする。そして、少年は光りに包まれた。

「さて、今度は何人」

ラクトが転移魔法でこの場所から消える前に独り言を呟く。

「今度は何人殺せるのだろうか？」

と、ラクトはそう呟いた。

別行動（後書き）

どうも、まーたです。いやあ、本当に申し訳ありません！

予定では、先週で更新できる予定だったのですが、リアルの方で予想外のことが起きまして、小説の方が進ませることができないでいました。

そのせいで、20日も経っちゃったし……。短いし……。

本当にすみません！

あと、A r i s h i a様とのコラボ。そちらの方も遅れてしまいました。

申し訳ありません！

次の投稿はできるかぎり早く書き終えますので、どうか、見捨てないでくださいっ！！

次回から、ラクトの出番が少しだけ無くなって、メアSideに進みます。

そして、最後のラクトは裏ラクトです。

ホントすみません。他の作者様との所の感想も書いて無い……。

……では、失礼します。

闇の書の始まり（前書き）

もっと早く投稿できたら良かった……

闇の書の始まり

S i d e : メアリスティング

私は八神嬢と一緒に八神嬢の家に向かっている。

移動手段は八神嬢が座っている車椅子を私が押して進んでいくという形だ。

「家までどのぐらいの距離なのだ？」

「んー、あと5分くらいや」

「そうか」

こっちの方向だとマンションの方向だな。

となると、私は八神嬢の家を見かけているかもしれない。

そんな風に考えている内に、私達は八神嬢の家に着いた。

結果的に何度か見かけている家だった。

前に見た時は、どんな金持ちが住んでいるのだろうか？ と思っていたが、実際は可愛い少女1人か……八神嬢の両親は偉い人だったのだろうか？ それなりの金が無ければ、このような家は購入できないだろうからな。

「メアさん、お礼として少し上がってくれへん？」

そんなことを考えている時に、八神嬢は私にそう言ってきた。

時間的には恐らく問題無いだろうと考え、私はその言葉に頷く。

そして、最初に八神嬢が家の中に入り、私が八神嬢に続いて家に入ろうとした。

その時

「ん？」

突如、背後から誰かに見られているような視線を感じた。その視線に、私は反射的に振り向く。

「にゃあ〜」

「……………」

視線を感じた所を見ると、一匹の猫が私のことを見つめていた。そのどこにでもありそうな光景に私は違和感を覚えたが、あまり深く考え過ぎずにして私は八神嬢の家に入った。

しかし、深く考えなかった為に

「確か、P・T事件の民間協力者……」

完全に扉が閉まった時に、どこからかそう言っている声が聞こえたことをメアは知らない。

むむ、……ここは正直に言っておくべきだろう。
いやしかし、ここで何かを言ってしまうては色々和不味いような気がする。

「メアさんって料理ができへのやな」

「……そこまで、そこまで正直に言われてしまつては傷付くな」

たかが、包丁で材料を切るつもりなのに、まな板まで切り裂いてしまったことなど、よくあることではないか………恐らく。

ここまで言えば分かるだろうが、私は今、この家で八神譲と一緒に料理を作っていたのだ。

「まな板の代金は私が払おう」

「なら助かるわ………って、それだけじゃないやろっ!？」

「……済まない。決して、わざとでは無いのだ」

先程はまな板までと言つたが、残念ながらその事實は間違つてゐる。正確には、まな板を切り裂いた後、さらに、まな板の下にある流し台そのものを木端微塵に破壊したというのが正しい。

正直に言つて、私の料理のセンスというものが、改めて0だと実感させられた。……いや、マイナスだろう。

「台所の方の金は私が全額払う」

「払えるんか？ 結構な額の筈やけど……」

「問題無い」

丁度、今日はラクトから金を貰ったのだ。……渡させた金の全てを使ってしまうそうだが。

……まあ、しかし、この件は私が悪いのでこれが当たり前前の処置だ。

「……って、どうやったらこんなんでできるん？」

「分からない。ただ、私が調理しようとする、……まあ、このようにことが頻繁に起こるな」

「……メアさんは、台所に立つこと禁止な」

「……了解だ」

何故だ？ 何故私はここまで料理ができないのだ？

うう、私だけだ。……姉様とラクトは料理ができるのに……。

「メアさん？ どうしたん？」

「いや、目の前の事実に傷付いてるだけだ」

八神譲は苦笑いでその場をやり通した。同情されているのかどうか、分からないな。

「苦笑いしん ……があっ！？」

私は「苦笑いしないでくれ」と言おうとしたのだが、突然、頭が割れるような頭痛を感じ、私はその痛みに堪え切れなくなってその場に倒れ込んだ。

「メアさん！？ どうしたんやつ！？」

「も、問題無い」

「そんな訳ないやろっ！ すぐ病院ん」

「大丈夫だ！ 少しの間横になっていれば、すぐに収まる筈だ！

……だから、今は私の言う事を聞いてくれ」

「せやけどっ！」

「私のことを心配しれくれるのは嬉しい事だが、今は静かに寝かせてくれ！」

私は立ちながらそう言って近くにあったソファに倒れ込んだ。その私を八神譲は私のことを心配するように見つめてくる。

……悪くない。姉様の、あの時の様な優しい眼だ。

それにしても今回の頭痛は、いつもより大分短いな。

「すまない。どうやら、一時的なものだったようだ」

「もう、あまり驚かせないでほしいわ」

「……すまない」

まあ、気にしていても仕方がないか。痛みが短いということは、まあ、悪いことではないだろうからな。

……さて、そろそろ帰ってマンションの後片づけをしなければ。

「八神譲にも心配させてしまったようだから、私は帰るとしよう」

「泊まっていかがへんの？ もう夜遅いで？」

私は八神嬢のその言葉に思考を止めた。

……む。そう言われるとは予想していなかった。

正直に言って、マンションの後片づけは面倒と思っていたのだ。これを機にあの部屋の惨状を放っておくか？

それで、迷った結果

「なら、その言葉に甘えよう」

八神嬢の家に泊まることにした。

Side:

ここは八神はやての自室。

その部屋で、はやてはベッドで横になりながら本を読んでいて、時計を見てみると、時刻は23時59分だった。

「あつ、もう12時……」

そうして間もなく、時計の針が12時を指す。

その瞬間、机にあった一冊の本から光が溢れ出した。

『封印を解除します』

はやては驚きと、それを遥かに超える恐怖により後ろに下がる。

『起動』

本から溢れ出していた光は部屋全体を呑みこむような光りになって、
ヴォルケンリッター
4人の守護騎士が現れた。

「闇の書の起動を確認しました」

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にございます」

「夜天の主　　「八神嬢っ！！」」

ヴォルケンリッター

守護騎士が喋っている間に、メアが八神はやての名を大きな声で呼びながら扉を勢いよく開け、守護騎士はそのメアを見て敵対心を表す。

「貴様、何者だ？」

「……貴様等の方こそ、何者だ？」

互いに殺気を込めた声で守護騎士とメアはそう言った。

Side：メアリスティング

「貴様、何者だ？」

「……貴様等の方こそ、何者だ？」

魔力を感じて来てみたら見知らぬ4人が八神嬢の近くにいて、状況が整理できていなかった。しかし、その4人が私のことを見ると殺気の込もった視線で見てきたので、私も殺気を出し、そう言った。

「我らは主を守る守護騎士だ。……貴様は？」

女性が2人に男性が1人、さらに少女が1人。守護騎士とはこの4人組の名称か？……とにかく、数では不利だな。一對一では負けないと思うが、この数だと確実に負ける。

「私の名はメアリスティング。八神嬢の知り合いだ」

戦うとしたら場所を移すか？ 戦うとしてもこの場所では八神嬢まで巻き込んでしまうかもしれないな。……それとも、会話でやり通すか？

……… 会話でやり通そう。そちらの方が最終的な被害は少ない。

「ヴォルケンリッター守護騎士と言ったか？ まあ、とにかく、殺気を納めてもらえないだろうか？」

私は殺気を納め、そのように交渉する。すると、赤色の髪をした少女以外の者は殺気を納めてくれた。ありがたい。

「なっ！？ どうしてコイツの言葉通りにしてんだよっ！？」

「ヴィータ、仮にここで戦ったとして主を傷つけないと自信を持って言えるか？」

「そ、それは……」

どうやら、ピンク色の髪でポニーテイルにしている女性がリーダー格のようだ。

それに、どうやら私と同じ事を考えていたらしい。

「それに、主の前では無礼な行動は許されない」

その一言で、赤色の髪をした少女も殺気を納めてくれた。

……それにしても、『主』か。今の会話などから考えると、どうやら八神嬢が守護騎士の主のようだが、彼女の様子を見てみ……。

私はふと、あることに気付いたので八神嬢に近づく。

「……ふむ、お前達がいきなり現れるようだから気絶してしまったぞ」

八神嬢は目を回しながら気絶していた。

……先程、八神嬢は魔法関係者と思っていたが、厳密に言えば、今、魔法関係者になったらしいな。

それで、何故こうなった？

先程まで、守護騎士達との出会いなどを回想していた訳だが、現在はか病院にいる。

病室の中にある1つのベットに八神嬢が寝ていて、その病室の中には守護騎士と私、さらには病院の関係者が（八神嬢を除く）私達全員を、……まあ、何と言うか、怪しい者を見るような視線で見ている。

まあ、見知らぬ者が5人もいたら、そうなるのは当たり前か……。

「それで貴方達は誰なのかしら？」

とは言え、この守護騎士達が気絶というだけで大騒ぎをするのが原因なのだな……。

しかし、この状況の中ではどちらが悪い、などとは言っていない。このままでは警察の関係者がきてしまう可能性があるからだ。

そう考えた私は自分で考えられる嘘を医師に言う。

「私はメアリスティングという者です。……私は彼女の両親とは知りだった為、一人寂しい思いをしているはやてちゃんの為に誕生日をサプライズとして祝おうとしたのですが、どうやら、私の友人がはやてちゃんを驚かし過ぎたらしくて気絶してしまったみたいなんですよ」

少し、嘘だと思えるような言い訳になってしまったが、八神嬢の親戚と言うよりは、まだ良いだろう。

そして、この言葉で納得したのか、疑いの視線は晴れた。

……それにしても、私が人の名前をちゃん付けするのは初めての出来事だな。正直に言つて、少し恥ずかしい。

そう言えば、前に私は『メアちゃん』と呼ばれていたのだった。今となつては、その言い方をされると恥ずかしいと思うだろうが、前の私はそんなことを思わなかったな。

そんなことを考えている内に八神嬢が起きた。

「あれ？ メアさん？」

「起きた？ はやてちゃん？」

「……何や？ その」

と、起きてすぐに嘘がバレそうなことを言いそうになったので、私は八神嬢を慌てて止める。

“八神嬢、そのことは言うな”

「え？ はあ？」

すっかり忘れていた。念話のことを知らないなんて、先程、魔法関係者になったばかりなのだから当たり前のことではないか。

“口では無く、心で会話しろ”

まあ、念話のやり方を物凄く短縮した形で教えると、多少違和感があるが、念話で会話ができるようになった。

そのおかげで、先程の嘘は完全に信用された。

そしてその後、八神嬢に関する簡単な事を言われ、私達は八神嬢の家にへとむかうのであった。

闇の書の始まり（後書き）

どうも、まーたです。

またしても更新が遅い……。ホント、申し訳ありません。
しかし、ようやく予想外だった出来事が落ち着きつつあるので、次回からはもっと早く投稿できるようになります！

今回はメアSideオンリーで、ラクトが出てきませんでした。
というより、彼、あと3話程出番が……。主人公なのに（笑）。
……まあ、彼は彼なりに動いているとお考えください。

さて、感想をくれたArisshia様、なっぺ様、ありがとうございます！

では、失礼します。

???「……酷いや酷いや。幼馴染に告白されて顔真っ赤にしたのに……」

おいっ!?

メアの欲望（前書き）

今回の話を書いてて思った。

アレ？ この小説の主人公ってラクトだよな？

メアの欲望

S i d e : メアリスティング

私達は八神嬢の家に戻った後、守護騎士達から『闇の書』についての説明を聞いていた。

話によると闇の書は、666ページ分のリンカーコアを吸収すると大いなる力を得ることが出来るロストログイアらしい。しかも、闇の書が完成すると、八神嬢の足も再び歩けることができるとのこと。

しかし、八神嬢は「人に迷惑掛けたらあかんよ」と言って、リンカーコアを蒐集させることを止めさせた。

「ふむ、つまり守護騎士達はリンカーコアを蒐集したらいけないと言う事か？」

「そうや……私は迷惑を掛けたくないんや」

「……ふむ、良い心構えだ」

本当にこの子は優しい子だ。……少なくとも、私のような者と違って。

「ところで八神嬢。その本……では無く、闇の書はいつからあったのだ？」

「物心ついた時には棚にあったんよ。綺麗な本やから大事にはしてたんやけどな」

……いや普通、綺麗だからという理由で何も書いていない本は大事にはしないと思うぞ。

というより、私ならそこら辺に捨ててしまっただろう。

「分かった事が1つある。闇の書の主として守護騎士達の衣食住をきっちり面倒を見なあかんゆうことや。幸い住むところあるし、メアさんと違って料理は得意や」

八神嬢、それは嫌味か？ 嫌味なのかつ！？

確かに、確かにっ！ 私は君の台所を破壊してしまった。それは覆しようのない事実だ。

しかし、いくら私でもそのような事を言われてしまったては……泣いてしまっつ！

「みんなのお洋服買ってくるから、サイズ測らせてな」

「私も付いて行こう。1人では大変だろうからな」

出来る限り、傷付いていないことを悟らせないように気をつけながら、私はそう言った。

しかし、私と八神嬢でも大変そうだな。となると……

ヴォルケンリッター

「守護騎士も付いてくるか？ 服は、私のを貸してやろう。赤毛の少女は八神嬢から貸りるといい。それと、狼？ は……すまない、具体的な対策が思いつかない」

ということで、私達は買い物に出かけている。

先程、自己紹介をして（とは言っても、私の名前は守護騎士と出会

った時に名乗ったのだが）、名前を互いに覚えた。

ピンク色の髪で、私と同じような口調を使うのがシグナム。クリーム色の髪で、補助担当のシャマル。赤毛の少女がヴィータで、男性はザフィーラ。

……段々と説明が適当になってきているが、まあ、覚えたので気にしないことにする。

そして各自、自分に合った服を買って八神嬢の家に帰ろうとしていたのだが、シグナムが騎士甲冑を決めて欲しいと言う事で、おもちゃ屋に来ている。図書館では無くおもちゃ屋に来た理由としては、図書館よりもおもちゃ屋の方が決めやすいと八神嬢が判断したからである。

八神嬢が次々と決めている中、赤毛の少女……もとい、ヴィータがぬいぐるみ置き場にあった、うさぎのぬいぐるみをじっくりと興味深そうに見つめていた。……まあ、気持ちが分からないということもない。

「ヴィータ、それが欲しいのか？」

「なっ!?! ……こんなの欲しくねえっ!」

私が聞くと、ヴィータは顔を真っ赤にして否定してきた。

「そうか。……なら私が欲しいから私が買おう」

私はそう言っ、そのウサギのぬいぐるみを持ってそのままレジに向かった。レジに向かっていている途中で、ヴィータが「あつ! ……」という声をあげたが、私はそれを気にしないでウサギのぬいぐるみを買った。

そして、私とヴィータは八神嬢と合流した。

「メアさん、何買ったんや？」

合流してから八神嬢は私が持っていた紙袋を指さして聞いてきた。もちろん、中には先程買ったウサギのぬいぐるみが入っている。

「ウサギのぬいぐるみだ」

「……………そうなんや」

何故だろう？ 物凄く驚いているというか、引かれてるような言い方をされているような気がする。私がウサギのぬいぐるみを買う事がそこまで驚くことなのだろうか？

まあ、今回は気にしないことにする。

「しかし、まあ、買ってみたは良いもののよく考えれば、確かにこのウサギのぬいぐるみはいらないな」

私はわざとらしくヴィータを見ながらそう言う。

「ふむ、ヴィータはこれが欲しいか？」

「い、いらねえって言っただろっ!？」

「…………ふむ、ヴィータが要らないということは…………捨ててしまうか」

この会話で、何故私がぬいぐるみを買ったのかヴィータ以外の者には理解してもらえた。

「…………やはり、ヴィータが持っていてくれ。私が持っていると捨て

てしまいそうで勿体無いからな」

「し、しょうがねえな。貰っておいてやるよ！　じゃないと、ウサギのぬいぐるみが可哀そうだからなっ！　／＼／＼／＼」

その様子を八神嬢達は何とも微笑ましい表情で見ていた。

時が経つのは早く、それからかなりの時間が経っていた。

私は現在、八神嬢の家で暮らしている。

マンションにあった荷物は私が片づけ、八神嬢の家に持ち運んだ。そして、ラクトの荷物は………全部売った。ラクトの荷物は意外と、価値のある物ばかりで高値で売れた。

もちろん、反省はしている。だが、後悔はしていない。

……というより、何故空き巣に入られたというのに、ラクトの物の価値はあそこまであったのだろうか？　しかし、まあ、気にしないことにする。

先程も言ったが、私は八神嬢と守護騎士達と暮らしている。

出会った当初は仲が悪かった守護騎士達とも、今では良い友人関係にあると言っても良いだろう。特にシグナムとは仲が良く、たまに模擬戦などを行う。今のところ、勝率は私の方が上だ。

「ヴィータ、醤油を取ってくれ」
「……ん」

とにかく、食事中にそんな事を考えずに、今はこの食べ物達を美味しく頂こう。

今日の昼食は和風だ。

ご飯に味噌汁、それに焼き魚といった、いたってシンプルな和風である。

それを食べた後、私は出掛ける準備をする。

「では、行ってくる」

「行つてらっしゃい」

八神嬢に簡単にそう言い、玄関から私は出ていった。

私が出掛ける理由は、八神嬢にアルバイトで働いていると言っているのだが、それは嘘だ。

ついでに言うと、翠屋のアルバイトも数週間前に止めてしまった。

何故、私が翠屋のアルバイトも止め、八神嬢にも嘘を吐いているかというと

“ シグナム、今日は何処で蒐集すればいい？ ”

“ 近くの砂漠世界だ。そこで蒐集して貰いたい ”

“ 了解した ”

今の会話で理解できたと思うが、私は八神嬢には内緒で闇の書の完

成を目指している。
しかし、守護騎士達と出会った当初は、闇の書の完成などに興味は無かった。

S i d e :

これはメアリスティングがヴィータにぬいぐるみを上げた数日後のこと。

いつものように八神はやてが作った料理を食べている時にメアがシグナムに念話を送る。

“ シグナム……後で話がある ”

“ ……分かった ”

シグナムとメアは短い会話をして、他の者がいなくなるのを待った。数十分後、ようやくシグナムとメアの二人きりになれたので、シグナムが口を開く。

「それで、話とは何だ？」

「恐らくだが、分かっているだろう？ ……………私に闇の書の蒐集の仕方を教えて欲しいのだ。それに、その後に闇の書を貸して欲しい」

メアは正直にそう言って、シグナムの反応を待った。

「それは、私に主はやての命令を無視しろと言っているのか？」

「いや、そうではない。私は数日前に言っただろう？ 『守護騎士達はリンカーコアを蒐集してはいけないと言う事か？』と。そして、八神嬢はその言葉に頷いた。……しかし、私は『守護騎士達は』と言ったのだ。つまり、私には何も言っていない。まあ、私は八神嬢の命令などに従う義理も無い……だから、私に闇の書の扱い方を教えて欲しい」

「……どうして、そのようなことをする？ もし、闇の書の力を奪おうなどと考えているなら、私が今すぐお前を斬る」

シグナムは警戒するようにそう言う。

闇の書が完成して、主に与えられる力を奪おうとしているのではないかと、シグナムは考えている。しかし、その言葉はメアによって否定された。

「いや、そんなものには興味の欠片も無い」

そこで、メアは珍しく無邪気に笑ってこう言った。

「なああに、私は可愛らしい少女の笑顔が見たいという、単なる私の欲だよ」

と。

S i d e : メアリスティング

これが、私が八神嬢に嘘を吐く理由。
私は単に、彼女の笑顔が見たいという個人的な欲求で闇の書を完成させるのだ。

そして私は蒐集をする為に、闇の書を持って第九十七管理外世界『地球』から離れた。

「これで、これで間違っていないですね？ ……姉様」

S i d e :

メアが地球から離れて蒐集対象を探している頃、1人の少女が海鳴にやってきた。
透き通るような白い肌に、小さく整った顔。誰もがこの少女を見た

ら、凝視してしまうような美少女だ。

現に、少女を見た男は凝視してしまっている。

「ここが彼の言っていた『海鳴』という所ですか。……………良い所ですね」

少女はそう言ってから目を閉じ、少し考えごとをする。そして、考え終わると同時に目を開けた。

「彼の“お願い”で海鳴^{こゝろ}に来たのですから、私は私の役割を果たすとしましよう。…………彼の情報ですと、桃色の魔力光みたいですから、すぐに見つかる筈ですね」

独り言で自分の考えをまとめ、少女は歩き始める。

「でも、何故彼は、私にこのような“お願い”をしてきたのでしょうか？」

その言葉を口にした後、少女は一時的に足を止めた。

彼女は受けた“お願い”について疑問に思うが、すぐにその疑問は無くなった。

正確には、『無くなった』では無く、『疑問に思ふ必要が無くなった』という方が正しい。

「彼は彼なりに考えているのですから、気にしないことにします」

そして少女は、無表情になり、再び歩き出したのであった。

メアの欲望（後書き）

どうも、まーたです。

まあ、前書きでも書きましたが、この小説の主人公ってラクトだよな？

と思った回でした。

メアが普通に何かカッコいいのに対し、ラクトは一体何をやっているのでしょうか？

と、まあ、主人公（笑）のことは置いておいて、

ようやく、メアとラクト以外のオリキャラを登場させることができました。

しかも、意味深なことを言って。

それと、今回で時間がかかり進んでしまいました。できれば、もう少し守護騎士とメアの絡みを多くしたいと思ったのですが、そこは自分の文才が無さ過ぎて書けませんでした。

それらを楽しみにしていた方はいないと（主に駄作という理由で）思いますが、もし、いたらすみません。

そして、この駄作に感想をくれたなっぺ様、A r i s h i a様、ありがとございました。

あ、そう言えば、メアが翠屋のアルバイトを止めたのですが、番外編ではメアはまだ続けているということにします。

そして、次回は……まあ、ぶっちゃけ、特に予定は決めてません。
でも、原作1話に入れたらなあーと思っていますので。

では、失礼します。

接触

S i d e : メアリスティング

今日は10月27日。私達は八神嬢の定期検査ということもあり、病院にいる。

定期検査と言っても、八神嬢は足の具合が悪いだけだから、そんなことをする必要も無いと思っているが、念の為に検査を行いたい。

「それにしても、闇の書の蒐集は上手くいつてるように思えるな」

あれからも、私は闇の書の蒐集を行い続けたおかげで、200ページ近く埋まってくれた。

四ヶ月で200ページ。そして、残りが400ページ以上。……闇の書を完成させるとしても、後八カ月程かかってしまうな。

「……まあ、時間はかかるが、少しずつ完成には近付いているんだ。これでいい」

実は、守護騎士達には蒐集しているということをシグナム以外の者には知らせていない。

……もちろん、私自身が知らせたくないと思っているから、知らせていないのだぞ。そして、この行動にも私なりの考えがある。

その時、八神嬢の担当の医師が私とシグナムに近づいてきた。

「すみません、はやてちゃんのことです少しお話が……」

その表情からはいつもより真面目……というより、深刻であるということが読み取れた。

最近は八神嬢もよく笑ってくれているから、私はまったくそのことを心配していなかったのだが……。

そして、私が思っていた以上に状況は悪かった。

……いや、むしろ、これ以上に無いぐらいに最悪だった。

「命の危険？」

「八神嬢が？」

私は珍しく、本当に珍しく慌てていたというよりは、焦っていたのかもしれない。元気だと思っていた少女に命の危険があると聞いて、落ち着く事が出来なかったからだと思う。

「……ええ。はやてちゃんの足は原因不明の神経性麻痺だとお伝えしましたが、この半年で麻痺が少しずつ、上に進んでいるんです。……このままでは内臓機能の麻痺に発展する危険性があるんです」

その言葉で私は言葉を失った。

「相変わらず私は弱い。…………弱過ぎる」

私は自虐的にそう言う。

医師から八神嬢の体のことを聞いて、家に戻って、部屋に戻り……私は部屋の隅に座っていた。

「…………強く、強くなっ たつもりなんだがな」

《…………メア様》

「前に、ラクトと模擬戦をした時にお前に『強くなっている』と言われて、浮かれていたのだな」

久しぶりのノエスとの会話。

八神嬢達と過ごしていた時にも、簡単な会話はしていたのだが、このような私のことに関しての会話は随分と久しぶりだ。

《ですが、強くなっているのは事実です》

「確かにそうだな。それは蒐集をしている時にそう思えた」

今までよりも、随分と速く動いていたし、能力そのもの自体も上がったていたように感じた。

…………しかし、それだけだ。

「私は誰も守れていない。…………自らの意思で誰も守れない」

《しかし、今回の件は…………》

「分かっている。今回の件は『闇の書』が原因、とでも言いたいのであろう？ ……しかし、そのことを知らなかった私にも責任はあると思うのだ」

私は八神嬢の体のことを言われた後、シグナムから話を聞いたのだ。そしたら、『闇の書』が原因と……。そして、今日はそのことで守護騎士達が話をするらしい。今は八神嬢が起きているから出来ないが、夜中に話し合うつもりのようなのだ。

「……無知は弱い、と言いたい訳ではないが、ラクトのように全てを知っていたらもう少し事態は良い方向に」

《メア様》

私の言葉をノエスは遮った。

「何だ？」

《メア様はジュエルシードの件、……P・T事件の時に、高町なのはさんに何と言ったか、覚えていますか？》

「なのは嬢に？」

《はい。高町なのはさんがジュエルシードをもっと早く封印できたなら、と思っていた時に言った時の言葉を覚えていないのですか？》

そう言われてその時のことを思い出す。

確か、なのは嬢がジュエルシードを持っていた少年を見かけたのに、それを回収することができず、ジュエルシードが発動して被害を出した。そして、そのことに責任を感じていた。

……その時に私は何て言った？

『私が完璧だったら、こんな事にはならなかった、とでも思っているのだろうか？』

……そうだ。私はなのは嬢にそう言っていた。
そして、私はその言葉の後にこう言い続けた筈だ。

『それはただの理想で、現実じゃない。この世界にそんな事ができる者なんてこの世にはいない。誰もが完璧では無いからな。……君は、君ができる精一杯のことをしたのだろう？ それで、十分じゃないか。……結果以上の結果を望むな』

と。

「……………ははっ……………これでは、私もなのは嬢に言えたものではないな」

《まったくです。……………ですが、これでメア様が何をすれば良いか、分かったのではないのでしょうか？》

「ああ。……………こんな所でウジウジと考えている場合では無かったな」

そうだ、私は私のできることをする。まったく、何故忘れていたのだろうか？

姉様の言葉を忘れるなんて、……………最低な奴だな、私は。

過去のことを思いながら、私はその部屋から出た。

それから時は少し進む。

Side…

空は既に暗闇になっていて、建物の光が町の夜の風景を作っていた。しかし、途中から結界が張られ、町は異様な雰囲気にも包まれる。

「魔力反応！……しかも、大きい！」

しばらくして、赤髪の少女ヴィータが大きな桃色の魔力を見つける。ヴィータはそのまま闇の書を持って、その魔力の持ち主に近づいて行く。

すると、その桃色の魔力を持った人物がマンシヨンの屋上にいた。その人物をヴィータは、不意をつくような攻撃をする。本来なら、騎士としてこのような行動はしないのだが、主の為を思って騎士としての心構えも無くす。

桃色の魔力光を持つ高町なのはは、ヴィータが最初に放った小さな鉄球を片手で受け止める。

そして、その隙を見逃さずにヴィータは鉄球と挟み撃ちという形でハンマーを振る。

「テートリツヒ・シユラークツ！！！」

その攻撃で、高町なのはは屋上から落ちる。

落ちている途中ではバリアジャケットをまとい、地面と激突する事からは回避できた。

「何処の子？ 何でこんなことするの！？」

なのはは体勢を取り戻した後、襲ってきたヴィータにそう言うが、

無視して小さい鉄球をヴィータは2つ取り出す。
それを見たなのは自らの魔力を集める。

《Shooting Mode》

「……教えてくれなきゃ、分からないってばあ！」

《Divine Buster》

そのまま、なのはは魔力を集めてその魔力の塊を放った。
それを、ヴィータは避けるが、身に付けていた帽子が落ちていった。

「……グラーファイゼン、カートリッジ」

ヴィータが帽子を落とされた怒りでカートリッジを使うつもりだったのだが、それは黒髪で紅い瞳の女性に遮られる。

「……落し物だぞ、ヴィータ」

「……………え？」

その姿を見てなのはは驚く。何故なら、その姿に見覚えがあったからだ。

「……メアさん？」

「久しぶりだな、なのは嬢」

それは数力月前に一緒に行動をしていた女性。
見間違える筈も無かった。

S i d e : メアリスティング

「久しぶりだな、なのは嬢」

私が翠屋のアルバイトを止めて以来会っていなかったから、その姿が懐かしく思える。

「どうして、メアさんがここにいるんですか!？」

「おい! メアの知り合いか!? こいつ!」

と、思っていたら、ヴィータとなのは嬢から質問された。

…… 2人とも、一緒に喋らないでほしい。声が聞き取りづらいから……。

私は辛うじて聞き取れるが、一般の者なら不可能だぞ。

「私は、ヴィータの……この子の様子を見に来た。そしてヴィータ、その子は私の知り合いだぞ」

物凄く伝わりにくい筈だが、2人はそれで一応伝わったようだ。

「……ヴィータ、悪いがこのまま彼女と戦っていてくれ。私は、少し行かなければいけない場所がある」

「なっ!?! どういう意味だよっ!」

「どういう意味だ、と聞かれてもな。……君一人で彼女に勝てるだ

ろっ？」

質問の答えにはなっていないが、ヴィータはそれで納得したようだ。一方、なのは嬢はその言葉を聞いて、驚いている。……まあ、数ヶ月前は共に行動していた仲間だったからな。そのような言葉を聞くとは思っていなかったのだろう。

「後で、理由を話して貰うからなっ！」
「……………」

その言葉を私は沈黙してやり通した。

正直、今回の場合はなのは嬢を傷つけないが、優先順序的には八神嬢の方が上だ。

八神嬢を助ける為なら、私はどんなに嫌われたって構わない。

そう思いながら、私はある場所に移動した。

「さて、ここなら構わないな。……………出て来い」

「気付いていたのか？」

「まあ、そうだな……………」

私が声をかけると、仮面を付けた男が現れた。

……まあ、正直に言って気付いていたというよりは、何と云うか……違和感があったから適当に言っただけなのだな。

「それで、私のことを付けてきたのに理由はあるのか？ ……それとも、単なるストーリーカーか？」

軽い冗談を言っつて、仮面の男を強く睨む。

若干、この視線に恐怖を覚えたようだが、すぐにそれが無くなった。

……この視線に恐怖を抱くと言う事は、私より弱い者か。

「それで、どうなんだ？」

「……理由はある」

「ほう。それで？」

まあ、理由が無ければこのような事はしないか。

それにしても、何か恨まれるような事は………数え切れないほどにしているが、この男は知らないな。

私はその男の返答を待った。

「……闇の書の主、八神はやてとの関係を断ち切って欲しい」

「………ほう」

私にとってその言葉は予想外だった。

接触（後書き）

どうも、まーたです。

テスト勉強サボって小説書いてたら何か一話分書けちゃったので、投稿しました。

……何やってるんだろ？ 俺。

さて、本編の方ですが、すみません。

少し……では無く、かなり無茶苦茶な感じになってしまいました。これも、自分の文才の無さが招いた結果ですね。……はぁー（ため息）

まあ、とりあえず、この事は置いておいて

原作一話目に入りました。A'sは多分ですが、無印より短くなりますね。すみません。

さて、このような駄作に感想をくれた、Arisshia様、なつぺ様、暇人様、ありがとうございます！

次回の予定としては、今回の続きと、前回出てきた少女の正体を明かす予定です。

正体明かすの早いと思いますが、よろしくお願いします。

では、失礼します。

ラクト「出番が無いな……。って、キーワードの所が、主人公（多分）になってる……」

白き少女（前書き）

今回から12が12日辺りまで更新できません。

白き少女

S i d e : なのは

私の心の中はどうして？　っていう疑問でいっぱいでした。

ジユエルシードと一緒に封印していた女性……メアさんがいきなり襲いかかって来た子と知り合いで……ううん、まだ、それだけなら良かったの。

でも、あんな台詞をメアさんから……。

『……君一人で彼女に勝てるだろう？』

あれはこの赤髪の女の子に対して言ってる言葉だった。信頼しているような声で……。

さっきのメアさんは、私のことを何とも思ってたと思うの。ただ、顔を知っていると云うだけで、何とも思っていない……。

メアさんにとって、私はその程度の人なのかな？　……だとしたら、物凄く、物凄く悲しいの。

「グラフアイゼン！　カートリッジ、ロード！」

その言葉で、私は今までどんな状況だったか思い出す。

《エクспローション》

「ラケーテン！」

気付いたら、赤髪の女の子が持っていたハンマーの形が変わっていて、そのハンマーを私に向かって大きく振っていた。

「っ！？ レイジングh」

《プロテクション》

さっきまでメアさんのことを考えていたから反応が遅れて、レイジングハートに指示が出せなかったけど、レイジングハートが私の指示無しでプロテクションを張ってくれた。

「ハンマーーッ！！」

でも、プロテクションでガードしたけど、赤髪の女の子の攻撃は簡単にプロテクションを壊して、レイジングハートごと私を吹き飛ばした。

Side：

「何だ、メアの知り合いって言っても魔力が多いだけか……」

ヴィータは吹き飛ばされたのはを見てそう呟く。そしてその声に

は、少し落胆したような感情があった。

「……まあ、魔力が多い方が好都合だからいいけど」

守護騎士達の間ではメアは強いというイメージがついている。理由としては、守護騎士達のリーダー格であるシグナムに模擬戦で勝っているからだ。しかも、メアの方が勝率が高い。そういったことから、そういうイメージがついている。

だから、メアの知り合いも強いとヴィータは思っていたのだが、今、簡単になのはを吹き飛ばしたことによりその考えが無くなった。

最初にもなのはを吹き飛ばしたが、それは不意をつくと言う形だった為、カウントはしない。

ヴィータがなのはの所に着いた時、なのはは既にボロボロでレイジングハートもかなり損傷していた。

「アンタには恨みとか無いけど………リンカーコアを貰うよ」

その姿を見て、ヴィータは容赦なくなのはからリンカーコアを闇の書に蒐集しようとする。

ほんの少し罪悪感が出てくるが、主の為……八神はやての為に、そんなくだらないモノは無視する。

そしてヴィータはグラーフアイゼンを、そのままなのはに向かって振り下ろす。

一方、なのはは初めての敗北という訳ではないが、ヴィータとの勝負に敗北した。

今までも、ジュエルシードを封印する時だって、危険な出来事に直

面している。しかし、ここで初めてなのは自らの命が相当危険な状況になっていると自覚する。

とは言え、なのはがそう思っているだけで、ヴィータは命を潰すつもりはないが……。

（こんなので終わり？ …… いやだ！ ユーノ君、クロノ君……フ
エイトちゃん！）

ヴィータがグラーファイゼンを振り下ろしている間に、なのはは友人のことを想うが、なのはは振り下ろされるグラーファイゼンに恐怖して、目を閉じてしまう。

そして、目を閉じてしまったが故に、

『友達』の為に此処に駆け付けた少女の表情はどのような物だったか分からなかった。

なのははいつまで経っても衝撃が来ないことに違和感を感じ、目を開けてみる。

すると、黒衣のバリアジャケットを見に纏った少女がグラーファイゼンを止めていた。

「……仲間か？」

ヴィータは突然やってきた黒衣の少女にそう尋ねる。

その姿をなのはは知っている。黒衣のマントに金髪のツインテール。表情は背中越しで分からないが、なのははこの少女が誰かを理解するのには十分すぎる。

そしてその姿に色々な感情が湧いてくる。

「……………友達だ……………！」

高町なのはとフェイト・テストロッサ。

今ここに、二人が再会した。

一方、メアリスティングの方はというと……………。

Side：メアリスティング

「……………闇の書の主、八神はやてとの関係を断ち切って欲しい」
「……………ほう」

仮面の男のその言葉に私は少し考え込む。

……………もし、この男の言う通りに私が八神嬢との関係を断ち切ったとしたら、この男にはどんなメリットがある？ 八神嬢と魔法の接点は闇の書から始まった。ということは、闇の書に関することの筈だ。

それは、先程の言葉からも考えられる。

何故なら、闇の書の主が八神嬢であるということをこの男は知っているからだ。

つまり、この男は八神嬢のことと、闇の書についても知っていると
いうことになる。

「……私がおとなしく『はい、そうですか。なら、八神はやてとの
関係を断ち切ります』などと言うと思っっているのか？」

「……………」

「……答えは却下だ。貴様が突然現れ、そう言って、私が貴様の言
う通りにすると思っっている事自体が間違いなのだよ」

「……なら、力尽くで行うのみ」

「笑わせるな。貴様如きに私が負けるとでも？」

仮面の男の言葉に私は思わず笑ってしまう。

先程の私の視線に少しだが、確実に恐怖を覚えた者が私を倒す？

……………笑わせる。

「……それより、何故貴様は今になって私の目の前に現れた？ も
し、本当に八神嬢との関係を断ち切って欲しいと思っっているのなら
ば、もっと早くそうしているべきだった筈だが……………」

「答える必要は無い」

「そうか。……なら、私が貴様を倒して後に貴様の知っっている事な
どを吐かせるでしょう」

実力的には問題な……………。

……………ん？ ……成程な、そういうことか。

「しかし、よく考えたものだと褒めておいてやろう。……………こう
して私と話している間に……………」

そう言って、私は胴体はそのまま視線だけを後ろの方へ向けた。
するとそこには、もう一人の仮面の男がいた。

「もう一人が私の不意をつくというところはな」

「……っ!？」

……一応、準備しておいて正解だったか。

「だが、もう少し早く攻撃するべきだったな。そうしていれば君達
は」

《Wide-ranging type attack》（広範
囲型攻撃）

「氷り漬けになることは無かったというのに……」

刹那、2人の仮面の男の周りから急速に氷が現れ始めた。

……私が前にラクトとの模擬戦で使った技だ。

しかも、あの時はこれを発動するのに30秒必要だったが、現在は
23秒。

この半年近くで7秒縮めることができた。もちろん、あの時とは威
力も違うぞ。

私は前の時とは違い、最後まで気を緩めずに仮面の男達を探した。
すると、所々氷が付いているが、あまりダメージを喰らっていない
様子の仮面の男達がいた。

「……ほう、貴様等も中々やるようだな。だが、今のでどちら
が強いか分かっただろう？」

タイミング的には良かったと思うのだが……。

まあ、この際は気にせずに相手を見る。

「……………ここは一旦引くか」
「そうだな」

そう言つて、仮面の男達は消えてしまった。

……む、私の言葉は無視か。酷い連中だな、まったく。

「だが……………アイツ等に会つたというだけでも十分な収穫だろう。……アイツ等の目的は分からなかったがな」

しかし、現時点で仮面の男達の目的を考えるとするならば、主に2つの理由が挙げられる。

1つ目は、シグナムが言っていた闇の書が完成した時の力を八神嬢から奪うこと。

これが理由としては最もだと思うが、何か違うような気がする。

そして、2つ目の理由。できれば、こちらでは無い事を祈るが……………。

「闇の書、もしくは八神嬢に恨みがある者が八神嬢を殺すこと」

本当に、この理由だけは勘弁して貰いたいな。

……まあ、このことはまた今度考えよう。

それより、ヴォルケンリッターは既に此处に來ているようだし、私も合流するでしょう。

そうして私は向かつて行くのだが、私は序所……………に私は慌てながら現地へと向かった。

S i d e :

高町なのは目の前でぶつかり合う魔力光。
状況としてはなのは達よりも、圧倒的にヴォルケンリッターの方が
押している。

（助けなくちゃ……！ みんなが頑張ってるのに、私ひとりがこんなところで……っ！）

なのははそんな状況を見て、自分も無理をしても動こうと考える。

（……私がみんなを助けなきゃ！ 私がこんなところで治療してても、みんなは今も戦ってるんだ。だから、助けないといけない！）

なのはは仲間の状況が良く見える場所へと移動する。

《撃ってください。スターライトブレイカーを》

そんな時、レイジングハートがなのはにそう伝える。

「無理だよっ！ そんな状態じゃ！」

《撃てます》

「……あんな負担のかかる魔法。レイジングハートが壊れちゃうよ！」

先程のヴィータの攻撃で既にレイジングハートはボロボロで、スターライトブレイカーなど撃ってしまったてはレイジングハートの損傷は悪化する。

そう考えたのははその提案を却下しようとするが、それよりも先にレイジングハートがなのはに伝える。

《私を信じてください》

と。

(……………レイジングハート。……………そうだね。レイジングハートが私を信じるなら私も信じないと！)

その言葉を受け、なのははスターライトブレイカーを撃つ決心をする。

そして、レイジングハートの目の前に周囲の魔力を集めて、後はもうその魔力の塊を放つだけになった。

「スターライトブ」

なのはが自分の技の名前を言っている最中に、なのはの胸から女性の手が生えた。

こちらは高町なのはのいる場所とは違う建物の屋上。

そこでシャルは魔力量の高い少女、もとい、高町なのはからリンカーコアを吸収しようとしている。

「……あ、はずしちゃった」

しかし、少し手の位置を間違えてしまった為に一度手を抜いた。

そして、再び腕を出すと今度は成功して、目の前に桃色の球が現れた。

「……よし。それじゃあ」

そう言っつて、シャルは闇の書を取り出しそのまま高町なのはのリンカーコアを蒐集しようとした。

「随分と面白そうな事をしているのですね」

しかし、それは白き少女に腕を掴まれることによって失敗した。
そして、白き少女は名を名乗る。

「申し遅れました。私は リア・リスティング・レイズトウルズ
という者です。」

この名前で分かると思うのですが、メア・リスティング・L・レイズトウルズの姉
です」

白き少女（後書き）

どうも、まーたです。

はい、またまたテスト勉強サボって書いてたら、出来ちゃいました。まあ、テスト前の投稿としては絶対にこれが最後ですけどね……。

えっと、感想をくれた A r i s h i a 様、なっぺ様、ありがとうございます！
ざいます！

さて、すみませんが結構時間を詰めているので今回はこの辺りで！

……感想が書いていなくてすみません。

敵同士

Side：メア・リスティング・レイズトゥルズ

私はヴォルケンリッター達の所へと焦りながら向かっていた。

出来れば転移で移動したかったのだが、転移で移動する為に準備する時間と自らが飛行魔法で向かうとでは、残念ながら転移をするという方が遅いと判断し、飛行魔法でヴォルケンリッター達と少しでも早く合流する為に、多少無茶をして移動している。

「ノエス！ それは間違いないのだろうなっ！」

《はい。99、6パーセントの確率ですが、間違いないかと》

「そうか。……急がなければっ！」

とにかく、急いで合流したい。

最初は間違いだと思っていた。だがそれは、現地へ向かえば向かう程、少しずつ確信に近づいていく。

「距離は後、何メートルだ？」

《600メートル程です》

今も間違いだと思っているが、もう間違えようのない程に近付いている。

……………間違いなく、さっきより今の方が近付いている。

……何故？ どうして？

「どうして海鳴うみにいるのですか？」

……姉様。

S i d e :

「申し遅れました。私は リア・リスティング・レイズトルズ
という者です。

この名前で分かると思うのですが、メアリスティング・レイズトルズの姉で
す」

建物の屋上でシャルルの腕を掴んだ白き少女……リアはニコリと微笑みながらそう言った。

「……え？」

一方、シャルルはその言葉に混乱する。

何故なら、リアの容姿は明らかに私服と思われる物を着ている。ここまでならまだ良い。

しかし、リアはどう見てもメアよりも年下と思えるからだ。それも、高町なのはと同じ年頃で。」

「驚いていますか？ …… まあ、無理もないでしょう。ですが、私がメアの姉であるという事実は変わることはありません」

その考えを見通してか、リアは先程言った言葉を繰り返した。

「……………」

「……そう警戒しないでください」

シャルは突然現れたリアに敵対心を向けながら注意深く見ていた。腕を掴まれるほどまでに近づかれていたということに気が付かなかったからだ。しかも、容姿からは想像することができないナニかを思わせる雰囲気。

これで警戒すると言われても正直な話、無理な事だ。

（メアさんと最初に出会った時に感じた殺気……………。あれも物凄く濃いモノだったけど……。こっちの方が不気味）

これがシャルが素直な感想。そこで、1つの疑問が浮かび上がる。何故、一ヴォルケンリッター（私）がメアと知り合いであるということを知っているかということである。

普通、自己紹介する時は自分の名前だけを言って終わる。しかしリアは、ヴォルケンリッターがメアのことを知っていなければ意味が通じないことを平然と言った。

『メア・L・レイストウルズの姉です』
リスディング

と。

先程の言葉には、メアとヴォルケンリッターの関係を知っているような言葉だった。

シャルはそのことを考えつつ、リアのことを注意深く見る。

「……私はただ護衛対象を傷つけられるのは困るということで、貴方達の行動を一時的に邪魔しているだけなのですから」

「護衛対象？」

「はい。……ああ、すみません。護衛対象と言うと少し語弊がありますね。正確には護衛人物が正しいです」

「……………」

シャルは護衛対象と護衛人物の違いが分からず、首を傾げた。そしてシャルの考えを読みとったのか、このことを説明する。

「対象というのは一般的に複数のモノを指します。そして、今回の場合は人物ですので……護衛対象というと、複数の人物を守ると言うことになるということです。対して、護衛人物は一般的に特定された個人を守ると言うことになります」

「……説明ありがとうございます？」

「何故疑問形なのか分かりませんが、理解できなかったという訳では無いようですし、安心しました」

説明を聞いてシャルは余計に疑問に思う事が増えた。

（……でも、その言い方だとあの子達の1人しか守らないって言っているようなものよね？）

シャルは、ヴォルケンリッターから高町なのは達全員を守ると思っていたからだ。

「そして私が護衛する人物は桃色の魔力を持った少女……名前は高町なのは。」

「……………そして先程貴方はその子のリンカーコアを蒐集してたので、貴方の邪魔をしました」

「……………」

「なので、彼女以外からリンカーコアを蒐集する場合には私は邪魔をしません。どうぞ、先程の技などで蒐集でもしてください。……先程も言いましたが、高町なのはには手を出さないでくださいね」

そして、それまで笑顔だったリアの表情は急に無表情になり、こう言った。

「もし、彼女の手を出したら貴方達を殺します」

その言葉にシャルは恐怖感を抱く。

「しかし、彼女に手を出さなければ良いので、特に気にするような事はありませんね」

「……………」

「……………黙りきるといふのは、相手に失礼だと思うのですが」
「……………」

シャルは意図的に黙っていると言う訳ではない。ただ、目の前のリアによって喋ることができないのだ。今まで長い時間を生きてきたシャルでも、ここまでの恐怖感を抱くには十分すぎる。

「……………さて、私の今出来る事は終わりました。シャルさんはちゃんと、他のヴォルケンリッターに伝えておいてくださいね」
「……………え？」

リアはそれだけを言うとシャルマルから視点を外し、後ろを振り向いてそのまま歩いて行く。

「ま、待ってください!」

「……何でしょうか?」

しかし、シャルマルは気が付くと、そんな声を出してリアを止めていた。

その声にリアは意外そうな声を出し、シャルマルの方を振り向く。

「……あの、メアさんのお姉さんなんですよね?」

「それは先程も言いましたが……」

「なら、妹であるメアさんには会って行かなくて良いんですか?」

「………私も出来れば会いたいですね」

シャルマルはリアが寂しそうな表情になったような気がした。しかし、それは一瞬の出来事だった為、見間違いと判断した。

「しかし、私にはやるべき事が」

「シャルマルツ!」

不意にヴィータが背中側からリアに近付いていき、そのままグラーファイゼンを振り下ろした。しかし、リアは背中に目があるかのよう横に移動し、それを避けた。

「……血の気の多い子ですね。そう言う子はあまり好きではないのですが」

「うつせえ!! テメエのリンカーコアを奪うつ!!」

ヴィータは怒鳴りながら、避けたリアに追撃をしようとした。

「メアはこんな人達と一緒に住んでいるのですか。……メアも大変ですね」

しかし、ヴィータはリアのその言葉で動きを止める。

「お前、メアの知り合いか？」

「ええ。私の名はリア・リスティング・レイズトルズ。……彼女の姉です」

「なっ!？」

「……。やはり、メアの姿が悪いのでしょうか？　どうも、驚かれます」

そんなヴィータを見て、リアは首を傾げながらそう呟いた。

一方、シャマルとヴィータはリアが言った『メアの姿』という言葉に氣にする。

「どういう意味だ？　メアの姿って？」

ヴィータはその言葉の意味を聞いた。

リアはヴィータを見て、その言葉の意味を答える。

「どういう意味も何も、本当のメアの姿は、今とは違うということですよ」

リアは両目を閉じながらそう答えた。

そして、リアは閉じた両目を開き口を開く。

「そうですよね？ ……………メア」

リアが振り返ったそこには、息を荒くしながらリアのことを見つめているメア・リスティング・レイズトゥルズがいた。

Side：メア・リスティング・レイズトゥルズ

「久しぶりですね、約１年半振りでしょうか？ メア」

「……ハア、ハアハア。……ふう」

私は荒くなっている息を整え始める。

……………疲れた。少し無茶をしたが故に滅茶苦茶疲れた。

……………愚痴などを言いたいのだが、今はそれどころではない。

「……………お久しぶりです、姉様」

何故姉様がここにいるのだろうか？ 旅でどんなことをしてきたのか？

など、聞きたい事はたくさんあるが、今は聞かない。

「……………む。……………私のことは『お姉ちゃん』と呼びなさいと言ってい

るでしょう?」

と。私の言葉に姉様はそう返してきた。

……って、さ、さすがにそれは……。

「……い、いや、出来れば遠慮したいです」

「私の言う事が聞けないんですか? ……悲しいです」

「……うっ!」

姉様は私のことを(今の身長的な問題で仕方ない事なんだが)上目
使いで見ている。

……破壊力が大きい!

「そう、ですよ。私の事なんて……その程度……ですよ?」

「……うっ!」

分かっている。これが姉様の演技であるということは分かっている。
姉様は昔から私で遊ぶのだ。

「もう、メアにとって、……私は必要の無い人物……何ですね?」

「……うっ!」

……姉様は上目使いに加えて涙目で見てきた!

……こ、これでは私が悪役ではないかっ!?

現に、事情を知らない者は、私のことを悪役シャマルとヴィータの様な目で見えてい
る。

だ、だが！ これは、間違いなく姉様の演技だ。

……演技の筈だよな？ ……姉様の涙の量が物凄く多くな
っているが、それも演技だよな？

……もしかして、演技では無いのかっ！？
それなら私は……完全に悪役っ！？

……仕方ない。仕方ないから、『お姉ちゃん』と呼ぶことにす
る、言っておくが、仕方なく言うんだぞっ！！

「お、お久しぶりです／＼ お……おねえ……ちゃん／＼
／＼／＼」

ヤバい。恥ずかしさで死ねる。

……む、知らなかったぞ。感情を持つ生き物はあまりにも恥ずかし
い目に遭うと、逆に落ちつけるものであるということを。

「はい 久しぶりです」

私が恥ずかしさの余りに地面を見ていると、そんな声が聞こえた。
無論、姉様のことだが。

顔を上げ、姉様の顔を見ると、先程泣いた顔とは思えない、良
い笑顔だった。

……どうやら、私の考え通りに演技だったようだ。

……。

……。

「って！ やっぱ演技だったんですかつ！？ 姉様っ！？」

「ええ。久しぶりです その声 …… まさか、言ってくれとは思ってませんでしたので、機嫌が凄く良いです」

「……そうですか」

「まあ、そんなに落ち込まないでください。……それに、ちゃんとメアとこの様なやり取りをしたのには理由がありますよ」

理由？ 私で遊んでいたのに理由があると言っても、私の恥ずかしがつている顔を見たいとかその辺りだと思っただが……。

前にも、そんな理由を言われていたような気がするし。

「まあ、それは後で分かるとして。……この辺で失礼しますね」

「え？」

姉様の突然の発言に理解するのが戸惑った。

これでは、本当に私をからかいに來ただけではないか。

「そんな驚いたような声を出さないでください。当たり前じゃないですか。現在、私は貴方とは敵同士なのですから」

「……敵同士？」

「ええ。貴方は守護騎士側で私は高町側ですから」

高町側？ ……なのは嬢のことだろうか？

……そう言えば、ヴィータはなのは嬢と戦っていた筈だ。なのにどうして此処にいる？

いや、この疑問は後でいいだろう。

それよりも、敵？

何故、私が姉様と敵対しなければいけないのだろうか？ ……私が
守護騎士側だからか。

……詳しい事は分からないが姉様と敵対するのは正直な話、少し気
分が落ち込む。

「ですから、私とはあまり話さない方が良いでしょう」

「……そうですか」

「しかし、メアに1つだけ助言を言っておきましょう」

私はその言葉で姉様のことを見る。

助言とは一体何なんだろうか？

私にとつての助言。

間違いなく意味があるものだと思うが、姉様の言葉を聞こう。

「闇は真実では無く、夜天こそが真実である」

そう言って、姉様は私達の目の前から消えた。

Side：リア・レスティング・レイズトゥルズ

私はメアに助言を言ってあの場から消えましたが、実は案外近い場所に移動をしてました。

距離にして300メートル程です。

その場所で、私は自らの魔力を感じ取られないように小さな結界を張ります。

「…………準備はいいですね」

正直な話、私にとって嬉しい事なのですが、何故こうさせたか分かりません。

メアに会えたことは嬉しいです。ですが、その為の口実が高町なのは守ることだなんて、おかしい話です。

…………ですが、その本人から聞けば一発で分かります。

そう考え、私は間違いなくこの場にいる人に向かって言葉を発する。

「そろそろ出てきてください」

そして、その言葉で黒髪黒髪の少年が現れた。

「やあ、久しぶりだね。…………リア」

その人のことを私は『ラクト』と呼んでいる。

敵同士（後書き）

どうも、まーたです。

いやあ、久しぶりに出た主人公（多分）www
予定ではもっと早く出る予定だったのに、意外と時間がかかりました。

次回から、何話かラクト視点になりますが、出番が多くないと思います。

さて、主人公（多分）のことはおいておいて

リアのことです。

今回、リアは小さいということを書きましたが、細かい設定などを書けなかったので、近いうちに設定回として出します。

では、この（駄）作品に感想をくれた Arishia 様、なっぺ様、暇人様、本当にありがとうございます。

では、今回はこの辺で失礼します。

P S . 予定とは大分ずれてしまいすみません。
リアは2話後活躍予定です。

優しい少女（前書き）

け、結構、グダグダな出来になってしまった……。
も、申し訳ないです

優しい少女

S i d e : ラクト

白い髪、白い瞳、白く透き通った肌。

左目は自らの白い髪で隠していて、隠していない右目で俺のことを見つめてくる。

そこに適度な風が吹き、白髪が綺麗に舞う。

…… ホント、どこのお嬢様って言いたいぐらいな容姿だよ。

「お久しぶりです。……ラクト様」

そしてその少女……リアは俺のことを様付けで呼んでくる。

しかし、その声からは若干の疑心……というよりは不安の様なものも混じっていた。

まあ、分からなくもない。多分、俺の行動に疑心や不安があったのだろう。

……っ て、その前に。

「様付けは止めてって言うてるでしょ？」

うん、これ必須。……こんなこと言う理由？

『小さい女の子にそんな事を言わせていて、ラクトはロリコンであ

る
』

みたいな感じに思われたくないからだよ。

いや、まあ、俺の容姿からして問題無いんだけどさ、そういう知識を知っている者としては、さすがに……………。

「何故ですか？」

「何故って言っても、…………君は知らなくていい事だよ」

「…………？」

そう言つて首を傾げるリア。

…………その手の趣味の者ロリコンだったら、お持ち帰りしたいぐらい可愛い行動だろう。

でも、俺にはそんな趣味は無い。…………いたって、ノーマルである。

「って、君はいつも俺のことを『ラクト』って呼んでるでしょ？」

「…………すみません、ラクトを少しからかいたかったので」

「…………酷いね」

「フフッ」

怖い。純粹に怖い。

何を考えてるのか分からないけど、いつも人を弄ることしか考えていないようなその笑顔は怖いです、リアさん。

…………さて、余興は

「余興はここまでにしましょうか、ラクト」

この辺で終わりにしようか。

……うん、考えてることは一緒だったね。

俺もリアとはこんな会話をするだけにリアの目の前に現れた訳ではないし……。

リアとは話しておかなければいけない真面目な話がある。

「うん、そうしようか」

俺のその言葉でリアは真剣な顔つきになり、俺のことを見てくる。
……さて、色々話し合おうかな？

「じゃあ、君は何が聞きたい？」

その言葉にリアは口を開く。

S i d e : リアリスティング

「じゃあ、君は何が聞きたい？」

ラクトのその言葉に私は聞きたい事を頭に浮かべる。

しかし私は、これから私が彼に聞こうとする内容を既に分かっているような、……私の全てを見抜かれているような、そんな気持ちに包まれる。

そんなことを考えながら、思い浮かべた1つの疑問をラクトにぶつける。

「ラクトは私とメアを再会させようと思いましたか？」

最初にこの質問です。

……本来、あの場で私はメアとは再会するつもりは無かったのですが、予想より早くメアがあの場合に来てしまったので再会してしまいました。

ですが、少しだけ不思議な点があったのです。

それは、途中まで分かっていたメアの気配が急に無くなったということです。

……まるで、誰かがメアが近付いているのを分からせないように。そして、そんな器用なことができる人物が目の前にいます。

「どうかな？ でも、君の考えで間違っていないと思うよ、とだけ言っておくよ」

「分かりました」

……その返答の仕方は間違っていないと言っ事ですか。

まあ、再会するつもりが無かったと言っても、メアのあの恥ずかしがっている声が聞けたので、プラスマイナスゼロ。

……いえ、むしろプラスですね。

さて、次の質問です。

「メアにストーリーカ行為をしてる犬どもをどう思いますか？」

どうも、最近そのような行為をされてたみたいですので、一応ラク
トに聞いておきます。

……人の妹にそのような行為をしないでほしいものですけどね。

「別に？ 特に何も思わないよ。……処分したいならご勝手にどう
ぞ」

「……了解です」

……？ 正直に言つてこの返答には予想外ですね。

いつもなら、「処分したいならご勝手にどうぞ」なんて台詞を聞き
ませんから。

「あ、でも、……君が思っている犬どもは殺さないでね。それに、
正確には犬どもじゃなくて、猫どもね」

「……？ 分かりました」

ラクトがいうなら殺しません。

しかし、猫？ ラクトは猫が好きなのでしょうか？ まあ、なんと
なくそう言ったかもしれませんで気にしません。

「次が最後の質問です」

「分かった」

私が一番気になっていた事です。

「何故私に、『桃色の魔力光の少女を守れ』などと言ったのですか
？」

少し前にラクトから通信があり、その一言だけ言つて通信を切つた

という、少し身勝手な行動でしたが、私としてはそれを無視する訳にもいきませんので、此処に来た訳ですが……。

守ると言うだけなら、ラクトだけでも十分に出来た筈です。

ですが、ラクトはそれをしなかった。前に同じような事を疑問に思いましたが、やはり気になります。

「あ、そのこと？ ……それはね、まあ、そのままなだけだよ」

ラクトは少しとぼけたような口調で喋る。

……正直、そのような演技は止めて欲しいのですが。私ではありませんし……。

「俺は、高町なのは守って欲しかったんだよ」

「……それなら、それならラクトもしようと思えば出来た筈です」

「ああ、ゴメンゴメン。言い方が悪かったね」

「……………」

「正確には、君に……リア・リスティング・レイズトゥルズに高町なのは守って欲しかったんだよ」

「え？」

……何故？ 何故私に高町なのは守って欲しいなどと？ 理解できません。

……本当に彼は何を考えているのでしょうか？

「……前に一緒に行動してた時のことを覚えてる？」

「それはもちろんです」

……あの時は本当に楽しかった。

……辛いことを忘れさせてくれるくらいに……楽しかった。

あの頃のことを私は一日も忘れたことはありません。

……と、回想に浸っている場合ではありませんね。今は、その頃の事と疑問を結びつけないと……。

「それならよかった。……それじゃ、単刀直入に言うね」

そう言つと、彼はあの時のような辛^{……}そうな表情をする。

私は彼が何故、辛い表情をしているのか分かりませんが、彼の言葉を待ちます。

そして、彼は言う。

「彼女が前に言つてた『優しい少女』なんだよ」

と。

S i d e : メ ア リ ス テ ィ ン グ

……『闇は真実では無く、夜天こそが真実である』か。

姉様の残した助言の意味は分らん。しかし、姉様が何の理由も無く、私に意味も無い事を言うとは思えない。

……まったく、こういう所は昔から変わっていない。

ヒントだけを出し、答えは私に見つけさせるところは。

だが、私は姉様のそんな所が好きだ。常に、という訳ではないが、私の事を考えているからだ。私を甘やかし過ぎず、ちゃんと考えてくれている。だから好きだ。

……と、少し考え過ぎたな。

今は姉様の事を考えるよりも前に、しなければいけないことがある。

「さて、シャマル、ヴィータ、何か聞きたい事はあるか？」

しなければいけないというのは、この二人に私の事情を話すということだ。

ヴィータとシャマルは私の言葉に頷き、恐らく、念話でどちらが聞くか相談したのだろう。

少し時間が経ってから、ヴィータが代表して喋った。

「……今までアタシは、メアのことを信じていなかったわけじゃねえ。今でも、メアの事は信じてる。……でも、出会った時から今までアタシはメアの事を何も知らない。メアがはやての為に行動してくれる良い奴っているのは分かっている。……でも、メアが今までどんなことをしてたとか、メアの過去は知らねえ。だから、教えてくれ」

ヴィータはメアを真剣な眼差しで見ながら言う。

「…………メアの姿って何だ？」
「……………」

……今まで私はヴィータの事を子供だ、とばかり思っていたが、さすがはロストログアとして長く生きてきただけはある、とだけ言っておこう。自分の意思を持っているというのは凄い事だな。

…………ふっ、これではまるで、私とは真逆だな。

「もちろん、言いたくないっていうなら、言わなくても良い。……それでも、メアに対する気持ちは変わらねえからな」

「随分と信頼されているんだな。……いいだろう、ヴィータに免じて私の事を話そう。まあ、全ては話せないがな」
「十分だ」

それは良かった。私としても全てを話すのは気が引けるからな。

「だが、私の事を話すのはまた今度だ。今はシグナムもザフィーラもないからな」

「分かった」

「それと、ヴォルケンリッターが全員揃ったとしても、その時にはまだ話せない」

「…………？ 結局、話してくれないのか？」

「いや、話すのは満月の時と、決めているからだ」

これは必須条件だ。

でなければ、恐らく話すことすらできないだろう。

満月の時こそ、月明かりが最も明るいからな。

と、まあ、そんな感じで話がまとまり、私達は八神譲の家へと戻って行った。

Side:ラクト

おおー、驚いてるリアの顔なんて久しぶりに見た。

大きく目を見開いて、いつもなら見せないようなレアな表情。

なので、俺は結構レアな表情をカメラで記録する……………ことができなかった。

「人の顔を勝手にとるのは良い事ではありませんよ」

「…………だからって、カメラを壊さないで欲しかったのですが…………」

記録出来なかった理由としては、メアと同じ凍結の魔力変換でカメラを氷り漬けにした後、木端微塵に砕かれた。

時間にして1秒にも満たないです。…………早いな、相変わらず。

にしても、あのカメラ。…………結構高かったりするんだけどなあ。まあ、いいか。…………予備として、同じのが3つあるから。

「…………それで、彼女が『優しい少女』なんですよね？」

そんな事を考えていたら、リアが話を戻した。

「そうだよ。だから、一回君に見て貰おうかな？　って思ったわけですよ」

「成程。彼女が……」

「とは言っても、君はあまり知らないでしょ？　彼女のこと」

だって、俺言ってないし。少ししか、喋ってないし。

……逆に知ってたら驚きだよ。

「はい。まあ、話を聞いた時から興味があつたので、どんな人物なのだろう？　と、思っていました」

「君が興味を持つ、ねえ」

「……む。何ですかその視線は。まるで、『ええ、リアがメア意外の人に興味を持つ？　シスコンであるリアがあ？　無い無い。明日は槍でも降ってくるのかな？』とでも思ってる視線は」

「……………」

……………。

「……………」

「無視されるのは辛いのですが……」

「はあ。君が俺をどんな風に思っているのかは、よく分かったよ」

「そうですか」

「まあ、いいや。……ということで、リアは好きに行動でもしていいよ」

「何が、『ということ』なのかは知りませんが、そうさせて貰います」

そう言って、彼女は俺の目の前から消えた。
……相変わらず、彼女は唐突だね。ホント。

「さて、俺も行こうかな？ ……一番、リアに言いたかったことを言うの忘れちゃった。テヘッ」

そして相変わらず、俺の『テヘッ』はキモイ。

「1人漫才は止めてっと。 ……まあ、忘れては無かったんだけど、伝えなかったただけだしね」

なのはの件の方は、リアに嘘を吐いてるから問題無いとして。
意図的に伝えなかったんだよね。 ……リアとメアにとって、かなり重要なことを。

このままじゃ、

「メアリスティングは精神的に壊れるってことを、ね」

……まったく、相変わらず最低な奴だな。俺は。

優しい少女（後書き）

どうも、まーたです。

はい！ 前書きにも書きましたように、グダグダな話になって申し訳ないです。

近いうちに、書きなおします。

と、これはおいておいて。

やってしまった。……またしてもやってしまった。

また、伏線を張ってしまった。

と、現在、猛烈に反省をしております。

ですが、今回の話で出てきたメアの方の伏線の方が回収が早いので、そちらの方を頭に入れておいてください。

『優しい少女』の方は、無視でいいです！

回収が当分、滅茶苦茶先なので。

では、このような（駄）作品に感想をくれた Arishia 様、なっぺ様、ばっど様、本当にありがとうございます！

では、今回はこの辺で失礼します。

シナリオ（前書き）

すみません、短いです。

シナリオ

Side：ラクト

メアが壊れるということを知っていて黙っているということは、最低な行動だろう。

だけど、今回も、俺が解決させては意味がない。

前回の事でリアが学ぶべきことは、目的の為なら手段を選ぶなどいうことだし……。

多分、平気でしょ？

「……呑気だな、俺って」

まあ、いざという時は俺が動けば問題無いと思う………多分。絶対に平気？ と聞かれれば、絶対とは限らないと答える。

何故なら、俺は前に少しだけ失敗しているのだから。

前の時の暴走？ ……まあ、とにかく、前の時のメアリスティングの対処の仕方を少し失敗してしまったが故に、メアリスティングは壊れてしまう。

リアとメアから見てみたら、俺は物凄く迷惑な存在だろう。だけど、あの時は仕方がない。………っていうのは言い訳だな。

ただ、あの時の俺は今の俺と比べて弱かった。ただそれだけだ。今度は間違いを犯さずに、確実に実行するだけだね。

……さて、メアの事は今はこの辺にしておいて。

「それよりも考えるべき事は、はやての事だ」

結構前に図書館で出会った車椅子の少女。前髪をピンで留めて、関西弁を使う少女。

……前に会っていた時は魔法には関わっていなかった筈なんだけども。

運が良いのやら、悪いのやら。

「どうして、夜天の……つと、今は闇の書って言われてるんだっけ？」

まあ、どっちでもいいや。

どうして、闇の書の主選ばれるんだろうね？

……いや、まったく、偶然というのは、本当に怖いモノだ。

はやての体をどうしようかな？

今すぐ、俺が干渉してはやての体を治すか？ でもそれだと、闇の書のバグは取り除けないからダメだね。

そこで、少し唸るようにはやての事をどうするか考えていた。

「……………あ」

そこで、ある事を思いつく。

「稀少能力レアスキルを使えば、全て解決じゃん」

と。

「……でも、稀少能力レアスキルはあまり使いたくないんだけどな。まあ、代償が無いならそんな事を考えなくても済むけど……。残念ながら代償はある。」

「……となると、非人道的な方法に加えて、最小限の稀少能力レアスキルで解決するっていうのが一番良い方法だね。」

そんな結論を出して、俺は転移魔法が出来る準備をする。

目的地は俺が物凄く憎んでいる場所だ。

Side：

ここはとある病室。その中にある1つのベッドに高町なのはが横になっっていた。

彼女はリアによってリンカーコアの蒐集を軽減されたのだが、それでも僅かにリンカーコアを蒐集してしまった為に検査として、横になっっていた。

「……メアさん」

そんな中、なのははメアの名前を口に出す。

なのはが横になって考えているのはメアのことばかりだ。

ヴィータが襲いかかって来た時に現れたメア。そして、ヴィータを信頼しているような声で会話をして、そのまま何処かに行ってしまった。

なのはから見ても、それは裏切りとも見れる行為である。

しかし、なのはは数か月前にジュエルシードと一緒に封印した人で、優しくて良い人といった、そんなイメージがなのはの頭の中にある。

だからこそ、なのはは混乱していた。

メアは本当に裏切ったのか？ それとも、メアなりに何かを考えて行動しているのか？

など、色々な考えが浮かぶ。

そんな中、病室のドアが開いた。

中に入って来たのは、金髪の少女。メアと同じく魔法関係者で、ジュエルシードをめぐって戦った、フェイト・テストロッサだ。

「……なのは」

「あ、フェイトちゃん！」

ヴィータのグラーファイゼンをフェイトが受け止めた時も再会はしているが、今は落ち着いた中での再会である為、なのはとフェイトは顔を合わせると、照れくさそうに笑い合う。

「あ、ごめんね。折角の再会がこんなで……。怪我、大丈夫？」

「あ、うん、こんなの全然。……それより、なのはは？」

「私も平気だよ」

二人は今回の戦闘での傷を互いに心配する。

なのははもう既に回復していて、フェイトも大した怪我はしていない。

そして、なのははベッドから起きて立ち上がろうとするが、足元がふらつき、倒れそうになる。

「なのはっ!？」

しかし、それをフェイトが支えて、地面と衝突するということは無くなくなった。

「あ、ありがとう。フェイトちゃん」

「……うん」

フェイトがなのはを支えているということもあり、二人の距離は先程よりもずっと近い。

そして、二人は再会の喜びを分かち合うように抱き合った。

「ん、二人とも何してんの？」

病室のドアから黒髪の少年が入りながらそう言った。そして、その言葉で二人は自分達が何をしているのかを理解する。

「ラ、ラクトツ！？」
「ラクト君っ！？」

というより、そんなことを言ったのは（一応）主人公であるラクトだった。

……クロノより空気読めない奴だな。コイツ。

そんな（一応主人公である）ラクトは、なのはとフェイトを見て考えごとをする。

そして、考えがまとまったのか、口を開いた。

「あ、邪魔したね。……とでも言っておくよ」

ラクトは「そんな趣味があったのか」と言わんばかりな視線を二人に向けながらそう言う。その視線を見て、慌てながら否定する。

「ち、違うよっ！？ ラクトツ！！」

「そ、そうだよっ！ ラクト君の勘違いだよっ！！」

まあ、こんな風に。

一方、ラクトは昔と雰囲気が変わったなあ〜と思っていたりする。

「……じゃあ、そういう事にしておくよ」

ラクトは、なのはの変わりように驚きながらも、とりあえずこの件？ は終わった。

閑話休題。

先程の件が終わり、改めてなのはとフェイトはラクトの存在に驚く。

ここまで一緒に来たというのであれば驚きはしないだろうが、どうやって此処まで来れたのか？　ということだ。

「とりあえず、高町さんは久しぶりかな？」

その時、ラクトはそう言う。

「私は？　……フェイトちゃんにはもう会ってるの？」

なのはは『高町さんは』という言葉聞いて、疑問が浮かぶ。何故なら、その言葉から考えると、フェイトとは既に出会っているということになるからだ。

一方、ラクトはなのはの言葉を聞いて、クエッションマークが浮かぶ。

「……もしかして、高町さんに言って無い？」

「……ごめんラクト。まだ、なのはには言って無い」

「そうですか」

「……？」

ラクトとフェイトの会話の内容が理解できずに首を傾げるなのは。ラクトはそんなのはを見て、なのはに説明をする。

「えっとね、実はフェイトと俺はさっき再会してるんだ」

「……でも、いつの間に？」

「だから、今回の戦闘中に。……君は気を失っていたから分からないと思うけどね」

「え？」

「ま、理解は出来ないと思うけど、そういうことだから」

淡々とした口調になのはは驚きを隠せない。

確かに、胸から手が生えた時からの記憶が抜けてしまっているが、それなら、どうして一緒に此処に来なかったのだろう？ など、そんな疑問が浮かぶ。

しかし、なのははラクトがこちら側にいるという事に事実には驚いている。

先程、メアはあちら側と考えていたところだからだ。

なのはは、ラクトとメアと一緒に行動していたと言う事は知っていて、メアとラクトは共にあちら側と思っていた。

そんなラクトが今、なのはの目の前にいるのだ。

そのことを理解して、なのはは、ラクトにメアの事を聞こうとする。

「あ、メアの事は知らないよ？ 今回は独断の行動みたいだしね」

しかし、なのはの考えを読んでか、ラクトは不意にそう言う。

「それと、俺は君達の仲間になった覚えも無い。それは、フェイトにも言っている」

「……う、うん」

「まあ、絶体絶命のピンチっていう時だけは助けてあげるけど。…それ以外は基本的に俺は無所属の方向でヨロシク」

その言葉に、なのはの髪がシュンと下に下がる。

ラクトはそれを興味深そうに見るが、視線を外し、そのまま何も言わず、病室から出て行ってしまった。

そして、残された二人の内、フェイトがなのはに今まで出来事の説

明をした。

S i d e : ラクト

結構冷たい事を言っちゃったかな？　なのはに。

まあ、いいや。ある程度、距離を取っていた方が俺にとって良い。

俺は、高町なのはとはあまり関係のない人物として演じ続ければ良いからさ……。

と、暗い雰囲気は嫌いなので、とつと次に行ってみよ。

次というのは俺が憎んでいる管理局に入り込んだ目的の事だ。

なのはに会ったと言う事で、一つ目の目的は達成したから、今度は二つ目の目的を果たしに行く。

その二つ目というのは、ギル・グレアムに会いに行く事だ。

と言っても、彼と会話をするつもりは全くと言っても良い程に無い。

「さて、俺のシナリオ通りに動いてくれるのを待つだけか……」

そう言って、ラクトは歩いて行った。

シナリオ（後書き）

あとがきこーなー

まーた「ふう、まず最初に一言。……内容が薄く、文章が短くて申し訳ありません！」

メア「まったく、何をやっているんだ？ この駄作者が」

ラクト「（久しぶりの会話方式だ……）」

まーた「ホント、すみません。……誰か、文才を分けてください（泣）」

メア「人に頼るな、自分で何とかしろ」

まーた「はい……」

ラクト「んゝ、でも、この作品って、正直に言ってグダグダもいいところじゃない？ さすがに、こういう文章は好まれないと思うけど……」

まーた「グサツ！？」

リア「……ラクト、少し言い方というのがありますよ」

まーた「（おお！ リアは俺を慰めてくれるのかっ！？）」

リア「『こつという作品は好まれないと思うけど……』では無く、既

に、好まれ無いを通り過ぎて、興味が無いと思われるようです」

まーた・メア・まーた「「「え?」「」」

リア「……さて、このような（駄作者が書いた、駄）作品に感想をくれたなっぺ様、ありがとうございます」

メア「成程な、感想がなっぺ様だけになったということか……」

リア「そういう事です。……では、今回はこの辺で失礼します」

ラクト「作者、これで俺の苦しみが理解出来た?」

まーた「ああ、今まで本当にスマン……」

リアとシゲナム（前書き）

今回は管理局側から少し離れ、八神家の方です。
あ、戦闘シーンは無いです。

リアとシゲナム

Side：メアリスティング

「相変わらず、八神嬢の作った料理は美味い」

食事中に何かを言うのは行儀の悪い行いだが私の作る料理とは天地の差だから、思わず口に出してしまう。

……ラクトの作った料理？ 悪いが比べる気にもならん。

………当たり前のように1人で語っていたので、どんな状況になっているか説明していなかった。とは言え、最早説明はいらないと思うが……。

一応、言っておく。私達は八神嬢の作った夜ご飯を食べていたのだ。

「そんなことないで？」

「……だから言っているだろう？ そこは領けと」

「何でや？」

うむ！ 私の料理のレベルの差を実感してしまうからだ！

とは言えず、八神嬢には適当にごまかす。

だが、ごまかせばごまかす程、私の心のなかのナニかが壊れていくような感覚があるが、それは無視する。

……無視しなければ辛いとか、そういうことじゃないぞ？

「ごちそうさまでした」

その時、いつもより早くシグナムが食事を終えた。

「今日は随分と早いな、シグナム」

「まあな。……主、すみませんが外出します」

……外出？ シグナムが？ ……本当に珍しい事もあることだ。

シグナムは基本的に家にいて新聞や本を読んでいるだけだ。

悪く言ってしまうえば、ニートだったか？

……とにかく、それに近い生活を行っているシグナムが外出とは驚きだ。

「……メア、今私の事を馬鹿にしなかったか？」

「気のせいじゃないか？」

「……気にしすぎか。忘れてくれ」

「わかった」

危ない危ない。あと少しで、私の命が大変なことになっていただろう。

今の声は冷や汗が止まらないほどだったからな

「いつてきます、主」

「いつてらっしゃい。……あ、シグナムはいつぐらいに戻るつもりなんや？」

「一時間程で戻って来れると思いますので」

「気をつけてな」

「はい」

……ん？ 今、シグナムの顔が強張ったような気がしたが……。

まあ、気のせいだろう。

そんな事を考えている内にシグナムは玄関から外に出ていった。

S i d e : リアリスティング

ここは海鳴にあるとある公園。

その公園にあるブランコに私は座っています。

「……どうやら、私の思い通りになるようですね」

まあ、何が思い通りなのかと言うと、すぐに分かりますのでご安心を。

……って、誰に向かって言っているのでしょうか？ まあ、いいです。

ですが、最近の伏線の多さに困っているというのも、また事実でありまして……。

……え？ メタ発言？ 気にしたら負けですよ？

「と、そんなことを言ってる間に来たみたいですね」

何が来たかと言うと、1人の大人の女性です。

……その女性の簡単な特徴は、ピンク色の髪でポニーテイル。

と言ったところでしょうか？

とりあえずは確認をしなければいけませんね。

「あなたがヴォルケンリッターのシグナムさんですか？」

S i d e :

月明かりの光りにリアの白髪が光り、綺麗になびく。

「あなたがヴォルケンリッターのシグナムさんですか？」

どこかのお姫様を連想させるような振る舞いで、シグナムに確認をする。

「……何故、私の名前を知っている？」

「その反応は間違っていないことですね。もし、間違っていたら恥ずかしかったです」

「人の話を聞いているのか？」

「せっかちですね。……短期は損気なんですよ、シグナムさん」
「……………」

シグナムはリアの挑発に少しだけ苛立つが、怒りが湧いてくる程では無かった。

一方、自分のペースで会話ができているリアは、そんなシグナムを見て感心する。

（前に、ヴィータさんとお話した時はすぐに攻撃してきましたが、さすがは守護騎士の将と言ったところでしょうか？ ……冷静です）

関心しながらも、リアはシグナムの事を警戒する。

「……ですが、名乗らないというのは失礼ですね」

「……………」

「私の名前はリア・リスティング・レイズトルズ。……メアの姉です」

その言葉にシグナムは驚くが、すぐに元の表情に戻る。

「……貴方がメアの姉ですか？」

「ええ。……やはり、既に貴方達の間では私の事を話していたようですね」

シグナムはメアとヴィータとシャルルから、前回の時の戦闘でメアの姉が現れた、ということを知り、三人から聞いていたのだ。

故に、シグナムは驚いた表情からすぐに元の表情に戻った。

「さて、自己紹介も終わった事ですし……シグナムさんは目的を果たしてはどうですか？ 私はその為に分かりやすいように魔力を出していたのですから」

「……やはりそうか」

シグナムは八神家にいる時に、まったく知らない魔力が自分に対して当てられていると感じて1人でここまで来たのだ。

「それで、私を呼び出した理由は何だ？ もし、くだらない理由で呼び出したと言ふのなら、メアの姉とは言え、リンカーコアを蒐集させてもらうぞ」

「……面白いですね。此処に呼んだ理由は厳密に言えば違いますが、私と戦ってみますか？ ……もし、私に勝てたと言ふのであれば、私のリンカーコアを好きなだけ蒐集しても構いませんよ」

その言葉にシグナムは、リアがメアの姉であるという事実よりも驚く。

というのも、ヴォルケンリッターは魔力を持っている人物を襲って、瀕死の状態にしてからリンカーコアを蒐集していた。それでも大抵の者はリンカーコアを蒐集されるまで抵抗を見せていた。

それが当たり前だと、ヴォルケンリッター達は思っていた。

しかしシグナムの目の前にいるリアは、シグナムが勝ったら抵抗しないで蒐集させてくれると言っている。

「まあ、貴方が私に勝てたら……の話ですが」

「……面白い」

その言葉にシグナムは相棒であるレバンティンを構え

「烈火の将、シグナム。……いざ、参る」

リアに斬りかかった。

S i d e : メアリスティング

……シグナムめ、一体何処を歩いているのだ？

まったく、こんな夜遅くまで帰って来ないというのはシグナムにしては珍しいことだが、八神嬢が心配していたぞ。

何故、過去形なのかというと私が睡眠不足は悪いと言って、八神嬢を寝かせたからだ。

「シグナムの奴、遅えな」

「確かに、珍しいですよ。シグナムがこんな時間まで戻って来ないなんて」

「……そうだな」

ヴィータとシャマル、それにザフィーラまでシグナムの事を心配し

ていた。

……ザフィーラの声、久しぶりに聞いたぞ。

と、冗談はさておき。

本当に何処に行った？ 先程から念話を送るが、どうにも繋がらない。

念話妨害などは確認できないという点から、シグナム自身が念話に
応答しないということだ。

……先程から嫌な考えばかりが浮かんでくる。

シグナム自身が応答しないということは、シグナムが応答できない
状況に立たされていると考える事ができる。

つまり

「……管理局に捕まったか？」

その可能性がある。

「なっ！？ バカなことやってんじゃねえよ！ シグナムが捕まる
訳ないだろっ！？」

「……音量を下げる、ヴィータ。八神嬢が起きてしまう」

「あ、悪い」

「だが、私もシグナムが管理局に捕まるとは思えない。シグナムぐ
らいの実力者なら、逃げるぐらいの事は可能の筈だ」

しかし、管理局の人数にもよるな……。

人数が少なければ、逃げる事は可能。逆に、人数が多ければ多いほど、逃げる事が難しくなる。

……この間、なのは嬢から（少しだが）蒐集した時から、まだあまり時間は経っていない。

だから、この短時間の間でそんなことができるとは思えんが……。

「とにかく、今からシグナムを探しに行くぞ」

……だからこそ、もう1つの可能性が出てくる。

第三者が、シグナムを拘束または殺しているという可能性だ。例えば、前に出会った仮面の男達。

不意をつけば、シグナムでもやられてしまう可能性はある。
正直に言って、前回の時はあと数秒遅れていたらマズかったしな……。

あの時は冷静な行動ができていたが、焦っていたのも事実。

……。

……嫌な考えはよそう。今は、シグナムを探すのが最優先行動だ。

そう考え、私達はシグナムを探しに外に出た。

Side:リアリスティング

「さすがは守護騎士の将。……少し手間取りましたよ」

「……………」

「黙りきりですか？ 酷いですね」

とは言え、この場合では酷いのは私の方だと思いますね。

「全身を氷り漬けにされて喋れというのは、あまりにも酷ですから」

さすがにそんな状態で喋るなんて不可能です。

「……まあ、ラクトならできそうな気がします。この際は忘れましょう。」

「……厳密に言えば、もう一人いますけど。それも、この際は忘れておきましょう。」

「……さて、関係の無い思考は中断して、今はこの状況をどうしましょう？」

シグナムさんとの戦いに熱中してしまって、この技を使ってしまったわけですが……。

反省です。猛烈に反省です。

ええ。それはもう、今すぐシグナムさんに土下座したぐらいに反省です。

「……ですがそろそろ、メアが貴方を見つけると思いますので、私はこの辺で失礼します」

シグナムさんにお時儀をして、私は逃げるようにその場を去りました。

「シグナムッ!!」

……どうやら、ギリギリセーフのようですね。

そんな事を思いながら、私は完全に消えた。

リアとシグナム（後書き）

あとがきこーなー

ラクト「出番が……」

まーた「さて、主人公（多分）は無視して、こちらで話を進めましょう」

リア「そうですね。……作者、今回の話は何が書きたかったのですか？」

まーた「……………（遠い目）」

リア「まさか考えなしに書いたとか、そんな風にほざきませんよね？」

まーた「一応、考えてるんだよ？ これでもさ」

リア「では、何を書きたかったのですか？」

まーた「ぶっちゃけると、オリジナルへの伏線だよ」

リア「……馬鹿ですか？ 貴方は」

まーた「酷いな。相変わらず」

リア「オリジナルって、貴方みたいな（駄作者で読者様に迷惑をか

けていて、更新速度は亀で、文章力は無いと言っても等しくて、屑みたいな）者がオリジナルなど書けるわけがないでしょう？」

まーた「グサツ!？」

リア「第一に原作の方も全然進めて無いのに、オリジナルなど……マジつけるwww」

まーた「キャラが変わってる。……でも、問題点はそこなんだよ）文才的なことを除いたら）」

リア「どういうことでしょうか？」

まーた「だから、メアと君のことをA's後に書くつもりでいたんだけど、今回の話を書いている途中に、両方とも混ぜちゃって良くね？　と思ったりした……」

リア「それは無謀と言います」

まーた「グサツ!？」

リア「まあ、好きなように。……さて、感想をくれた、希竜刹那様、Arishia様、なっぺ様、ありがとうございます」

まーた「というわけで、アンケート取ります」

1、両方とも混ぜちゃってもいいんじゃない？

2、いやいや、原作やってからオリジナルでしょ？

3、 両方とも無理だから、やらない方がいいと思う

まーた「の中から1つ選んで欲しいです！」

リア「……みたいなので、答えてください。本当に申し訳ありません、この（屑）作者が」

まーた「（優しさの欠片も無い）……では、失礼します」

PV100、000逝きました……字が違っ？（前書き）

すみません、今回は前書きで感想の感謝をします。

感想を送ってくれた、Arishia様、希竜刹那様、なっぺ様、
ありがとうございます！

PV100、000逝きました……字が違っ？

ラクト「……………」

メア「……………」

リア「……………」

ラクト「……何で、俺達こんなところにいるの？」

メア「私は作者に呼ばれてここに来たのだが……」

リア「私も作者に呼ばれてここに来たのですが……。ラクトは違うのですか？」

ラクト「違うよ。何かいつものように過ごしていたら、後頭部を殴られて気絶し……って、ちょっとリアさん？」

リア「はい、何でしょう？」

ラクト「……どうして、そんな素晴らしい笑顔をしているのでしょうか？」

リア「そうですね？（ものすごく素晴らしい笑み）」

ラクト「……まあ、さすがに気にしすぎかな？（リアが俺の後頭部を殴って、気絶させたりするわけないよね？）」

リア「そう言えば、メアは知っていますか？」

メア「何がです？ 姉様」

リア「案外、人間を気絶させるといのは簡単なものですよ」

ラクト「（……物騒なことを言ってるけど、気のせいだよね？……）
」

リア「その方法とは、鈍器で気絶させたい相手の後頭部を思いっきり殴る事なのです」

ラクト「（気のせい気のせい気のせい気のせい……）」

メア「……結構、物騒なやり方ですね。それでは、相手が死んでしまふのでは？」

リア「ええ。ですが、ラクトにやった時は死にませんでしたので問題無いと思います」

ラクト「結局、俺の後頭部を殴ってんのっ！？」

リア「……フッフ バレてしまいましたか」

ラクト「何が『バレてしまいましたか』だよっ！ 下手したら、俺死んでたよっ！？」

リア「問題ありません」

ラクト「……何で言いきれなのさ?」

リア「仮に死んでしまった場合、証拠隠滅」

ラクト「余計にたちが悪いっ!! ホント、物騒すぎるよ!」

リア「滅すれば、問題はありません」

ラクト「続けないでっ! せつかく、言葉の途中にツッコミを入れたのにっ!」

メア「成程。……では、私も試してみます」

ラクト「……え?」

メア「……死ね」

【少々、お待ちください】

「メ、メアさん? ……その鈍器をしまってくれと」

「悪い、手が滑った」

「ギャーーーーッ!!!!!!」

「……む、気絶しませんよ。姉様」

「それは当たり前です。相手を気絶させるには一発ではなく、最低でも20発殴らなければ」

「そうなのですか？
……分かりました」

「来るなあー……っ！！ マジで！ 冗談抜きで死ん

「悪い、手が滑った」

「ギヤ——————————ッ！！！！！！！！」

「さで、最初のギャグをラクトさん、ありがとうございます！」

リア「そうですね……私的に最高の始まりです」

「……少々、やりすぎたような気がするぞ……」

「……少し、やりすぎたか？」

「……もう少し赤い液体が見たいです」

リア「……さて、（99パーセントの悪意のある）遊びはここまでにしましょう」

まーた「……何でだろう？ 物凄い悪意を感じただけど」

メア「奇遇だな、作者。私もだ」

リア「……ところで、作者は何故、私達を呼んだのですか？」

メア「そう言えばそうだったな。……何故呼んだのだ？」

まーた「あー、それはね……」

リア「それは？ ……何ですか？」

まーた「実は、このs「主人公がいない時に言うなあーっ！」……生きてたんだ」

ラクト「本編ならまだしも、番外編で死ぬってどんだけ理不尽な扱いなんだよ。俺って」

まーた「ラクトに死亡フラグが建ちましたあー！」

ラクト「……何で？」

まーた「今、言ったじゃん、『本編ならまだしも』って」

ラクト「え？ いやいや、そんなつもりで言った訳じゃないよ？ ただ、扱いのひどさに、さ……。分かるでしょ？」

まーた「全然、理解できないけど」

メア「何を言ってるんだ？」

リア「そんなの分かる訳がないじゃないですか」

ラクト「仲間がいねえー！ーっ！！」

リア「うるさいです。……死にたいんですか？」

ラクト「……すみませんでした」

まーた「（主人公弱っ！？）」

メア「（あまりにも一方的すぎるな）」

リア「……話を戻しましょう。……作者は何が言いたいんですか？」

まーた「あー、うん。実はこの小説のPVが100、000いったんだよね」

ラクト「………」

メア「………」

リア「………」

まーた「……何この反応？」

ラクト「……いや、だってさ」

メア「まあ、まさかとは思っていたが」

リア「まったく、これだから」

ラクト・メア・リア「「妄想と現実の判断もできないのか」
ですか」？」「」

まーた「……orz」

ラクト「いや、まさか作者がそんな戯言を言うとは思わなかったよ」

リア「こんな（駄）作品がPV100,000もいく筈がないじゃないですか」

まーた「嘘じゃないないよっ！！ マジだって！ 本気と書いてマジと読むほどに！」

ラクト「………」

メア「………」

リア「………」

ラクト「…………マジ?」

まーた「マジだって。さっきからそう言ってるけど…………」

ラクト「…………五ヶ月でPV100、000って遅くね?」

まーた「…………orz」

メア「まあ、更新速度が亀で、内容も面白くないというのなら当たり前か」

リア「…………ですが、目的だったPVは超えたのでよかったじゃないですか」

まーた「素直に喜べない! 君達は酷い、酷過ぎる!」

ラクト「いやだって、事実だし」

まーた「君もなのか? 主人公(多分)」

ラクト「…………それを言うな」

まーた「まあ、100、000越えが遅いとしても、これから頑張るさ」

リア「(と、言いつつも頑張れない作者なのでした…………)」

ラクト「ところで、作者」

まーた「何？」

ラクト「このグダグダな会話も終わらせないと、本編より長くなっちゃうよ？」

まーた「……マジだ」

メア「きちんと計画してから書けよ」

リア「メアの言う通りです」

まーた「（……結局、グダグダで終わりか。本当に文才というものが無いね、この作者）」

まーた「では、グダグダな会話に加え、グダグダな終わりで申し訳ありませんがこの辺で失礼します」

ラクト「とは言え、PV100,000も読んでくれてありがとう
ございます！」

メア「『できれば、こうした方が良い』などのアドバイスがあったら躊躇い無く送ってくれ。その方が作者曰く、更新速度があがるらしい」

リア「……では、失礼します」

PV100、000逝きました……字が違っ？（後書き）

ラクト「……それで、一体何がしたかったわけ？ PVが100、000越えて」

まーた「……特に予定は無い」

ラクト「つまり、テンションが上がったからこんな会話をしていたということ？」

まーた「そういうこと」

ラクト「本編書け」

まーた「……はい」

ラクト「と、その前に言う事があった」

まーた「何？」

ラクト「いつになったらArishia様とのコラボが完成するの？」

まーた「……分からない。でも、ネタとかは色々考えてるよ」

ラクト「だったら、本編よりも優先して書け」

まーた「……はい」

ラクト「まったく、本当にすみませんArishtia様」

まーた「……では、失礼します」

限界（前書き）

アンケートの結果が一番でしたので原作と混ぜてA・Sは進めたい
と思います。

それと、今回の話は原作キャラが空気です

限界

S i d e : リアリスティング

「今の声はメアの声ですね」

最後に聞いた「シグナムッ!!」と言う声。
あれは間違いなく、私の妹のメア・リスティング・レイズトゥルズの声です。

……シグナムさんには悪い事をしてしまいましたね。
それと、メアにも負担をかけてしまいました……。

「このことをどう思いますか？ ミーシャ」

「……分からないわね」

私の使い魔である【ミーシャ】と会話をする。
私はデバイスを持たない代わりに、使い魔を持っている。

ちなみに、ミーシャは猫の使い魔です。

「ただ、あの子に色々な感情を持たせるのは好ましく思わないわ」
そして、クールな女性を思わせるような口調。

「……やはりそうですね」

「ええ。……だけど、私は貴方に従っただけよ」

「ありがとうございます」

そんなクールビューティーで、私の事を思っている使い魔のミーシヤですが……。

……正直に言いますと

「どういたしまして。……今夜はもう寝たらどう？　貴方達はまだ子供でしょう？」

「……子供扱いしないでください」

ミーシヤは私の事を子供扱いするのです。

……これ以上ない屈辱です。
私はないすばでいーの大人なのです。

「いいえ、貴方はまだ子供よ。精神年齢が少し高いだけで」

「精神だけでも十分大人です！」

「……っふ」

「……何ですか？　その『貴方が大人？　それじゃ、世界に生きている者の殆どが大人よ』とでも言いたそうな表情は？」

「本当に貴方の言いがかりは面白いわね。……駄々っ子みたいだわ」

……やはりミーシャは私を子供扱いします。……泣きたいです。

私がメアを弄るのには、私が弄られているからというのも理由の一つにあるのです。

私がメアを弄る時は機嫌が良くなるので、きっと今のミーシャは機嫌が良いでしょう。

「しかし、ミーシャの言う通りにしますね。……少し眠たくなってきました」

目を細め欠伸をしながら、私はそう言う。

「だから言ったじゃない。貴方はまだ子供なのよ」

「……早く成長したいですね」

「そう？　なら早く寝て少しでも成長しなさい」

「……はい。そうします」

そして、私は近くの公園のベンチに横になり、そのまま瞳を閉じます。

そして、意識が完全に落ちる前にミーシャが何か言ったような気がしましたが、私は結局寝てしまったのでした。

Side・ミーシャ

「こんなところで寝たら風邪をひくわよ？　マイマスター」

「……………」

「……………もう完全に意識が落ちてるわね」

本当にこの子の頭のネジは何処かに飛んでしまっている。

いくら、精神年齢が高いと言っても所詮は子供であることに変わりはないのに…………。

だって、身体が震えてまでもこのベンチで寝てるのよ？

もう12月にも入って、夏とは比べ物にならないほどに寒くなっているのに、それでもこの子は自分の身体のことなんか無視してこんなところで寝ている。

「……………ごめんな、さい……………」

「……………はあ」

思わずため息を吐いてしまう。

この子は過去の出来事に縛られ過ぎてしまっている。…………別にその考えを否定する気は無いわ。ただ、この子の考えが過剰すぎるだけ。

メア・リスティング・レイストウルズを自分の手で守れなかったという過去は正直に言ってこの子から消した方が良いと思っているぐ

らいよ。

「溜め息ばかり吐いてると、幸せが逃げるよ」

「っ!？」

突然の声に私は驚き、声を出したであろう人物を見ようする。でも、私とその人物を見る前に首元に黒い剣が突き付けられていた。

「……もし俺が敵だったら死んでたよ。ミーシャ」

「あまり心臓に悪い事はしないでくれる？」

「ごめんごめん」

と、まったく言葉だけで反省する様子は無い。

私はこの男が嫌いだ。………いえ、嫌いというわけではないわね。

「君と会話をするのって随分久しぶりの事だね？」

「……そうね」

「結構冷たい反応だね。……でも、君は俺の事を嫌ってるみたいだし仕方がないと言えば、仕方がないのかな？」

「……前から言ってるでしょう？ 私は貴方の事は嫌いでは無いわ。……ただ、貴方の事は苦手なだけよ」

そう、私はラクトこの男の事が苦手だわ。

この男の事を私は初めて会った時に怖いと思った。

「……やっぱりなあ。初対面は大事なのかな？　もし、あの時に初対面を大切にしようっていう考えがあつたら君は俺の事を苦手としなかつたと思うし……」

「……………それで、私達に何の用かしら？」

これ以上この男とは会話したくない。
そんな考えが脳から離れず、私は無理矢理に話を変える。

「用があつたのはリアの方だったんだけど……。寝てるみたいだし、君に伝えるよ」

「……………メアリスティングの事かしら？」

「……………正解」

私とその名前を言うと、彼は驚いたような口調でそう言った。

「……………でも、この男は表情だけ驚いていて、内心はまったく驚いていないと思うけど。」

「まあ、メアのことだって分かってるなら俺の言いたい事は分かるよね？」

「……………やっぱり、そういうことなのね」

「だからその忠告を言いに来た」

メアリスティングが壊れてしまうということね……。
それも残った時間は余り残されていない。

「で、今回の件は俺は基本的に無所属でやり通すから」

「……………マスターの為に協力はしないということで良いのかしら？」

「その通り。……………今回は君達に協力しない」

「理由を聞いても良いかしら？」

「理由は優先順序が違うから。……………あ、でも絶体絶命のピンチ
って言う時だけ助けてあげるよ」

「……………」

この男がそう言っているということは、本当に絶体絶命の時以外は
助けてくれないみたいね。

……………でも私が、リア・リスティング・レイズトルズの使い魔であ
る私がそんな事を認める訳にはいかないわ。

「力尽くで貴方に協力してもらおうということはできないの？」

「馬鹿な考えは止めておいた方がリアの為になるよ。……………もしここ
で君が俺に攻撃してきたら、俺は君を殺すことになるだろうし」

「それでも私はマスターを少しでも楽にしたいのよ。そして、楽に
することができる人物が目の前にいる。こんなチャンスを見逃すこ
とはできる限りしたくない」

マスターが悲しくなるといふのなら、私の命を喜んで犠牲に捧げるわ。

「……………この子の悲しむ顔はもう二度と見たくないから」

「相変わらずの忠誠心の高さだね。…………ラルドデイスにも見習わせたいぐらいだよ」

「それはどうも。…………それで、私は今にも貴方に襲いかかろうとしているのだけど、我慢しなくちゃいけないの？」

「別に襲いかかってきてもいいよ。…………でも、それは何も意味がない。君はただ俺に殺されるだけ」

…………正直に言つて、私もここで彼を襲つたとしても意味がないと思うわ。

それほどまでに私と彼との実力差はあるから。

でも、私はマスターの為なら…………。

「それに、君が死んじやつたらリアも悲しむよ」

「…………え？」

「あれ？もしかしてそのことは考えても無かった？…………リアにとって君はメアと同じぐらいに大切な人と思つていふ言う事には気付かなかつた？だから君は俺に襲いかかるなんて馬鹿な考えが出てくるの？昔、俺に殺されかけたのにそれでも襲いかかるうするのは、大切にされているとは思わなかつたから？…………馬鹿

なの？　アホなの？　死ぬの？」

「そんな筈はないわ。……だって、私はマスターのことを子供扱いしてるし………何より、昔に私はマスターの命令を無視したのよ？」

そう私は昔、マスターの命令を無視した事がある。

マスターにとつて、とてもとても大切な命令だったのに……。

私はその命令を聞かなかった。

きつと、マスターは私に対して何も思っていない。ただ、命令を聞いてくれる都合のいい生き物と思っている筈なのに……。

「それだけ？」

「え？」

「だから、君がリアに大切に思われていないと思ってる理由はそれだけなのって聞いているんだけど……。もしそれだけなら、君は色々なことを考え過ぎてるただの馬鹿だよ」

だけど彼は私の考えをくだらないと言った。

……私は貴方のような人物じゃない。ただの……出来損ないの使い魔だ。

だから私は貴方のような考え方はすることができない。

「まあ、十人十色とも言出し、君の考えを完全に否定する気はないけどさ。……考え過ぎていうのもあまりよくないと思うよ？」

「……覚えておくわ」

「それじゃ、俺はこの辺で失」 …… つと、忘れてた」

ラクトはマスターに近づき、マスターの顔に触れる。

その瞬間、寒さで震えていたマスターの震えが嘘のように止まった。

「まったく、こんなところで寝ると風邪をひいちゃうよ。 …… 君もマスターに言わないとダメだよ？」

そう言つて、彼はどんな方法を使つたか分からないけど転移魔法以外の方法で目の前から消えた。

「…………… 散々、馬鹿か？ と言われたわね」

少しショックだわ。

…………… それでも、私が彼に対する感情は変わらないのだけど。

マスターに優しい。私に対しても助言をくれる。

それでも私は彼に対して『怖い』と思っているのね……………。

何か、もどかしいわ。

S i d e : ラ ク ト

「ミーシャはリアにこの事を伝える筈だから、とりあえずは目的達成かな？」

まったく、こんな寒い中で子供が公園で寝るって、どんだけ小さなホームレスだよ。

一応、寒さを感じにくくしたから問題は無いと思うけどさ。……リアとミーシャは馬鹿だね。

「実質上リアにもメアの事を伝えたし、ギル・グレアムさんにも闇の書の事は伝えた」

《あれは伝えたとは言わねえ。……脅したって言うんだ》

「細かいことは気にしない。おかげでギル・グレアムさんとは協力することができるじゃん」

《脅したからな》

「君もミーシャのような忠誠心があつたらいいんだけど」

いや、本当にリアは良い使い魔を持っている。

それに比べ、俺のデバイスは強者との戦いを求めて我儘……ミーシャとラルドデイスを交換できないかな？

《それはこちらの方が良いということでしょうか？ 我が主》

「……いや、別に良いんだけどさ。何か素直に言い過ぎて失礼な態

度を取らないか心配で……」

《安心しろ。テメーに迷惑はかけるつもりは無え》

「そう。……じゃあ、次はどうする？ ギル・グレアムさんにも伝えた、リアにも伝えた。……次は何をするべきかな？」

闇の書のバグとメアリスティングの件。

この二つは今すぐ解決することはできるけど、それは今回はしない。

理由としては最低限の稀少能力レアスキルで解決できないから。

《メアリスティングの様子を見たらどうだ？》

「ん、それもアリなんだけど。それをする予定も俺のシナリオに入ってるからさ」

《そうか。……なら高町なのははどうだ？》

「なのはを？ ……別に良いんだけど………」

《何だ？ それもテメーの言うシナリオに入ってるのか？ ……もし、入ってるならこれ以上の考えは出ねえな》

「なのはの事は入ってないよ？ ……ただ、何となくだよ」

意識して避けてるって訳じゃないけど……。彼女には必要以上に俺に関わって欲しくないんだよね……。欲を言えば、出来れば、お話とかしたいよ？

でもさ、記憶を消しちゃってるから出来ないんだよ。

彼女にとって今の俺はジュエルシードを集めていた時に会った1人の少年という認識だと思うから、いきなり慣れ慣れしくすることはできない。

「……………はあ」

《溜め息吐くと幸せが逃げるぞ?》

「……………そうだね。……………はあ」

俺は誰かに物事を伝えるけど、それはその人にとって良い方向に導くような言葉だ。

だけど、逆に誰かに物事を伝えられても俺はそれを実践しない。

……………この溜め息の件も『俺には幸せになる権利が無い』と思ってるから実践しない。

「……………ラルドデイス」

《何だ?》

「俺って、やっぱり最低な奴だよな?」

《さああな? それはテーマが結論を出す事じゃねえ。……………お前が関わった人間が決める事だ。デバイスである俺に決める事はできない》

「……………ありがとう」

俺はラルドデイスを最高の相棒って思ってるからこそ、こうして頼る。

弱い僕には何もできやしない。

「……と、そう思ったら俺は君に似ているかな？」

《……主？》

「いやいや、何でもないよ。少し回想に浸っていただけだから」

……本当は君に迷惑を掛けたくないよ。

でも、もう少しだけ俺の我儘に付き合ってね。

「よし！ することを決めたよ」

《そうか。……で、何をするんだ？》

「……移動しながら言つよ」

……俺は君の思うであろう事を実行するだけだ。

どんなに最低だとか、屑だとか、罵られようと俺は君の思うであろう事を実行する。

……その為なら、どんなことだってするよ。

例え人殺しであろうと、ね。

S i d e :

見渡す限り黒い空間に1人の黒い髪に紅い目の少女がいた。
その容姿はまるで、メアリスティングを幼くした容姿だ。

「……………限界が近付いてる」

小さくだが少女はそう言う。

無表情で何も感じさせないような口調でそう言う。

「……………どうしよう?」

幼い少女はこれから起きる出来事の解決法を考えるが見つからない。
考えている間はずっと無口で、何も無い場所をじっと見つめている。

「……………困った」

幼い少女は考えたが、結局解決法は出せなかった。

そうしてる間にも、幼い少女の言う限界は確実に近付いていた。

限界（後書き）

あとがきこーなー

まーた「新キャラ2人登場です」

ラクト「早くね？　いくらオリジナルでも」

まーた「まあ、A'sで活躍する人物を出来る限り早く決めておくかな？　って思ったから、つい」

ラクト「原作キャラを空気扱いにしないでね」

まーた「頑張ってみるさ。今回はオリジナルへの伏線だらけだったけど、次回はミーシャと話しあう前の君と管理局メンバーの話だから多分、問題はない」

ラクト「成程。（出番が安定してきて良かった……）」

まーた「さて、感想？　をくれたArisshia様、なっぺ様、暇人様ありがとうございます」

ラクト「あ、そう言えば行間変えたよね？」

まーた「まあ、ね」

ラクト「理由はあるの？」

まーた「一応。……最初の方の行間は読みやすいんだけど、間があ

り過ぎるかな？　と思ったから、行間を狭くしてみた。でも、それだと、前に比べて読みにくくなった。それで、この行間にしたら丁度いいじゃん、と思った訳ですよ」

ラクト「あゝ、君Wordで書いてるからか」

まーた「そういうこと。……また行間を変えてしまつて申し訳ないですが、今後はこれで固定しようかな？　と思います。反対意見などがあつたら感想覧にどうぞ」

ラクト「すみません、この（屑）作者が……」

まーた「酷いな。……では、失礼します。あ、それと今回で（多分）年内最後の更新です」

ラクト「みたいです。……では、失礼します」

まーた「本編の方は若干オリジナル強めのA'sにする予定でいますが、多少変わったら申し訳ありません」

出会いと信用（前書き）

12月31日まで終わらせる予定だったのに……

出会いと信用

S i d e : フェイト

私はなのはに今回の戦闘での出来事を説明していた。

なのはが気絶してる間にラクトが現れて、ラクトと（何を言ったのか分からないけど）会話をした後襲いかかってきた人達はその場を去っていったということ。

そして、私に『君達に仲間になったつもりは無い。もちろん、あの人達の仲間にもね』そう言ってラクトは消えた。

でも、さっき目の前にいたのだから本部の何処かにいる筈……。

説明を終え、なのはは首を傾げる。

「……結局、ラクト君はなにがしたいのかな？」

「分からないけど、誰かのために行動してると思う」

確信は無いけど私はそう思う。

だって、母さんと話せるようになったのはラクトが協力してくれたから。もし、ラクトがいなかったら母さんは間違いなく虚数空間に落ちていた。

……それだけじゃない。私にアリシア姉さんができたというのもラクトのおかげだ。

……一緒に行動してた時のラクトの行動は今考えてみたら全部意味があるものだった。

だから、私の時のように誰かの為に行動していると私は思ってる。

「……私もラクト君は誰かの為に行動してるって思ってるよ」

「……？　なのははラクトと親しいの？」

なのははラクトとあまり喋った事はないって思ってたけど……。違うのかな？

それに私の気のせいかもしれないけど、ラクトってなのはのことを避けてるような気もするけど……。

「うーん、そこまで親しいって訳じゃないかな？　でも、何故かそう思ってるの」

「そうなんだ。……そう言えばラクトって何でここに来たんだろう？」

「ふえ？　……何でフェイトちゃん？」

「だって、ラクトって管理局の事を嫌ってた筈だし……」

アースラになのはとラクトがいた時メアさんがラクトを追いかけててあまり姿は見てなかったけど、少なくとも良くは思ってたなかったと思う。

「あ、確かにラクト君ってクロノ君に酷い事をしてたもんね」

「……あゝ、うん」

そう言えば、ラクトはクロノを弄ってた記憶がある。

……私が一番覚えてるのはクロノの身長の高さで弄ってたことだ。

……いや、あれは弄っていたとは言わない。あれは完璧にクロノを虐めていた。

主に精神を。

「……そうだね」

正直、あのラクトは怖い。

それはもう言葉では表せないくらいに……。

「でも、クロノ君だけだよな？ ラクト君が酷い事をしたのって」

「……あ、確かに」

その事には気付かなかった。

ラクトってクロノ以外の人には案外普通に接していたと思う。

とは言っても、殆ど会話は行って無かったけど……。

「ラクト君って凄いいよね。フェイトちゃんだけじゃなくてプレシアさんとアリシアちゃんも救ったからさ」

「……うん。方法はまったく分からないけど」

……話が少し逸れるけど、私はリンディさんとラクトは何か秘密を隠してると思う。

私がそう思う理由は私達の処罰の件についてだ。

私達はジュエルシードを使って次元震まで起こしたと言うのに、ほぼ無罪というのはありえないからだ。

母さんですらあの驚きようで、今回の判決が異常なのは分かる。

いくらアースラの人達が弁護してくれたってあの判決は異常だ。

……変なことを考え過ぎだと思うけど、誰かが私達の判決を操作したと思う。

そしてそんなことがアースラにいた人達の中ではリンディさんとラクトだけだ。

だから、リンディさんとラクトは何かを隠してる。

普通ならありえないと思う事だけど、私は何故かそう思っていたのでした。

S i d e : ラ ク ト

俺はギル・グレアムさんに会い行くつもりだったけど、ギル・グレアムさんは何処にいるのか分からないということで管理局本部の中を見学しています。

「俺って相変わらずの呑気だな」

…… 本当はこんな場所にいたくないけど目的を果たしていないから、もう少しだけこの場所にいるつもりだ。

とは言え、管理局との関係は日が続につれ良くなっている。

まあ、この理由はまた今度話すとして……。

「ギル・グレアムさんに会うためにはどうしたらいいんだろう？」

アポイントメントも取ってなく、それ以前に管理局の人間でも無い俺がどんな方法で彼と接触することができるのかな？

と、そんな考えをしていたからか曲がり角から人が近付いてるのに気が付かず、俺と見知らぬ誰かが衝突した。

「い、い m」

「きゃっ!？」

俺の不注意で衝突してしまったから俺は謝ろうとしたんだけど、その前に俺は（声からして）女性が持っていた書類が落ちて、その書

まま類に押しつぶされた。

……女性がこんなにも重い書類を持てるの？

「う、ごめんなさい！」

「……あ、気にしなくて良いよ。俺が不甲斐ないから書類が落とさせちゃったし……」

「すぐに拾いますから！」

慌てながら女性は俺の上に乗っている書類を素早く拾って箱に詰めていく。

そして全ての書類を箱に詰めたと同時に俺は立ちあがった。

「……本当にすみません」

俺はぶつかった女性を確認すると猫の耳と尻尾を生やして、髪をメア程じゃないけど伸ばしている綺麗な人だった。

……猫の使い魔なのかな？ だとしたらミーシャと同じだ。

「だから、気にしなくていいよ。……それよりもそんなに重い物を持つて大変じゃないの？」

「そうですね。本当は重いですけど、父様の為にも頑張らないといけませんから」

その言い方だと、その『父様』っていうのがこの人の主になるのかな？

だとしたらここにもいるよ。忠誠心はかなり高い使い魔が……。俺の知ってる猫の使い魔^{ミィン}も滅茶苦茶忠誠心が高いからさ。……猫の使い魔って忠誠心が高いのかな？

「大変そうだね……荷物を運ぶのを手伝おうか？」

管理局の人間とは言え、こういう人がいたら手伝うって心に決める。

困っている人がいたら手伝うってというのは、手伝う人も手伝われる人も気分が良くなるから。

………っていうのは偽善だな。

本当の理由は昔に心に誓ったからなんだけど……。

それが偶然、解釈によっては善い行いをしたと思われるだけだ。

「い、いえ。迷惑をかけた人に手伝ってもらうのは……」

「気にしない気にしない。……人の好意は素直に受け取っておくべきだよ」

「そうですけど……」

「だ・か・ら、荷物をとつとと渡す！」

そう言つて、女性から（ある程度強引）に書類をもらう。

第三者から見たら荷物を奪ったって思われるかもしれないけど………。

「……それで、これをどこまで運べば良いの？」

「そうですね、なら私に着いて来てください」

「了解」

「……………あの渡してから言うのも少しおかしいかもしれませんが、本当に手伝ってもらっていいのでしょうか？」

「だから、さっき言ったでしょ？ 人の好意は素直に受け取っておくべきだって。」

「……………それに、もしここで俺が手伝わなくて君が1人で持っていたら、また誰かとぶつかる可能性もあるし、二人で持った方が最終的な効率が良い筈……………」

「……………それなら、手伝った方がいいでしょ？」

俺は良い奴だみたいに思われるかもしれないけど実際はさっきも言ったように、ただ心に誓った事を実行してるだけだ。

それが偶然が重なり良い奴と思われてしまう。

「……………だから、俺が行っている行動は偽善だ。」

「あゝ、平気ですか？」

「……………？ 何が？」

「いえ、少し顔色が良くなったように感じたので……………」

「少し考えごとをしてただけだよ。心配をかけてごめんね」

少し考えが表情にまで出ちゃったみたいだね。……反省つと。

それにしても、考えが表情にまで出るのは俺にしては結構珍しいな。いつもは何を考えているのか分からないような表情？ にしてるつもりだけど。

この女性に読み取られゝ ……そう言えば、まだ自己紹介してないや。

「そう言えば、貴方の名前は何て言うの？」

おっと、この人も同じことを思っていたみたいだ。

……んゝ、いつものような自己紹介で大丈夫だよな？

「確かにまだ自己紹介して無かったね。……俺の事はラクトって呼んでください」

さっきの疑問を浮かべた理由を言うと、P・T事件の時に管理局に対して攻撃と化したじゃん？ だから、その名前が残っていたら面倒だなと思った訳ですよ。

でも、この人の反応からしてその心配は杞憂に終わりそうだ。

「私はリーゼアリアよ。これからよろしくね、ラクト」

……………。

まあ、ある程度は猫の使い魔というところで、予想はしてたけど当たるとはね。

……どうやら、ギル・グレアムさんを探す必要は無さそうだ。

このまま身を流れに任せて行けば、会えるだろうしね。

「リーゼアリ　……少し長いからアリアって呼ぶけど構わないかな？」

「貴方の好きなようにしてもいいわ」

「そう？　……こちらこそよろしくね、アリア」

「ええ。よろしくね」

管理局の人間……いや、今回はギル・グレアムさんの使い魔じゃなかったら良い友達同士になれたと思うんだけどな……。

でも、少しだけ話をしてみる価値はあるかな？

「ねえ、アリア」

だから俺は

「八神はやてっていう人物を知ってる？」

彼女たちにとっての爆弾発言を躊躇いも無く言った。

Side :

リーゼアリアとリーゼロッテは八神はやてを行動を監視している。

闇の書の主選ばれた八神はやてを調べて両親がいないと分かった時、ギル・グレアムは彼女に援助を行った。もちろん、名前は伏せてだ。

彼女は1人暮らしの身だったので、監視は比較的に楽にできた。

しかし、闇の書が覚醒する前日にメアリスティングが八神はやてと出会った事で少しだけ状況が変わった。メアが魔法関係者では無かった場合は問題はなかっただろうが、メアは管理局の者に少しだけ知られている。

P・T事件の協力者だったからだ。

だから、メアの監視もその日からするようになったのだがメアは視線などには敏感で監視しようとしても、すぐに姿を消してしまう。

結果として、メアが八神はやてと住んでいる事で最初の目的だった八神はやてを監視するということは殆どと言ってもいいほどにできなくなっていた。

そのことでリーゼアリアはギル・グレアムの役に立っていないと思

い、内心に少しストレスを溜めていた。

だからこそ

「八神はやてっていう人物を知ってる？」

というラクトの言葉を聞いた時、彼女は驚いた後異常なまでの敵対心を見せた。

それは30秒ほど経った今でもラクトのことを鋭く睨んでいる。

「……何故その名前を知っている？」

「だって互いに自己紹介したような仲だし……。まあ、君達が本格的に彼女を監視する前にだけだね」

「……そう。それで何が目的だ？」

「ギル・グレアムさんと会話をさせて欲しいっていうのじゃダメ？」

「父様に会わせる訳にはいかないわ」

ラクトを完全に拒絶するような口調でリーゼアリアは言っが、ラクトはそれを特に気にすることは無く会話を続ける。

「まあ、落ち着いてって。……君たちにもメリットはある話だと思うよ？」

「……メリット？」

「そうだよ。君たちにも俺にもメリットになることがある」

「……………」

その言葉にリーゼアリアは少し考える。

（…………メリットね。確かに気にはするけど、だからと言って父様に合わせる訳にもいかない。この男が父様を見た瞬間から襲いかかるかもしれないから…………）

リーゼアリアはそのメリットというのに興味はあるが、それだけではギル・グレアム会わせられない。

そう結論付け、ラクトの要求を拒否しようとした時

「じゃあ、俺の事をバインドとかで縛ってもいいよ。…………まあ、君が彼に会わせてくれるならね」

ラクトはそう言った。

その言葉でリーゼアリアは拒否を躊躇った。

バインドで縛るなら襲いかかるにも難しく襲いかかるにも自らが拘束してもいいですよ、何て事をいうのはあまり考えられない。

それにラクトの顔からは緊張感の欠片も無く、これから襲いかかるなんてことは考えなさそうだった。

「…………でもこれだけじゃまだ会わせてくれないだろうから、今のところは引いておこうかな？」

それはまるで友達と話に行くような、そう言った事を想像させるほどラクトの表情は軟らかかった。

「いえ、構わないわ。父様に会わせてあげる」

だから、リーゼアリアはその場でだが一応ラクトのことを信用した。それにリーゼアリアとラクトが出会った時から書類を運ぶのを手伝ってくれたのを考えるとどうも彼はそんなことをしない人間だ、と思ったのも理由の一つである。

一方、ラクトはその言葉を聞いて驚く。

彼も今日でギル・グレアムと接触できるとは思っていなかったからだ。

そもそも、ここに来た理由はもつと簡単にできる理由であって、接触などリーゼアリアの名前を聞いた時に思いついたことなのだから。

「俺が言っちゃアレだけど、あまり知らない者を大切な人と会わせてもいいの？」

「だから構わないと言ってる。……付いてきなさい」

「……了解」

ラクトは警戒力が弱い人なのかな？　と思いつながらもリーゼアリアの後に付いて行った。

出会いと信用（後書き）

あとがきこーなー

まーた「と言う訳で、ミーシャと会話をする前の出来事その1でした」

ラクト「……その1ってことはその2があるってこと？」

まーた「もちろん！……というより、話の流れ的にそうでしょ？」

ラクト「となると、次回はギル・グレアムさんと交渉？　なのか」

ラルドデイス「だからアレは交渉とは言わねえ」

まーた「ですよねーラルドデイスさん。……あれは交渉とは言いませんよね？」

ラルド「まったくだ」

ラクト「……そうかな？　俺にとつてあれは普通なんだけど」

まーた「アレが普通って非常識でしょ？」

ラルド「同意するぜ、作者」

ラクト「……二人が虐めるよ（泣）」

まーた「と言う訳でラルドは感想の方を頼む」

ラルド「それじゃ、今回感想をくれたA r i s h i a様、なっぺ様……礼は言っておくぜ」

まーた「どうも。……さて、次回はさっき言ってた通りグレアムとの会話だけどさ」

ラクト「うん」

まーた「正直、上手く書ききれぬ自信が無いぜ!」

ラクト「威張るな。安心して、いつも作者の文は酷いから」

まーた「酷い。……だけど、いつものクオリティぐらいなら書けると思うんだが……」

ラクト「だが?」

まーた「いや、次回ってフェイト達の判決の理由も書くつもりで難しいと思う」

ラクト「判決の理由ってリンディさんがそう言ったからじゃないの?」

まーた「(君は知ってるというより当事者なんですけど……) まあ、違うんだよな」

ラクト「へえ」。……まあ、頑張って」

また「軽いな。……それと次回は軽く？」ご都合主義設定がある
と思います」

ラクト「出来るだけ軽い設定であることを祈るよ」

また「それと、最近少し忙しいので更新が遅れる可能性があります」

ラルド「みたいだ。これからよろしく頼むぜ？」

ラクト「……では、今回はこの辺で失礼します」

交渉（前書き）

すみません、予想以上に難しかったです。
ようするに出来が……

交渉

Side :

提督室にいるのは、提督の服を着ていて青い目をしている男と黒い髪と黒い瞳で10代後半を思わせる青年だ。

この場にリーゼアリア、リーゼロッテはいない。
とは言え、青年の方はバインドで縛られているが……。

「初めましてギル・グレアム提督。俺の事はラクトと呼んでください」

「……………まあ、掛けたまえ」

ギル・グレアムは先程のリーゼアリアと同じように警戒しながらラクトを見る。

一方、ラクトはグレアムの言葉に頷き腰を下ろした。

「……………それで話したいことは何かね？」

「アリ……………リーゼアリアさんから聞いて無いんですか？」

ラクトは癖でアリアと普通に呼びそうになったが、馴れ馴れしく呼ぶと余計な警戒が増えそうな気がしたのでリーゼアリアと呼んだ。

しかし、ラクトの考えも空しくグレアムは警戒心を増す。

「まあ、いいです。聞いてないと言うのなら俺が言いますよ。」

……貴方と話したいこととは闇の書に関する事です」

「……ふむ」

「と、この事を話し合う前に1つ聞きたい事があります」

そこでラクトは一度深呼吸をして呼吸を整えグレアムを真つすぐ見つめる。

「貴方は闇の書にだけ恨みがあり、八神はやてのことは恨んでいませんか？」

グレアムはその言葉に過去のことを思い出す。

確かにグレアムは闇の書は恨んでいるが、八神はやての事は恨んでいない。

グレアムにとって彼女は闇の書の主選ばれてしまった可哀そうな少女という認識があり、いずれ行う闇の書の封印の為にせめて幸せな生活を送れるように生活援助をしていた。

しかし、グレアムは自らが行おうとしていることは最低な行動と思っており、八神はやては殺したくないというのが心境である。

だから、ラクトからの質問には

「彼女のことは殺したくはない」

と、そう答えた。

ラクトはその言葉を聞いて満足そうに頷き笑った。

「良かったですよ。もし、貴方が八神はやてを殺すと言いましたら貴方を間違いなく殺してましたから」

笑いながらではあるが、バインドを縛られている状況の中でラクトは平然とそう言った。

しかも、少しだけ威圧感を出しながらだ。

そのことにグレアムは冷や汗を流しながら目の前のラクトに若干の恐怖感を覚える。

それに加えて、外で待機していたリーゼアリアとリーゼロッテはその威圧を感じて慌てながら中に入ってくる。

「父様っ！？ 何かあったんですかっ！？」

「父様に何かしたのかっ！？ 貴様っ！！」

リーゼロッテは殺気まで込めた視線でラクトの事を見て、リーゼアリアはラクトの事を信用したとはいえ少しだけ敵意を向ける。

ラクトはため息を吐きながら一回グレアムの事を見た後にリーゼ達を見た。

「……………俺、バインドで縛られてるから何もできないよ。まあ、少しだけ威圧を出しちゃったけど…………」

「彼の言う通りだよ。外で待ってなさい」

それに対して二人は冷静にリーゼアリアとリーゼロッテを対処する。だが、二人の主であるグレアムがそう言ってもラクトに対する感情は変わらない。

そのことに面倒なことになったな、と思いながらも冷静に考える。

「……グレアム提督。ここはこの二人にも会話に参加させた方が良いと思います。」

そちらの方が俺に対する感情が変わる可能性がありますし、グレアム提督自身の口から二人に伝える必要は無くなると思いますから」

「……確かに」

「それと、こちらの方が信憑性があります」

例え、ラクトのことを信用されても嘘と思われればそれまでだ、と考えた。

「会話を続けましょうか、グレアム提督」

「……ああ」

「……では、今ここで聞きますが貴方達の望む出来事は『八神はやてを殺さず、闇の書を殺す事』で合ってますか？」

正確には、グレアムの望みは『闇の書を害の無い物にすること』なのだが、二つとも似たような意味だったのでそれを肯定させた。

「……ああ。その通りだ」

と。

一方、ラクトはその答えを聞いて考えごとをするが、すぐに考えが決まったのか1人で頷いた。

「……こちらの望む出来事は『八神はやてを殺さずに闇の書を夜天の魔導書に戻す事』です」

「夜天の魔導書に戻す？ ……どういう意味かね？」

グレアムは調査で闇の書は本来、夜天の魔導書と呼ばれていたのを知っている。

ラクトがその事実を知っているのに驚くが、それを聞いてしまつては話が進まないのどのような意味か聞く。

「ええ。貴方が望むのは『闇の書を殺す事』と肯定させましたが、それは『闇の書を害の無い物』に変えるという考え方もできなくはありません。そして、闇の書では無く夜天の魔導書には害は無い……俺の言いたい事が分かりますよね？」

つまり、闇の書を元の夜天の魔導書に戻してしまえば、グレアムとラクトの願いは達成される。

そう解釈できるが、グレアム達はその夜天の魔導書に戻す方法を知らない。

「だが、夜天の魔導書に戻すのは不可能だと思うが……」

不可能と思っているからこそ、八神はやてごと永久封印させようとしていた。

もし、そんな方法があると言つのであれば当然そちらの方法を選択していただろう。

「プレシア・テストロッサ」

突如、ラクトはグレアムを見てそう言った。
グレアムはこのタイミングでその人物名を言う理由が分からず疑問に思う。

「……その反応は知ってるんですね。プレシアさんのことを」

「ああ……。だが、今言う理由は無いと思うが」

「ちゃんとありますので安心してください。……それと確認ですが、リンディさんのことも知ってますよね」

「当然だ」

グレアムはリンディ・ハラOWNとは昔から関係を持っていて、リンディには申し訳ないという気持ちもある。11年前の出来事でリンディの夫だったクライド・ハラOWNを失ってしまったのだから。

そして、リンディのアースラでの活躍も当然知っている。

その時にP・T事件を聞いてプレシア・テストロッサの事を知ったのだ。

「じゃあ、プレシア・テストロッサの娘のアリシア・テストロッサ

が死者蘇生したという事実も知ってますか？」

「……にわか信じられん話だがね」

この事はグレラムだけでなく、管理局のほとんどがそのことを知っている。

しかし、その半分以上はその事実を嘘だ、と決めつけているが……。

グレラムはそのことをリンディから聞いた、と言う訳ではないがそのことを知っている。

しかし、グレラムは大半の者とは違いそのことを信じている。

……正確には信じているというより、信じなければいけなかった。

何故なら、アリシア・テストロッサに会った事があるからだ。

しかも、アリシアと出会う前にグレラムはアリシア・テストロッサが死んでいたと言う事実を知っている。

だからこそ、本人と出会った時は信じなければいけなかった。

「そして、アリシア・テストロッサを蘇生させた人物が目の前にいるとしたらどうします？」

「なっ!？」

「そんな死者蘇生なんて奇跡を起こした人物が闇の書のバグを取り除いて、夜天の魔導書に戻そうとしていたらどうしますか？ ギル・グレラム提督」

「……………それは本当か？」

もしそれが事実であるなら闇の書を夜天の魔導書に戻すことも可能だ。

そう考えて、本当にラクトが死者蘇生という出来事を行ったのか確認する。

「ええ。……………何だったらリンディさんにでも聞いたらどうですか？
彼女とは色々な取引をしていますから」

「……………成程、そういうことか。それなら確認する必要はないな」

「……………リンディさんは約束を守ってくれてるみたいで良かったですよ。

その様子だと、誰がアリシア・テストロッサを蘇生させたかと聞いても答えてくれなかったのでしょうか？」

グレアムは以前リンディに誰にそんなことができたのか、と聞いてみた時があつたのだがリンディは言葉を濁すばかりで答えてはくれなかったのだ。

無理矢理聞くと言ったことはしなかったもののリンディが隠し事をするのは珍しいので気になっていたが……………。

「……………色々とは？」

「色々ですよ。……………例えば、フェイト・テストロッサ及びプレシア・テストロッサの処罰の件とか、色々ですよ」

「……………？」

「あれ？ 一回も疑問に思わなかったんですか？ 次元震を起こした人間が無罪になるのはおかしいとは思いませんでしたか？」

その言葉でグレアムは確かにあの処罰は異例だと思い始める。

「まあ、リンディさんだけじゃないですけど。色々と裏で動いて二人の罪をほぼ無罪にしたんですよ。……まあ、やり方は上層部の人間を黙らせて脅は……ではなく、交渉をして。

……あ、このことは他人には言わないでくださいね」

「……その割には簡単に言うんだね」

「信用して、ですよ グレアム提督は誰にも言わないって信じてますから。

……さて、話を戻しましょうか」

とんでも無い事を言ってもラクトは平然としてる辺りからグレアムはラクトが大物だと思い始めるが、そんなことを思うのはまた今度でいいと考えてラクトの言葉に頷いた。

「俺はアリシア・テストロッサを蘇生させた方法で闇の書を夜天の魔導書に戻せます」

「……………」

「と言う事で、俺が闇の書を夜天の魔導書に戻したら一件落着と言う訳ですよ」

「……………そういうことか」

ラクトの言葉にグレアムが同意する。

確かにこの方法で（死者蘇生の方法などは知らないが）、八神はやてを殺さずに闇の書を害の無い物に変えることができると思ったからだ。

これなら簡単に問題が解決できるとグレアムは思った。

「と、言えたら良かったんだが……」

しかし、現実はそのままで簡単ではないものだ。

S i d e : ラ ク ト

ギル・グレアムは思っていた以上に話が通じやすく良かったのだが……。

「……実は俺と話し合う必要があるのは八神はやてのことだけでは無い」

問題は闇の書のことだけでは無い。

仮に、闇の書のことだけだった場合、正直に言ってギル・グレアムが好き勝手動いても問題は無かった。

しかし、こちらとしてはメアリスティングのことも解決させなければならぬ。

「口調の事は気にするなよ」

「……まあ、薄々気が付いてたよ。君がそんな人物であることはね」

「そうか。……さて、前置きは抜いて単刀直入に言うぞ。

……ギル・グレアム。今から俺の手駒となれ」

残念ながら拒否権は無いと言いたいところだが、今回は拒否権はある。

「拒否権はあるが拒否したら先程の件は無くなり、だからといって八神はやてごと闇の書を永久封印しようとしたらアンタを殺す」

当然、殺すという言葉に反応してリーゼアリアとリーゼロッテは先程と同じように睨んでくるが、正直興味がない。

「いや、言い方を少し変えよう。今から俺の言う通りに動いてくれ」

「……………」

「何、無理な事は言わない。……ただ、こちらが抱えている問題の解決を手伝って欲しいだけだ」

「問題？」

「ああ。メアリスティングという人物はP・T事件で知ってる筈だな。……そのメアリスティングに関しての問題だ」

プレシア・テストロッサのことを聞いたのもメアの事を知ってるか

の確認でもあった。

「……それで、私達はどうすればいいのかな？」

「その返し方はこちらの問題を手伝ってくれるということか？」

「その通りだよ」

「……先程は済まなかったな、殺気を少しとはいえ出して」

自分でもよくそんな口が言えるな、と言いたところだ。

少しの殺気ならこんなことが言えると思うが、今の殺気はリンディ・ハラオウンの時よりも圧倒的に多く、そして濃い殺気だ。

「……だが、さすがは元執務官長と言ったところでその表情には余裕が見てとれる。」

「……老人の私には辛かったね」

「……その割には余裕な表情をしているが。」

まあ、謝った事で俺に向けられていた殺気は納まったものの若干の恐怖心を植え付けてしまったようだ。

特にリーゼアリアとリーゼロッテには。

……。

……。

やっべ！　なんか自分でした事なのに物凄く罪悪感が出てくるんですけど。

え？
そもそもお前に良心は無いって？

い、嫌だなあ。あ、あるに決まってるじゃないですか……………多分、きっと、メイビー。

「いやあ、ごめんね。怖い思いをさせるつもりはなかったんだけど……」

.....

無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理
無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理
無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理
無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理
無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理
！！！！！！！！

え？ 何この涙目っ！

本当にさっきしたことは正しかったの！？

ここまで涙目にさせておいてまでもやっておくべきことだったのっ！？

答えは否だって言いたいっ！

それほどまでにこの涙目はそう思わせるほどのモノがあるっ！……！

……い。

でも、仕方のないことだったから悪くないよね？ 俺は悪くないっ！

……るさい、……ぞ。

俺は自分の思ったように行動しただけで悪くない！
悪くないって言ったら悪くないんだっ！

《うるさいって言うてるんだ！ 聞こえないのかっ！ ラクト！》

「……え？」

《だから、お前が悪い事をしたってことは分かったからそれ以上叫ぶなッ！ 鬱陶しいっ！》

その言葉に俺は冷静にラルドデイスの言葉の意味を考える。

………もしかして声に出てたとか？

だとしたら、物凄く恥ずかしいのですが……。

《安心しろ。お前の心配には及ばないさ》

「あ、そうなの？ だったらよかったk」

《お前は自分の大声を聞いて貰いたかったんだろ？ だったらバツチリ聞こえてるぜ》

「……………え？」

ラルドデイスが言ってるリーゼアリアとリーゼロッテを見てみると、涙目から変わって物凄く痛い人を見るような視線だった。

……………恥ずかしいっ！！

でもまあ、俺に対する感情は変わったからいいのかな？
相変わらず、俺って呑気だな。

「では、グレアム提督。今はこの辺りで失礼しますね、連絡は近いうちにしますので」

そう言っつて、俺は逃げるようにその場を去っていった。

Side：

「いやあ、緊張したね」

《何処がだ？　むしろテーマはこういう交渉………とは言わない交渉は得意じゃねえか》

提督室から出たラクトは無表情でそう言い、ラクトのデバイスであるラルドデイスがそれに絡む。

「俺はちゃんとした交渉をしたつもりだけど………」

《逆にそう思ってる根拠が聞きたいぜ》

「……………あはは」

ラクトはラルドデイスの言葉について苦笑いをした。

その苦笑いからは「まあ、当たり前かな？」と言ってるように感じる。

《まず最初に軽い殺気を出して恐怖心を与え、管理局の上層部を脅したとわざと言いかけて、交渉に戻す。そして、相手にとって一見メリットしかないことを言った後に重い殺気をぶつけてこちらの条件を吞ませる……………って言うのがさっきのテーマのやり方だ》

「まあ、大雑把に言うただけだね……………」

《で、軽い殺気を感じて外にいたリーゼアリアとリーゼロッテを中に入れさせた。これが最初の殺気の意味だ》

淡々とあの場の状況を検証するようにラルドデイスは言っていく。

《次に管理局の上層部を脅したと言いかけたことで、あいつ等3人

に『上層部にそんなことができる人物』だと思わせる。さらに、メリットしか言わなかったのは、重い殺気で感じる恐怖心を増やす為だ』

「……………」

『その事で、グレアムは勝手な想像をする。『たかが向こうの問題の解決を手伝えればいいのだ』と。…………その勝手な想像によって、こちらの条件はたかがと思わせるモノにして確実に条件を吞ませる。…………最後の行動は分からなかったけどな』

「名推理だねとでも言っておくよ。…………あ、最後の行動にもちゃんと意味はあるよ」

ラクトは残酷な笑みを浮かべて転移魔法の準備をしながら言う。

「あの行動でアリア達の俺に対する恐怖心を無くすって事なんだよ。これから一緒に行動する時はあんな感じの俺でいれば、いずれは俺の事を完全に信用してくれると思うし」

『やっぱ、お前には素直に怖いって思うぜ』

「…………褒め言葉として受け取っておくよ」

『だが、あちらさんから見たら案外普通の交渉だと思っただろうな…………』

「だね。…………でもさ、メアリスティングの問題が闇の書より面倒なことって知らせて無いからだよ、それは」

《……やっぱりこんなもんは交渉とは呼べねえな》

その言葉に　そうかな？　と首を傾げながらラクトは漆黒の魔力光に包まれていく。

しかし、首は傾げているものの表情は無意識のうちに残酷な笑みを浮かべていたのをラクトは知らなかった。

交渉（後書き）

あとがきこーなー

まーた「……無理。この辺りはこのぐらいの出来が限界」

ラクト「それはどうでもいいんだけど。……最後の俺って悪役っぽくなってない？」

まーた「そのつもりで書いたから。……で、ラルドデイスの説明が分かりにくかった人がいると思いますのでもっと簡単にしたのをラルドデイスさん、どうぞ！」

ラルド「つまり、『そっちの条件を呑んでやるからこっちの要求を呑めや』ってことだぜ」

ラクト「……ちゃんとした交渉じゃん。まあ、取引とも言えなくはないけど」

ラルド「これから起きる出来事の差が違い過ぎんだよ。……もっと、簡単に言うならグレアムが1000円に対してお前は10000円渡せって言ってるようなもんだからな」

まーた「（……駄目だ。多分、これでも理解できなさそう）……まあ、普通の交渉？　があつたものだとお考えください」

ラクト「……さて、次回はどうなるの？」

まーた「今度は八神家の話だけど、細かいのは決めて無い」

ラクト「そんな感じだと矛盾がでちゃうよ？」

まーた「気を付けます。……では、感想をくれた希竜刹那様、なっぺ様、ありがとうございました！」

ラクト「……………」

まーた「どうした？」

ラクト「いやあ、読者様の想像する交渉じゃない交渉って人質をとるようなものだと思う人もいるかもしれないから、今回は優しい方だなんて思う人もいると思うよ」

まーた「安心しろ。A'sではもう一回交渉があるから」

ラクト「聞かなければ良かった。これじゃ益々俺が怖い人って思われるじゃん」

まーた「ま、A'sが終わったあとの君は完全にネタキャラになり下がるから問題ない」

ラクト「あ、そうなの？ それなら安心……できないよっ！？ 何っ！？ ネタキャラになり下がるって！？」

まーた「それで君の思ってる問題は解決さ」

ラクト「そんな訳無いでしょ！ 主人公がなり下がるってダメでしょ！」

また「それが君の扱いなんだから

では、この辺で失礼します」

ラクト「……逃げるなっ！！」

番外編 翠屋のアルバイト（前書き）

A r i s h i a 様、すみません。
ですが、出来が酷いです。

それと時系列は無視してください！

番外編 翠屋のアルバイト

Side：メアリスティング

ある日のこと。

「翠屋の特別イベント……ですか？」

私は桃子さんに話を聞かされた。

話によると、翠屋の特別イベントというのは翠屋で行われる行事のひとつで、その主役的なものを私に任せたいというものであった。

しかし、そんな大事な日の主役がアルバイトの私にはできない。そのように伝えるが、

「メアさんじゃないと絶対に駄目よ」

と、桃子さんに力説されてしまった。

力説する桃子さんに思わず私はそれを承諾してしまい、桃子さんはそれを確認すると満足そうに頷く。

「良かったわ ……えっと、メアさんは今日、もう上がっていいわよ」

「早くないですか？」

「いいのよ。明日は疲れるでしょうから、今日はゆっくりと休みなさい」

「そうですか。……では、お言葉に甘えさせてもらいます」

その後、私は高町家の皆さんに挨拶をして、翠屋をあとにしたのであった。

「何故だ？」

私はそう呟いた。いや、呟いたというよりは目の前の事実を受け入れられずにいた。
まあ、誰でもそうなるだろう。

何故なら、私は

「桃子さん、この格好は何ですか？」

いつものウェイトレスの格好ではなく物凄く派手な格好をしていたからだ。

いつもは黒を中心とした衣装なのだが、現在はもの凄くフリフリが付いた服をしている。

「あら　とても似合っているわよ、メアさん」

「い、いえ、褒めてもらえることは嬉しいのですが、この格好は落ち着かないというか何と言うか……」

「大丈夫よ！ 自信を持ちなさい！」

普段の格好からすると考えられないものだがここは桃子さんの言うこともあり、とりあえず気にしないことにする。

というより、この格好にして何をするのだろうか？

「それはもちろん、アルバイトをするのよ」

「は？」

この格好で？ …… いやいやいや、正直に言っただけでやりたくないぞ。私のような者にこのような可愛らしい服は似合わないだろう。

「わ、私がこのような服は着ない方が良いでしょう。……どういう服は桃子さんにこそ似合うと思いますか？」

「駄目よ。昨日承諾したじゃない」

「それは、そうですね……」

昨日の私は馬鹿か？

何故あまり考えずに承諾してしまったのだろうか？

「それにメアさんの方が、お客様が喜ぶと思うわ」

「……………」

どういう意味だろうか？

まさか、桃子さんより私の方が似合っているとも言いたいのだろうか？

……そんなことがわけあるわけがない。

「じゃあ、そろそろ開店だわ。今日一日頑張ってね」

「頑張らせてもらいます」

そして開店の時間になり、お客様が入ってくるようになった。

翠屋が営業開始時間になり、お客様が早速入ってくる。
私はいつものように接客しようとするが、どうも、この格好が気になる声が上がってしまう。

「い、いらつしやいませ　／＼／＼／＼」

「ぶはっ！（一般客が鼻血を流血）」

な、何故だ！？　いつも通りに言っただけなのに！
訳が分からん！

「だ、大丈夫ですか！？　ティッシュです」

「あ、すみません。ありがとうございます。……にしても、メアさんは何故その格好を？」

私は翠屋で働いているので、常連の客とは知り合いになっている。その為、メアさんと呼ばれているのだ。

「今日はイベントというもので、このような格好をしています」

「今日だったっけ？ 忘れてた」

「では、お席のほうにご案内します」

私はお客様を席に案内した。

それにしても、あの人があのように言うと言う事は、やはりこのイベントはかなりの人気があるらしいな。

（単に桃子さんに言われていただけです。　Byまーた）

「メアさん。衣装を変えましょう」

その言葉で私は一時的に接客から離れ衣装を変えることになった。

「う……っむ」

正直に言って、今度の衣装は先程のヒラヒラの衣装よりも恥ずかし

い。

私が着ているのは、……確か、セーラー服と言ったものだったか？

まあ、地球の詳しいことは知らんが、制服のようなものだろう。実際に、なのは嬢もこれに似ているのを着ているからな。

しかし、サイズがきついのだ。

そのせいで胸元の所のボタンは留めることができない。つまり、胸が少し露出してしまっているのだ。

こ、こんなものを着て、接客をするのか　／＼／＼／

断りたいがそれもできない。しかも、恐らくこの後にこれ以上の衣装がでてくるのだろう。……頑張るか。

そして、お客様が入ってきたので出向かうことになった。

「いらっしゃ……い……ま………」

……。

私は固まった。

お客様だと思っていたのだが違ったからだ。……いや、客であることに間違いはないか……。

だが、なんでよりによってこんな時にこの人が来るんだっ！？

「メア？　……その格好は？」

「……優か」

私がただ一人、異性として見ている優であつたからだ。

……つて、待て待て待てッ!? 何故、優が此処にいる!? あり得ないぞッ!

これは夢か? 夢だなッ!?

「ボーっとしてるけど平気?」

「も、問題無いッ! …… / / / / /」

不味いまずいマズイッ!

優が突然来るのは別に構わない、というより寧ろ来て欲しいぐらいだが、状況が状況だ。

こんな私に似合わないような格好で、しかも肌を露出してしまっているのだ。

恥ずかしがらない訳が無いッ!! / / / / /

……落ち着けッ! 落ち着くんだッ!!

Side:優

メアの様子がおかしい。さっきから、何故か顔を赤くしたかと思えば元に戻って、それで少ししたら急に顔を赤くするという無限ループが続いている。

「と、ところで何故、優はここにいるんだ？　／／／／／」

顔を赤くしながらメアはそう言う。

「……言ってくるけどさ。もう少し、胸元とか注意した方が良いと思う。」

さっきから、下着が普通に見えちゃってるから。

まあ、こつちの世界のラバーズは自らこういう状況を作ってくるけどさ……。

さすがに目に毒だ。

「何でって言われても……気が付いたらこの世界にいた」

「……要するに作者に何かされたということか？」

「……多分」

メタ発言がたくさんあるけど気にしない方向の方が良いよな？

俺もメアの発言に疑問を持つところか、その意味を理解してるし……。

「となると、こちらの作者も糸を引いてる可能性があるということか………後で殺るか（ボソッ）」

……少し物騒な事を言ってるけど気のせいだよね？

「さて、私は仕事の続きを行うから空いてる席にs ……空いてる席にご案内しますね」

「……………」

台詞の殆どを言い終ってから口調を変えるって……。

まあ、そうなるってことは俺のことを親しい仲って思ってくれてるからなのかな？

だとしても、別に変えなくてもいいと思うんだけどな……。

いやでも、ギャップがあるという意味ではOKなのか？

「ご注文はお決まりですか？」

「…………えつとじゃあ、シュークリームとメアがお勧めする飲み物で良いかな？」

「了解しました。では、少しお待ちください」

そう言っつてメアは厨房の方に戻り俺は案内された席に座った。

……で、何でこの人がいるんだ？

「直接会つのは初めてですよね？ 暁優さん」

Side：リアリスティング

「私の事はご存知かもしれませんが自己紹介をさせていただきます。
リア・リスティング・レイズトルズです。これからよろしくお願
いしますね」

「暁優です。……よろしく」

……性別は男である筈なのですが、実際に会ってみると男とは思え
ないような容姿ですね。

それに情報によると、幽霊などが怖いとのこと……。

とにかくメアはこの男の娘に恋をしているのですか……。

……フラグ神と呼ばれているこの男の娘には女装というものが似合
っていると思いますが、今はそれを行わないでいましょうか。

と、その前に……。

「うちのメアがお世話になってます。これからメアの事をよろしくお願いしますね」

「いえ、こちらの方がメアには世話になってますよ」

「そう、謙虚することは無いです。事実としてメアにとって暁さんは大きな存在ですから」

とは言え、最近のメアの行動は少し過激と言えるような事がありますが……。

例えば、暁さんの写真をラクトが触れただけで殺気を飛ばして追いかけまわし魔法を乱暴に扱ったとか……。

まあ、色々です。

……結論として、メアにとってそれだけ暁さんを想っているということですよ。

ちなみに、先程言った例の時のラクトとメアの表情はカメラで記録済みですよ

ラクトは冷や汗を流しながら必死に逃げ、メアは逃げるラクトを鬼の如く追いかけ回す2つの表情は最高ですね

「……それは大袈裟だと思います」

「いえ、事実ですよ。……と、1つ言い忘れてたことがあります」

「……………」

「私は暁さんより年下なので敬語やさん付けで呼ぶのは止めていただけませんか？」

私が登場した時からずっと思っていた事なのですが、暁さんって私に敬語で話すんですよね。敬語を使わない時もありますけど、呼ばれる時は『リアさん』としか呼ばれていないです。

……私、意外と小さい女の子ですよ？

私が大人の人に敬語などで話されたり、さん付けで呼ばれるのはどうも違和感があるわけでした……。

「ああ、うん。そうですね」

「……………」

もしかして、今までの私のSな行動を見て自然とそうになっているのでしょうか？

まさかこんなところでしっぺ返しを喰らうとは考えてもいませんでした……。

……まあ、正確にはしっぺ返しと言う訳ではないですけど。

「お、お待たせいたしました……って、どうしてここにいるんですか？ 姉様」

そんな考えが頭から離れずメアの接近には気付かなかった。

私はメアの接近を声で判断したので今度はどんな衣装を着ているの
だろうと思ひ

そのまま振り向いた。

.....ふむ。

「.....今度はメイド服ですか？」

「い、言わないでください / / / / /」

私の一言で顔を赤くするメア。

.....最高ですね

今のメアの衣装はメイド服なのですが、身体.....の半分以上が露出する
というメイド服を着てます。

その衣装のこともありメアの顔は私が弄る時より顔が赤くなつてま
す。

「では、今日はこの辺で失礼しますね。 暁さん、また今度に改めて
お話ししましょうね」

ということですか？ 私は翠屋から出て行きますか。

.....馬に蹴られて死にたくはありませんから。

S i d e : メ ア リ ス テ ィ ン グ

ね、姉様め！

こんな露出の多い服で優と話など出来る訳がないではないかっ！

………うっ、優に露出狂などと思われてしまったら私はどうしたらいい？

……嫌われてしまったら私はどうしたらいいのだ？

桃子さんに「これを着れば平気よっ！」と言われて着ている訳だが、はたして本当にそうなのか？

そして肝心の優は私の事を見て顔を赤くして、それに続いて私の顔が先程よりも赤くなるのを自覚する。

は、恥ずかしいぞ。……ダメだ。まともに喋れてもいない。

……なんだ？ 恥ずかしいそつて。

「その服は露出が多いけど可愛らしいと思うよ」

「……か、からかうのは止めてくれないか？ / / / / /」

「からかってるつもりはないよ。俺は本当に可愛らしいと思うんだけどな……」

「なっ！？ / / / / /」

か、かかかかかかか可愛らしいだっ！？

……優に？ 優にそんなことを言われただっ！？

こ、ここは素直に嬉しいと言っておくぞっ！！ / / / / /

と、そんな事を考えていたせいか足元を滑らせて尻もちをついてしまった。

「……メア、大丈夫？」

「あ、ああ。恥ずかしいところを見せてしまったな / / / / /」

やはり優は優しいな。

私のミスなのに私の事を心配してくれるとは……。

しかも、優は私に手を指し伸ばそうとして立ち上がろうとしている。
本当に優は優しい / / /

………それにしても私が足元を滑らせるだっ？ この私が？
いくらなんでも優に……か、可愛らしいと言われて気持ちが高まっ
ていたとはいえ私が足を滑らせる？

………いくらなんでも尻もちなどつくか。
となると、誰かに尻もちをつかされたと考えるのが普通だな。
そうなるっ

「手につかまって」

だが、私は優のその声で思考を中断して手を伸ばした。

「ありがとう、優」

「どういたしまして」

私が礼を言い、優が（言葉から考えて）どういたしまして、とでも言おうとしたのだろう。

しかし、その言葉を言いながら優も足元を滑らせて私に向かって倒れ込んでくる。

私は迫ってくる優の顔に何もできなかった。

優は身体を鍛えている為か、かなり早い反射神経で何とかしようとするが、優の顔は私にそのまま近付いてきて私の口とそのまま重なり合った。

.....？

待て待て。

今、何が起こった？

現在、私の口と優の口が重なりあっている。

それはつまりどういう意味だ？

.....つまり、私と優はキスしているということになるな。

日本語的に言うのであれば接吻だな。

.....。

.....っ！？ ゆ、優とキスッ！？ // // //

「————っ！？ // // //

「ご、ごめん！ // // //

私と優は慌てながら離れた。

だが、その現場（というより事故）を見ていた一般客からは冷やか
しを受け、私は厨房の方へと逃げた。

..... まあ、簡単にまとめると私と優はキスをした。
加えて、私にとってのファーストキスだった。

以上！ ハッピーエンド！

こんな終わらせ方があるかあ——————っ！
!!!!!!!!!!

オマケ

S i d e : リアリスティング

「ふふつ　私の望んだとおりになりましたね」

まあ、何故か足元に凍っていたみたいでああなってしまったようですがね。

「カメラで記録もしましたし、大満足ですう」

そう言うて私はその場から消えた。

番外編 翠屋のアルバイト（後書き）

あとがきこーなー

まーた「Arishia様、申し訳ないです m（ ）m」

ラクト「初のコラボなのに俺の出番が……」

まーた「君の事なんてどうでもいい。それより今回の出来のひどさの話をしよう」

ラクト「知るか。それは作者の文才だろ？ だったら俺は関係のないことだ」

まーた「……何故、そっちの口調？」

ラクト「気分で というより最近こちらの口調に疲れた」

まーた「……そう」

ラクト「さて、作者に続きArishia様、本当に申し訳ないです、こんな文で」

まーた「……本当は優とメアの衣装で弄るってことを考えてたけど、この際にキスということにした」

ラクト「……メアは初心だからキスだけでも顔を赤くするでしょ」

まーた「そういう設定だからね」

ラクト「メタ発言だね。というより、昔もあんな感じだったっけ？」

まーた「知ってるくせに聞くな」

ラクト「はいはい。それで、次回からどうなるの？」

まーた「次回？ 次回はリアがシグナムを倒した後の話」

ラクト「なるほど。……さて、A r i s h i a様、なっぺ様、希竜刹那様、暇人様、ありがとうございます！」

まーた「では、失礼します」

楽しい日常（前書き）

更新が遅れてすみません。

ラクトの出番はそんなないです。

それと若干ロツテの口調が……

楽しい日常

S i d e : ラクト

俺はアリアとロッテと共に書類を運ぶ作業をしている。

……まあ、何故そんなことをしているかと聞かれれば暇だったからかな？

あと、大変そうだったし……。

「ラクト、それはこっちの方に運んでおいて」

「了解。……で、この後は何をすればいいの？」

「その後は向こうの書類等を父様の方へ運ぶわ」

「了解」

いやあ、こんな仕事をしてなかったから分からなかったけど、書類を運ぶ作業は面倒くさいね。

そういう意味ではアリアとロッテには尊敬できる。

……さて、今更だけど一言言っておこう。

何で俺、自然と管理局の仕事をしちゃってるんだろ？

うん、管理局は俺にとって憎むべき存在である筈なんだけど、どう

して俺はその組織の仕事を自然と行っているのでしょうか？

いやまあ、今の俺の性格が吞気って言うのは分かるけどさ……。

「誰か、的確な意見をください」

「何独り言を言ってるの？ 気持ち悪いよ」

ロツテの言葉に ラクト は 999 の ダメージを
受けた。

ラクト は 瀕死状態 になった。

「悪い悪い。少し考えごとをしてたら自然と出ちゃった」

「へえ……。……今後、私には近寄らないでね」

「何でっ！？ 独り言を言うのがそこまで気持ち悪いのっ！？ さ
すがに酷くないっ！？」

え！？ 何マジでっ！？

そんなことを言われたら俺に死ねって言うてるようなものだよっ！！

「……orz」

「……じ、冗談だよ？ 冗談冗談。……だからさ、へこまないで、
ね？」

「ホント？ 本当に冗談なの？ 考えごとで独り言を言っても気
持ち悪いとは思って無い？」

「う、うん！ 私だってそう言う事はよくあるからね！」

だよねっ！？
それが普通の行動だよ。

逆に独り言を言わない人がいたらその人の事を気持ち悪がるだろう。

とにかく今はそれどころでは無くて、ロツテが独り言を認めてくれたと言うのが重量だ。

今、ロツテが独り言を認めてくれたということは、この内容でも問題ないよね？

仮に

「仮に独り言の内容がロツテの下着についてだったとしても、平気だよねっ!？」

「そんな無理に決まってるだろケエエエエエエ！」

「?！-?」

「気持ち悪いっ！？ もう二度と近付くなっ！？」

「だって、さっきは認めてくれたじゃん！ アレは嘘だったの？」

「それとこれとは話が別じゃ――っ！！！！」

そう言われてロツテは俺を本気で追いかけてきた。当然、俺はそれを超える速さで逃げる。

……やっぱり平和がいいなあー。

と、思いながら。

だが、この主人公（多分）は先程の発言がセクハラであるということに気付いていない。

……変態め。

S i d e : メ ア リ ス テ ィ ン グ

「心配をかけて申し訳ありません、主はやて」

八神嬢にシグナムが頭を下げながらそう言う。

だが、八神嬢からしたら何のことだか分からず首を傾げた。

「昨日はシグナムが帰って来なかっただろう？　それで気になっていたじゃないか、八神嬢」

「成程な。……シグナムは何処に行ってたん？」

「私は少し散歩に……」

……その言い訳は少しダメだと思うぞ。

冬の真夜中に散歩に行くと言われても気分転換にもならんし、寒いだけではないか。

シグナムは言い訳が下手なのか？

……と、私の置かれている状況を説明していなかった。

私は八神嬢とシグナムの三人で買い物をしている。

私がシグナムを氷漬けにされた状態で見つけ、第一にシャマルを呼びシグナムの治療をさせた。シグナムの状態は特に目立った傷など無く、氷漬けにされただけだったようなので案外早く治療が終わった。

その後はシグナムが目を覚ますまで待ち誰にやられたか聞こうとしたのだが、その前に八神嬢が起きて買い物に行くと行ったので今に至るというわけだ。

……シグナムが倒れていた時は焦ったが、先程も言ったように目立った傷などが無くて安心した。

当然、八神嬢にはシグナムが氷漬けにされたとは伝えていない。

「あまり遅くに帰ったらアカンよ？」

「申し訳ありません、主はやて」

「……………」

何というか、面白い光景だな。

シグナムという大人の女性が八神はやてという少女に心配され、謝るのは。

普通は逆の筈だからな。

大人が子供のことを心配して子供が謝るとというのが普通なのに、この二人は……。

いや、二人だけでは無い。

八神はやてという人物とヴォルケンリッター守護騎士の関係は第三者から見ると本当に面白い。

主と守護騎士という関係上、仕方が無いのだが見ていて面白いと思える。

「とりあえず、これで買いたい物は一通り買ったな……。さて、戻るとしようか八神嬢」

「ええよ。……にしても荷物持ちがいるだけでこんなに楽なんてな」

「……前は1人で全てを行っていたからか？ そんな事を言うのは」

「全てって言うわけないけど、確かに自分でやってたから楽に感じるんや。だから、シグナム達には感謝してる。……もちろん、メアさんにもやで？」

………感謝か。

「そう言ってくれるとありがたいな」

……確かに、嬉しいことではある。

自分が他人の為に動き、それを感謝されるということは。

しかし、最近の私はそう思えなくなってきた。

理由は分からない。

ただ、姉様と出会ってからそんな事を思うようになり始めた。

私は、姉様との再会をしてから私は毎日決まった夢をみるようになった。

その夢は決して心地の良い夢ではない。

それは悪夢だ。

何故なら、私は

「……ん。……メア……メアさ〜ん！」

……ん？

「……呼んだか？ 八神嬢」

「さっきから呼んでいたぞ。何か、考えごとか？」

「うむ。まあ、少し、な……」

「家に戻るぞ。……念話で伝えてきたのだが料理を作って待っているらしい」

「了解した。……それにしても悪かったな八神嬢」

「……………?」

「ああいや、呼んでいたであろう? それに気づけなくて悪かったと言ってるんだ」

「気にしなくてもええよ」

……………ありがとう。

内心、私はそう思い八神嬢とシグナムと一緒に八神嬢の家に向かって歩き出した。

向かっている最中でも私は先程のことを考えていた。

家に戻ると異臭が漂っていた。

鼻をツーンとするような痛みが出るほどの刺激臭。

どうやら、台所の方からこの臭いが発生しているみたいだが……。

「……って、何事だ？」

と、自分でも驚くぐらいに冷静になっていたが明らかにこの臭いは異常だ。

まさか、例の仮面の男が襲撃してきたのかっ！？

一瞬、そう思ったが目の前にヴィータが現れたのでその可能性を捨てる。

仮に襲われていたとしてもヴィータがいるということで安心できた。

「シグナム悪い」

と、いきなりヴィータがシグナムに謝った。

シグナムはいきなり謝れたことに驚いたが、すぐにある結論に思い至ったようだ。

「まさかとは思うが……この臭い元は台所から出ているのか？」

「……………」

無言を肯定とシグナムは受け取った。

「あれほどまでに言っただろうっ！ 何があっても止めるとっ！？」

私と八神嬢は突然怒鳴ったシグナムに驚く。

私とシグナムは口調も似ていて性格もある程度似ている。

だが、私とシグナムが決定的に違うところは冷静さだ。

まあ、正確には冷静さではなく怒鳴るか怒鳴らないかではあるが……。

私は感情が高まった時には怒鳴る。

それはまあ、普通だとは思う。だが、シグナムはある程度の感情から自分の中に残して、あまり怒鳴らない。（戦闘中は例外だ）

さらに付け加えるなら八神嬢の目の前では滅多に怒鳴らない。

そんなシグナムが八神嬢の目の前で怒鳴ったのだ、驚かないわけがない。

「落ち着け、シグナム」

「……すまない、取り乱した。……主はやて、申し訳ありません」

「それでこの臭いの原因を知っているのか？」

「……シャルが料理らしき物を作っている」

「……料理らしき物？」

「……待て待て。シャルが料理を作っているからこの臭いが出ているのか？」

「だとしたら、……私が言うのもどうかと思うがシャルの料理センスというのは相当低いな。」

そんな事を思いながらいつものようにリビングの方へ歩いていく。

「あ、はやてちゃん帰って来たんですね　丁度、料理を作り終えたところなんですよ」

「そ、そうなんや」

「今は1人分しか作ってないけどその内もつと作るようになるから、その時はよろしくね」

「……………」

この時、私達の心は1つになっただろう。

“それだけは何があっても阻止しなければならぬ”

と。

そして、シャルマルが皿を持ってきて机に作った料理を置く。

私の目の前に置かれたのは紫色という……少し変わった色のスープだ。

それを見たシグナムとヴィータとザフィーラと八神嬢は……………つまり、シャルマルを除く全員が目を見詰めて驚いている。

……シャルマルはこのスープを作った時に使った包丁などを洗う為か、流し台の方へ向かった。

「…………誰が食べたよ？　この料理もどき」

紫色のスープを見て素直にヴィータが言った。

……料理もどきとは酷いと思うぞ？　そもそも、私は料理そのものすら作る事ができないのだからな。

……八神嬢に台所に立つのを禁止されているというのもあるが、理由は前にあっただろう？　私が包丁を持ち、食材を切ると流し台まで破壊すると言う事が。

そのせいで恐怖心が出てしまい料理を作ろうと思えないのだ。何故か、無意識のうちに力が入っていてな……。

「私は遠慮したいんやけど……」

“私は治ったとはいえ元怪我人だから遠慮したい……”

「こんなマズそうな物食えるかよ……」

「……………いらん」

と、気付いていた時には私を除く物がその料理を要らないと言っていた。

正直に言えば私も食べたくは無い。

「……………だが、これでは材料がもったいないではないか」

スープをよく見てみるとかなりの具が入っている事が分かり、思わずそう言ってしまった。

そして、その一言を待っていたかのように

「じゃあ、そんなことを言ったメアが食えよ」

そう言われた。

そして、さらに狙ったようなタイミングでシャマルが戻って来た。

「あら、メアさんが食べてくれるんですか？」

「……………」

その言葉に私は沈黙した。

…………… まあ、確かに見た目はアレだが、味は物凄くイイものである可能性もある。

実際にラクトだって、紫キャベツという食べ物を使ってあり得ない色の食べ物を私に食べさせていたのだからな。

しかし、味はいつものように美味しかったので文句は言えなかった。

だから、シャマルが作ったこの料理もそういうものなのだと、思いたい。

「……………いただきます」

シャマルの目がキラキラと輝きながら私の事を見ってくる。
それ以外の者の目は心配するようなものだ。

そして、私がシャマルの作った紫色のスープをスプーンですくう。

(…………… そんな馬鹿な)

だが、私はそのスプーンですくったモノを見てそう思う。
……だが、それは仕方のない事だと思う。

何故なら、紫色のスープをすくう時の感触が言葉に表せないほどに
気持ち悪かった。
最早スープとは呼べないほどに液体では無い。

……簡単に言うと、スライム状の物をさらにドロドロにしたよ
うな物になっていた。

当然、それを見たシャル以外の者は完璧に引いている。

「……………す、少し気分が悪くなってきた。シャルのこの料理を
食べれずに残念だが、わ、私は少し寝ることにするよ。だ、ただだ
から、そのスープは他の者に食べて貰うといいと思うよ?。」

それを見た私は迷わず逃げる事を決意する。

私の本能が告げているのだ。

アレは、アレだけは、マジでヤバいね!!

……若干、口調がラクトのようになっているがそれは気にしないで
貰いたい。

「あ、そうなんですか？　なら仕方が無いですね」

「……………う、うむ！　本当に残念としか言いようがないが、気分が悪
くなってしまったからな！　……せ、折角シャルが作ってくれた
料理だから冷えない内に食べて貰うと良い!。」

「に、逃げんなよ！　メア！」

シャルは簡単に騙せたようだがヴィータ達はそう簡単にはいかな
いらしい……。

「逃げてなどいないさ！　そ、それに何から逃げると言うのだ？」

……目の前には美味しそうな料理があるだけではないか！　何なら
ヴィータが食べたらどうだ？」

最初に食べると言いだしたのは私だが、気分が悪くなってしまつて
は食欲もないからな！

悪いな。

……私の為に犠牲になってくれ！

「メ、メアが食べるって言ったんだろ！？　だったら、気分が悪く
ても味見ぐらいはしろよ！」

「……っ！？　大声を出さないでくれ。頭痛が酷くなる」

「あ、悪い………って、さっきまでそんなこと無かつただろ！」

さ、さて何のことやら？

わ、私には何を言ってるのか、ヴィータが、まったく理解できない
ぞ。

……文の順序が違うが、今はこの状況から逃げる事が先決だ！

それに私はこの料理を食べると言つたおぼえはないぞっ！！

「で、ではな！ 私は寝るぞ！」

物凄く焦りながら私は自分の部屋へと向かうのであった。

……まあ、今は慌てながら逃げているが、こんな日常が私は楽しい
と思っている。

だが、私は知らなかったのだ。

この日常が……この楽しい日々が……終わりを迎えるということ。

弱い私は考えることもしていなかった。

そしてさらに付け加えるなら、この日常は私の手によって壊される
ということ。

楽しい日常（後書き）

あとがきこーなー

ラクト「俺の出番ってアレだけ？」

まーた「アレだけだけど、何か文句ある？」

ラクト「まあ、出番が少しとは言えあるだけいいか」

まーた「その通りだよ、変態」

ラクト「……………変態って呼ぶな」

まーた「なら、あんなこと言つなよ。……………それにしても、日常ってこんなにも難しいと実感した」

ラクト「まあ、最後はシリアス的に変えちゃったけどね……………」

まーた「まあ、次回からはシリアス的になっていくから」

ラクト「早くね？」

まーた「まあ、少し考えてる事があつてな」

ラクト「そう。…………さて、感想をくれたなっぺ様、Arishia様、ありがとうございます！」

まーた「……では、失礼します」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8565m/>

魔法少女リリカルなのは～Introductory chapter of story～

2011年1月26日18時28分発行